徳島県埋蔵文化財センター調査報告書　第55集

大　柿　遺　跡

県代行緊急地方道路整備事業（町道光下新町線）関連埋蔵文化財発掘調査報告書

《第１分冊　本文編》

２００４

徳　島　県　教　育　委　員　会
財団法人　徳島県埋蔵文化財センター

徳島県埋蔵文化財センター調査報告書　第55集

大　柿　遺　跡

県代行緊急地方道路整備事業（町道光下新町線）関連埋蔵文化財発掘調査報告書

《第１分冊　本文編》

２００４

徳　島　県　教　育　委　員　会
財団法人　徳島県埋蔵文化財センター

調査前風景（北から）

調査前風景（東から）

巻頭図版 2

SD3004出土弥生土器（1）

SD3004出土弥生土器（2）

SK2067出土土器

SP4099出土土器

巻頭図版 4

A－１区第13遺構面西側検出状況（西から）

SK13011縄文土器出土状況

序　　文

本書は、徳島県が代行で実施した緊急地方道路整備事業（町道光下新町線）に伴う、大柿遺跡の４次にわたる発掘調査の成果をとりまとめたものであります。

大柿遺跡は、讃岐山脈南麓の吉野川北岸に形成された河岸段丘上に立地し、これまでにも吉野川北岸農業用水路や四国縦貫自動車道の建設に伴って発掘調査が行われ、縄文時代から江戸時代にかけての各種遺構・遺物が出土し、県西部を代表する重要な遺跡として知られています。

今回の発掘調査では、縄文時代から中世までの遺構・遺物が検出され、この地域における歴史を解明していくうえでの、更に多くの貴重な資料を得ることができました。

これらの成果をまとめた本書が、埋蔵文化財の調査研究の資料として活用され、文化財に対する理解と保護への一助となれば幸いです。

なお、発掘調査及び報告書の作成にあたり、関係各機関並びに地元の皆様方には多大のご援助、ご協力を、更に関係各位には貴重なご教示を賜りました。ここに深く感謝の意を表しますとともに、引き続き今後もご支援いただけますようお願い申し上げます。

平成17年３月

財団法人　徳島県埋蔵文化財センター
理事長　　松　村　　通　治

例言・凡例

1　本書は、県代行緊急地方道路整備事業（町道光下新町線）建設工事に伴って平成10年度から４ヵ年実施した大柿遺跡（光下新町線）の発掘調査報告書である。

2　発掘調査及び報告書作成は、三好町より依頼を受けた徳島県からの委託により、財団法人徳島県埋蔵文化財センターが実施した。

3　発掘調査及び報告書作成についての実施期間は次の通りである。

・発掘調査期間　試　掘　平成10年３月２日～平成10年３月20日
　　本調査　平成10年10月１日～平成11年３月31日
　　平成11年４月２日～平成12年３月31日
　　平成12年４月４日～平成12年12月12日
　　平成13年７月１日～平成14年１月31日
・報告書作成期間　平成13年４月１日～平成14年３月31日
　　平成14年４月１日～平成15年３月31日
　　平成15年４月１日～平成16年３月31日
　　平成16年４月１日～平成16年９月30日

4　発掘調査及び報告書作成に当たっては、次の機関、方々の御協力御教示を得た。
徳島県教育委員会、徳島県道路保全課、徳島県池田土木事務所、古環境研究所、和鋼博物館、山口県立山口博物館
石村　和敬、後藤田　貴子、白石　純、富岡　直人、村川　義行、藁科　哲男

5　本書の執筆は以下のとおりである。

Ⅰ～Ⅲ　棚次　美和子
Ⅳ　幸泉　満夫　（第１節）
　　棚次　美和子（第２～４節）
Ⅴ　白石　純　（①）
　　藁科　哲男　（②）
　　村川　義行　（③）
　　古環境研究所（④）
　　富岡　直人　（⑤）
　　後藤田　貴子・石村　和敬（⑥）

6　遺構の表示は、財団法人徳島県埋蔵文化財センターが定める発掘調査基準による略記号を用いた。
凡例
SA：掘立柱建物跡　SB：竪穴住居跡　SD：溝　SG：柵列・塀跡　SH：炉跡
SJ：水利施設　SK：土坑　SP：ピット　SU：集石遺構　SX：不明遺構
SB2001EH１：竪穴住居跡2001の炉跡１（Sの代わりにEが頭に付く場合は遺構内遺構である。）

7　本書で用いた土層及び遺物の色調は、小山正忠・竹原秀雄『新版標準土色帖』2001年度版と、細野尚志編代表『標準色彩図表A』1981年度版によった。

8　遺構番号は通し番号とし、本文・挿図・表・図版と一致する。

9　第４図の地形図は、建設省国土地理院発行の１/25,000の地形図「阿波池田」を使用した。

各章の校正はそれぞれの執筆者が担当し、全体の編集を棚次・幸泉が行った。写真は遺物を棚次が撮影、遺構をそれぞれの調査担当者が撮影した。

本　文　目　次

【第１分冊】

Ⅰ　調査の経緯
第１節　調査に至る経緯……3
第２節　調査の経緯……5
(1)　調査の経過……5
(2)　発掘調査の方法……5
(3)　調査日誌抄……5

Ⅱ　遺跡の立地と環境
第１節　地理的環境……19
第２節　歴史的環境……20

Ⅲ　微地形と基本層序
第１節　微地形……25
第２節　基本層序……25

Ⅳ　調査成果
第１節　縄文時代中期末の調査と成果……幸泉　満夫…29
(1)　検出にいたる経緯、学史抄……29
(2)　遺構群の配置……29
(3)　土器の系統分類……31
(4)　遺構および出土遺物の観察……34
(5)　第13包含層出土遺物の観察……54
①　第13遺構面直上出土遺物……54
②　第13包含層出土遺物……62
(6)　小結……67
第２節　縄文時代晩期～弥生時代（第12遺構面～第７遺構面）の調査と成果……棚次美和子…76
(1)　地形の概要……76
(2)　遺構および出土遺物の観察……76
①　第12遺構面……76
②　第11遺構面……80
③　第10遺構面……88
④　第９遺構面……97

⑤　第８遺構面 ……104
⑥　第７遺構面 ……113
第３節　古墳時代～古代（第６遺構面～第４遺構面）の調査と成果 ……棚次美和子…127
(1)　遺構および出土遺物の観察 ……127
①　第６遺構面 ……127
②　第５遺構面 ……127
③　第４遺構面 ……127
第４節　古代～中世（第３遺構面～第１遺構面）の調査と成果 ……棚次美和子…153
(1)　遺構および出土遺物の観察 ……153
①　第３遺構面 ……153
②　第２遺構面 ……228
③　第１遺構面 ……354

Ⅴ　自然科学的分析
①　大柿遺跡出土土器の胎土分析 ……白石　純…359
②　大柿遺跡出土サヌカイト製遺物の原材産地分析 ……藁科　哲男…367
③　大柿遺跡に係る鉄滓等の自然科学的分析調査 ……村川　義行…382
④　大柿遺跡における自然科学分析 ……㈱古環境研究所…396
⑤　大柿遺跡土壌 pH……富岡　直人…414
⑥　大柿遺跡出土人歯の鑑定結果 ……後藤田貴子・石村　和敬…416

報告書抄録

【第２分冊】

土器観察表……1
石器観察表……33
鉄器観察表……39
銭貨観察表……41
新遺構一覧表……42
SA 観察表 ……146

写真図版

挿　図　目　次

【第１分冊】

第１図　調査区位置図 ……12
第２図　グリッド配置図 ……13
第３図　各年次の調査区の配置と新調査区の対応 ……14
第４図　各遺構面の調査区分布 ……15
第５図　周辺の遺跡分布図 ……16
第６図　A－１区第13遺構面遺構配置図 ……30
第７図　A－１区 SH13001遺構実測図 ……35
第８図　A－１区 SH13001出土遺物実測図(1) ……36
第９図　A－１区 SH13001出土遺物実測図(2) ……37
第10図　A－１区 SH13002遺構・遺物実測図 ……39
第11図　A－１区 SH13003遺構・遺物実測図 ……40
第12図　A－１区 SH13004遺構・遺物実測図 ……41
第13図　A－１区 SK13003遺構・遺物実装図 ……42
第14図　A－１区 SK13005遺構・遺物実測図 ……43
第15図　A－１区 SK13006遺構・遺物実測図 ……45
第16図　A－１区 SK13008遺構・遺物実測図 ……46
第17図　A－１区 SK13009遺構・遺物実測図 ……47
第18図　A－１区 SK13010遺構・遺物実測図 ……48
第19図　A－１区 SK13011遺構・遺物実測図 ……49
第20図　A－１区 SK13013遺構・遺物実測図 ……50
第21図　A－１区 SP13003遺構・遺物実測図 ……51
第22図　A－１区 SR13001遺構実測図 ……52
第23図　A－１区 SR13001出土遺物実測図 ……53
第24図　A－１区 SR13002遺構・遺物実測図 ……54
第25図　A－１区第13遺構面直上遺物出土状況図(1) …56
第26図　A－１区第13遺構面直上遺物出土状況図(2) …57
第27図　A－１区第13遺構面直上出土土器(1) ……58
第28図　A－１区第13遺構面直上出土土器(2) ……60
第29図　A－１区第13遺構面直上出土石器 ……61
第30図　A－１区第13包含層出土土器 ……63
第31図　A－１区第13包含層出土石器 ……66
第32図　A－３区 ST12001・SP12077遺構・遺物実測図 ……77
第33図　A－３区 SP12119遺構・遺物実測図 ……78
第34図　A 区第12遺構面 SP 出土遺物実測図 ……78
第35図　A 区第12包含層出土遺物実測図 ……79
第36図　B－１区 SD11001遺構実測図 ……80
第37図　A－11区第11遺構面水田実測図 ……81
第38図　A－10区第11遺構面水田実測図 ……82
第39図　A－９区第11遺構面水田実測図 ……83
第40図　B－２・１区第11遺構面水田実測図 ……84
第41図　B－１区第11遺構面水田実測図(1) ……85
第42図　B－１区第11遺構面水田実測図(2) ……86
第43図　A 区第11包含層出土遺物実測図 ……87
第44図　B 区第11包含層出土遺物実測図 ……87
第45図　A－９区 SK10001遺構・遺物実測図 ……88
第46図　A－11区第10遺構面水田実測図 ……89
第47図　A－10区第10遺構面水田実測図 ……90
第48図　A－９区第10遺構面水田実測図 ……91
第49図　B－３区第10遺構面水田実測図(1) ……92
第50図　B－３区第10遺構面水田実測図(2) ……93
第51図　B－２・１区第10遺構面水田出土遺物実測図 ……94
第52図　B－１区第10遺構面水田実測図 ……95
第53図　A－10区第10遺構面水田出土遺物実測図 ……96
第54図　A 区第10包含層出土遺物実測図 ……96
第55図　B 区第10包含層出土遺物実測図 ……96
第56図　A－９区 SH9001遺構実測図 ……97
第57図　B－２区 SH9002遺構実測図 ……97
第58図　A－11区第９遺構面水田実測図 ……98
第59図　A－９区第９遺構面水田実測図 ……99
第60図　B－３区第９遺構面水田実測図(1) ……100
第61図　B－３区第９遺構面水田実測図(2) ……101
第62図　B－２・１区第９遺構面水田実測図 ……102
第63図　B－１区第９遺構面水田実測図 ……103
第64図　A 区第９包含層出土遺物実測図 ……104
第65図　B 区第９包含層出土遺物実測図 ……104
第66図　A－11区第８遺構面水田実測図 ……105
第67図　A－10区第８遺構面水田実測図 ……106
第68図　A－９区第８遺構面水田実測図 ……107
第69図　B－３区第８遺構面水田実測図(1) ……108
第70図　B－３区第８遺構面水田実測図(2) ……109
第71図　B－２・１区第８遺構面水田実測図 ……110
第72図　B－１区第８遺構面水田実測図 ……111
第73図　A－10区第８遺構面水田出土遺物実測図 ……112
第74図　A・B 区第８包含層出土遺物実測図 ……112
第75図　A－９区 SK7001遺構・遺物実測図 ……113
第76図　A－11区第７遺構面水田実測図 ……114
第77図　A－10区第７遺構面水田実測図 ……115
第78図　A－９区第７遺構面水田実測図 ……116
第79図　B－３区第７遺構面水田実測図(1) ……117
第80図　B－３区第７遺構面水田実測図(2) ……118
第81図　B－２・１区第７遺構面水田実測図 ……119
第82図　B－１区第７遺構面水田実測図(1) ……120
第83図　B－１区第７遺構面水田実測図(2) ……121
第84図　A－10区第７遺構面水田出土遺物実測図 ……122
第85図　A・B 区第７包含層出土遺物実測図 ……122
第86図　A－11区第６遺構面水田実測図 ……123
第87図　A－10区第６遺構面水田実測図 ……124
第88図　A－９区第６遺構面水田実測図 ……125
第89図　B－２区第６遺構面水田実測図 ……126
第90図　A・B 区第６包含層出土遺物実測図 ……128
第91図　A－11区 SG5001遺構実測図 ……128
第92図　A－８区 SK5001遺構・遺物実測図 ……128
第93図　A－11区第５遺構面水田実測図 ……129
第94図　A－10区第５遺構面水田実測図 ……130
第95図　A－９・８区第５遺構面水田実測図 ……131
第96図　A－８区第５遺構面水田実測図 ……132
第97図　A 区第５包含層出土遺物実測図 ……133
第98図　B 区第５包含層出土遺物実測図 ……133
第99図　A－８区 SD4002遺構・遺物実測図 ……134
第100図　A－８区 SD4003遺構・遺物実測図 ……135
第101図　A－５区 SK4003遺構・遺物実測図 ……135

第102図　A－5区 SP4040遺構・遺物実測図 ……136
第103図　A－5区第4遺構面 SP 出土遺物実測図 ……136
第104図　A－9区 SP4099遺構・遺物実測図 ……136
第105図　A－11区第4遺構面水田実測図 ……137
第106図　A－9・8区第4遺構面水田実測図 ……138
第107図　A－8区第4遺構面水田実測図(1) ……139
第108図　A－8区第4遺構面水田実測図(2) ……140
第109図　A－3区第4遺構面水田実測図(1) ……141
第110図　A－3区第4遺構面水田実測図(2) ……142
第111図　B－3区第4遺構面水田実測図(1) ……143
第112図　B－3区第4遺構面水田実測図(2) ……144
第113図　B－2区第4遺構面水田実測図 ……145
第114図　C－2区第4遺構面水田実測図 ……146
第115図　A－3区第4遺構面水田出土遺物実測図 …147
第116図　A区第4包含層出土遺物実測図(1) ……147
第117図　A区第4包含層出土遺物実測図(2) ……148
第118図　A区第4包含層出土遺物実測図(3) ……149
第119図　A区第4包含層出土遺物実測図(4) ……152
第120図　B区第4包含層出土遺物実測図 ……152
第121図　C区第4包含層出土遺物実測図 ……152
第122図　A区 SA3001遺構実測図……154
第123図　A－4区 SD3004－1層出土遺物実測図 ……155
第124図　A－4区 SD3004－2層出土遺物実測図(1) …156
第125図　A－4区 SD3004－2層出土遺物実測図(2) …157
第126図　A－4区 SD3004－2層出土遺物実測図(3) …158
第127図　A－4区 SD3004－2層出土遺物実測図(4) …159
第128図　A－4区 SD3004－2層出土遺物実測図(5) …160
第129図　A－4区 SD3004－2層出土遺物実測図(6) …161
第130図　A－4区 SD3004－3層出土遺物実測図(1) …162
第131図　A－4区 SD3004－3層出土遺物実測図(2) …163
第132図　A－4区 SD3004－3層出土遺物実測図(3) …164
第133図　A－4区 SD3004－3層出土遺物実測図(4) …165
第134図　A－4区 SD3004－3層出土遺物実測図(5) …166
第135図　A－4区 SD3004－3層出土遺物実測図(6) …167
第136図　A－4区 SD3004－3層出土遺物実測図(7) …168
第137図　A－4区 SD3004－3層出土遺物実測図(8) …169
第138図　A－4区 SD3004－3層出土遺物実測図(9) …170
第139図　A－4区 SD3004－3層出土遺物実測図(10) …171
第140図　A－4区 SD3004－3層出土遺物実測図(11) …172
第141図　A－4区 SD3004－3層出土遺物実測図(12) …173
第142図　A－4区 SD3004－3層出土遺物実測図(13) …174
第143図　A－4区 SD3004－3層出土遺物実測図(14) …175
第144図　A－4区 SD3004－3層出土遺物実測図(15) …176
第145図　A－4区 SD3004－3層出土遺物実測図(16) …177
第146図　A－4区 SD3004－3層出土遺物実測図(17) …178
第147図　A－4区 SD3004－3層出土遺物実測図(18) …179
第148図　A－4区 SD3004－3層出土遺物実測図(19) …180
第149図　A－4区 SD3004－3層出土遺物実測図(20) …181
第150図　A－4区 SD3004－3層出土遺物実測図(21) …181
第151図　A－4区 SD3004－3層出土遺物実測図(22) …182
第152図　A－4区 SD3004－4層出土遺物実測図(1) …183
第153図　A－4区 SD3004－4層出土遺物実測図(2) …184
第154図　A－4区 SD3004－4層出土遺物実測図(3) …185
第155図　A－4区 SD3004－4層出土遺物実測図(4) …186
第156図　A－4区 SD3004－4層出土遺物実測図(5) …187
第157図　A－4区 SD3004－4層出土遺物実測図(6) …188
第158図　A－4区 SD3004－4層出土遺物実測図(7) …189
第159図　A－4区 SD3004－4層出土遺物実測図(8) …190
第160図　A－4区 SD3004－4層出土遺物実測図(9) …191
第161図　A－4区 SG3001遺構実測図 ……192
第162図　A－1区 SK3001遺構・遺物実測図 ……192
第163図　A－1区 SK3008遺構・遺物実測図 ……193
第164図　A－9区 SK3038遺構・遺物実測図 ……193
第165図　A区 SR3001遺構・遺物実測図(1)……194
第166図　A区 SR3001遺構・遺物実測図(2)……195
第167図　A－2区 ST3002遺構・遺物実測図 ……196
第168図　A－5区 ST3005遺構・遺物実測図 ……196
第169図　A－1区 SP3034遺構・遺物実測図 ……197
第170図　A－1区第3遺構面 SP 遺構・遺物実測図(1)
……198
第171図　A－1区第3遺構面 SP 遺構・遺物実測図(2)
……199
第172図　A－3区 SP3202遺構・遺物実測図 ……199
第173図　A－3区 SP3207遺構・遺物実測図 ……200
第174図　A－4区 SP3270遺構・遺物実測図 ……200
第175図　A－5区 SP3317遺構・遺物実測図 ……200
第176図　A区第3遺構面 SP 出土遺物実測図 ……201
第177図　A－10区第3遺構面水田実測図 ……202
第178図　A－9・8区第3遺構面水田実測図 ……203
第179図　A－8区第3遺構面水田実測図 ……204
第180図　B－2区第3遺構面水田実測図 ……205
第181図　C－4区第3遺構面水田実測図 ……206
第182図　C－3区第3遺構面水田実測図 ……207
第183図　C－2区第3遺構面水田実測図 ……208
第184図　C－1区第3遺構面水田実測図 ……209
第185図　A－3区第3遺構面水田出土遺物実測図 …210
第186図　A－10区第3遺構面水田出土遺物実測図 …210
第187図　B－1区第3遺構面水田出土遺物実測図 …210
第188図　C－2区第3遺構面水田出土遺物実測図 …210
第189図　A区第3包含層出土遺物実測図(1) ……211
第190図　A区第3包含層出土遺物実測図(2) ……212
第191図　A区第3包含層出土遺物実測図(3) ……213
第192図　A区第3包含層出土遺物実測図(4) ……214
第193図　A区第3包含層出土遺物実測図(5) ……215
第194図　A区第3包含層出土遺物実測図(6) ……216
第195図　A区第3包含層出土遺物実測図(7) ……217
第196図　B区第3包含層出土遺物実測図 ……218
第197図　C区第3包含層出土遺物実測図 ……218
第198図　A－1区 SA2001遺構・遺物実測図 ……219
第199図　A－1区 SA2002遺構実測図 ……220
第200図　A－1区 SA2003遺構・遺物実測図 ……220
第201図　A－2区 SA2004遺構・遺物実測図 ……221
第202図　A－2区 SA2005遺構実測図 ……222
第203図　A－3区 SA2006遺構実測図 ……222
第204図　A－4区 SA2007遺構・遺物実測図 ……223
第205図　A－4区 SA2008遺構・遺物実測図 ……224
第206図　A－5区 SA2009遺構実測図 ……225
第207図　A－5区 SA2010遺構実測図 ……225
第208図　A－5区 SA2011遺構実測図 ……226
第209図　B－1区 SA2012遺構・遺物実測図 ……227
第210図　A－2区 SD2004遺構実測図 ……228
第211図　A－2区 SD2004出土遺物実測図 ……228

第212図　B－1区SD2009遺構・遺物実測図 ……229
第213図　B－1区SD2010遺構・遺物実測図 ……230
第214図　B－1区SD2011遺構・遺物実測図 ……230
第215図　A－4区SG2001遺構実測図 ……231
第216図　A－2区SH2001遺構・遺物実測図 ……232
第217図　A－1区SK2001遺構・遺物実測図 ……233
第218図　A－1区SK2002遺構・遺物実測図 ……233
第219図　A－1区SK2004遺構・遺物実測図(1) ……234
第220図　A－1区SK2004遺構・遺物実測図(2) ……235
第221図　A－1区SK2006・SK2007・SK2008遺構・遺物実測図 ……236
第222図　A－1区SK2009遺構・遺物実測図 ……236
第223図　A－1区SK2010遺構・遺物実測図 ……237
第224図　A－1区SK2011遺構・遺物実測図 ……237
第225図　A－1区SK2012遺構・遺物実測図 ……238
第226図　A－1区SK2014遺構・遺物実測図 ……238
第227図　A－1区SK2017遺構・遺物実測図 ……239
第228図　A－1区SK2023・SK2026遺構・遺物実測図 ……239
第229図　A－1区SK2027遺構・遺物実測図 ……240
第230図　A－1区SK2028遺構・遺物実測図 ……241
第231図　A－1区SK2036遺構・遺物実測図 ……242
第232図　A－1区SK2038遺構・遺物実測図 ……242
第233図　A－1区SK2040・SK2047遺構・遺物実測図 ……243
第234図　A－1区SK2048・SK2052・SK2056遺構・遺物実測図 ……244
第235図　A－2区SK2067遺構・遺物実測図(1) ……245
第236図　A－2区SK2067遺構・遺物実測図(2) ……246
第237図　A－2区SK2068遺構・遺物実測図 ……246
第238図　A－2区SK2069・SK2070遺構・遺物実測図(1) ……247
第239図　A－2区SK2069・SK2070遺構・遺物実測図(2) ……248
第240図　A－2区SK2072遺構・遺物実測図 ……249
第241図　A－3区SK2078遺構・遺物実測図 ……249
第242図　A－3区SK2080遺構・遺物実測図 ……250
第243図　A－3区SK2081遺構・遺物実測図 ……251
第244図　A－3区SK2082遺構・遺物実測図 ……252
第245図　A－3区SK2085・SK2086遺構・遺物実測図 ……253
第246図　A－3区SK2093遺構・遺物実測図 ……253
第247図　A－3区SK2097遺構・遺物実測図 ……254
第248図　A－3区SK2098遺構・遺物実測図 ……255
第249図　A－4区SK2101・SK2105遺構・遺物実測図 ……256
第250図　A－4区SK2108遺構・遺物実測図 ……257
第251図　A－4区SK2109遺構・遺物実測図 ……258
第252図　A－4区SK2110遺構・遺物実測図 ……258
第253図　A－4区SK2112遺構・遺物実測図 ……258
第254図　A－4区SK2113遺構・遺物実測図 ……258
第255図　A－4区SK2119遺構・遺物実測図 ……258
第256図　A－5区SK2125遺構・遺物実測図 ……259
第257図　A－5区SK2126遺構・遺物実測図 ……260
第258図　A－5区SK2134・SK2136遺構・遺物実測図 ……260
第259図　A－5区SK2145遺構・遺物実測図 ……260
第260図　A－5区SK2150遺構・遺物実測図 ……261
第261図　A－5区SK2151遺構・遺物実測図 ……261
第262図　A－8区SK2169遺構・遺物実測図 ……262
第263図　B－1区SK2170遺構・遺物実測図 ……263
第264図　B－1区SK2172遺構・遺物実測図 ……263
第265図　B－1区SK2173遺構・遺物実測図 ……264
第266図　B－1区SK2174遺構・遺物実測図 ……264
第267図　A－2区ST2001遺構・遺物実測図 ……264
第268図　A－2区ST2005遺構・遺物実測図 ……265
第269図　A－2区ST2010遺構・遺物実測図 ……265
第270図　A－2区ST2008遺構・遺物実測図 ……265
第271図　A－3区ST2014遺構実測図 ……266
第272図　A－3区ST2014出土遺物実測図 ……267
第273図　A－5区ST2016遺構・遺物実測図 ……268
第274図　A－5区ST2017遺構・遺物実測図 ……269
第275図　A－5区ST2018遺構・遺物実測図 ……270
第276図　B－1区ST2019遺構・遺物実測図 ……271
第277図　A－1区SX2001遺構・遺物実測図(1) ……272
第278図　A－1区SX2001遺構・遺物実測図(2) ……273
第279図　A－1区SX2004遺構・遺物実測図 ……274
第280図　A－2区SX2006遺構・遺物実測図 ……275
第281図　A－8区SX2009遺構・遺物実測図 ……276
第282図　A－1区第2遺構面SP遺構・遺物実測図 …277
第283図　A－1区第2遺構面SP出土遺物実測図 ……278
第284図　A－2区第2遺構面SP遺構・遺物実測図 …279
第285図　A－2区第2遺構面SP出土遺物実測図 ……280
第286図　A－3区SP2356遺構・遺物実測図 ……280
第287図　A－3区SP2374・SP2400遺構・遺物実測図 ……281
第288図　A－3区SP2464遺構・遺物実測図 ……282
第289図　A－3区SP2487遺構・遺物実測図 ……282
第290図　A－3区SP2505遺構・遺物実測図 ……283
第291図　A－3区第2遺構面SP出土遺物実測図(1) …284
第292図　A－3区第2遺構面SP出土遺物実測図(2) …285
第293図　A－4区第2遺構面SP出土遺物実測図 ……286
第294図　A－5区SP2695遺構・遺物実測図 ……287
第295図　A－5区SP2767遺構・遺物実測図 ……287
第296図　A－5区SP2852遺構・遺物実測図 ……287
第297図　A－5区SP2863遺構・遺物実測図 ……287
第298図　A－5区・A－8区第2遺構面SP出土遺物実測図 ……288
第299図　B－1区第2遺構面SP遺構・遺物実測図 …288
第300図　A－11区第2遺構面水田実測図 ……289
第301図　A－10区第2遺構面水田実測図 ……290
第302図　A－9・8区第2遺構面水田実測図 ……291
第303図　A－8区第2遺構面水田実測図 ……292
第304図　A－7区第2遺構面水田実測図 ……293
第305図　A－1区第2遺構面水田実測図(1) ……294
第306図　A－1区第2遺構面水田実測図(2) ……295
第307図　B－2・1区第2遺構面水田実測図 ……296
第308図　B－1区第2遺構面水田実測図(1) ……297
第309図　B－1区第2遺構面水田実測図(2) ……298
第310図　A－1区第2遺構面水田出土遺物実測図 …299
第311図　A－7区第2遺構面水田出土遺物実測図 …299
第312図　B－1区第2遺構面水田出土遺物実測図 …299

第313図　A区第2包含層出土遺物実測図(1) ……300
第314図　A区第2包含層出土遺物実測図(2) ……301
第315図　A区第2包含層出土遺物実測図(3) ……302
第316図　A区第2包含層出土遺物実測図(4) ……303
第317図　A区第2包含層出土遺物実測図(5) ……304
第318図　A区第2包含層出土遺物実測図(6) ……305
第319図　A区第2包含層出土遺物実測図(7) ……306
第320図　A区第2包含層出土遺物実測図(8) ……307
第321図　A区第2包含層出土遺物実測図(9) ……308
第322図　A区第2包含層出土遺物実測図(10) ……309
第323図　A区第2包含層出土遺物実測図(11) ……310
第324図　A区第2包含層出土遺物実測図(12) ……311
第325図　B区第2包含層出土遺物実測図 ……311
第326図　C区第2包含層以上出土遺物実測図(1) ……312
第327図　C区第2包含層以上出土遺物実測図(2) ……313
第328図　A－1区SD1003遺構・遺物実測図 ……314
第329図　A－1区SD1004遺構・遺物実測図 ……315
第330図　A－10区第1遺構面水田実測図 ……316
第331図　A－9・8区第1遺構面水田実測図 ……317
第332図　A－8区第1遺構面水田実測図(1) ……318
第333図　A－8区第1遺構面水田実測図(2) ……319
第334図　A－5区第1遺構面水田実測図(1) ……320
第335図　A－5区第1遺構面水田実測図(2) ……321
第336図　A－5区第1遺構面水田実測図(3) ……322
第337図　A－5・4区第1遺構面水田実測図 ……323
第338図　A－4区第1遺構面水田実測図(1) ……324
第339図　A－4区第1遺構面水田実測図(2) ……325
第340図　A－4区第1遺構面水田実測図(3) ……326
第341図　A－3区第1遺構面水田実測図 ……327
第342図　A－3・2区第1遺構面水田実測図 ……328
第343図　A－2・1区第1遺構面水田実測図 ……329
第344図　A－1区第1遺構面水田実測図(1) ……330
第345図　A－1区第1遺構面水田実測図(2) ……331
第346図　A－1区第1遺構面水田実測図(3) ……332
第347図　A－1区第1遺構面水田実測図(4) ……333
第348図　A－1区第1遺構面水田実測図(5) ……334
第349図　B－2区第1遺構面水田実測図 ……335
第350図　A－3区第1遺構面水田出土遺物実測図 …336
第351図　A－4区第1遺構面水田出土遺物実測図 …336
第352図　A－5・A－10区第1遺構面水田出土遺物実測図 ……337
第353図　A区第1包含層出土遺物実測図(1) ……338
第354図　A区第1包含層出土遺物実測図(2) ……339
第355図　A区第1包含層出土遺物実測図(3) ……340
第356図　A区第1包含層出土遺物実測図(4) ……341
第357図　A区第1包含層出土遺物実測図(5) ……342
第358図　A区第1包含層出土遺物実測図(6) ……343

自然科学的分析目次

【第1分冊】

① 大柿遺跡出土土器の胎土分析
第1表　蛍光X線と顕微鏡観察による分析結果 …361
第2表　大柿遺跡出土土器の胎土分析一覧表（%）ただし、Rb・Sr・Zrはppm.（1） ……364
第3表　大柿遺跡出土土器の胎土分析一覧表（%）ただし、Rb・Sr・Zrはppm.（2） ……365
第1図　縄文土器分布図（K－Ca散布図） ……362
第2図　縄文土器分布図（Mg－Ca散布図） ……362
第3図　弥生後期～古墳前期初頭土器の分布図（K－Ca散布図） ……363
第4図　弥生後期～古墳前期初頭土器の分布図（Mg－Ca散布図） ……363
図版1　実態顕微鏡による胎土観察（約8倍） …366
② 大柿遺跡出土サヌカイト製遺物の原材産地分析
図1　サヌカイト及びサヌカイト様岩石の原産地 ……372
図2　金山・五色台地域サヌカイト、黒曜石様ガラス質安山岩の原産地 ……373
表1－1　各サヌカイト（安山岩）の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値 ……374
表1－2　各サヌカイト（安山岩）の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値 ……375
表1－3　各サヌカイト（安山岩）の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値 ……376
表1－4　原石産地不明の組成の似た遺物で作られた遺物群の元素比の平均値と標準偏差値 ……377
表1－5　原石産地不明の組成の似た遺物で作られた遺物群の元素比の平均値と標準偏差値 ……378
表2　岩屋原産地からのサヌカイト原石66個の分類結果 ……379
表3　和泉・岸和田原産地からのサヌカイト原石72個の分類結果 ……379
表4　和歌山市梅原原産地からのサヌカイト原石21個の分類結果 ……379
表5　大柿遺跡出土サヌカイト製石器、石片の元素比分析結果 ……380
表6　大柿遺跡出土サヌカイト製遺物の原材産地分析結果 ……381
③ 大柿遺跡に係る鉄滓等の自然科学的分析調査
表1　資料明細 ……382
表2－1　化学成分分析値（wt%） ……386
表2－2　化学成分分析値（wt%） ……386
表2－3　化学成分分析値（wt%） ……386
図版1　調査資料外観 ……388
図版2　調査資料外観 ……389
図版3　顕微鏡観察組織 ……390
図版4　顕微鏡観察組織・SEM観察組織とEDX鉱物相微小部分析 ……391
図版5　SEM観察組織とEDX鉱物相微小部分析 ……392

図版６　SEM 観察組織と EDX 鉱物相微小部分析……393
図版７　X 線回析……394
図版８　X 線回析……395
④　大柿遺跡における自然科学分析
Ⅰ　大柿遺跡のプラント・オパール分析
表１　大柿遺跡のプラント・オパール分析結果(1)……399
表２　大柿遺跡のプラント・オパール分析結果(2)……399
図１　A－１区地点におけるプラント・オパール分析結果……400
図２　A－11区地点におけるプラント・オパール分析結果……401
図版１　プラント・オパールの顕微鏡写真……402
Ⅱ　大柿遺跡の花粉分析
表１　大柿遺跡における花粉分析結果……405
図版１　大柿遺跡の花粉・胞子……406
Ⅲ　大柿遺跡の種実同定
表１　大柿遺跡における樹種同定結果……410
図版１　大柿遺跡の木材及び炭化材……411
⑤　大柿遺跡土壌 pH
表１　大柿遺跡土壌 pH（すべて所属時期は縄文時代中期末）……415
⑥　大柿遺跡出土人歯の鑑定結果
表１　デンタルチャート……417
表２　デンタルチャート……418

観察表目次

【第２分冊】

第１表　大柿遺跡土器観察表（１）……1
第２表　大柿遺跡土器観察表（２）……2
第３表　大柿遺跡土器観察表（３）……3
第４表　大柿遺跡土器観察表（４）……4
第５表　大柿遺跡土器観察表（５）……5
第６表　大柿遺跡土器観察表（６）……6
第７表　大柿遺跡土器観察表（７）……7
第８表　大柿遺跡土器観察表（８）……8
第９表　大柿遺跡土器観察表（９）……9
第10表　大柿遺跡土器観察表（10）……10
第11表　大柿遺跡土器観察表（11）……11
第12表　大柿遺跡土器観察表（12）……12
第13表　大柿遺跡土器観察表（13）……13
第14表　大柿遺跡土器観察表（14）……14
第15表　大柿遺跡土器観察表（15）……15
第16表　大柿遺跡土器観察表（16）……16
第17表　大柿遺跡土器観察表（17）……17
第18表　大柿遺跡土器観察表（18）……18
第19表　大柿遺跡土器観察表（19）……19
第20表　大柿遺跡土器観察表（20）……20
第21表　大柿遺跡土器観察表（21）……21
第22表　大柿遺跡土器観察表（22）……22
第23表　大柿遺跡土器観察表（23）……23
第24表　大柿遺跡土器観察表（24）……24
第25表　大柿遺跡土器観察表（25）……25
第26表　大柿遺跡土器観察表（26）……26
第27表　大柿遺跡土器観察表（27）……27
第28表　大柿遺跡土器観察表（28）……28
第29表　大柿遺跡土器観察表（29）……29
第30表　大柿遺跡土器観察表（30）……30
第31表　大柿遺跡土器観察表（31）……31
第32表　大柿遺跡土器観察表（32）……32
第33表　大柿遺跡石器観察表（１）……33
第34表　大柿遺跡石器観察表（２）……34
第35表　大柿遺跡石器観察表（３）……35
第36表　大柿遺跡石器観察表（４）……36
第37表　大柿遺跡石器観察表（５）……37
第38表　大柿遺跡石器観察表（６）……38
第39表　大柿遺跡鉄器観察表（１）……39
第40表　大柿遺跡鉄器観察表（２）……40
第41表　大柿遺跡銭貨観察表（１）……41
第42表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）（１）……42
第43表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）（２）……43
第44表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）（３）……44
第45表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）（４）……45
第46表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）（５）……46
第47表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）（６）……47
第48表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）（７）……48
第49表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）（８）……49
第50表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）（９）……50
第51表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）（10）……51
第52表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）（11）……52
第53表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）（12）……53
第54表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）（13）……54
第55表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）（14）……55
第56表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）（15）……56
第57表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）（16）……57
第58表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）（17）……58
第59表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）（18）……59
第60表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）（19）……60
第61表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）（20）……61
第62表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）（21）……62
第63表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）（22）……63
第64表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）（23）……64
第65表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）（24）……65
第66表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）（25）……66
第67表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）（26）……67
第68表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）（27）……68
第69表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）（28）……69
第70表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）（29）……70
第71表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）（30）……71
第72表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）（31）……72
第73表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）（32）……73
第74表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）（33）……74
第75表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）（34）……75

第76表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）　(35)……76
第77表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）　(36)……77
第78表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）　(37)……78
第79表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）　(38)……79
第80表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）　(39)……80
第81表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）　(40)……81
第82表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）　(41)……82
第83表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）　(42)……83
第84表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）　(43)……84
第85表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）　(44)……85
第86表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）　(45)……86
第87表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）　(46)……87
第88表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）　(47)……88
第89表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）　(48)……89
第90表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）　(49)……90
第91表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）　(50)……91
第92表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）　(51)……92
第93表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）　(52)……93
第94表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）　(53)……94
第95表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）　(54)……95
第96表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）　(55)……96
第97表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）　(56)……97
第98表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）　(57)……98
第99表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）　(58)……99
第100表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）　(59)……100
第101表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）　(60)……101
第102表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）　(61)……102
第103表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）　(62)……103
第104表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）　(63)……104
第105表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）　(64)……105
第106表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）　(65)……106
第107表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）　(66)……107
第108表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）　(67)……108
第109表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）　(68)……109
第110表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）　(69)……110
第111表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）　(70)……111
第112表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）　(71)……112
第113表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）　(72)……113
第114表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）　(73)……114
第115表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）　(74)……115
第116表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）　(75)……116
第117表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）　(76)……117
第118表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）　(77)……118
第119表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）　(78)……119
第120表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）　(79)……120
第121表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）　(80)……121
第122表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）　(81)……122
第123表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）　(82)……123
第124表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）　(83)……124
第125表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）　(84)……125
第126表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）　(85)……126
第127表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）　(86)……127
第128表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）　(87)……128
第129表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）　(88)……129
第130表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）　(89)……130
第131表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）　(90)……131
第132表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）　(91)……132
第133表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）　(92)……133
第134表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）　(93)……134
第135表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）　(94)……135
第136表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）　(95)……136
第137表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）　(96)……137
第138表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）　(97)……138
第139表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）　(98)……139
第140表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）　(99)……140
第141表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）　(100)…141
第142表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）　(101)…142
第143表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）　(102)…143
第144表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）　(103)…144
第145表　大柿遺跡新遺構一覧表（内実測）　(104)…145
第146表　大柿遺跡SA観察表　（1）……146

図　版　目　次

【第1分冊】
巻頭図版1　調査前風景（北から）
　　調査前風景（東から）
巻頭図版2　SD3004出土弥生土器(1)
　　SD3004出土弥生土器(2)
巻頭図版3　SK2067出土土器
　　SP4099出土土器
巻頭図版4　A－1区第13遺構面西側検出状況（西から）
　　SK13011縄文土器出土状況
【第2分冊】
図版1　調査前風景A区（南から）
　　調査前風景C区（西から）
図版2　A－1区第13遺構面西側検出状況（西から）
　　A－1区第13遺構面西側検出状況（北から）
図版3　A－1区第13遺構面完掘状況（西から）
　　A－1区第13遺構面西側完掘状況（北から）
図版4　A－1区第13遺構面西側完掘状況（東から）
図版5　A－2区第13遺構面完掘状況（西から）
　　A－2区第13遺構面完掘状況（東から）
図版6　SH13001遺物出土状況（北から）
　　SH13001遺物出土状況（北から）
　　SH13001覆土堆積状況（西から）
図版7　SH13002検出状況（北から）
　　SH13002縄文土器出土状況
　　SH13002覆土堆積状況（東から）
図版8　SH13004検出状況（北から）
　　SH13004覆土堆積状況（南から）
　　SH13004覆土堆積状況（東から）
図版9　SK13008縄文土器出土状況
　　SK13011縄文土器出土状況（南東から）
　　SK13011縄文土器出土状況（西から）

図版10　SR13001遺物出土状況（北から）
SR13001完掘状況（北西から）
SR13002完掘状況（東から）
図版11　ST12001土層堆積状況（北西から）
ST12001完掘状況（南から）
図版12　A－10区第11遺構面水田完掘状況（南から）
A－11区第11遺構面完掘状況（南から）
図版13　B－１区第11遺構面水田検出状況（西から）
B－２区第11遺構面水田検出状況（南から）
図版14　B－１区第11遺構面水田水口（南から）
B－１区第11遺構面水田水口（西から）
図版15　SD11001完掘状況（南から）
SD11001流木１（西から）
図版16　SD11001流木２（南から）
SD11001流木３（南から）
図版17　A－10区第10遺構面水田完掘状況（南から）
A－11区第10遺構面水田完掘状況（南から）
図版18　B－１区第10遺構面水田完掘状況（南西から）
B－２区第10遺構面水田検出状況（南から）
B－３区第10遺構面水田完掘状況（東から）
図版19　B－３区第10遺構面水田東側（北から）
B－３区第10遺構面水田水口・足跡痕（南から）
図版20　SK10001完掘状況（南から）
SK10001遺物出土状況（南から）
B－１区第10包含層F－１グリッド遺物出土状況（北西から）
図版21　A－９区第９遺構面水田検出状況（南から）
B－２区第９遺構面水田検出状況（南から）
図版22　SH9001炭化物検出状況（南から）
SH9002炭化物検出状況（南から）
図版23　A－11区第８遺構面水田完掘状況（南から）
B－３区第８遺構面完掘状況（北西から）
SD8001完掘状況（北から）
図版24　A－10区第７遺構面水田完掘状況（南から）
B－３区第７遺構面完掘状況（東から）
A－10区第６遺構面水田完掘状況（南東から）
図版25　A－８区第５遺構面完掘状況（北西から）
SK5001完掘状況（西から）
図版26　A－10区第４遺構面完掘状況（西から）
C－２区第４遺構面水田検出状況（南から）
図版27　SD4002完掘状況（北から）
SD4002完掘状況（西から）
図版28　SD4003検出状況（北から）
SP4099遺物出土状況（東から）
図版29　A－１区第３遺構面完掘状況（西から）
A－１区第３遺構面東側検出状況（西から）
図版30　A－４区第３遺構面完掘状況（西から）
C－１区第３遺構面水田完掘状況（南から）
図版31　C－２区第３遺構面水田検出状況（南から）
C－４区第３遺構面水田完掘状況（南から）
図版32　SD3004－１層断面ポイントA南遺物出土状況（南から）
SD3004－２層断面ポイントA南遺物出土状況（南から）
図版33　SD3004－２層断面ポイントA北遺物出土状況（南から）
SD3004－２層断面ポイントA北遺物出土状況（西から）
図版34　SD3004－３層遺物出土状況（南から）
SD3004－３層断面ポイントA北北側溝付近遺物出土状況
SD3004－４層遺物出土状況（南から）
図版35　SP3046遺物出土状況（東から）
SP3070遺物出土状況（西から）
SP3095遺物出土状況（南から）
図版36　A－１区第２遺構面西側完掘状況（東から）
A－１区第２遺構面東側完掘状況（東から）
図版37　A－１区第２遺構面北西部分完掘状況（東から）
A－１区第２遺構面水田検出状況（西から）
図版38　A－２区第２遺構面完掘状況（東から）
A－３区第２遺構面完掘状況（東から）
図版39　A－４区第２遺構面完掘状況（東から）
A－８区第２遺構面完掘状況（東から）
図版40　A－８区第２遺構面完掘状況（北から）
B－１区第２遺構面完掘状況（東から）
図版41　SA2008完掘状況（東から）
SD2004遺物出土状況（南から）
SD2004完掘状況（南から）
図版42　SH2001遺物出土状況（南から）
SH2001土層堆積状況（南東から）
SH2001土層堆積状況（北東から）
図版43　SK2026遺物出土状況（南から）
SK2028遺物出土状況（西から）
図版44　SK2036遺物出土状況（北から）
SK2048遺物出土状況（東から）
図版45　SK2067遺物出土状況(1)（南から）
SK2067遺物出土状況(2)（南から）
SK2067遺物出土状況(3)（南から）
図版46　SK2067遺物出土状況(4)（南から）
SK2067遺物出土状況(5)（南から）
SK2067遺物出土状況(6)（南から）
図版47　SK2070遺物出土状況（南から）
SK2097遺物出土状況（南から）
SK2108・SK2110遺物出土状況（南から）
図版48　SK2170遺物出土状況（西から）
SK2174遺物出土状況（南から）
図版49　SX2001土層堆積状況（東から）
ST2016人骨検出状況（南から）
図版50　ST2014人骨検出状況（南から）
ST2014人骨検出状況（西から）
図版51　SP2176遺物出土状況（南から）
SP2259遺物出土状況（南から）
図版52　A－１区第１遺構面東側完掘状況（西から）
A－１区第１遺構面北西部分完掘状況（東から）
図版53　A－１区第１遺構面水田完掘状況（東から）
A－２区第１遺構面水田完掘状況（西から）
図版54　A－４区第１遺構面水田完掘状況（南東から）
SD1003遺物出土状況（北から）
図版55　第13遺構面出土遺物
図版56　第13遺構面出土遺物
図版57　第13遺構面出土遺物
図版58　第13遺構面出土遺物

図版59　第13遺構面出土遺物
図版60　第13遺構面出土遺物
図版61　第13遺構面出土遺物
図版62　第13遺構面出土遺物
図版63　第13遺構面・包含層出土遺物
図版64　第13包含層出土遺物
図版65　第13包含層出土遺物
図版66　第12遺構面・包含層出土遺物
図版67　第11包含層出土遺物
図版68　第10遺構面水田・包含層出土遺物
図版69　第９包含層出土遺物
図版70　第８遺構面水田出土遺物
図版71　第８包含層出土遺物
図版72　第７遺構面水田・包含層出土遺物
図版73　第６包含層出土遺物
図版74　第５遺構面・包含層出土遺物
図版75　第４遺構面出土遺物
図版76　第４遺構面水田・包含層出土遺物
図版77　第４包含層出土遺物
図版78　第４包含層出土遺物
図版79　第３遺構面出土遺物
図版80　第３遺構面出土遺物
図版81　第３遺構面出土遺物
図版82　第３遺構面出土遺物
図版83　第３遺構面出土遺物
図版84　第３遺構面出土遺物
図版85　第３遺構面出土遺物
図版86　第３遺構面出土遺物
図版87　第３遺構面出土遺物
図版88　第３遺構面出土遺物
図版89　第３遺構面出土遺物
図版90　第３遺構面出土遺物
図版91　第３遺構面出土遺物
図版92　第３遺構面出土遺物
図版93　第３遺構面出土遺物
図版94　第３遺構面出土遺物
図版95　第３遺構面出土遺物
図版96　第３遺構面出土遺物
図版97　第３遺構面出土遺物
図版98　第３遺構面出土遺物
図版99　第３遺構面出土遺物
図版100　第３遺構面出土遺物
図版101　第３遺構面出土遺物
図版102　第３遺構面出土遺物
図版103　第３遺構面出土遺物
図版104　第３遺構面出土遺物
図版105　第３遺構面出土遺物
図版106　第３遺構面出土遺物
図版107　第３遺構面水田・包含層出土遺物
図版108　第３包含層出土遺物
図版109　第３包含層出土遺物
図版110　第３包含層出土遺物
図版111　第２遺構面出土遺物
図版112　第２遺構面出土遺物
図版113　第２遺構面出土遺物
図版114　第２遺構面出土遺物
図版115　第２遺構面出土遺物
図版116　第２遺構面出土遺物
図版117　第２遺構面出土遺物
図版118　第２遺構面出土遺物
図版119　第２遺構面出土遺物
図版120　第２遺構面出土遺物
図版121　第２遺構面出土遺物
図版122　第２遺構面出土遺物
図版123　第２遺構面出土遺物
図版124　第２遺構面出土遺物
図版125　第２遺構面出土遺物
図版126　第２遺構面出土遺物
図版127　第２遺構面出土遺物
図版128　第２包含層出土遺物
図版129　第２包含層出土遺物
図版130　第２包含層出土遺物
図版131　第２包含層出土遺物
図版132　第１遺構面水田・包含層出土遺物
図版133　第１包含層出土遺物
図版134　第１包含層出土遺物

付　図　目　次

付図１　大柿遺跡（光下新町線）A～C区　基本土層図
付図２　大柿遺跡（光下新町線）第13～５遺構面　遺構配置図（A区）
付図３　大柿遺跡（光下新町線）第４～１遺構面　遺構配置図（A区）
付図４　大柿遺跡（光下新町線）第11～１（B区）、第４・３遺構面　遺構配置図
付図５　大柿遺跡（光下新町線）第２遺構面　遺構配置図（A区）
付図６　大柿遺跡（光下新町線）A－４区SD3004土層堆積・遺物出土状況図(1)
付図７　大柿遺跡（光下新町線）A－４区SD3004　遺物出土状況図(2)

Ⅰ　調査の経緯

第１節　調査に至る経緯

本遺跡は、徳島県三好郡三好町昼間に位置し、昭和50年６月から翌年の２月にかけて、東西約300mにわたって、吉野川北岸農業水利事業に伴う埋蔵文化財発掘調査が実施された。その際に、弥生時代前期末から後期の集落、古墳時代後期の集落、中世の集落が発見された。弥生土器、須恵器、陶磁器、宋銭等が出土しており、弥生時代から中世までの長期間にわたって集落が形成されていたと考えられる。

中でも、弥生時代中期および後期の竪穴住居跡からは、安山岩の剝片や石鏃・石錐などの未製品や、石器加工台が出土しており、石器の製作が行われていたと思われる。

その後、四国縦貫自動車道（美馬～池田間）建設に伴って、平成８年４月３日より平成９年３月31日までの間、引き続き大柿遺跡の発掘調査が行われた。調査区域は前回の調査地点より、南に約300mの地点で、東西１㎞、深度約５ｍ、延べ面積約263,000㎡にわたる大規模な発掘調査となった。吉野川に面した微高地の斜面からは弥生時代前期、後期～古墳時代初頭の棚田が検出された。水田は等高線に沿って営まれていたことから、当時は、地形を大きく改変して耕作地を造成するのではなく地形に沿って、且つ、地形を利用して水田を営んでいたと考えられる。古墳時代後期の集落からは竪穴住居が25軒検出された。県内でこの規模の古墳時代集落が確認されたのは初めてである。微高地中央部からは古墳時代・平安・室町期の遺構とともに、微高地内でもやや低いところでは古代から中世に及ぶ水田が検出された。県内では、集落とともにそれと同時期の生活基盤である水田が確認された例は珍しく、注目されている。

今回の発掘調査は、町道光下新町線建設に伴うもの査である。建設用地は、四国縦貫道側道から県道鳴門池田線に向けて、三好町の平野部西部を細長く1.2㎞北西へと延びる。平成10年３月２日～３月20日にかけて、南東部分約350mと北西部分約420mにわたる部分に、約20か所のトレンチを設定し、試掘調査が行われた。その結果、東隣の大柿遺跡（四国縦貫自動車道）との対応が考えられる遺構面、遺構が検出された。

南東部分では、耕作土及び近世以降の水田土壌の下に、古代～中世、弥生～古墳、縄文時代の遺構面、中世の水田などが確認された。

北西部分においては、全体的に小川谷川の度重なる氾濫を受けており、礫層が検出された。南の低地部では、南東部分と同様の堆積の下に礫層が確認された。北の微高地部では、小川谷川の近世以後の氾濫と思われる礫層が上位に、その下には、南の低地部と対応する層が見られ、下層は再び礫層となる。

以上の調査結果により、大柿遺跡(四国縦貫自動車道)同等の遺構面のある可能性が考えられ、特に、縄文晩期の遺構面、弥生時代の水田面、弥生～古代の集落群の遺構など、貴重な資料が残っていると推測され、本調査が必要であると判断された。

発掘調査業務、報告書作成業務体制は以下の通りである。

調査主体　　財団法人徳島県埋蔵文化財センター

調査組織

理　事　長	青木　武久（平成10～12年度）	松村　通治（平成13年度）
所　　長	寒川　光明（平成10～12年度）	本淨　敏之（平成13年度）

局　　長	細川　靖夫（平成10・11年度）	伊丹　康裕（平成12・13年度）
総務課長	井後　伸一（平成10・11年度）	高野　　明（平成12・13年度）
庶務係長	福本紀美子（平成12・13年度）	
調査課長	菅原　康夫（平成10～13年度）	
調査第一係長	市村　みね（平成10・11年度）	光山　忠幸（平成12・13年度）
調査第二係長	武市　文雄（平成10～12年度）	新居　文和（平成13年度）
研究員	田川　　憲（平成10・11年度）	加藤　公夫（平成10～12年度）
	上窪　昭英（平成11年度）	深田　晃司（平成12年度）
	相原　　聡（平成13年度）	島田　豊彰（平成13年度）

整理組織

理事長	松村　通治（平成13～16年度）	
所　　長	本淨　敏之（平成13～15年度）	浦上　純二（平成16年度）
局　　長	伊丹　康裕（平成13年度）	西村　和博（平成14・15年度）
	河野　幸一（平成16年度）	
総務課長	高野　　明（平成13年度）	山本　高史（平成14・15年度）
	古田　哲郎（平成16年度）	
庶務係長	福本紀美子（平成13・14年度）	坂尾　俊一（平成15・16年度）
整理普及課長	島巡　賢二（平成13～16年度）	
整理係長	貞野　保仁（平成13・14年度）	貞野　雅己（平成15・16年度）
普及係長	青木　秀明（平成13・14年度）	関本　秋夫（平成15・16年度）
研究員	泊　　強（平成13年度）	幸泉　満夫（平成13年度）
	棚次美和子（平成14～16年度）	久保脇美朗（平成15年度）

第２節　調査の経緯

(1)　調査の経過

本調査は、４年間にわたって行われた。第１次調査面積480㎡、延べ面積3,348㎡を平成10年10月１日～平成11年３月31日まで、第２次調査面積3,271㎡、延べ面積11,232㎡を平成11年４月２日～平成12年３月31日まで、第３次調査面積1,095㎡、延べ面積4,600㎡を平成12年４月４日～平成12年12月31日まで、第４次調査面積4,100㎡を平成13年７月１日～平成14年１月31日まで、それぞれ実施した。

(2)　発掘調査の方法

平成10年度に発掘を始めるにあたり、グリッドの配置は、四国縦貫道大柿遺跡のグリッドを西に延長したのを踏襲しつつ、第Ⅳ系国土座標軸を基準とした、X＝114,500　Y＝34,000を基点に設定した。しかし、翌年度からの調査により、調査区は西に拡張されたので、改めてX＝114,500　Y＝33,600を基点として再設定した。その基点から１辺100ｍの中グリッドを設定し、北へα～δ、東へⅠ～Ⅶの組み合わせで表した。中グリッドをさらに５ｍメッシュで分割し、基点から北へアルファベット、東へアラビア数字をふり、その組み合わせで小グリッドを表した。なお、本遺跡の中グリッドα－Ⅴ、小グリッドA－11地点が、四国縦貫道大柿遺跡の基点である、大グリッドLoc.１、中グリッドα－Ⅰ、小グリッドA－１（X＝114,500　Y＝34,000）に該当する。

本遺跡は、調査期間は４年間にわたり、全20調査区に分割されている上、各調査年度の分布範囲が複雑に入り組んでいる。そのため、報告書作成段階に、調査対象地全体を、JR高架のため調査不可能部分や、試掘により本調査不要とされた部分を境界として３区に大別し、東から北西へそれぞれABCのアルファベットで表した。さらに調査時の調査区にあわせて小別し、各大別調査区内で通し番号を振りなおした。A区は11区、B区は３区、C区は４区にそれぞれ小別される。

遺構番号は、調査年度、調査区、遺構面ごとにそれぞれ別個に遺構番号を設定していた。報告書作成段階に、各調査区間の遺構面の対応を検討後、遺構面・遺構の種類ごとに、東側（A－１区）より北西側（C－４区）に向かって、全て通し番号を振りなおした。

(3)　調査日誌抄

平成９年度

３月２日　試掘調査開始
３月20日　試掘調査終了

平成10年度

10月１日　調査前準備
10月12日　鉄板敷立会
10月20日　１区機械掘削開始
10月21日　１区人力掘削開始
10月22日　１区第１包含層遺構検出・遺構掘削
10月26日　１区第１包含層完掘写真
　　２区機械・人力掘削開始
10月30日　１区第１遺構面平面図完成
　　２区第１遺構面掘削開始
11月２日　１区第２包含層人力掘削開始
11月５日　１区第２遺構面検出、遺構内掘削
　　２区第１遺構面完掘写真（スカイマスター）
11月９日　１区第２遺構面完掘写真

11月11日　2区第2包含層遺構検出
11月12日　1区第3包含層人力掘削開始
11月13日　2区第2遺構面A検出
11月16日　1区完掘精査、完掘写真
　　2区第2遺構面A遺構内掘削開始
11月19日　1区第4包含層掘削開始
11月25日　1区第4遺構面完掘写真
　　2区第2遺構面a精査
11月26日　2区第2遺構面a完掘写真
11月30日　2区第2遺構面B包含層掘削開始
12月1日　1区第5包含層掘削開始
12月4日　1区第5遺構面精査、検出
　　2区第3遺構面包含層掘削
　　第2遺構面B完掘写真
12月8日　1区第5遺構面遺構掘削
　　2区第3遺構面包含層掘削、遺構検出
12月10日　1区第5遺構面完掘写真
　　第6包含層人力掘削
12月11日　1区第6遺構面遺構検出、完掘、写真
　　2区第3遺構面遺構内掘削
12月15日　1区第7包含層人力掘削
12月16日　1区第7包含層遺構検出、遺構内掘削
12月17日　1区第7遺構面完掘、写真
12月22日　1区第8包含層人力掘削
12月24日　1区第8包含層遺構掘削
1月5日　1区第8遺構面精査、写真
1月8日　1区第9包含層掘削
1月11日　1区第9遺構面遺構内掘削
1月13日　1区第9遺構面精査、写真
1月14日　2区第3遺構面精査、完掘、写真
1月18日　2区第4包含層人力掘削
1月19日　1区第10包含層人力掘削
　　2区第4包含層遺構検出
1月20日　2区第4包含層遺構内掘削
1月22日　2区第4包含層人力掘削
1月27日　1区第10遺構面遺構内掘削
1月29日　1区第10遺構面精査、完掘写真
　　2区第4－a遺構面遺構検出、遺構内掘削
2月1日　2区第4－a遺構面完掘写真
2月4日　1区第11遺構面包含層掘削、遺構内掘削
2月5日　2区第4－b遺構面包含層掘削
2月8日　2区第4－b遺構面遺構内掘削
2月9日　1区第12遺構面包含層掘削
2月10日　2区第4－b遺構面完掘
2月15日　1区第12遺構面遺構検出、遺構内掘削
　　2区第4－b遺構面完掘、写真
2月16日　2区第5遺構面包含層人力掘削
2月17日　2区第5遺構面遺構検出、遺構内掘削
2月19日　1区第12遺構面写真
2月23日　1区調査区壁面土層図作図
2月25日　1区第13包含層人力掘削
3月2日　2区第5遺構面写真
3月3日　1区第13遺構面遺構検出、遺構内掘削、写真
3月4日　2区第6包含層人力掘削
3月8日　2区壁面写真、第6遺構面遺構掘削
3月9日　1区確認トレンチ掘削
3月10日　2区第6遺構面完掘写真
3月11日　2区確認トレンチ掘削
3月18日　1区完了写真、調査完了
3月25日　2区調査完了

平成11年度

4月1日　調査前準備
4月28日　1－1区第1包含層人力掘削、遺構検出
　　2－1区第1包含層人力掘削
4月30日　1－1区遺構検出
　　2－1区第1包含層人力掘削
5月6日　1－1区第1遺構面遺構内掘削
　　2－1区第1、2遺構面検出
5月10日　2－1区第1遺構面遺構内掘削
　　試掘掘削開始
5月13日　1－1区第1遺構面完掘、写真、第2

	包含層人力
5月17日	2－1区第1遺構面完掘、写真
5月19日	1－1区第2遺構面検出
	2－1区1－B遺構面検出、遺構内掘削
	3区第1遺構面検出
5月20日	2－1区1－B遺構面精査、完掘、写真
	3区第1遺構面遺構内掘削、精査
5月21日	2－1区第2遺構面遺構内掘削
	3区第1遺構面完掘、写真
5月31日	1－1区第3包含層人力掘削、第3遺構面遺構検出
6月1日	1－1区第3遺構面完掘
	3区第2包含層人力掘削、第2遺構面遺構検出
6月11日	3区第3遺構面人力
6月14日	3区第3遺構面検出、写真、遺構内掘削
6月16日	3区第4包含層人力掘削
6月17日	3区第4遺構面人力掘削、遺構内掘削
6月21日	2－1区第2遺構面精査、完掘、写真
	3区第4遺構面精査、完掘、写真
6月22日	3区第5包含層人力掘削
6月23日	3区第5遺構面検出、写真、完掘
6月28日	2－1区第3包含層人力掘削
7月5日	2－1区第3遺構面検出
	3区第6包含層人力掘削
7月6日	2－1区第3遺構面遺構内掘削
7月8日	3区第6遺構面検出
7月12日	3区第6遺構面遺構内掘削
7月14日	3区第7包含層人力掘削
7月15日	3－1区第7遺構面遺構検出、完掘、写真
7月16日	2－1区第3遺構面完掘、写真、第4包含層人力掘削
	3区第7遺構面遺構内掘削
7月21日	1－1区壁面土層断面図、写真
	3区第7遺構面完掘
7月23日	2－1区第4包含層人力掘削
	3区第8包含層人力掘削
7月26日	2－1区第4遺構面検出
	3区第8遺構面検出
7月30日	2－1区第4遺構面遺構内掘削
	3区第8遺構面遺構内掘削
8月2日	3区第8遺構面完掘、写真
8月4日	3区第9包含層人力掘削
8月5日	1－1区調査完了
	3区第9遺構面検出、写真、遺構内掘削、完掘
8月9日	1－2区機械掘削
	2－1区第4遺構面写真、第5包含層人力掘削
8月17日	1－2区第1包含層人力掘削
8月20日	1－2区第1遺構面遺構検出、写真
	2－1区第5遺構面遺構検出
	3区第10包含層人力掘削
8月24日	3区第10遺構面遺構検出、写真
8月26日	1－2区第1遺構面遺構内掘削
8月27日	3区第11包含層人力掘削
8月30日	3区第11遺構面遺構検出、写真
8月31日	1－2区第2包含層人力掘削
	2－1区調査完了
	2－2区機械掘削
	3区第11遺構面遺構内掘削
9月1日	1－2区第2遺構面検出、遺構内掘削
9月3日	3区第12包含層人力掘削
9月7日	第1包含層人力掘削
9月9日	2－2区第1包含層人力掘削
	3区第12遺構面遺構内掘削
9月13日	3区第12遺構面検出、写真、完掘、壁面土層断面図、写真
9月16日	2－2区第1遺構面検出
9月17日	1－2区第2遺構面完掘、写真
	2－2区第1遺構面遺構内掘削
9月28日	2－2区第1遺構面精査
9月29日	1－2区第3包含層人力掘削
	2－2区第1遺構面完掘、写真

10月４日	３区第13包含層人力掘削、遺構面遺構検出
10月５日	３区第13遺構面検出、写真、遺構内掘削
10月６日	１－２区第３遺構面遺構内掘削
	２－２区第２包含層人力掘削
10月13日	１－２区第３遺構面完掘、写真
	２－２区第２遺構面遺構検出、遺構内掘削
10月15日	３区第14包含層人力掘削
10月18日	３区第14遺構面遺構内掘削
10月19日	３区第14遺構面遺構検出、写真、遺構内掘削
10月21日	１－２区調査完了
10月25日	４区機械掘削
10月28日	４区第１包含層人力掘削
10月29日	３区壁面土層断面図
11月１日	４区第１遺構面検出
11月２日	４区第１遺構面遺構内掘削
11月９日	４区第２包含層人力掘削
11月10日	４区第２遺構面遺構検出、写真、遺構内掘削
11月17日	４区第３包含層人力掘削
11月18日	４区第３遺構面検出、遺構内掘削
11月24日	３－２区表土削除
11月25日	３－２区機械掘削
	４区第４包含層人力掘削、第４遺構面検出、遺構内掘削
11月26日	３－２区第１遺構面遺構内掘削
12月２日	４区第５包含層人力掘削
12月３日	４区第５遺構面検出、完掘、写真、第６包含層人力掘削
12月６日	４区第６遺構面検出、写真、完掘
12月８日	２－２区第３包含層人力掘削
	３－２区第１遺構面完掘、写真
12月16日	２－２区第３遺構面遺構検出
12月17日	３－２区第２包含層人力掘削
１月５日	４区第７包含層人力掘削
１月６日	４区第７遺構面遺構検出、遺構内掘削
１月７日	２－２区第３遺構面遺構内掘削
	４区第７遺構面遺構内掘削、完掘、写真
１月13日	３－２区第２遺構面検出
１月14日	３－２区第３包含層人力掘削
１月24日	４区第８包含層人力掘削
１月25日	３－２区第３遺構面遺構内掘削
	４区第８遺構面検出、完掘
１月26日	３－２区第５包含層人力掘削
１月27日	３－２区第５遺構面遺構検出
１月28日	３－２区第５遺構面精査、写真
１月31日	３－２区第５遺構面遺構内掘削
２月３日	３－２区第６包含層人力掘削
	４区第９包含層人力掘削
２月７日	３－２区第６遺構面遺構検出
２月９日	３－２区第６遺構面写真、遺構内掘削
２月14日	４区完掘状況写真
２月16日	３－２区第７包含層人力掘削
２月17日	３－２区第７遺構面遺構検出
２月18日	３－２区第８包含層人力掘削
２月22日	３－２区第８遺構面検出、遺構内掘削
２月26日	３－２区第９包含層人力掘削
２月28日	３－２区第９遺構面遺構検出、遺構内掘削、機械掘削
３月２日	２－２区第４包含層人力掘削
	３－２区第９遺構面遺構内掘削、機械掘削
３月６日	３－２区第10包含層人力掘削、第10遺構面遺構検出
３月７日	３－２区第10遺構面遺構内掘削、写真
３月９日	２－２区第４遺構面遺構検出
	３－２区第11遺構面遺構検出
３月14日	３－２区第11遺構面遺構内掘削
３月15日	２－２区第４遺構面遺構内掘削
３月21日	３－２区調査完了
３月29日	２－２区調査完了

平成12年度

４月４日	調査前準備

4月17日	1区側溝掘り
	2区側溝掘り
4月18日	1区第1包含層人力
	2区機械掘り
4月27日	2区第1包含層遺構検出
4月28日	2区第1遺構面完掘、写真
5月8日	2区第2包含層人力
5月9日	2区第2遺構面検出、写真
5月11日	1区第1遺構面検出、写真
5月12日	2区第2遺構面遺構内掘削
5月15日	1区第1遺構面完掘、写真
5月19日	1区第1－B遺構面包含層人力
5月24日	1区第1－B遺構面完掘、写真
5月26日	1区第2包含層人力
5月30日	1区第2遺構面遺構内掘削
6月1日	1区第2遺構面精査、完掘
6月6日	1区第3包含層人力掘削
	2区第2遺構面完掘
6月12日	1区第3包含層精査、検出
6月13日	1区第3遺構面精査、検出
6月14日	1区第3遺構面完掘、写真
6月16日	2区第3包含層人力掘削
6月20日	1区第4包含層人力掘削
6月22日	2区第3遺構面検出、写真
6月23日	1区第4遺構面検出
6月24日	1区第4遺構面完掘、写真
6月29日	2区第3遺構面遺構内掘削
7月3日	1区第5包含層人力掘削
7月5日	1区第5遺構面検出、完掘
7月7日	2区第3遺構面精査、完掘、写真
7月10日	1区第6包含層人力掘削
7月11日	1区第6遺構面検出、完掘
7月12日	1区第6遺構面完掘、写真
	2区第4包含層人力掘削
7月17日	1区第7包含層人力掘削
7月18日	1区第7遺構面検出、完掘
7月24日	2区第4遺構面検出、写真
8月1日	1区壁面精査、写真
8月3日	1区壁面土層断面図
8月4日	2区第4遺構面遺構内掘削
8月8日	1区埋め戻し
8月17日	2区第4遺構面完掘、写真
8月22日	2区壁面断面図写真
9月1日	第1トレンチ第1遺構面検出、完掘、写真
9月5日	第1トレンチ第2遺構面検出、完掘、写真
9月7日	第1トレンチ第3遺構面検出、完掘、写真
9月18日	第1トレンチ第4遺構面検出、完掘、写真
	第3トレンチ表土機械掘削、側溝掘削
9月19日	第3トレンチ第1包含層人力掘削
9月20日	第1トレンチ第5遺構面検出、完掘、写真
	第2トレンチ表土機械掘削
	第3トレンチ第1遺構面検出、完掘、写真
9月21日	第2トレンチ第1包含層人力掘削、第1遺構面検出、完掘、写真
9月25日	第1トレンチ第6遺構面検出、完掘、写真
	第3トレンチ第2包含層人力掘削
9月26日	第3トレンチ第2遺構面検出、完掘、写真
9月27日	第1トレンチ第7遺構面検出、完掘、写真
	第2トレンチ第2遺構面検出
9月28日	第2トレンチ
9月1日	トレンチ掘削開始
10月20日	3－3区撹乱部分機械掘削
10月24日	3－3区側溝掘削、第1包含層人力掘削
10月26日	3－3区第1遺構面検出、完掘、写真
10月30日	3－2区第1包含層人力掘削
10月31日	3－2区第1遺構面検出、写真

	3－3区壁面補修
11月6日	3－3区壁面土層断面図、写真
11月7日	3－2区第2包含層人力掘削
11月8日	3－2区第2遺構面検出、写真、第3包含層人力掘削
11月9日	3－2区第3遺構面検出、写真、第4包含層人力掘削、第4遺構面検出、写真
11月10日	3－2区第5包含層人力掘削
11月13日	3－2区第5遺構面検出、完掘、写真
11月14日	3－1区第1遺構面検出、写真
11月15日	3－1区第2遺構面検出、写真、第3包含層人力掘削
11月16日	3－1区第4包含層人力掘削
	3－2区壁面土層断面写真
11月17日	3－1区第4遺構面検出、完掘、写真
11月22日	3－1区壁面土層断面写真、
11月24日	トレンチ掘削完了、埋め戻し、周辺部整地
12月26日	調査終了
12月27日	現場撤収

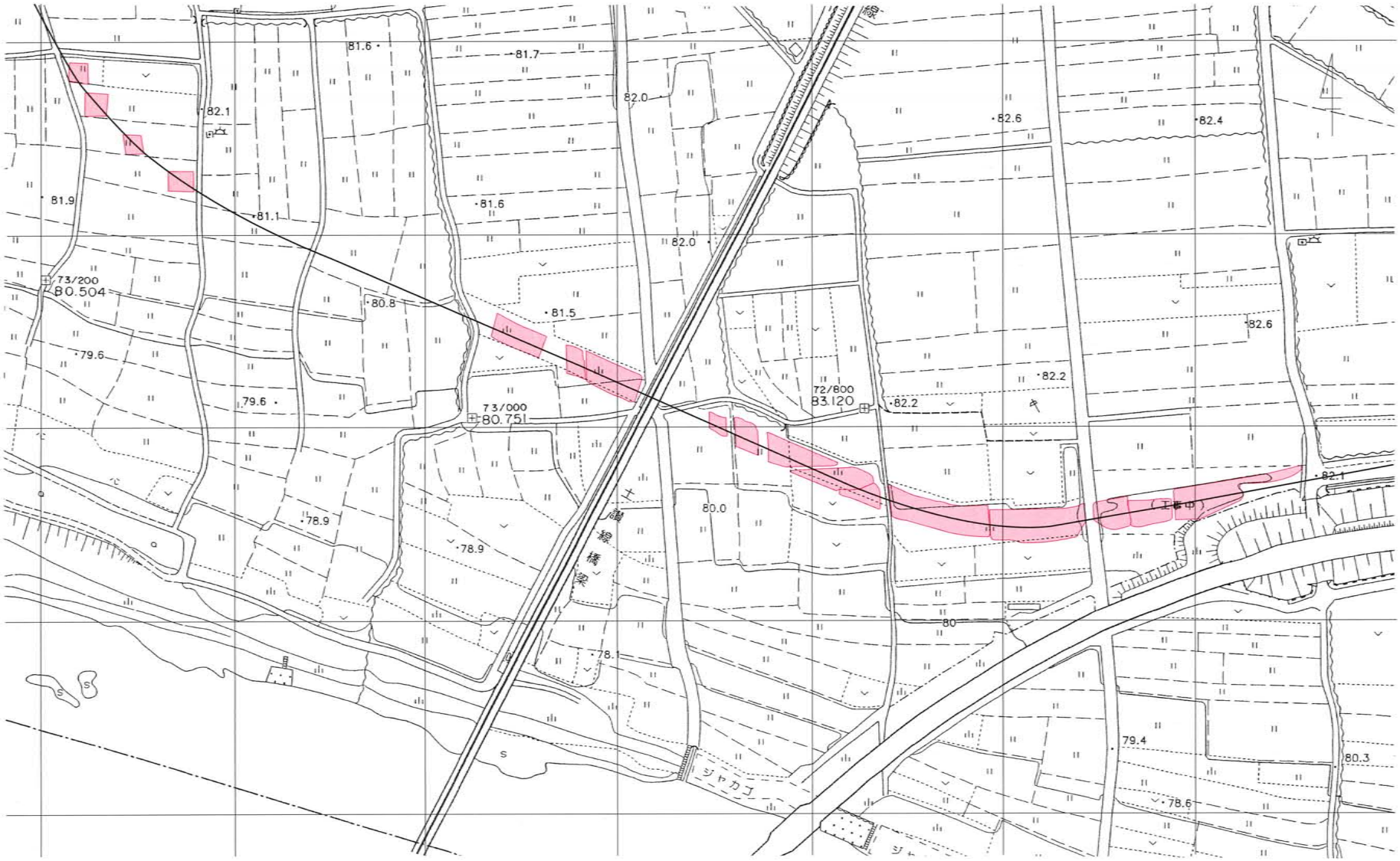
平成13年度

7月3日	調査前準備
7月18日	1－1区第1包含層人力、第1遺構面検出
	1－3区第1遺構面検出
7月19日	2－1区第1包含層人力
7月23日	1－1区、1－3区、第1遺構面遺構掘削
7月24日	2－1区第1遺構面検出
7月25日	1－2区第1遺構面検出
7月26日	2－1区第1遺構面遺構掘削
7月27日	1－2区第1遺構面遺構掘削
7月30日	2－1区第1遺構面精査、完掘写真
7月31日	1－1区第2包含層人力
8月2日	1－1区第2包含層人力、第2遺構面検出
8月3日	1－1区第2遺構面検出
8月7日	1－1区第2遺構面遺構掘削
8月9日	1－3区第1遺構面精査、完掘、写真
8月17日	1－3区第2包含層人力
8月22日	2－1区第2包含層人力
8月23日	1－2区第1遺構面精査、完掘、写真
	1－3区第2遺構面精査、検出、写真
8月29日	1－3区第2遺構面遺構掘削
	2－1区第2遺構面検出、写真
9月4日	1－2区第2遺構面遺構掘削
9月18日	1区第2面完掘撮影準備
9月19日	1区第2面完掘撮影
9月20日	2－1区第2遺構面遺構掘削
9月21日	2－1区第2遺構面完掘、写真
9月25日	1－3区第3包含層人力
9月27日	1－3区第3遺構面検出
9月28日	1－1区第3包含層人力
10月2日	1－2区第3包含層人力
10月4日	1区第3遺構面検出、写真
	2－1区第3包含層人力
10月15日	1－1区第3遺構面掘削
	2－1区第3遺構面検出、写真
10月18日	2－1区第3遺構面遺構掘削
10月19日	2－1区第3遺構面完掘、写真
10月24日	1区第3遺構面遺構掘削
10月30日	1区第3遺構面精査
10月31日	1区第3遺構面完掘、写真
11月1日	2－1区第4包含層人力
11月7日	2－1区第4遺構面検出、写真
11月9日	1－1区、1－2区、第4包含層人力
	2－1区第4遺構面遺構掘削
11月13日	2－1区第4遺構面完掘、写真
11月20日	1区第4遺構面検出
11月21日	1区第4遺構面検出、写真、遺構掘削
	2－1区第5包含層人力
11月26日	1区第4遺構面遺物集中区再検出
	2－1区第5遺構面検出、写真、遺構掘削
11月27日	2－1区第5遺構面完掘、写真

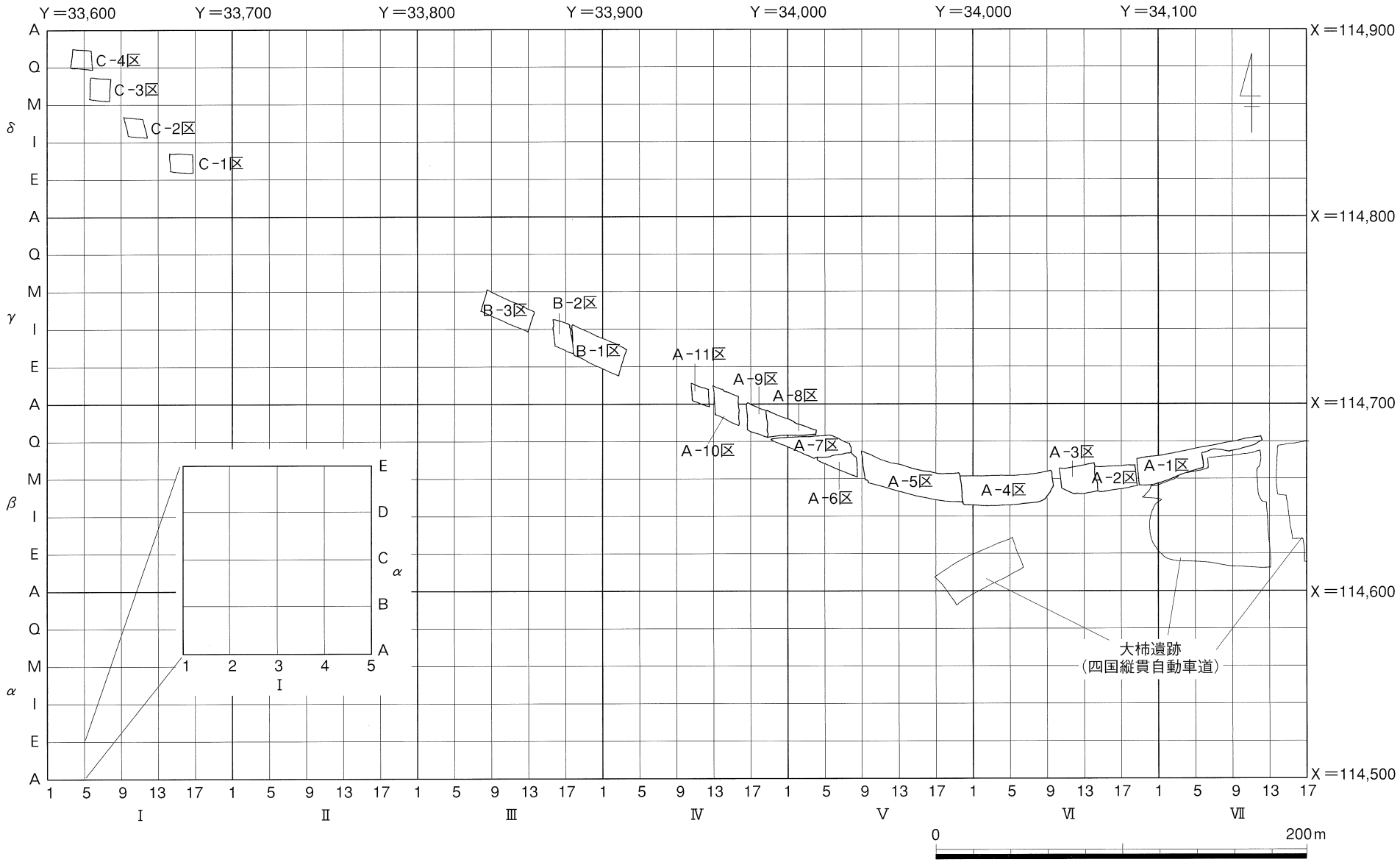
11月28日　２－１区第６包含層人力
11月29日　２－１区第６遺構面完掘、写真
２－２区表土機械掘削
11月30日　２－３区表土機械掘削
12月１日　２－１区調査終了
12月３日　２－２区第１包含層人力、第１遺構面検出、遺構掘削、完掘、写真
12月５日　２－２区第２包含層人力、第２遺構面検出、遺構掘削、完掘、写真
２－３区第１包含層人力、第１遺構面検出、遺構掘削、完掘、写真
12月７日　２－２区第３包含層人力掘削、第３遺構面検出、完掘、写真
２－３区第２包含層人力、第２遺構面検出、完掘、写真、第３包含層人力
12月10日　２－２区第４包含層人力、第４遺構面検出、遺構掘削、完掘、写真
２－３区第３包含層人力、第３遺構面検出、遺構掘削、完掘、写真
12月12日　２－２区第５包含層人力、第５遺構面検出、遺構掘削、完掘、写真
２－３区第４包含層人力、第４遺構面検出、遺構掘削、完掘、写真
12月14日　２－２区第６包含層人力、第６遺構面検出、遺構掘削
２－３区第５包含層人力、第５遺構面検出、遺構掘削
12月17日　２－２区第６遺構面完掘、写真
２－３区第５遺構面完掘、写真
12月18日　２－２区第７包含層人力、第７遺構面検出、遺構掘削、完掘、写真
２－３区第６包含層人力、第６遺構面遺構掘削、完掘、写真
12月19日　１区第４遺構面完掘写真準備、精査
12月20日　１区第４遺構面完掘、写真
２－３区第７包含層人力、第７遺構面検出、遺構掘削、完掘、写真
12月21日　２－２区第８包含層人力
２－３区第８包含層人力
12月26日　２－２区第８遺構面検出、遺構掘削
２－３区第８遺構面検出、遺構掘削
12月27日　２－２区第８遺構面完掘、写真
２－３区第８遺構面完掘、写真

平成14年

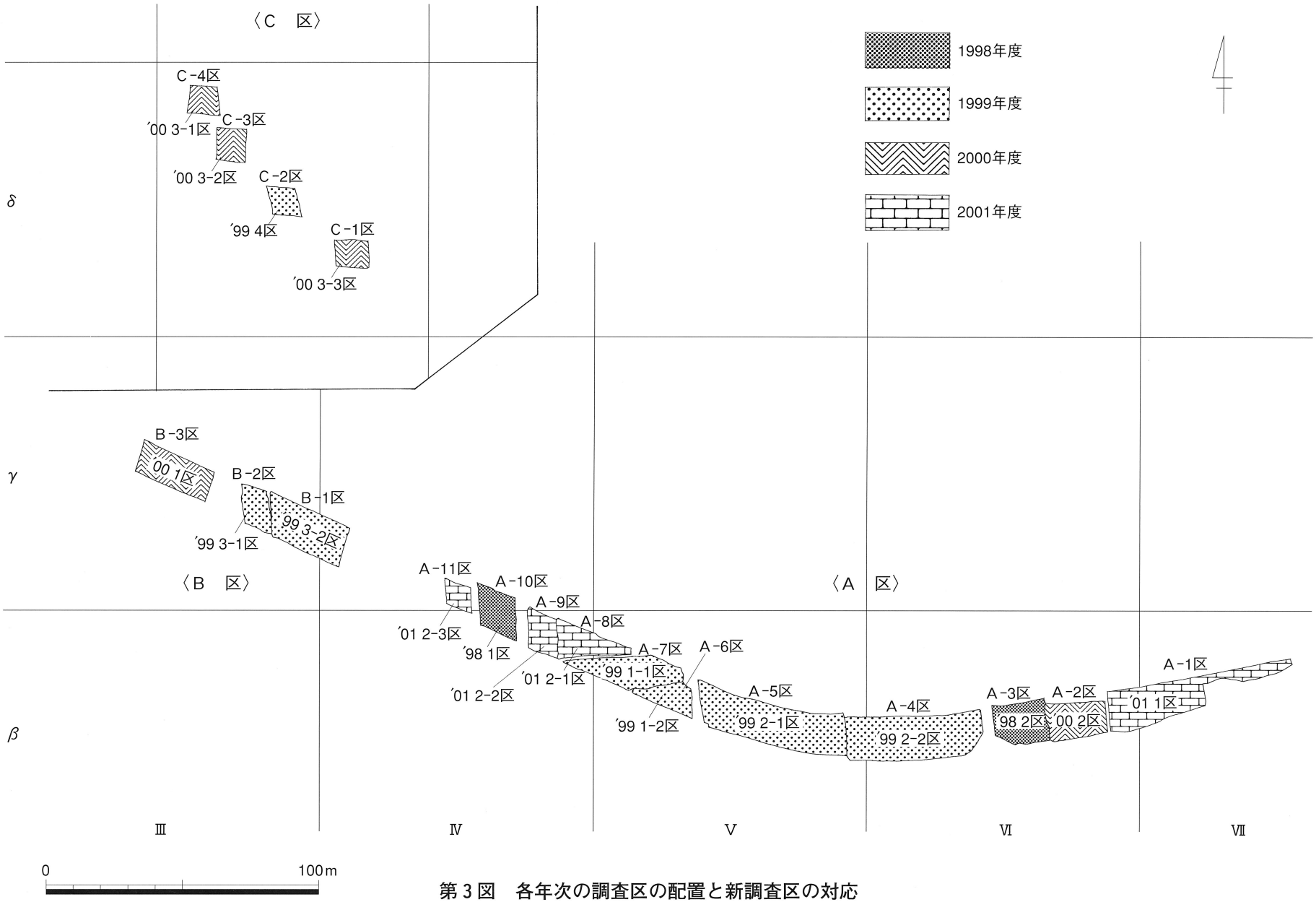
１月７日　１区第４遺構面遺構集中区完掘、写真
２－３区第９包含層人力
１月８日　２－２区第９包含層人力、第９遺構面検出
２－３区第９包含層人力、第９遺構面検出、遺構掘削完掘、写真
１月９日　２－２区第９遺構面遺構掘削、完掘、写真、第10包含層人力
２－３区第10包含層人力、第10遺構面検出、遺構掘削、完掘、写真
１月10日　２－２区第10遺構面検出、遺構掘削、完掘、写真
２－３区第11包含層人力
１月15日　２－２区第11包含層人力
２－３区第11遺構面検出、遺構掘削、完掘、写真
１月17日　２－２区第11遺構面検出、遺構掘削、完掘、写真
２－３区第12包含層人力
１月18日　２－２区第12包含層人力
２－３区第12遺構面検出、遺構掘削、完掘、写真
１月19日　２－２区第12遺構面検出、遺構掘削、完掘、写真
２－３区壁面土層
１月22日　２－２区壁面精査、
２－３区調査完了
１月24日　２－２区調査完了
１月31日　現場撤収


81.6
81.7
82.0
82.1
82.6
82.4
81.9
81.1
81.6
82.0
73/200
80.504
80.8
81.5
82.6
79.6
79.6
72/800
83.120
82.2
82.2
73/000
80.751
82.1
80.0
78.9
78.9
80
78.1
79.4
80.3
78.6
シャカコ

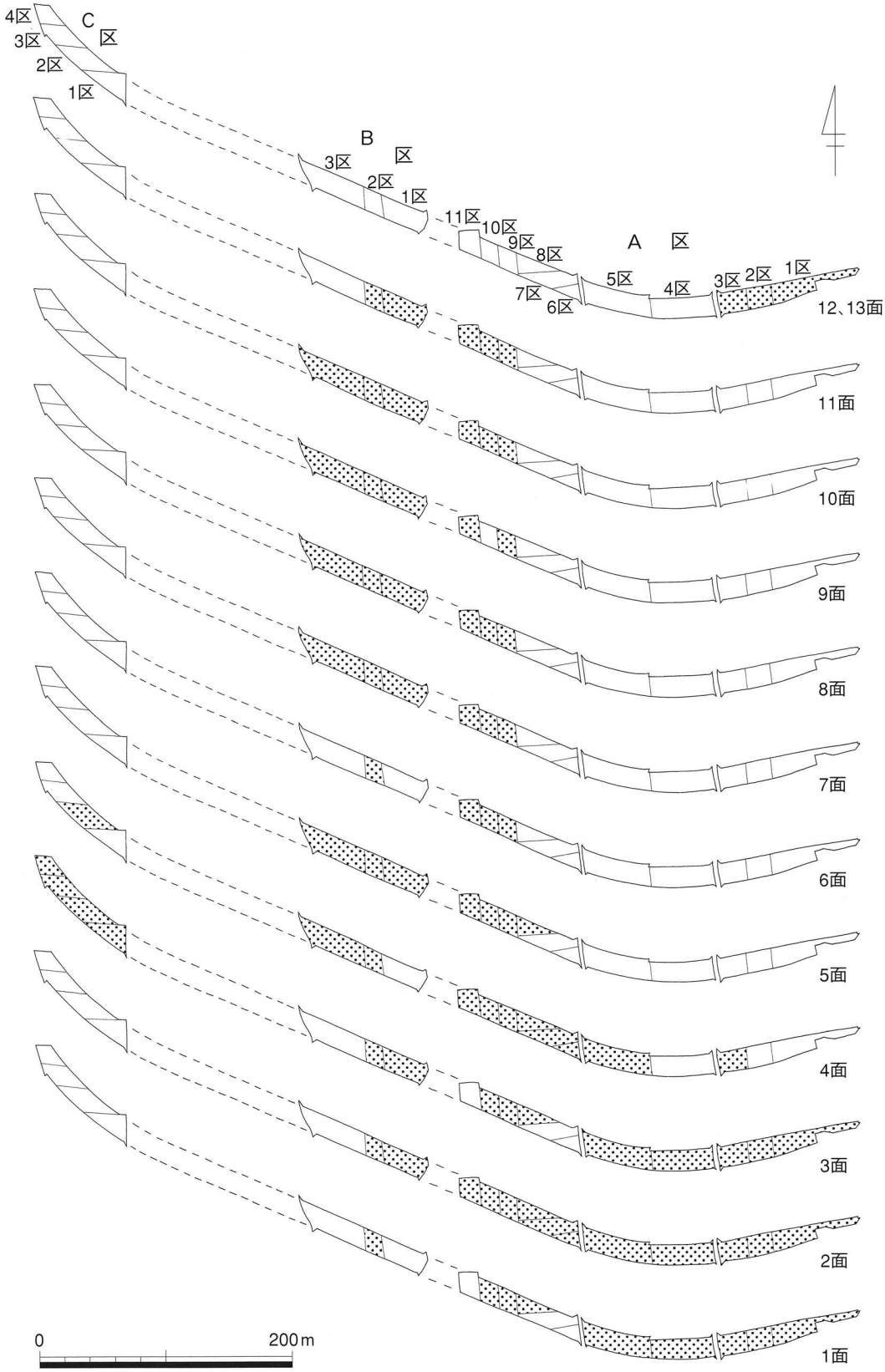
第１図　調査区位置図


Y＝33,600
Y＝33,700
Y＝33,800
Y＝33,900
Y＝34,000
Y＝34,000
Y＝34,100
X＝114,900
X＝114,800
X＝114,700
X＝114,600
X＝114,500
C-4区
C-3区
C-2区
C-1区
B-3区
B-2区
B-1区
A-11区
A-9区
A-8区
A-10区
A-7区
A-6区
A-5区
A-4区
A-3区
A-2区
A-1区
大柿遺跡
（四国縦貫自動車道）
0
200m

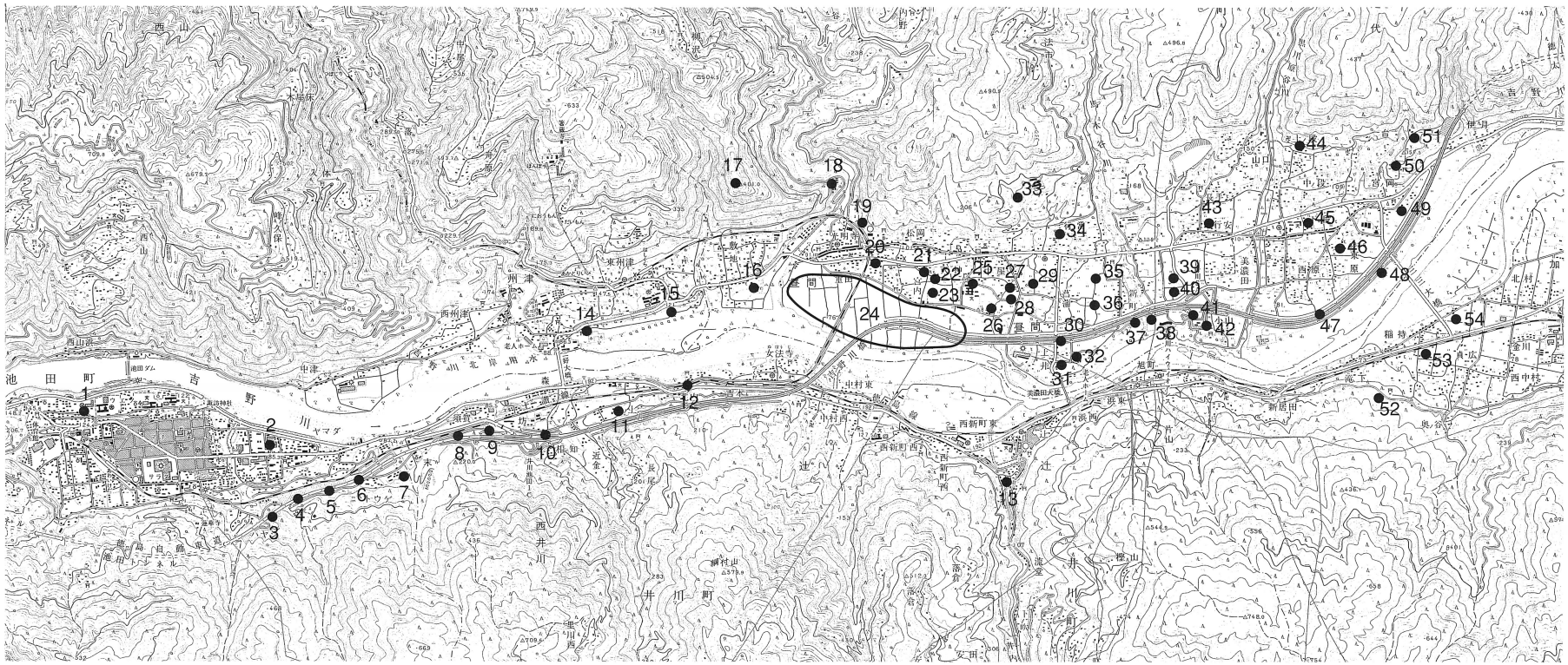
第２図　グリッド配置図



第３図　各年次の調査区の配置と新調査区の対応



第４図　各遺構面の調査区分布



1　ウエノ遺跡	10　相知遺跡	19　坪井谷山上古墳	28　荒神前遺跡	37　西貝川遺跡	46　足代東原遺跡
2　お塚古墳	11　井出上遺跡	20　光明寺跡	29　羽根田遺跡	38　小山遺跡	47　西原遺跡
3　山田遺跡（Ⅰ）	12　八幡遺跡	21　立法寺跡	30　土井遺跡	39　円通寺跡	48　東原遺跡
4　山田遺跡（Ⅱ）	13　野津後城跡	22　京伝遺跡	31　東昼間城跡	40　円通寺塚穴古墳	49　宮の岡遺跡
5　供養地遺跡	14　州津遺跡	23　角田遺跡	32　西成行古墳	41　円通寺遺跡	50　足路城跡
6　お塚古墳	15　東州津遺跡	24　大柿遺跡	33　土器之丸城跡	42　円通寺遺跡（小山地区）	51　台遺跡・中峰経塚
7　お塚古墳	16　田之岡城跡	25　天神前遺跡	34　行常遺跡	43　行安遺跡	52　鴨塁跡
8　須賀遺跡	17　東山遺跡	26　妙見七夕塚古墳	35　新町遺跡	44　上の段遺跡	53　稲持塚古墳
9　坊遺跡	18　土取遺跡	27　正力遺跡	36　菖蒲遺跡	45　中の段遺跡	54　稲持遺跡

第５図　周辺の遺跡分布図

Ⅱ　遺跡の立地と環境

第１節　地理的環境

徳島県は四国東部に位置し、北部は阿讃山脈を介して香川県と接し、西部は高知県、愛媛県と接し、南側は高知県と接する。東部は紀伊水道を隔てて和歌山県と対峙する。面積は4,144.95㎢、そのうち80％を山地が占めている。

大柿遺跡の所在する三好町は、徳島県の北西部、吉野川の上流、北岸に位置している。東側は切谷を境に三野町、西側は西谷川を境に池田町、南側は吉野川を隔てて井川町・三加茂町、北側は阿讃山脈の尾根を境に香川県仲南町・財田町と接している。面積は54.84㎢、そのうち山間部が80％を占めている。

三好町の地質構造は、大きく３つに分けられる。中央構造線の北の山地は中生代後期に隆起したと考えられる和泉層群があり、主として泥岩と砂岩が互層となり地層を形成している。この南縁にみられる断層が中央構造線である。中央構造線は、西南日本を外帯と内帯に二分する大断層である。中央構造線の南側には古生代から中生代にかけて堆積・隆起したと考えられる三波川帯がある。青石と呼ばれる緑色片岩や石英片岩からできており、段丘を含む平野部の基盤となっている。美濃田の淵や美濃田大橋の周辺や馬ん淵でその露出が見られる。さらに北側の段丘及び平野部は砂礫や粘土でできている。これは新生代第四紀に阿讃山脈から南に流れる小河川や吉野川の堆積作用によってできたものである。三好町内の中央構造線の位置は、断層粘土の露出地点から確認が可能である。その露出地点の北側には多くの断層崖が見られる。断層崖の上下にはいずれも平坦地があり、段丘が形成されている。

大柿遺跡は、天椅立神社の南方通称「シマ」と呼ばれる、吉野川北岸の土砂の堆積によりできた標高80mの中洲性微高地に立地する。遺跡の北側には阿讃山脈が迫り、これに源を発する小川谷川が遺跡の西側で吉野川に合流し氾濫源となる。東側には金江谷川が南流し、遺跡が立地する微高地間には旧喜来谷川が東流し南へと流れを変える。これらの様々な小河川の作用もあり、この微高地の西側と北側には僅かながらも低位段丘が発達する。またこれら河川の運搬・堆積作用により、段丘礫層が形成され、さらに沖積層が堆積し微高地を形作っている。遺跡が広がる微高地は現在でも中央部分「字カワラケメン」がやや低く、南側「字花の木」には昔自然にできた堤防内に小谷が入っていることから、昔の地形は「字松吉」を中心とした東側の微高地と、「字鳥居・堂の本」を中心とした西側の微高地をつなぐ「字カワラケメン」付近の吉野川に沿った馬の背状の自然堤防から形成されていたと推定される。

本遺跡の調査区は、その「字鳥井・堂の本」を中心とした西側微高地の南西縁に沿って細長く延びる部分である。調査区の東端から西端まで総延長距離は約700m（未調査地区を含む）を測る。調査対象地内において、現地表面の標高最高地点は、A－１区の81.6m、最低地点はA－11区の79.4mを測る。調査区東側端部は大柿遺跡（四国縦貫道）の大船戸地区北西部と隣接し、土層堆積状況も同様のものが見られる。遺跡の現在は水田として利用されている。

第２節　歴史的環境

大柿遺跡周辺では、旧石器時代から中世に至るまで、数多くの遺跡が形成されている。遺跡の多くは、吉野川に望む河岸段丘上や扇状地、吉野川沿いの沖積地に展開する。ここでは、三好町の主な遺跡について概略を述べる。

旧石器時代の遺跡では、本遺跡の北側、標高150m付近に位置する土取遺跡から、石鏃とともにナイフ形石器が採集されている。

縄文時代の遺跡では、大柿遺跡（四国縦貫道）からは縄文時代晩期の扁平打製石器や特殊なスクレイパーが出土しており、植物栽培が行われていた可能性が考えられる。大柿遺跡の東側段丘上に立地する土井遺跡からは、縄文時代晩期後半の土器が出土している。

弥生時代の遺跡では、土取遺跡から弥生時代中期前半の竪穴住居跡１軒が検出され、高地性集落として位置づけがなされている。大柿遺跡（四国縦貫道）では、微高地と自然堤防から、中期初頭の水田（棚田）と灌漑用水路が検出されている。本遺跡から北東に位置する低位段丘上に展開する昼間遺跡群のうち、神前遺跡からは弥生時代の竪穴住居跡が検出されている。

古墳時代前期には、足代東原遺跡から、砂岩礫を積み上げた積石墓を中心に30数基の円形積石墓からなる集団墓地が検出された。埋葬儀礼に使用された土器の中には、威嚇の表情をした猪形と猿形の動物土製品が出土している。古墳時代後期では、吉野川南岸の緑泥片岩が使われた七夕塚古墳、伊月古墳などがある。大柿遺跡（四国縦貫道）からは、竪穴住居が25軒検出され、この時代の集落に関する貴重な調査例となっている。

古代の遺跡では、本遺跡北側に位置する式内社天椅立神社は、およそ千百年程前の延喜式神名帳に記されている神社である。大坪という古代条里制の名残を思わせる地名を一望できる高台に位置しており、通称「シマ」の水田も条里制の名残ではないかと言われている。

中世の遺跡では、大柿遺跡（四国縦貫道）から、平安時代の土師器焼成土坑、地鎮祭祀遺構、集落が検出された。この祭祀遺構には白磁四耳壺が完全な形で埋葬されていたが、これは掘立柱建物の廃絶にともなう祭祀行為と考えられる。輸入陶器や国産陶器を模倣して製作されたと思われる瓦質四耳壺も出土している。埋納時期は、13世紀（鎌倉時代）頃であろうと推測される。円通寺遺跡からは、炭焼き跡、城館跡、火葬墓などが発掘された。12世紀後半に炭焼きをしながら土地開発が始まり、15世紀には堀と土塁を備えた城館に発展している。「吾妻鏡」には源頼朝が三野田保を石清水八幡宮に寄進したことが記録されており、この遺跡が三野田保の荘官か地頭クラスの人物の館であった可能性がある。土井遺跡からは、水田遺構、煙管状土器焼成窯、灰原などの遺構が確認された。窯や灰原からは、西村系須恵器椀を中心に、土師器杯・皿などの供膳具が出土しており、これらからこの窯の操業は12世紀後半から13世紀初頭であったと想定される。また、三好町には、城跡も多く残されている。足代城跡は足代神社の北山麓にあり、阿波の本城の一つに位置づけられ重要視されていた。三好氏の三好郡における拠点となっていたと考えられる。この他、東昼間城跡、田岡城跡、東山城跡などが知られている。

以上のように、三好町は遺跡の宝庫であり、旧石器時代から中世に至るまで数多くの遺跡が形成されている。

引用・参考文献

「三好町史　歴史編」三好町1997

「三好町の史跡と遺跡」三好町2001

「大柿遺跡Ⅰ」『四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　18』徳島県教育委員会2002

「円通寺遺跡」『四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告　15』徳島県教育委員会2000

「土井遺跡」『四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告　19』徳島県教育委員会2002

「大柿遺跡」『徳島県三好郡三好町　送電線（松尾線）鉄塔移転工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
三好町教育委員会1998

「大柿遺跡」『町道船戸線拡幅工事に伴う発掘調査』三好町教育委員会2000

Ⅲ　微地形と基本層序

第１節　微地形

本遺跡は、吉野川北岸の土砂の堆積によって形成された標高80m前後の、なだらかな傾斜をもつ中洲性微高地に立地している。調査区の総延長距離は約700m、幅は約８mである。調査対象外の箇所もあり、地形の概要はつかみ難いが、現地形を詳細に観察すると、数箇所の起伏を認めることができる。

第２節　基本層序

調査に際しては、調査担当者の入れ替わりや、各年度調査区範囲の分散・混在のため、遺構面の検出・認定に際して厳密に統一した基準が適用できていない。また、調査区は水田として利用されていたため、削平や盛土などの土地改変が繰り返し行われている部分もある。その上、時代幅が縄文時代～近世と長期間にわたるため、同一遺構面上で時代の異なった遺構が検出される場合もある。報告書作成時には、土層とレベルをまず優先して、出土遺物の年代や形式も考慮しながら、調査区間の遺構面の対応関係をまとめたのだが、不整合がないとはいえない。一定の誤差を含んだものとみるべきである。

先述のように、調査区は、未調査部分を境界としてA～C区に分割したが、土層堆積については、A－８区の傾斜変換ラインによって大別され、特徴付けられる。本遺跡東端A－１区～A－８区の傾斜変換ラインまでの調査区東半部は主に集落部、A－８区の傾斜変換ラインより本遺跡西端までの調査区西半部は主に水田部を形成している。A－１区～A－８区の調査区東半部は標高81.6m～81.5mを測り、遺構面数は３～４面である。傾斜変換ラインを境として、表土部分で東側から西側に約１m下がる。遺構面数もそれに伴い、A－８区で５面、A－９区で10面と増加する。B区、C区は全て水田面である。遺構面数は、B区で最大11面、C区で２面である。

次にA～C区別に基本層序を述べる。まずA区の集落部では、表土の下に近世～中世の第１遺構面（水田）が広がる。黄褐色砂質土がベースとなる。鋤跡、足跡、稲株などが確認できる。３・４区第１遺構面上には灰オリーブ砂をベースとする洪水砂が認められる。第２遺構面は、にぶい黄褐色粘質土がベースとなる。８区の傾斜変換ライン以東は集落部、以西は水田部を形成する。時代は東側は中世後半15～16世紀、６区の撹乱層を挟んで西側は少々さかのぼり、古代～中世前半と思われる。

Ⅳ　調査成果

第１節　縄文時代中期末の調査と成果

(1)　検出にいたる経緯、学史抄

三好町大柿遺跡は県西部有数の縄文遺跡である。過去、昭和50年度の吉野川北岸用水に伴う県教育委員会の調査では完形に近い後期初頭土器等の出土をみたが、報告書未刊のため、一般には余り周知されていない。平成７～９年度には四国縦貫自動車道建設に伴う大規模調査が同じく県教委により実施されたが、工期都合もあり、縄文時代の層序は中～晩期という長いスパンでしか捉えられていなかった（栗林誠治編2001）。今回の県代行調査も着手当初は中～晩期までの層序が充分把握されないまま進行したが、2001年度調査においてようやく縄文中期末段階の単純遺構面、および包含層の検出に成功し（島田豊彰2002）、さらにこの成果を契機として、過去調査区の縄文時代に関する層序関係の復元がある程度可能となったのである。それら詳細経緯は第Ⅲ章でも記した通りである。

かような経緯を経て確認された縄文各層位のうち、特に中期末段階の成果は特筆に値する。近年、県西部においても縄文時代に関する纏まった調査報告が相次いでいるが[1]、しかしこと中期末となると、その出土事例は皆無に等しい状況下にあった。

西日本全域に視野を広げるならば、今村啓爾氏による平式（今村1977a・b）、泉拓良氏による北白川Ｃ式の提唱（泉1982、1985）以後、縄文中期末土器群に対する認識は急速に深められつつある。今日、近畿、東海西部、山陰東部、瀬戸内東部北岸を中心にかなりの資料が知られるようになったが、同時に、矢部奥田式（矢野1994a）、天理Ｃ式（岡田茂弘1965、坂靖編2000）、九日田式（柳浦俊一2003）の提唱など、地方型式の再評価に向けた動きが徐々に活発化してきている。わが県においても徳島市矢野遺跡において、磨消縄文完成以前として明らかに区分しうる中期最終末の土器群が一定量出土しているが、それらの層位的独立性は判然としていない。矢野では下部層位、遺構面においても、多くは中津Ⅰ式新段階までの資料が混在した状況下での出土であり、その存在は客体的と評価せざるをえない（藤川智之ほか2003）。こうした徳島県下の状況のみならず、四国地方全域においても依然、中期末段階の良好な一括資料には恵まれておらず、東方の既存型式たる北白川Ｃ式、そして山陽の矢部奥田式との関係も、長らく不問のまま伏されてきた[2]。

今回、大柿遺跡において四国地方の空白時期を埋める中期末の良好な資料が得られたことは極めて重要な成果である。そこで本書では第Ⅳ章第１節を縄文中期末の成果として独立区分し、特別詳細に叙述する方針をとった。なお、上位遺構面（水田削平面等）においても縄文中期末に相当する資料が多少検出されているが、整理体制の都合、それらの成果は後節述べられている。あわせて参照されたい。

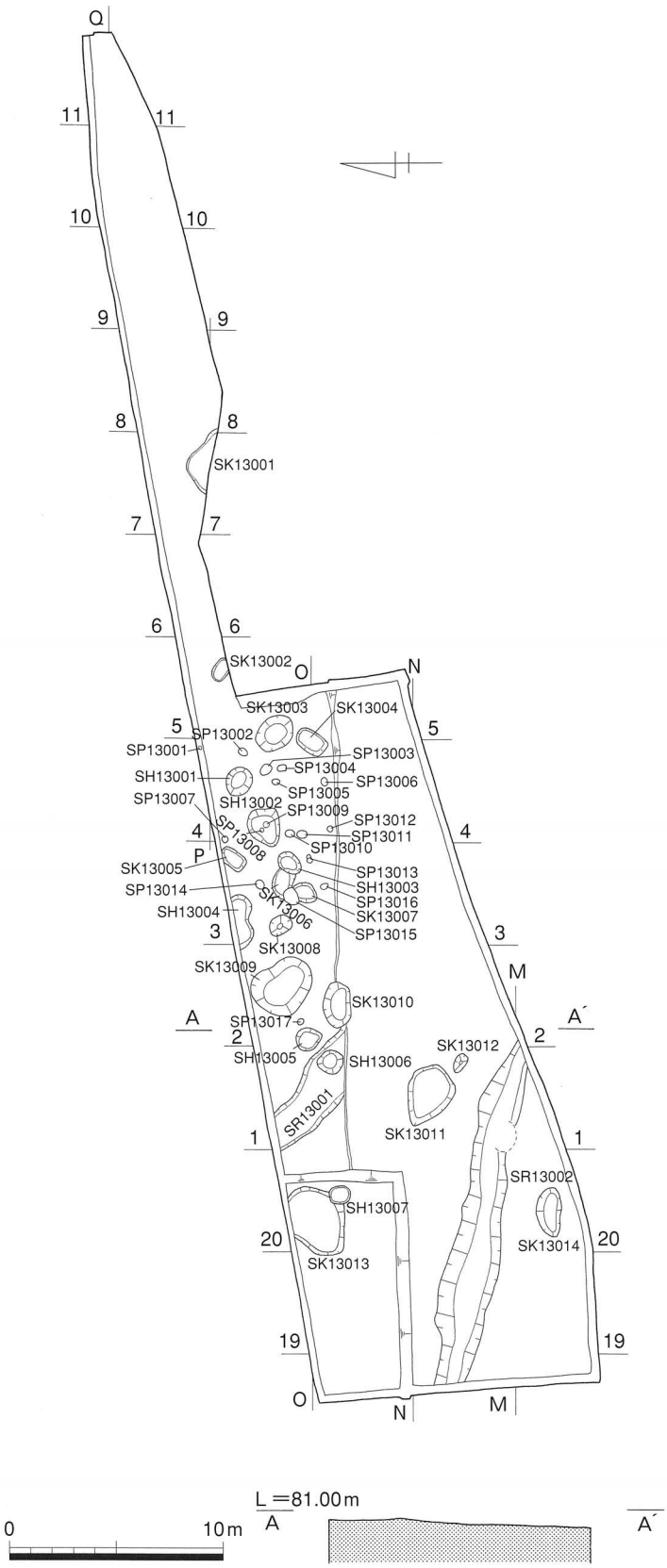
(2)　遺構群の配置

中期末に相当するＡ－１区第13遺構面は、遺跡の南側を東流する吉野川に向かった、緩傾斜面上に位置している（第６図）。調査区南半部分については古代以降の水田経営により上層部の削平を受けているが、残存する遺構の密度、出土遺物とも北半と比較して少なく、該期においても緩傾斜面低位という、自然地形を維持していたものと推定される。このことは、縄文中期末のＡ－１区が河岸段丘の縁辺、すなわち集落の南縁付近に相当していたことを暗示する。

遺構は直径約２～３ｍの不明土坑を中心に合計38基を検出しているが、それらはフラットな平坦面を

維持する調査区北半の中央部分に集中しており、遺跡の中枢部は、さらに隣接する調査区外の北側一帯に埋没するものと予想される。検出遺構の内訳は、焼土坑；人為埋土中に焼土、炭化物を特徴的に含む直径1～2m程度の土坑（SH）を7基、直径2～3mを主とする土坑（SK）14基、小土坑・柱穴（SP）15基、自然流路跡（SR）2条である（第6図）。SH、SK、SPの集中する調査区中央の北半部分は、後述第25・26図にも示されるように、土器を中心とする多量の遺物が、本来、遺構面直上付近に相当する層理面上において集中堆積しており（写真図版2参照）、原位置をほぼ保った状態での出土と判断された。つまり、包含層出土の中期末遺物についても、一定レベル（遺構面直上付近）において集中出土する傾向が窺われ、遺構内出土資料との若干の時間差は期待されるものの、後期以降との交錯の可能性は全くないと判断されたのである。北半中央部に集中するSP群については、調査当時から平地式住居や掘立柱建物の可能性を念頭におき、慎重に調査が進められたが、調査区域が限定されたことに加え、柱穴と認定することが困難な小土坑が含まれているなど、住居等明確な遺構として捉えることはできなかった。ただ、いずれにせよ、この遺構集中部が集落の中枢域に近接していることは疑いない。

遺物には土器、石器があり、総



第6図　A－1区第13遺構面遺構配置図

数にして約300点が出土している。

(3) 土器の系統分類

出土土器は全て縄文時代中期末葉に限定される。型式学的にみれば連続性をもつ数時期程度の小時期差も看取されるが、後期初頭中津式にまで下る資料はない。土器についてはその重要性を考慮し、口縁部片、底部片については砕片を除く全点を、胴部片については特徴的な資料のみ図示する方針を採った。

中期末土器は多種多様な文様系統が共存する時期でもある。器形にも多くのバリエーションが窺えるが、該期は製作途上、文様および文様帯構成の主張を第一義的前提として製作が進められた時期であり、器形は文様に対し従属的に決定されたと認識させる要素が、口縁や把手などの視覚的部位を中心に窺われる。これは器形と文様系統の画一化が進む、つまり、器形の在り方が文様配置を逆に規制する後期中葉以降とは対照的であり、中期末～後期前葉段階の土器製作構想上の特徴として捉えることができるだろう。従って中期末有文土器の分析に際しては、まず文様系統による大分類を試みたのち、個別資料の観察を行うことが望ましい、そう考える[(3)]。そこで四国地方全域を想定した文様系統の分類大綱を第1表として提起した。無論、これには今回の大柿出土資料のうち、全く該当しない類型も含まれている。

器種は、深鉢（鉢形および小形特殊器種を極少量含む）、浅鉢、壺形の3者に大別される。

深鉢・鉢形には有文、無文の別があり、うち有文土器はプロト磨消縄文系、沈線文系、阿高系、素文系に大別される。このうち磨消縄文系の原型を成すプロト磨消縄文系統は、以下の4類型に分類が可能である。

北白川C類型；近畿地方を中心として成立発展を遂げた、北白川C式の系譜を引く土器群である。泉拓良氏の研究業績により、A～Dまでの細分が成されている（泉1985）。既に合田幸美氏、矢野健一氏らも指摘しているが、大阪湾、瀬戸内東部、山陰東部以西ではこのうちB2類Fを除く典型的なB類の存在は殆ど知られておらず、深鉢A、C類が卓越する（合田1992、矢野1993）。A類とは、横位区画文を基調とする口縁部文様帯と、縦位に展開する胴部文様帯が肥厚、屈曲、隆帯等により完全に乖離される土器のうち、口縁端部が緩波状ないし平縁を呈する例で、加曽利E式、曽利式などとの影響関係の深いA1、A2類、山陰東部に多いA3類、里木Ⅱ・Ⅲ式の要素をより強く継承する近畿南部星田式類縁のA4類からなる（泉1985）。C類とは、大波頂口縁の有文土器である。本節ではこうした既存型式、分類基準との重複、あるいはその系譜上強い関係にある例は、その分類名称を可能な限り尊重した。

矢部奥田類型；岡山県倉敷市矢部奥田遺跡出土資料を標式として近年、矢野健一氏が提唱した、矢部奥田式の系譜を引くと考えられる土器である（矢野1994a）。類例が少なく、分布範囲や詳細部分に不明な点が多いが、原則として文様は口縁部のみに集約され、頸部以下が無文である点に東方との決定的差異が窺える。口縁部文様も連弧文や重層山形文、短斜線文、全縄文等を主とし、区画文風のモチーフは少ないなど、多くの属性において北白川C式との差異が指摘されよう。

里木Ⅱ・Ⅲ類型；中期後葉の在地土器、里木Ⅱ・Ⅲ式の系譜を引く土器である。緩い内彎口縁、ないし直口縁を呈し、全形は頸部で滑らかに括れる長胴形が多いとみられる。縄文、縦位条痕、ないし無文を地文とし、口縁と胴部上半にのみ横位を基調とする波状文、連弧文、横走沈線が描かれる。頸部は原則無文帯となる。

大柿類型；里木Ⅱ・Ⅲ類型の系譜を引く土器。緩い内彎口縁、ないし直口縁を呈し、文様は口縁部か

第１表　中期末土器文様系統分類大系（四国地方）

- 深鉢・鉢形
  - 有文
    - プロト磨消縄文系
      - １類：北白川Ｃ類型
        - ａ：北白川Ｃ式Ａ類系譜
        - ｂ：北白川Ｃ式Ｃ類系譜
      - ２類：矢部奥田類型
      - ３類：里木Ⅱ・Ⅲ類型
        - ａ：細密波状文
        - ｂ：細密直線文
      - ４類：大柿類型
    - 沈線文系
      - １類：波状文類型
      - ２類：独立区画文類型
      - ３類：幾何学文類型
      - ４類：横走直線文類型
    - 阿高系
    - 素文系
      - １類：帯縄文（天理Ｃ）類型
      - ２類：全縄文類型
      - ３類：全撚糸文類型
      - ４類：条線文類型
      - ５類：条痕文類型
  - 無文
    - 無文系
      - １類：口唇文付加類型
      - ２類：口唇無文類型
- 浅鉢・皿
  - 有文
    - プロト磨消縄文系
    - 集線文系
    - 沈線文系
    - 素文系
      - 全縄文類型
  - 無文
    - 無文系
      - １類：口唇文付加類型
      - ２類：口唇無文類型
- 壺形
  - 有文
    - 隆帯文系
    - 塗彩文系
    - プロト磨消縄文系
    - 沈線文系
  - 無文
    - 無文系

第２表　中期末土器底部系統分類大系（四国地方）

- 底部
  - 平底
    - Ⅰ類
    - Ⅱ類
  - 高台底
  - 凹底
  - 脚台底

ら胴部上半を中心に横位展開を基調とするものを仮称する。口縁部文様から、比較的振幅の狭い波状文、あるいは横走沈線と波状文を組合わせる細密波状文（１類）と、口縁に平行して数条の横走沈線を重層させる細密直線文（２類）に細分類できる。

沈線文系；里木Ⅱ・Ⅲ類型に起源をもつ粗製の沈線文土器で、筆者により１～４類に分類されている（幸泉2001）。ナデないし条痕地に幅４㎜以上の太い沈線文が単独施文される。上記の磨消縄文系沈線文土器とは異なり、沈線の交叉、遊離が顕著であり、数条を単位とする帯状施文の原則も厳守されていない。

素文系土器；外器表面上半を中心とする広範囲に地文様のみを施す例で、東日本では粗製土器として一括される場合が少なくないが、西日本では無文系との差異が重要な意味合いをもつため、ここでは素文系土器として分離させている。帯縄文類型、全縄文類型、全撚糸文類型、条線文類型、条痕文類型の５類型に分別可能である。前３者は北陸、中部、東海以東において多く分布する類型といえよう。全撚糸文類型とは、縦位撚糸文のみが施される里木Ⅱ・Ⅲ式期の土器である。ちなみに里木Ⅲ式には二枚貝放射肋による明瞭な縦位二枚貝条痕のみを施す例が稀に存在するが、これは撚糸文の擬似的表現を起源とするため、全撚糸文類型に含めて扱った。条痕文類型とは、貝殻、板状工具による擦過を利用して円文や蛇行文などの幾何学的モチーフを描く例で、櫛状工具により同等の文様を施す条線文類型の影響下成立する稀少類型である。単に器面調整のみ、あるいは明瞭な横位、斜位擦過による地文様としての効果を意図した例は、厳密には施文とは区別されるべきなので、粗製無文土器群に含めた。この点、注意願いたい。

無文土器；文字通り器表面に文様をもたない系統を一括したものであるが、さらに次のような分別が可能である。まず第一に、口唇部に刻目や刺突、縄文等を付加する例（１類）と、全く無文となる例（２類）の２者に大別される。前者の口唇付加文は文様意匠に相違なく、有文土器に含めるべきとする意見もあるが、１・２類間において製作技法上の差異は殆どなく、その違いはむしろ、中期以前に遡る小地域的製作伝統に帰趨されるべき性格のものであるから、ここではともに粗製土器として、上記有文諸系統とは一線を画すべきと考えた。

学史上においても最終器面調整の差異を基準に細分を試みた、精緻な報告例が幾編か存在している。なかには年代や地域差にまで言及した優れた例も多いが（矢野健一1990、宮本一夫1990など）、惜しむらくは個別報告上の分類提示にとどまる例が多く、その意義性格までを明確にした報告書は意外に少ない。資料を実見すれば、実際には条痕後ナデやミガキ調整を加える例が大半にのぼり、さらに部位、観察位置により調整手法の変化する例も少なくない。このほか種類の異なる複数の工具を併用する例が散見されるなど、小片資料を対象とすることの多い縄文土器では、分類の結果が複数基準に跨る例、さらには誤認の見積もられる可能性が相対的に高くなる。これらの属性については整理途上より完全分類を目指すのではなく、むしろ個別資料の観察蓄積を通じて時期的、地域的特徴を通史的に見出し、最終評価すべき性格の属性といえる。

浅鉢については最後の小結でも述べるように組成上の割合は決して高くはないが[4]、深鉢に準じて有文、無文の各文様系統が併存している（第１表）。うち有文では、無文地に太く明瞭な沈線で渦文や蛇行文を描く集線文系が、他の器種にはない系統として評価される。

壺形土器の組成比は浅鉢よりもさらに少なく、四国地方では未だ実体が明らかでない。現状で小形の双耳壺と、中・小形広口壺の２者が確認されており、前者の割合が高い。文様系統は、有文土器では、

渦文等を主文におき、肩部に界線を設ける隆帯文系や塗彩文系のほか、深鉢主文部の一部を強調施文するプロト磨消縄文系、沈線（渦巻）文系からなり、これに無文系土器が主体的に加わってくる。

底部については、別途分類基準を設けた(第２表)。器種については深鉢・鉢を基準としたが、浅鉢・壺形についてもこの分類に準じている。四国地方については概観ながら筆者が分類整理を行っており(幸泉2002a、2002b、2003、2004a)、ここでも同等の基準に従っている。

平底；外底面を平坦に仕上げるもの。うち完全にフラットな例を平底Ⅰ類、外縁から中央に向け下弦弧状に凹む資料のうち、凹みの深さが３㎜未満の例を平底Ⅱ類とする（幸泉2004a)。

高台底；底縁外周に粘土紐を貼付け、その下端に平坦な接地面を設けるもの。隆帯形状により細分が可能である（幸泉2002b、2004a)。

凹底；外縁から中央に向け下弦弧状に凹む資料のうち、凹みの深さが３㎜以上の例。形態的に細分が可能である（幸泉2002b、2004a)。

脚台底；外縁に台形筒状の長い脚が付き、全形がゴブレット状を呈する例。

中期末土器群については以上第１・２表の分類基準に基づき、解説を加える。

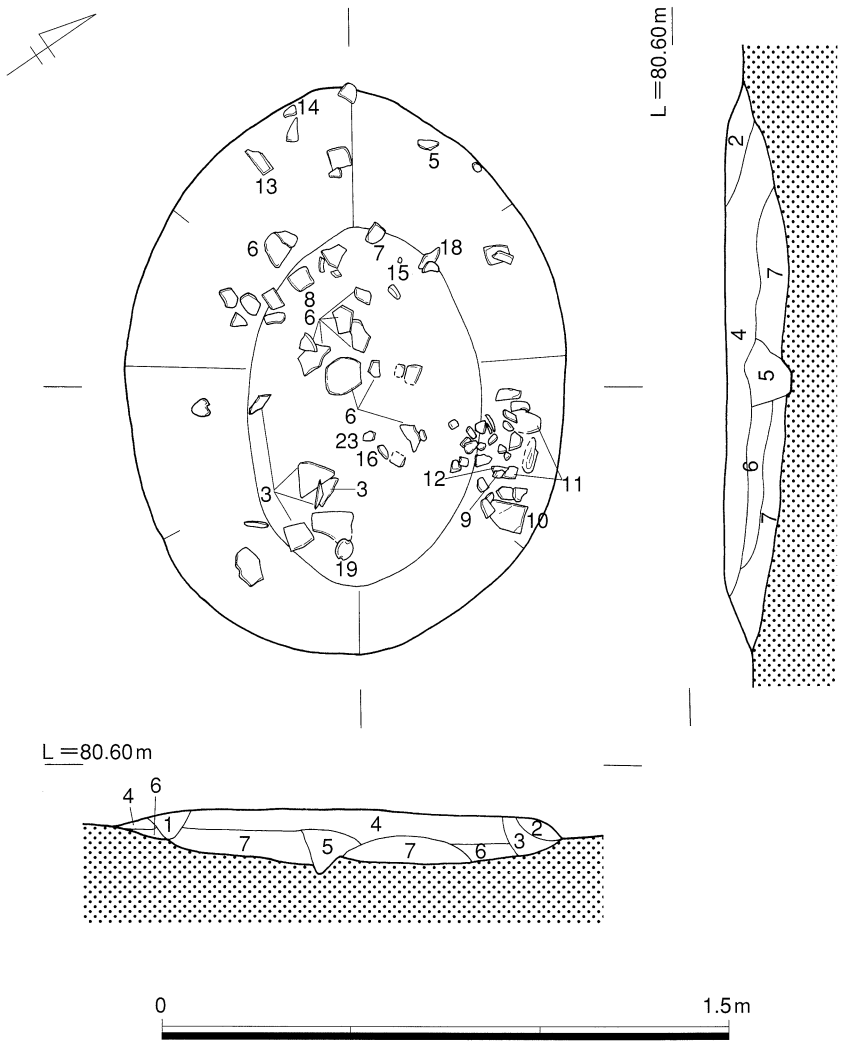
(4) 遺構および出土遺物の観察

遺構はSH、SK、SP、SRの順に述べ、伴出遺物については遺構ごとに解説する。第13包含層出土資料については本節の後半で纏めて説明したい。

焼土坑（SH13001）

A－１区北半中央部分において検出された。全長1.50m、全幅1.16m、深さは最深80㎝を測る（第７図)。平面楕円形、断面は舟底状を呈し、埋土上部の第４層を中心に焼土ブロック、炭化物を多量に含む。遺物はこの埋土第４層を中心に出土しており、土坑下部が埋没した後、遺物群が焼土、炭化物と伴に一括廃棄されたものと推定される。いっぽう埋土下部第５～７層では肌理細かい砂質ブロックが複数組み合わさって堆積しており、これらも人為埋没の可能性が強い。遺物内訳は土器口縁部片８、胴部片15、底部片３、石器２である。うち胴部砕片を除く土器17点、石器２点を図示した（第８・９図)。

１～５は有文深鉢である。１は口縁が緩く内彎する波状口縁深鉢で、口縁に沿い長楕円の区画沈線文が、さらに頸部にも連弧状のモチーフが窺われる。磨消縄文を志向するが、口縁から口唇部にかけて縄文が連続する点、沈線の交叉、遊離が認められる点で磨消縄文の完成はみていない。北白川Ｃ類型のうち、特にＡ４類星田式に近いであろう。縄文原体は節幅2.5㎜を測る粗い短節LR縄文を用いている。２は緩い内彎口縁を呈する深鉢で、外面口縁部に横長Ｊ字文風のモチーフを左右対抗させている。区画文内部を中心に節幅2.5㎜を測る粗いLR縄文が充填されているが、区画外のナデ消しは区画間の狭いＬ字状空白部にのみ顕著であり、充分ではない。口唇への縄文施文は認められない。頸部以下にも一部沈線文がみえるが、内容は不明である。横位連繋を基調に連続施文された文様構成であり、里木Ⅱ・Ⅲ類型の系譜を引く仮称、大柿類型に分類される。３は有文深鉢胴部片で、最大径は26㎝以上と推定される。文様は口縁～胴部上半に施文される。上下一対の双頭渦文を主文におき、これを横位連繋する長楕円形区画文と下端の緩波状文で密に構成される。節幅約２㎜の短節LR縄文の充填が主文部と連繋区画文の一部に認められるが、狭義磨消縄文の手法は採られていない。胴部下半には一部巻貝条痕が残存する。主文、下端部区画文、縄文の採用などに北白川Ｃ式の影響が看取されるが、横位を基調とする多重の横走区画文、波状文には２と同様、里木Ⅱ・Ⅲ類型の系譜が窺われる（大柿類型)。４は有文深鉢



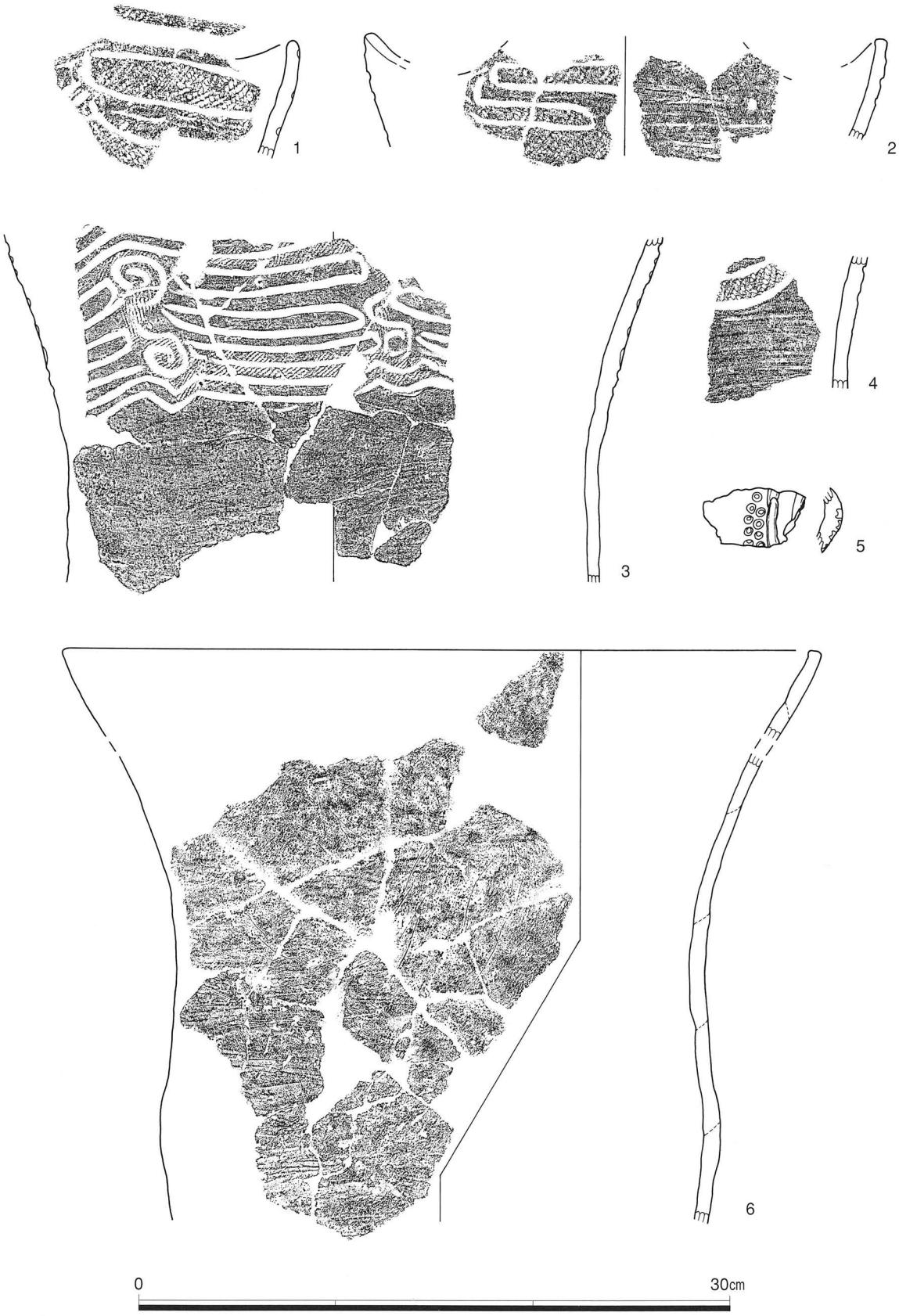
1. 灰黄色2.5Y6/2砂質土。砂質土ブロックを多量に含む。しまり良し。
2. 黄灰色2.5Y6/1砂質土。砂質土ブロックを多く含む。しまり良し。
3. にぶい黄色2.5Y6/3砂質土。マンガンが少量沈着。しまり良し。
4. オリーブ褐色2.5Y4/3砂質土。炭化物を極少量、焼土ブロックを多量に含む。
5. オリーブ褐色2.5Y4/3砂質土。砂質土ブロックを多量に含む。しまり良し。
6. 黄褐色2.5Y5/4砂質土。炭化物を極少量含む。しまり良し。
7. 黄褐色2.5Y5/4砂質土。砂質土ブロックを多量に含む。しまり良し。

第７図　A－１区 SH13001遺構実測図

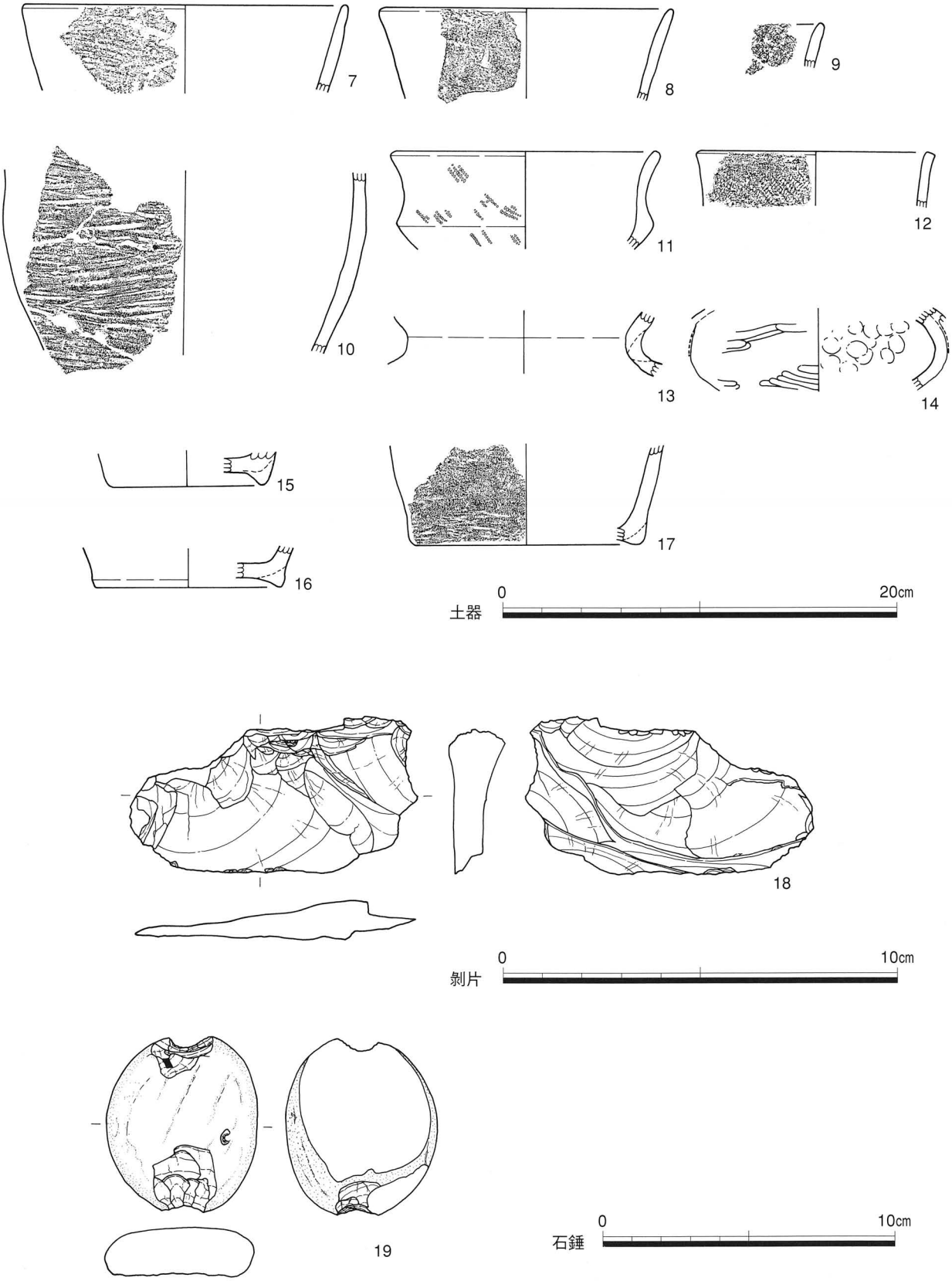
の胴部片である。二条を単位とする弧状沈線の区画帯内部に節幅３㎜と太く粗い短節 LR 縄文が充填されている。紡錘文ないし連弧状の区画文となろうが、文様系統の分類は不能である。沈線は幅3.5～4.5㎜と太く明瞭である。５は強いキャリパー状を呈する深鉢口縁部小片で、里木Ⅱ・Ⅲ類型に分類される。縦位に垂下する幅５㎜の太い沈線文二条と、竹管状工具による縦位二列の刺突文帯によって構成される。内外ともナデのみによって仕上げられている。

６～８・10は無文系深鉢・鉢である。６は口径約37.6㎝、胴部最大径28.2㎝、残存高28.9㎝を測る。胴部の張りは弱く長胴で、頸部から口縁にかけては強く外傾させて最大径を口縁におく。口縁部を極めて弱く内彎成形させる特徴は該期有文土器の一部とも共通している。外器面頸部以下には横位の巻貝条痕が明瞭に残されている。７・８は直口縁を呈する深鉢で、うち７は砲弾形を呈する可能性が強い。推定口径はそれぞれ16.4㎝、14.8㎝である。10は無文系深鉢胴下半部である。体部最大径は18.5㎝、張りの弱い長胴形を呈し、外面には横位二枚貝条痕が明瞭に残されている。

９・11・12は素文系浅鉢で、いずれも全縄文類型に分類される。後述する遺構面直上出土の64は９と



第8図　A－1区 SH13001出土遺物実測図(1)



第9図　A－1区 SH13001出土遺物実測図(2)

同一個体とみられる。いずれも口縁部を短く外反させ、端部をやや面取り気味に仕上げる点で共通しており、11に示されるように、全形は体部で鋭く屈曲する弱い「く」字形を呈するものと推定される。口径は11が推定13.4cm、12は推定11.7cmである。器表面には節幅２～2.5mmの短節RL縄文が粗く施されている。11については縄文が一部分にしか付着していないが、これは製作工程上、器表面の乾燥が進んだ状態での押捺に起因すると観察される。

13・14は壺形土器。うち13は頸部が強く括れ、口縁の外反する中形の広口壺である。一般に双耳壺の口縁は短く直口、ないし内傾するものが多いのに対し、本例は口縁が長く明瞭に外反し、胴部最大径が20cm前後にまで達する可能性が強いなど、小片ながら典型的な双耳壺とは様相が異なるため、広口壺に分類した。内外面はナデ調整のみによって仕上げられており、装飾やミガキ調整等は認められない。14は無文の双耳壺で、最大径は13.0cmを測る。胴が玉葱胴形に強く張り、その肩部には粘土粒貼付による小さく、薄手の把手が付けられている。断片的な遺存であるが、この矮小な把手が頸部に向かい極端に肥大化する可能性は低く、貫通孔や装飾のない、小把手と観察される。穂積裕昌氏の型式編年とは矛盾するが（穂積1992）、本資料群の時期的一括性は先述の通りであり、地域差、ないしバリエーションとして認識しておきたい。外器表面は丁寧なミガキが施されるのに対し、内面肩部には指頭圧痕が顕著に残る。

15～17は深鉢底部である。全て高台底に分類されるが、17はやや低平な作りである。底径は15が7.8cm、16が9.5cm、17が11.5cmを測り、17のみ径が大きい。

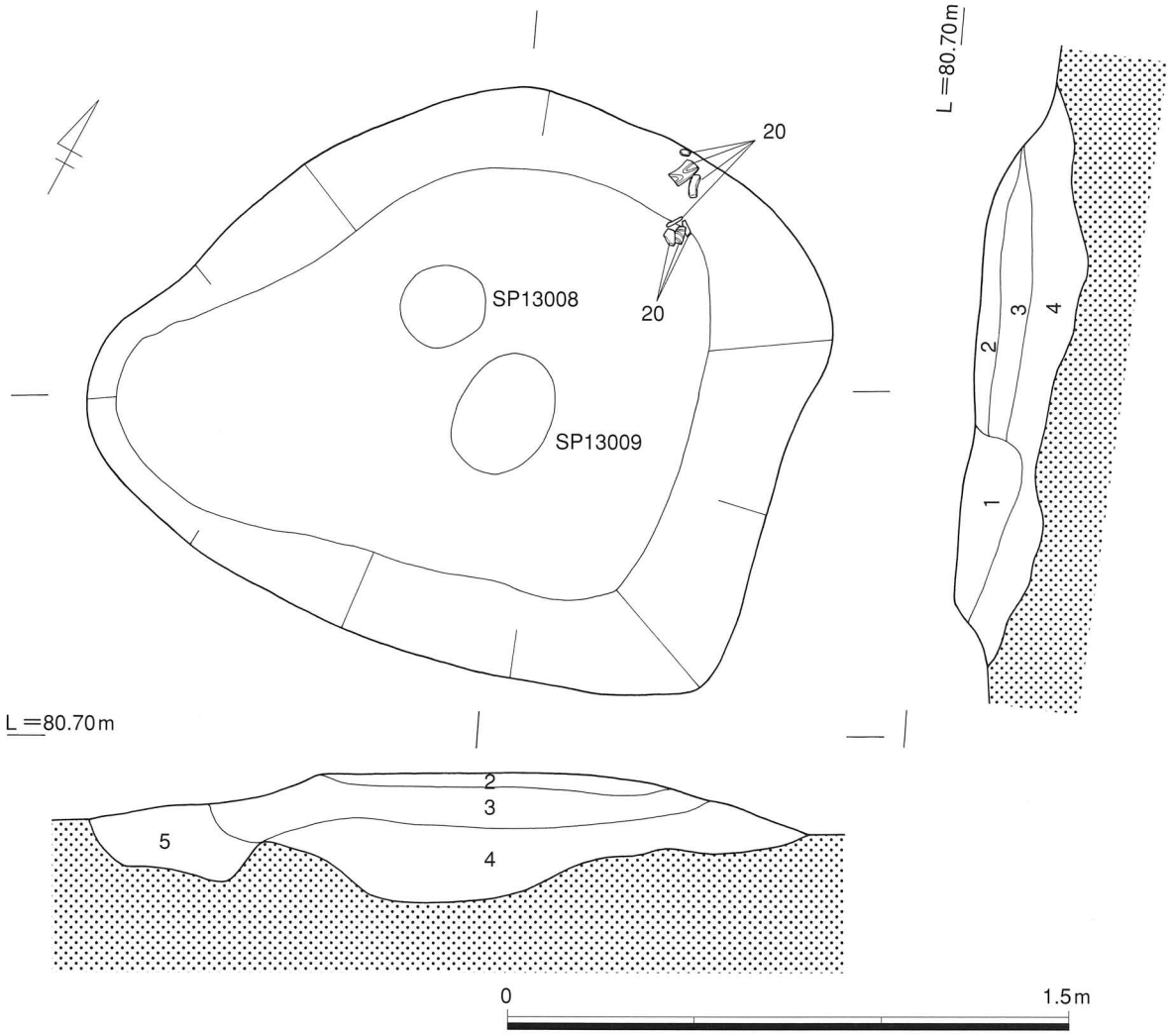
つぎにSH13001出土土器１～17の胎土と色調についてみておきたい。色調は「にぶい黄橙系」が最も普遍的で（２～５・７・11・13～16）、うち在地の結晶片岩、砂岩系河原小円礫のいずれか、ないしその両方を混和させる３・５・13・14と、石英・長石・雲母のみを含む前記以外の例に類別できる。ほかに稀少例として灰白系（１）、赤褐色系（８）、橙色系（17）、浅黄色系（10）、そして褐色系（６・９）が挙げられるが、うち前４者は搬入資料と見做される。なお、２は後頁第Ⅴ章掲載の白石純氏胎土分析資料の№２に相当する。

18・19は石器である。18はサヌカイト製の使用痕ある剥片で、長さ4.1cm、幅7.4cm、厚さ1.5cm、重量は32.0ｇである。横長剥片を素材とし、周縁よりヒンジフラクチャーを生ずる強い二次加工を加える。刃部は折取調整により生じた鋭利な折断面をそのまま利用し、一部に刃こぼれ状の微細剥離痕が観察される。19は小型の打欠石錘で、長さ6.0cm、幅5.2cm、厚さ2.0cm、重量92.3ｇを測る。緑色片岩製である。

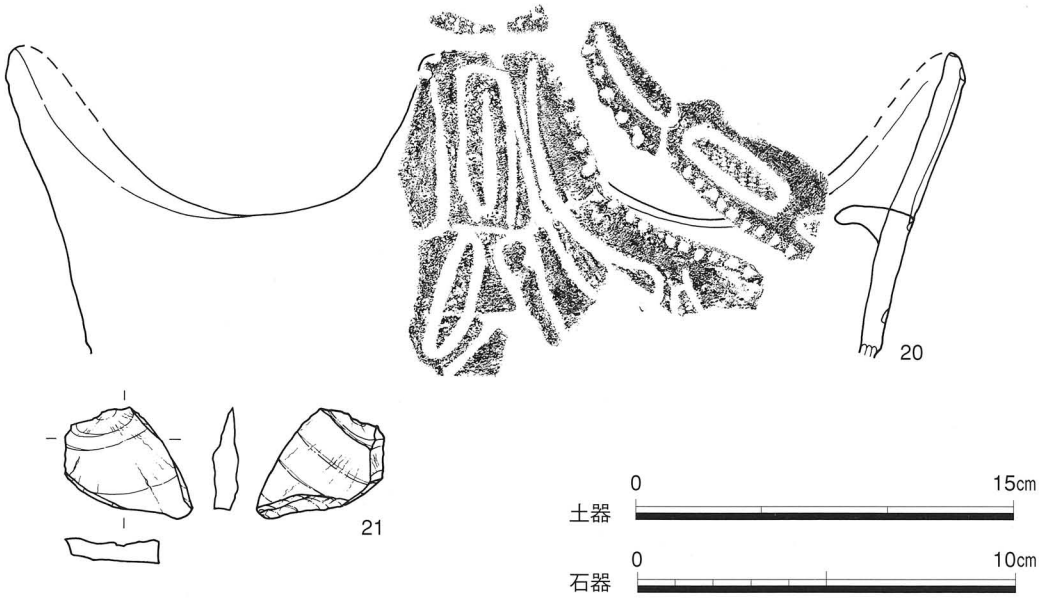
焼土坑（SH13002）

A－１区北半中央部で検出された。SH13001の西側に隣接し、SP13008、SP13009に切られる。全長1.92m、全幅1.54m、深さは最深部で36cmを測る（第10図）。平面略台形、断面は舟底状を呈し、埋土上～中位の第１・３層を中心に焼土ブロック、炭化物を多量に含む。各層は重層するレンズ状堆積にも映るが、いずれも層中には砂質ブロックを多量に含み、人為的埋土と判断される。縄文土器１個体分、サヌカイト剥片１点が出土した。土器は遺構北東隅の埋土第４層より出土している。

20は北白川Ｃ類型の有文深鉢で、富士山形の４単位大波頂口縁を有することから、Ｃ類に分類される。波頂部を除く口縁両側縁には最大幅3.2cmを測る鰭状の肥厚帯が設けられており、断面逆Ｌ字形、波頂部横断面形は角樋状を呈している。文様はこの口唇部肥厚帯上面と外面側に施文されており、両文様帯の境界には幅５mmの棒状工具で内部に一条の稜を付加する円形の押引刺突文が、波頂から側縁に向



1. オリーブ褐色10YR4/4～4/6砂質土(焼土)。
2. オリーブ褐色2.5Y4/3砂質土。砂質土ブロックを多量に含む。しまり良し。
3. オリーブ褐色2.5Y4/4砂質土。砂質土ブロックを多く含む。しまり良し。
4. 黄褐色2.5Y5/4砂質土。砂質土ブロックを多く含む。
5. オリーブ褐色10YR4/4砂質土。炭化物を極少量含む。



第10図　A－1区 SH13002遺構・遺物実測図

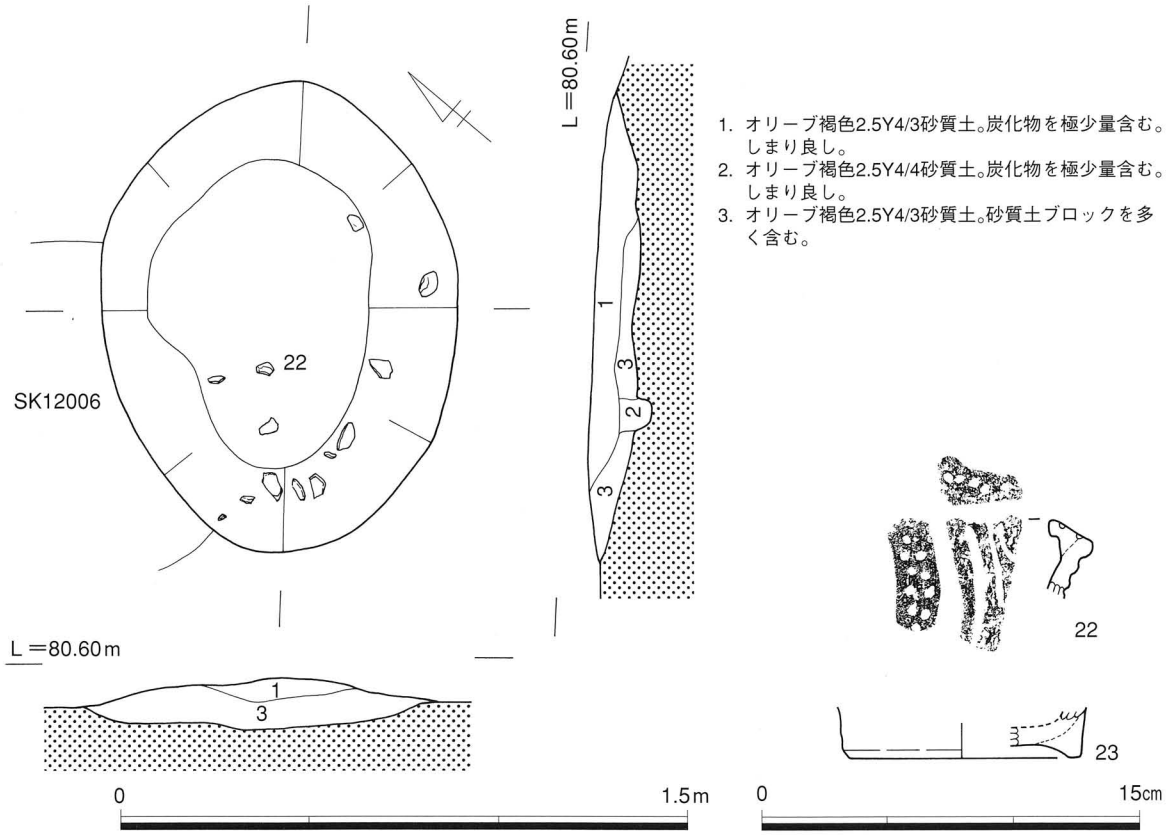
けて連続施文されている。外面文様は波頂部直下における縦長「の」字状文と、その下位の二者一対となる縦位楕円形区画文を主文におき、その両翼に縦位雫状の変形区画文を配して、文様帯を形成している。沈線原体は幅５㎜と太く明瞭である。各区画文内、ならびに口唇部の楕円形区画文内部には縄文が充填施文される。縄文原体は口唇部外面が節幅３㎜弱の短節 LR 縄文であるのに対し、口唇部では節幅3.5㎜の短節 RL 縄文が用いられており、施文工程の僅かな時間差を反映するものとして注目される。色調はにぶい黄褐系、胎土中には石英・長石を多く混和する。

21はサヌカイト製の小剥片で、長さ、幅とも2.6㎝、厚さ0.7㎝、重量は8.0ｇである。長辺両側縁に折断面が認められ、石鏃製作を意図した素材剥片の可能性がもたれる。

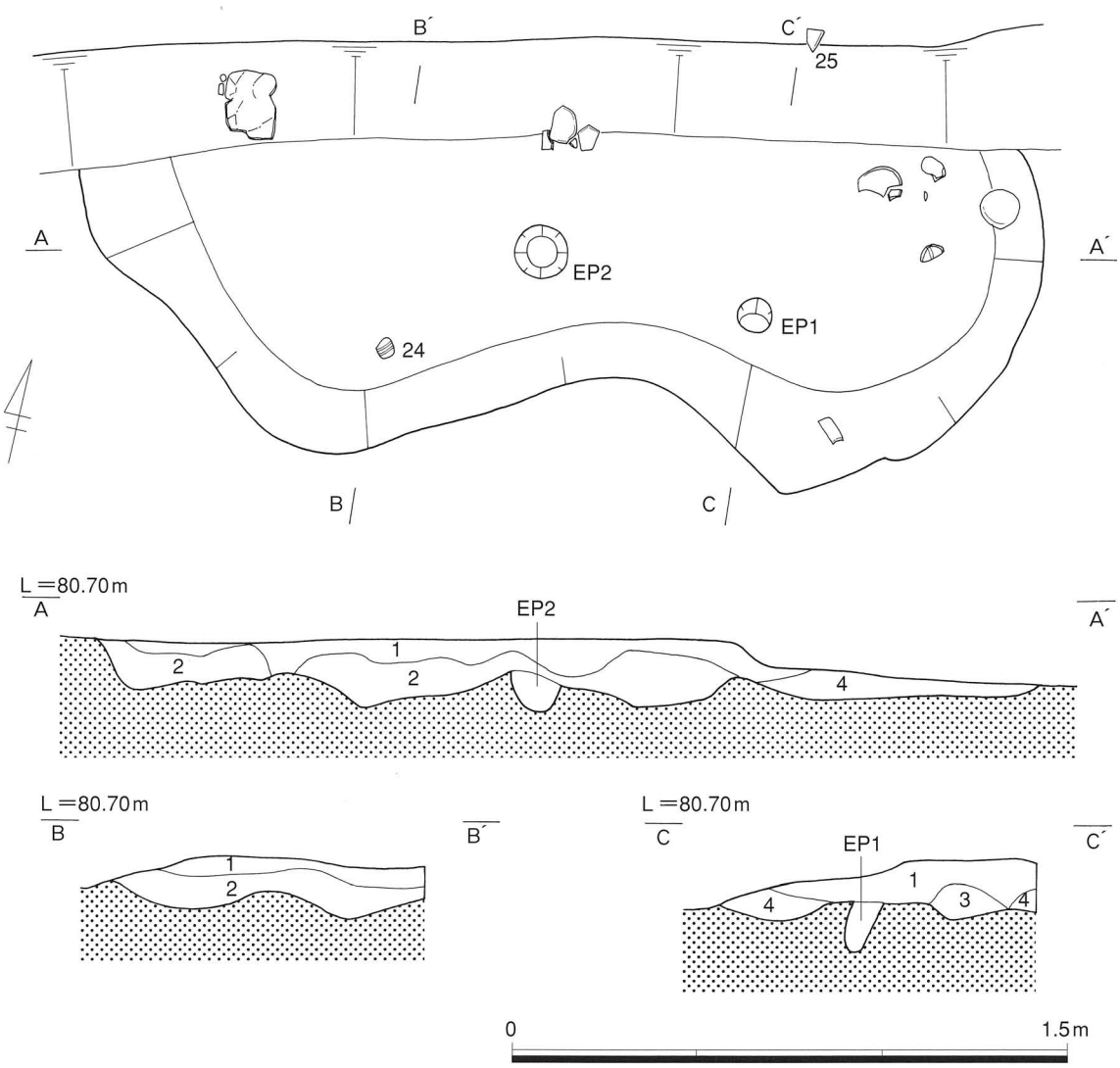
焼土坑（SH13003）

Ａ－１区の北半中央部、SH13002の西側に隣接して検出された。全長1.24ｍ、全幅0.94ｍ、最深部16㎝の楕円形土坑である（第11図）。断面レンズ状を呈し、埋土上部の第１層において焼土ブロックを多量に含む。第２層は大型の砂質ブロック単体の可能性が強く、下部の基本層序は第３層に統合されよう。この第３層南半を中心に自然礫、土器小片２が出土した。22、23がその土器片である。

22は北白川Ｃ類型の大波頂口縁深鉢小片で、Ｃ類に分類される。文様は内面側に肥厚する口唇面上の円形刺突列、口縁部外面の弧状に流下する幅約４㎜の沈線文で構成される。刺突文は細い棒状工具を用いており、幅約３㎜、深さは1.5㎜を測る。色調は灰黄褐系で、胎土中には石英・長石・雲母を含む。23は深鉢の底部片で、底径は推定8.8㎝である。外縁に明瞭な隆帯を貼付けた高台底であるが、隆帯内面側を弧状に整形する点に特徴が見出せる。色調はにぶい黄橙系、胎土中には石英・長石・雲母を多く含む。なお、この底部片は整理途上 SH13001出土小片と接合することが判明しており、両遺構埋没の



第11図　Ａ－１区 SH13003遺構・遺物実測図



1. 黄褐色2.5Y5/3砂質土。炭化物を多く、焼土ブロックを少量含む。
2. 黄褐色2.5Y5/4砂質土。炭化物を極少量、焼土ブロックを少量含む。
3. オリーブ褐色2.5Y4/3砂質土。砂質土ブロックを多量に含む。しまり良し。
4. 黄褐色2.5Y5/4砂質土。炭化物を極少量、焼土ブロックを少量含む。

EP1. オリーブ褐色2.5Y4/3砂質土。しまり良し。
EP2. オリーブ褐色2.5Y4/4砂質土。しまり良し。

第12図　A－1区 SH13004遺構・遺物実測図

同時性を示す傍証となる。

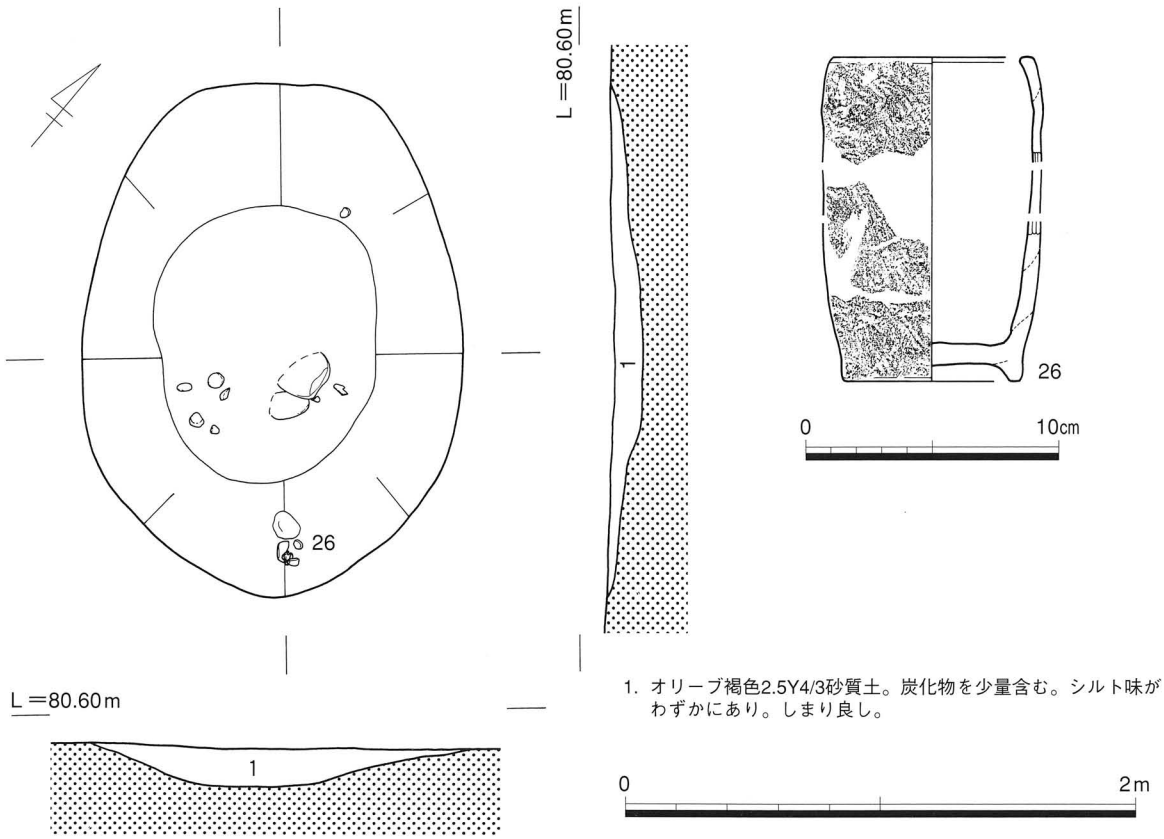
焼土坑（SH13004）

A－１区中央北壁沿いで検出された。全長2.56m、全幅2.20m、床面までの深さは19cmが遺存していた（第12図）。平面不定形、断面形は逆台形に近いが、底は平坦ではない。南端床面において柱穴の可能性あるEPを２基検出しているが、配置や構造に規則性は見出しがたい。従って住居の可能性を想定することは困難であろう。埋土は上位第１層を中心に炭化物を多量に含み、焼土ブロックも観察された。遺物は主にこの第１層から出土しており、他の焼土坑と同様、炭化物、焼土とともに一括廃棄されたものと推察される。下部の第２～４層では砂質ブロックを不規則に混在させており、ともに人為埋土の可能性が強いと判断される。

出土遺物は24・25の２点のみである。24は緩く内彎する沈線文系深鉢の口縁部片で、口縁端部内面側を弱く肥厚させる。口縁外面に沿い幅５㎜と太く明瞭な横走沈線二条が平行施文されており、沈線文系４ないし３類に類別される。色調はにぶい黄橙系、胎土中には粒径３㎜以下の結晶片岩等を多量に含んでいる。25は集線文系の浅鉢胴部片である。外面には蕨手状の渦文と、主文間を充填する弧文、文様帯を区画する横走沈線などによって構成されており、沈線原体は幅4.5㎜と太く明瞭である。器壁が８～９㎜と厚手であり、かつ内面に巻貝条痕を残すなど鉢形とみるべきかもしれないが、小片のため、類例から浅鉢とした。色調はにぶい黄橙系、24と同様、胎土中には粒径３㎜以下の結晶片岩を多く含む。

土坑（SK13003）

A－１区北半中央部で検出された。全長2.08m、全幅1.50m、最深16cmを測る楕円形土坑で、断面形



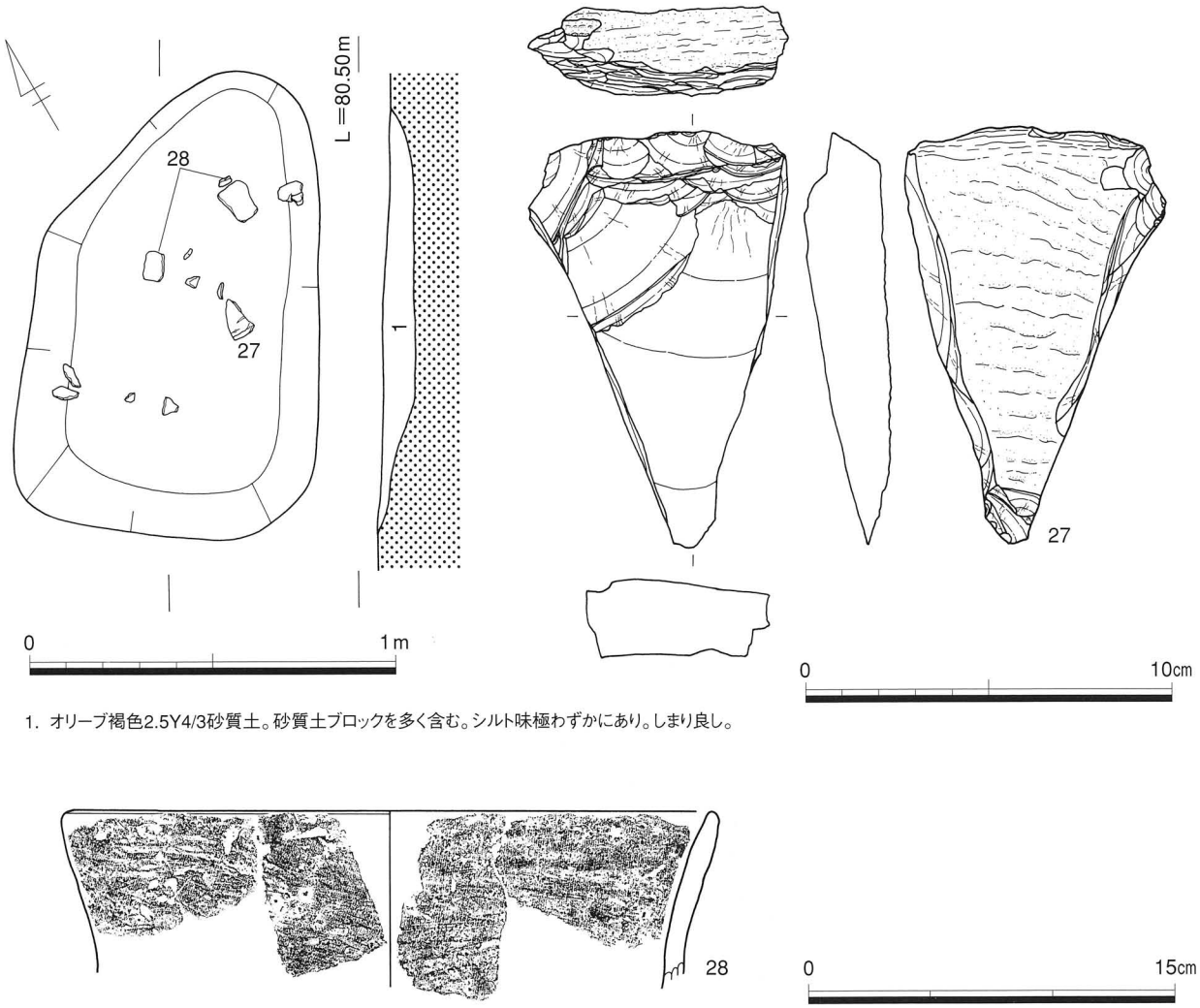
第13図　A－１区 SK13003遺構・遺物実装図

状は薄いレンズ状を呈す（第13図）。覆土は１層のみで、窪地部への浅い自然堆積の可能性もある。

覆土中より特殊な小型円筒形の無文系土器１点が出土した（26）。ほぼ完形に復元される。推定口径7.6cm（不定形）、底径6.8cm（不定形）、器高は推測で12.7cmに復元した。しっかりとした隆帯を設けた高台底から胴部を直立させ、口縁は緩く内彎成形する。器体成形、器面調整とも粗雑であり、内面は粗いナデ、外面は斜位の巻貝条痕後ナデによって仕上げられている。断面には粘土帯の接合痕が明瞭に残り、非日常的な器種を想起させる。徳島市矢野遺跡３区 SB6003出土の報告№660資料は磨消縄文系であるが、同一器種と捉えることができる（藤川編2003）。やはり用途は不明である。26の色調はにぶい褐系であり、胎土中には石英・長石・雲母が少量認められた。なお、本資料は白石氏の分析№29に相当する。

土坑（SK13005）

A－１区中央北壁沿いで検出された。全長1.15m、全幅0.78m、最深10cmを測る長方形土坑である（第14図）。北東コーナーを欠くがプランは明瞭であり、人為土坑の可能性が強い。断面は薄いレンズ状で、覆土は１層のみである。



第14図　A－１区 SK13005遺構・遺物実測図

覆土中からは石器１、土器１が出土した。27はサヌカイト製の板状素材である。長さ11.3㎝、幅7.1㎝、厚さ2.3㎝、重量は190.0ｇを測り、上面と裏面は自然面のまま放置されている。上側縁にはヒンジフラクチャーを生ずる強い剥離痕が切合い、さらに対向する下縁裏側には二次的加撃痕が認められることから、両極打法による連続的な剥片剥離が意図されたものと推定される。左右両側縁には急角度の折取調整が施されており、この折断面が表の剥離面を全て切っていることから、石器転用を目的とした調整加工の可能性が強い。28は中期末の無文系深鉢で、口径は約26㎝である。口縁は直口外傾し、頸部で緩く括れる器形で、器面は内外とも巻貝条痕後ナデによって仕上げられている。色調はにぶい黄橙系、胎土中には粒径３㎜以下の結晶片岩を多く含む。

土坑（SK13006）

A－１区中央北半で検出された。SH13003とSP13015に切られる。残存長1.28m、全幅1.04m、最深部で16㎝が遺存する（第15図）。平面プランは推定楕円形、断面形は薄いレンズ状を呈しており、覆土は１層のみが確認されている。窪地への浅い自然堆積層の可能性がある。

覆土中からは土器片４個体分（29～33）が出土している。29・30は同一個体で、沈線文系２類に分類される。口縁は緩く内彎し、端部内面を若干肥厚させる。外面に幅４～５㎜の太く浅い沈線で方形状の区画文が描かれている。器面は内外とも条痕後ナデで、色調はにぶい黄橙系、胎土中には粒径３㎜未満の結晶片岩が多く含まれている。31は無文の深鉢胴部片で、内外とも巻貝条痕が明瞭に残る。胎土中には石英・長石・雲母とともに領家帯起源の花崗岩粒が目視でも確認され、瀬戸内地方からの搬入品と理解される。色調は浅黄系である。32・33は深鉢底部で、ともに高台底に分類される。隆帯内側を弧状に整形する点に特徴がある。底径は32が11.4㎝、33は14.8㎝を測り、後者は本遺跡では特大サイズといえる。色調はともににぶい橙系、胎土中には石英、長石、雲母がみられる。

土坑（SK13008）

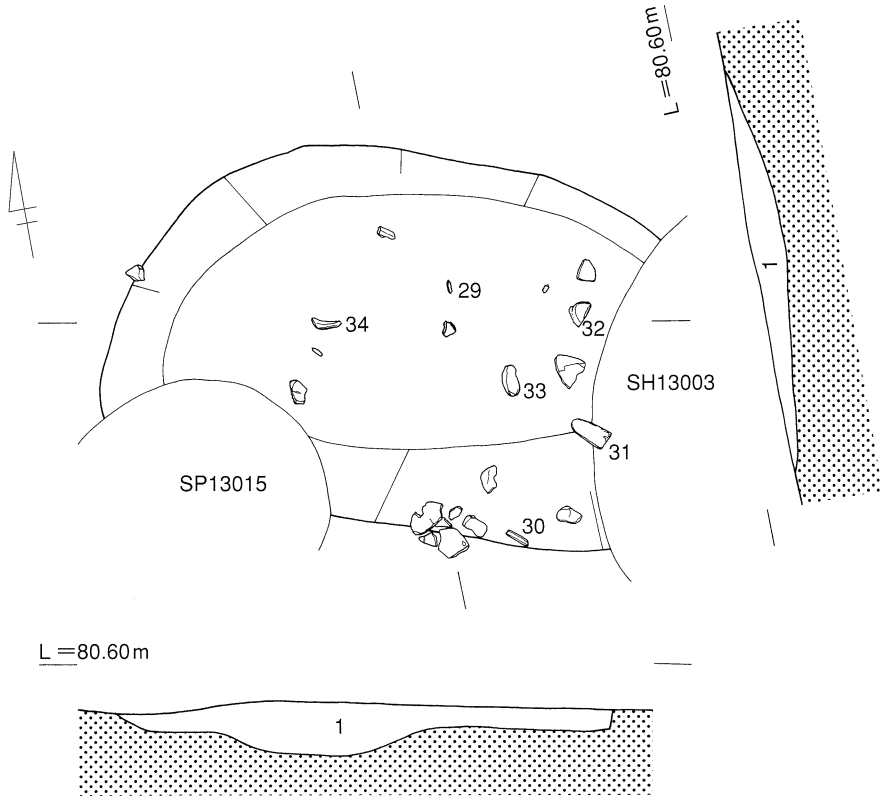
A－１区北半中央部で検出された。SK13006の西側に隣接する。全長1.08m、全幅0.92m、最深14㎝を測る略楕円形土坑で、断面はレンズ状を成す（第16図）。覆土は２層に分層されるが、窪地部への自然堆積層の可能性が強い。

覆土第２層より縄文土器口縁部片一個体分が出土している（34）。直口外傾する頸部から口縁部が緩く内彎成形されており、端部は短長交互４単位の波状縁を呈している。波頂部を除く側縁のみを鰭状に内傾肥厚させており、北白川Ｃ類型のＣ類と文様帯配置が共通する。文様は外面口辺部にのみ集中施文される。波頂部から垂下する逆三角形様の区画文を主文におき、その両翼にはさらに沈線を配して主文間に小渦巻文を垂下させている。文様帯下端となる頸部には振幅の緩い二条の波状文が描かれており、区画的役割を担うものと推察される。また横位連繋という文様帯構成には里木Ⅱ・Ⅲ類型からの系譜が想定され、北白川Ｃ式との折衷により生じた在地類型と判断されよう。

文様帯内部には巻貝条痕を地に節幅２㎜を測る短節LR縄文が粗く充填されるが、それらは複数の沈線を跨いで施文されており、狭義磨消縄文の手法は厳守されていない。色調は灰褐色系、胎土中には花崗岩粒の含有が目視でも観察される。白石氏分析の№31に該当し、瀬戸内領家帯からの搬入が確実視される。

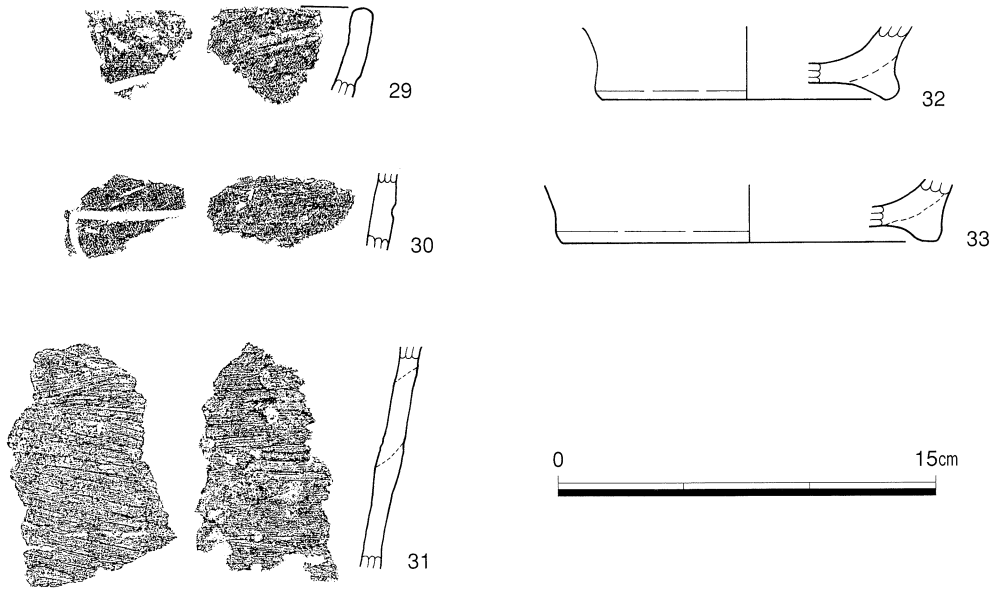
土坑（SK13009）

A－１区北半中央部で検出された。全長3.16m、全幅2.56m、最深10㎝を測る略楕円形土坑である（第17図）。断面形状は非常に薄いレンズ状で、浅い窪地への自然堆積層と判断される。覆土は１層のみで

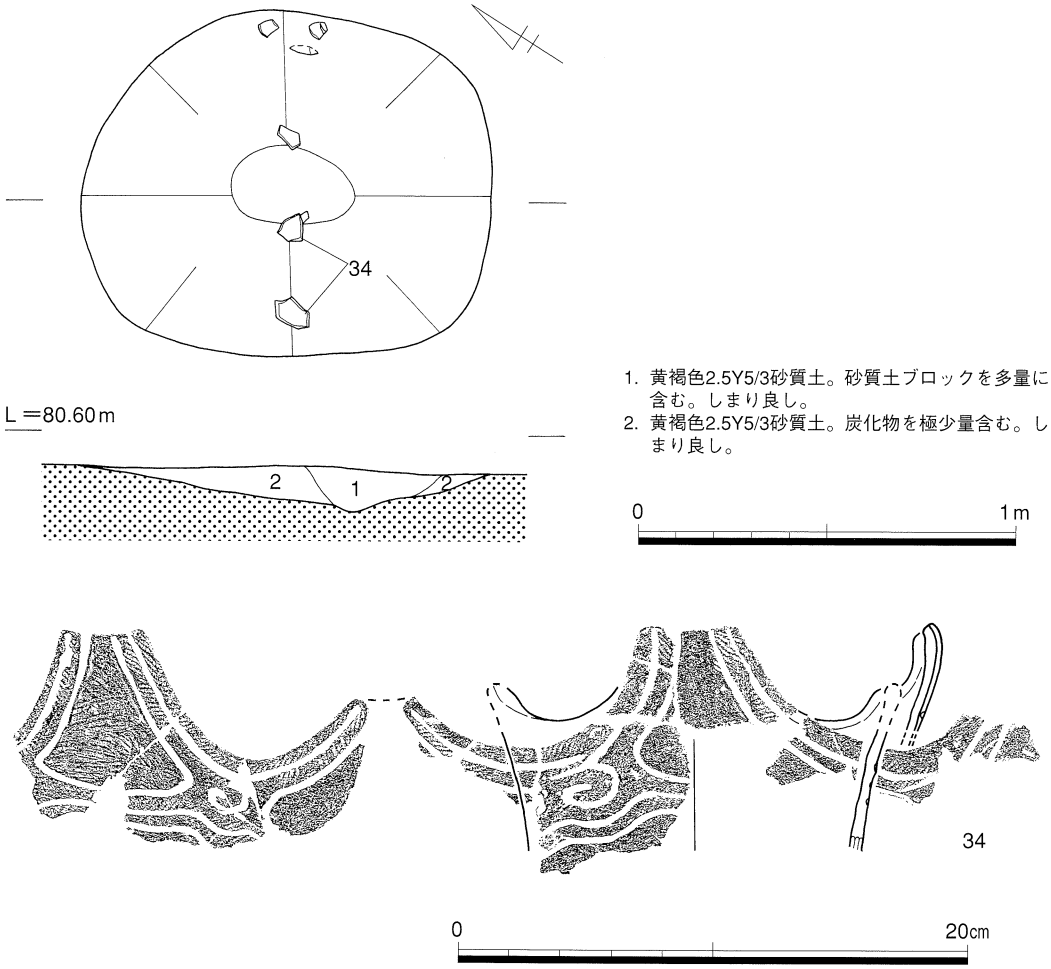


1. オリーブ褐色2.5Y4/3砂質土。炭化物を少量含む。しまり良し。

0　1m



第15図　A－1区 SK13006遺構・遺物実測図



第16図　A－1区 SK13008遺構・遺物実測図

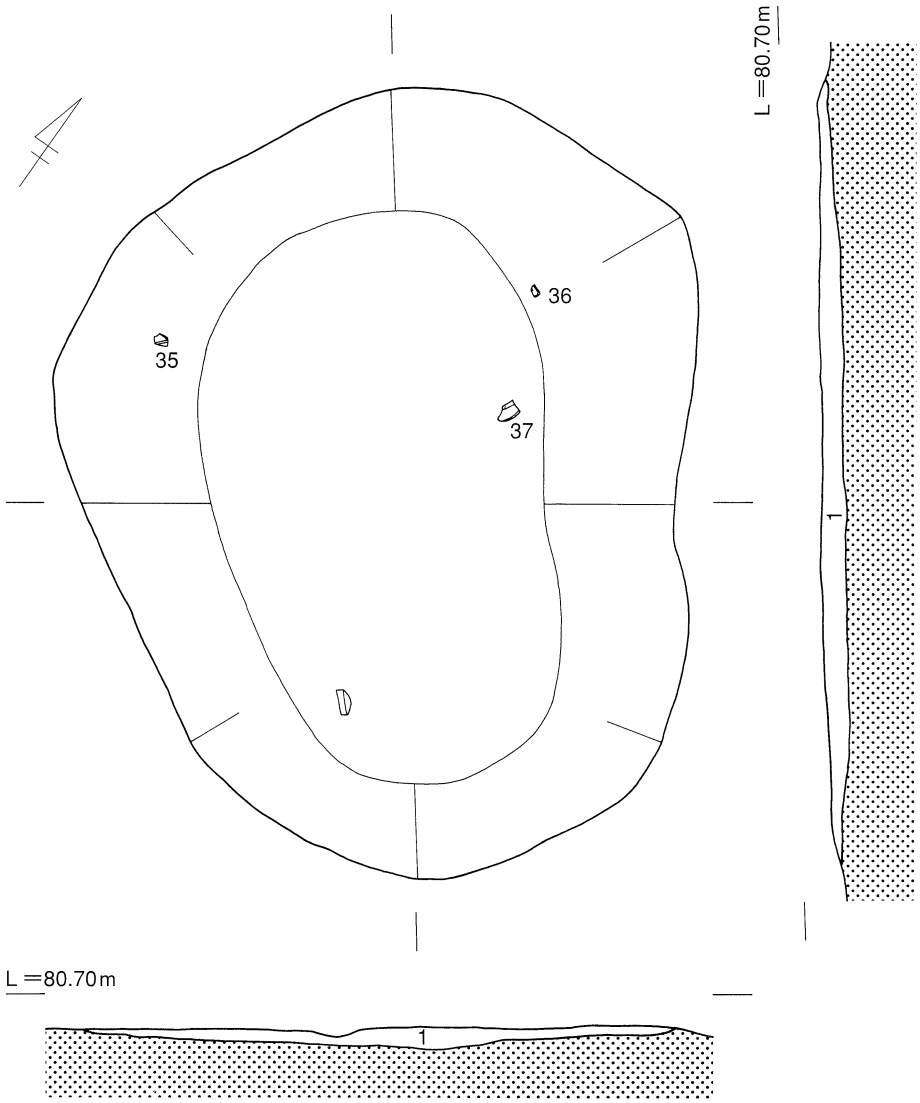
構成される。

覆土中より土器片3個体分が出土している（35～37）。35は口縁を直口外傾させ、端部内面側を若干肥厚させる波状口縁の例で、口縁外面には横長J字文を予想させる区画沈線文が幅4～5㎜を測る太い沈線で描かれている。区画文内部から口唇上面にかけては節幅2㎜を測る短節LR縄文が施されており、狭義磨消縄文の手法は採られていない。色調はにぶい黄橙系、胎土中には粒径2㎜未満の結晶片岩が多く含まれている。36は小片のため文様構成は不明であるが、節幅2㎜の短節LR縄文と、横走する沈線の一部が遺存している。35とは同一個体の可能性がある。色調はにぶい黄橙系、胎土中には結晶片岩を多く含む。37は長胴の無文系深鉢である。頸部の括れは極めて緩く、口縁を長く直口外傾させている。外器面には横位巻貝条痕を一部にとどめる。色調は赤褐系、胎土中には石英・長石・雲母を多量に含む。

土坑（SK13010）

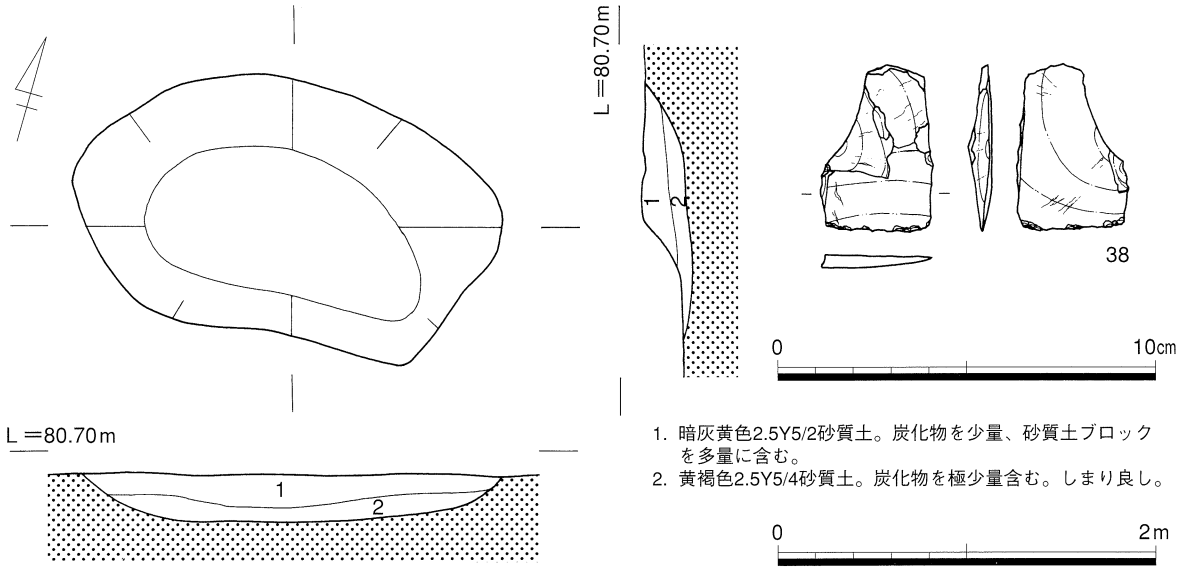
A－1区北半中央部で検出された。SK13009の南側に隣接する。全長2.30m、全幅1.36m、深さ26㎝を測る略楕円形土坑である（第18図）。断面形は舟底状を呈し、覆土は上下2層に分層される。

覆土中よりサヌカイト製の使用痕ある剥片1点が出土した（38）。長さ4.3㎝、幅2.9㎝、厚さ0.6㎝、重量6.7gの剥片で、刃部と見做される鋭利な下側縁辺には刃こぼれ状の微細な剥離痕が遺存する。



1. 黄褐色2.5Y5/3砂質土。炭化物、砂質土ブロックを少量含む。しまり良し。

第17図　A－1区 SK13009遺構・遺物実測図



第18図　A－1区 SK13010遺構・遺物実測図

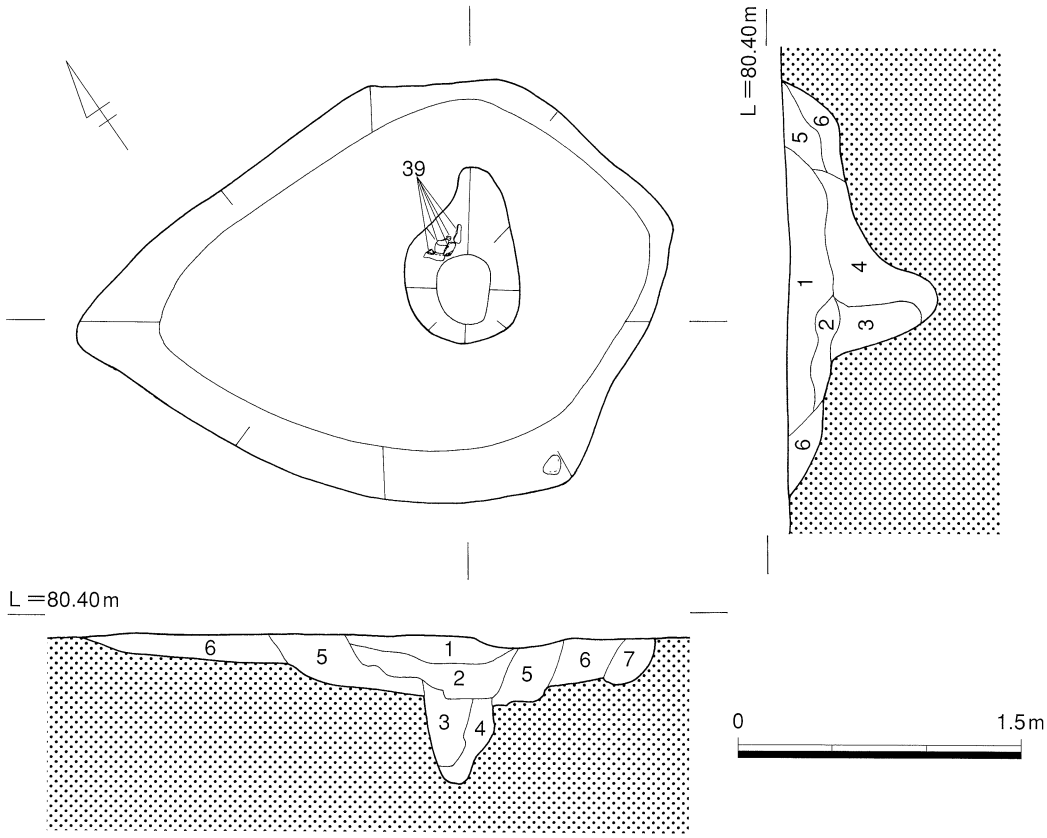
土坑（SK13011）

A－1区南西部で検出された。SR13001とSR13002の間に位置する。全長3.00m、全幅2.25m、深さは中央の円形土坑底面までが80cm、周囲のテラス状部分で約30cmを測る（第19図）。平面プランは不整な倒卵形を呈し、中央に直径約60cmを測る柱穴状の深い落込みが検出された。覆土中には焼土、炭化物を不均一に少量含むが、壁面等に被熱痕は認められず、炉跡の可能性は考えがたい。柱穴とみるのがより妥当であるが、詳細な性格は不明である。

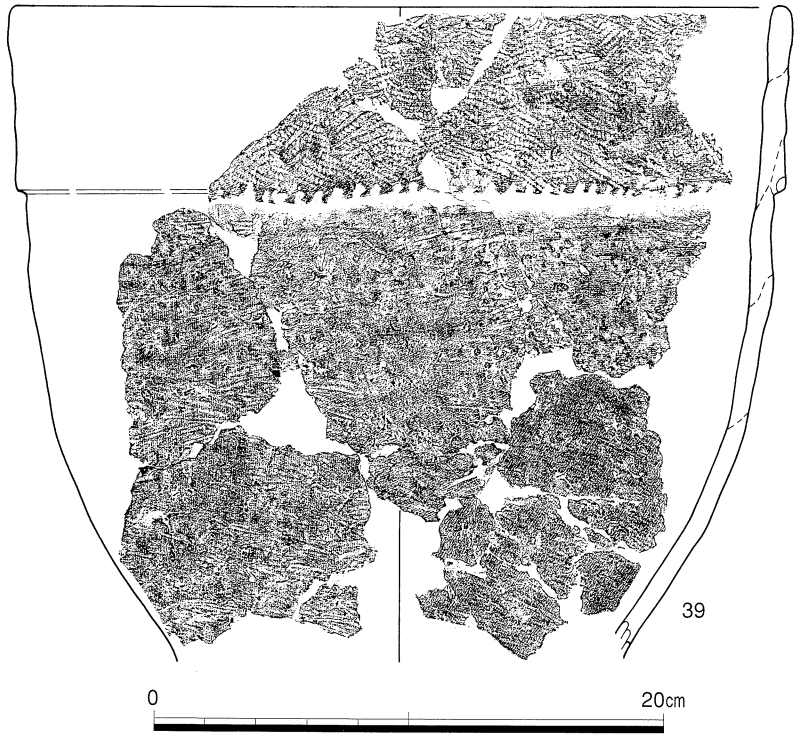
ほぼ完形に復元される矢部奥田系深鉢が倒立状態で、中央の柱穴状遺構北縁辺（第4層）から出土している（39）[5]。推定口径30.4cm、残存高は25.9cmを測る。平縁となる口縁に平行して幅約7cmと広い口縁部文様帯を配し、その下端には粘土紐貼付けによる弱い段を形成している。段稜部には幅4mmを測る半截竹管C字形の深い刺突文が連続施文されており、文様帯の境界をより明確にしている。この口縁部文様帯と口唇部上面には縄文が施文されている。口唇のそれは節幅2mmを測る短節LR縄文であるのに対し、口縁外面の文様帯には特殊な原体による短節LR縄文と、節幅2mmの短節RL縄文を交互に施文し、綾杉状に仕上げている。特殊なLR原体とは、組合わさる条の幅が2.5mm、1.5mmとそれぞれ異なる無節Rl原体を用いている点にあるが、しかし対となるRL縄文に条幅の視覚的違いが表れていないことから、意図的な行為とは考えがたい。同様のモチーフは岡山県矢部奥田遺跡第3調査区東縄文包含層の報告№165などにもみられ（高畑知功編1993）、矢野健一氏の提唱する矢部奥田式の内容を補強する好資料ともなろう（矢野1994a）。器面調整は胴部外面と内面下端部にやや肋の細かいアルカ属二枚貝による条痕後ナデが、内面中位以上は粗いナデのまま放置されており、結果接合痕が顕著に残されている。色調はにぶい黄橙系、胎土には肌理細かな粘質土をベースに結晶片岩、砂岩系小河原円礫をはじめとする粒径7mm以下の大型粒が多量に混和されており、後頁の考察結果から地元近辺で製作された土器と判断される。

土坑（SK13013）

A－1区北西部で検出された（第20図）。SH13007に南東隅を切られる。平面プランは不定形で、全長



1. オリーブ褐色2.5Y4/3砂質土。炭化物を少量、砂質土ブロックを多く含む。シルト味が強い。
2. 灰黄褐色10YR4/2砂質土。炭化物、砂質土ブロックを多く含む。シルト味わずかにあり。しまり良し。
3. 黄褐色2.5Y5/3砂質土。砂質土ブロックを多量に含む。シルト味わずかにあり。しまり良し。
4. 灰黄褐色10YR4/2砂質土。炭化物を少量含む。シルト味わずかにあり。しまり良し。
5. 黄褐色2.5Y5 /3砂質土。シルト味わずかにあり。しまり良し。
6. 黄褐色2.5Y5/4砂質土。砂質土ブロックを多く含む。シルト味ごくわずかにあり。しまり良し。
7. 暗灰黄色2.5Y4/2砂質土。炭化物を少量、砂質土ブロックを多量に含む。シルト味わずかにあり。しまり良し。



第19図　A－1区 SK13011遺構・遺物実測図

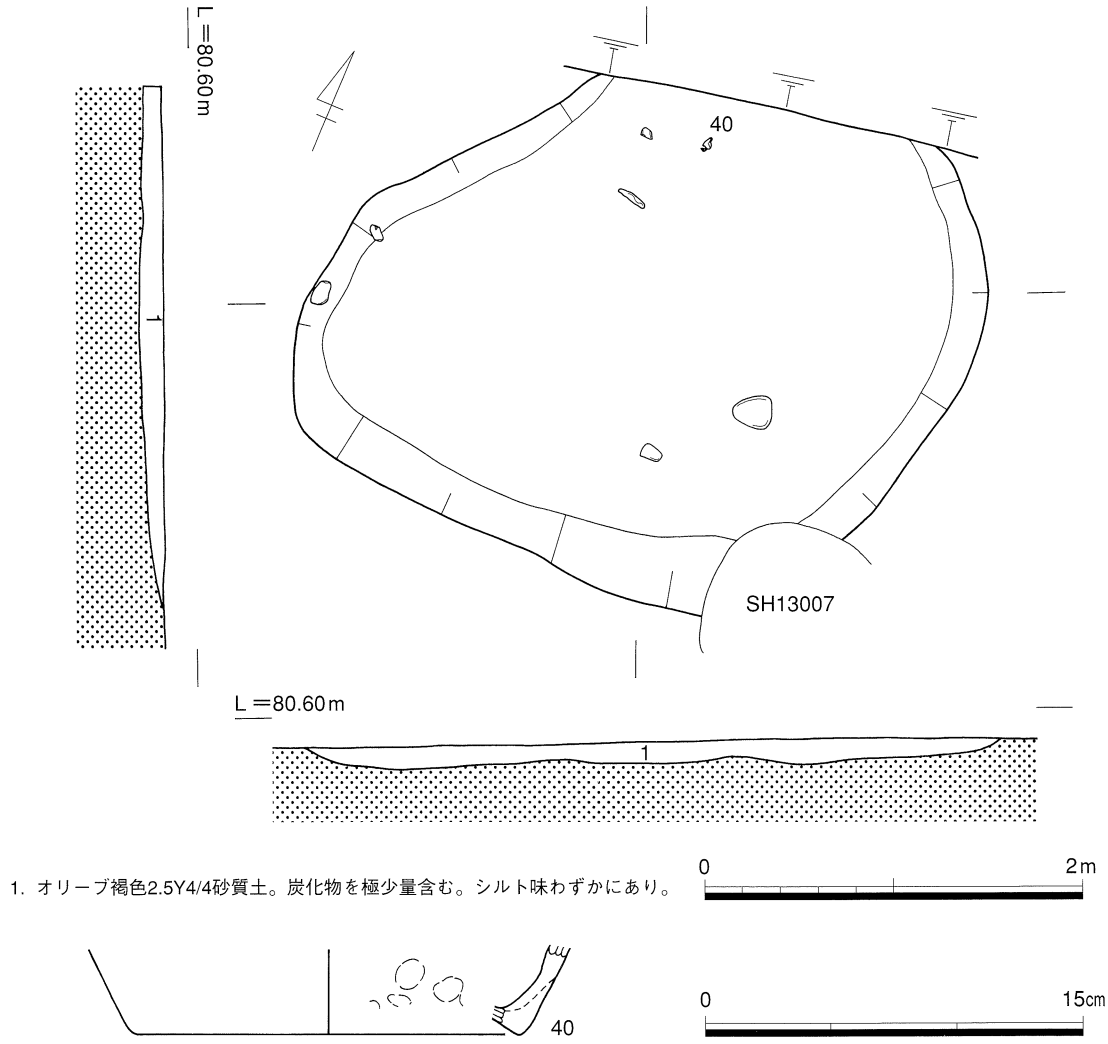
3.68m、全幅2.36m、深さは16cmが遺存する。断面は薄いレンズ状を呈しており、窪地部における自然堆積層と判断される。覆土構成は１層のみであった。

覆土中より深鉢底部片１点が出土している（40）。底径約15cmと本遺跡では特大サイズである。外縁には接地面がなく、中央に向け下弦弧状に凹んでおり、大型の緩い凹底に分類される。色調はにぶい褐系、胎土中には石英・長石とともに砂岩系河原小円礫を含んでいる。内面下端付近に指頭圧痕を顕著に残す手法が他とは異なっているが、胎土色調からは在地産と判断されるため、中期後葉に遡る時期差を想定しておきたい。なお本資料は白石氏の分析No.30に該当する。

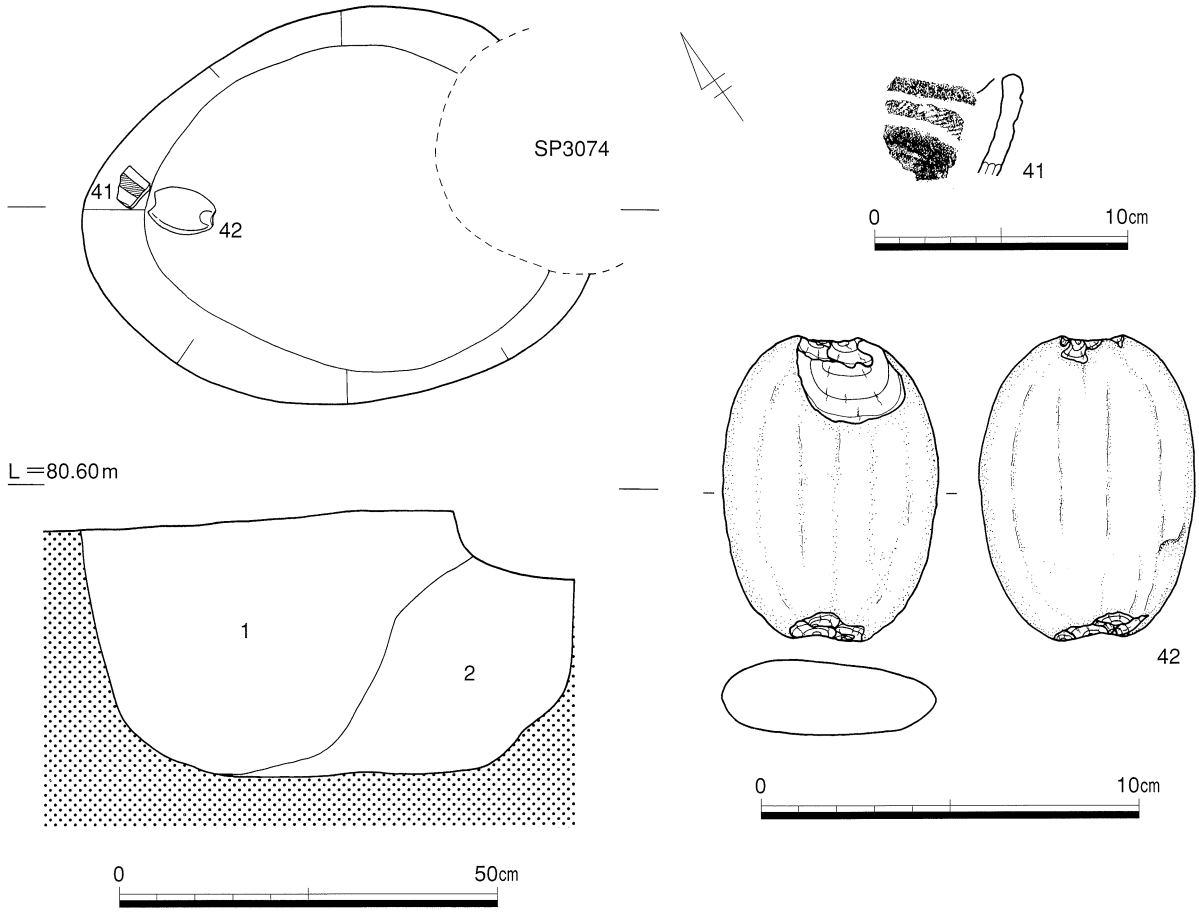
小土坑（SP13003）

A－１区北半中央で検出された。SH13001の南側に隣接し、上面検出のSP3074に東縁を切られる。全長65cm、全幅43cm、深さ36cmを測る平面楕円形の小土坑である（第21図）。断面形はしっかりとした舟底状を呈し、明らかに人為的な掘込みであるが、柱穴とは見做しがたく、性格は不明である。

覆土は２層に分層されたが、うち第１層からは遺物２点が出土している（41・42）。41は有文深鉢の口縁部片である。口縁は緩く内彎し、端部は緩波状に成形される。口縁外面には二条を単位とする縄文



第20図　A－１区 SK13013遺構・遺物実測図



1. 黄褐色2.5Y5/3砂質土。マンガンを極少量含む。しまり良し。　2. オリーブ褐色2.5Y4/3砂質土。マンガン、シルト味極わずかにあり。

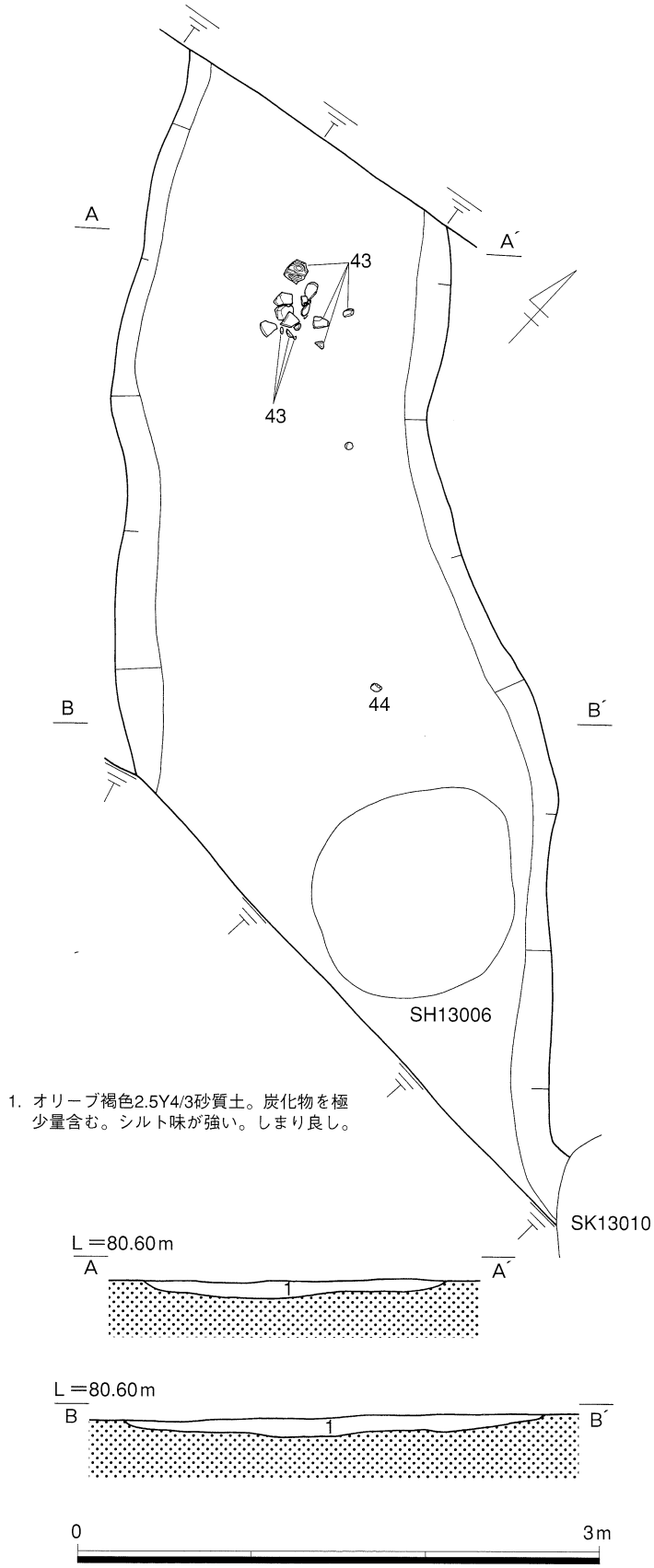
第21図　A－1区 SP13003遺構・遺物実測図

帯が配されるが、文様構成、系統とも不明である。沈線原体は幅4㎜で浅くやや不明瞭、縄文原体は節幅1.5㎜と肌理細かい短節LR縄文を用いている。色調はにぶい黄橙系、胎土中には結晶片岩、砂岩系河原小円礫を多量に含む。42は緑色片岩製の打欠石錘である。長さ8.0㎝、幅5.7㎝、厚さ2.0㎝と小形で、重量は160ｇを測る。

自然流路跡（SR13001）

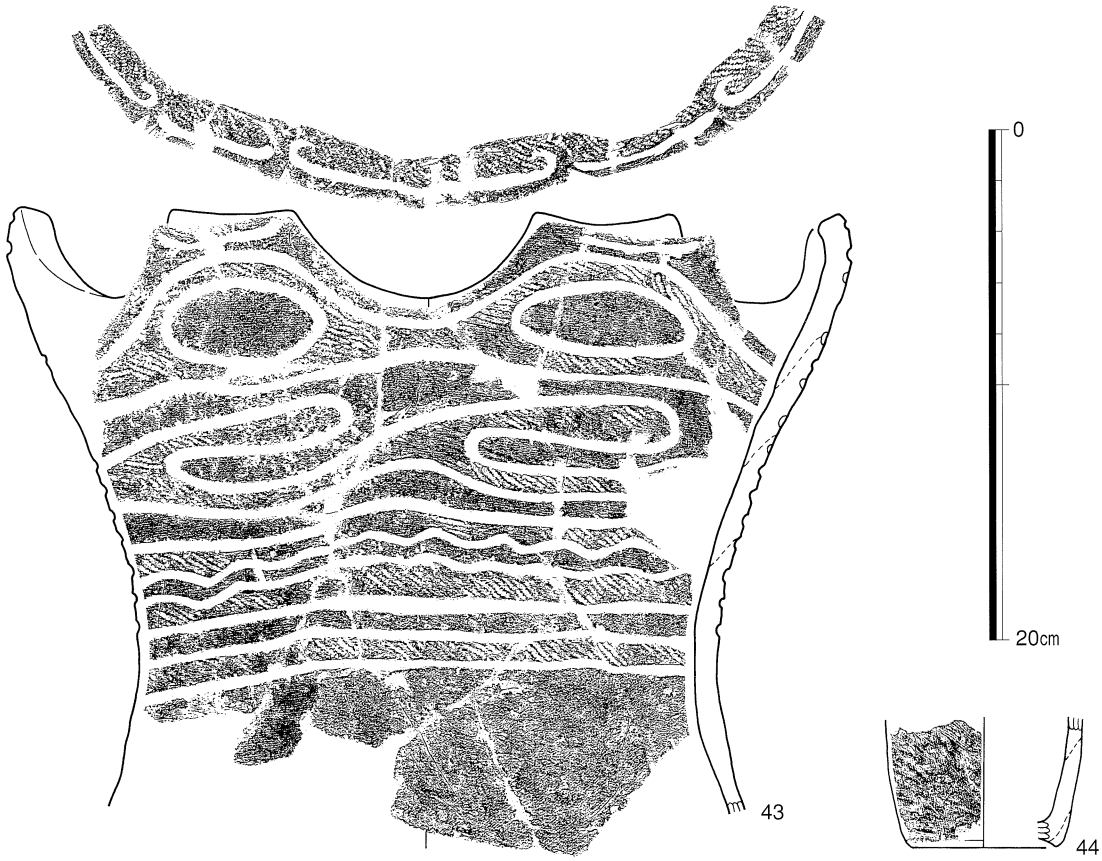
A－1区北東部で検出された。調査区南半までは遺存しない。残存長約4.9m、全幅約1.8m、深さ約10㎝の浅い自然流路跡である（第22図）。断面は薄いレンズ状を呈している。底面精査時において焼土坑SH13006を検出したことで、流路との時間差が確認された。すなわち流路状遺構は周囲の土坑群よりも若干時期の下る可能性が強いと判断される。

覆土中からは縄文土器2個体分が出土している（43・44）。43は推定口径32.3㎝、残存高23.5㎝を測る大柿類型の深鉢である。頸部が滑らかに括れ、口縁端部を内彎成形する。口唇は低い富士山形の波状縁を呈し、頂部は6単位に復元される。文様は全て横位連繋を原則とし、口唇、口、頸、胴部上半の四帯に分帯されるが、うち口頸部境界には段、屈曲等は表現されず、口縁部文様帯下端の横走沈線がかろうじて界線的役割を担っていることから、型式学的にみて、土坑群出土資料よりも若干新相と捉えるこ



第22図　A－1区 SR13001遺構実測図

とができよう。口唇部文様帯は波頂部平坦面の弧状単沈線と、端部が蕨手状となる弧線文が、鰭状に拡張された側縁上面にそれぞれ独立しながら連続施文されている。縄文はこれら口唇の沈線列よりも内側に充填されるが、磨消縄文の手法は採られていない。口縁部文様帯は波頂部下の大きな楕円形区画文を主文におき、その上下を二条縄文帯で結んでいる。頸部には連続する横長J字文が配されているが、縄文部と無文部の間ですでにポジ＝ネガ現象（玉田芳英1989）が生じている点で注目される。口縁部文様帯下端の横走界線とこの頸部無文帯により、口頸間の境界を視覚的に強調表現した結果と考えられる。胴部文様帯は大きく上下二段に分帯される。上帯は縄文横帯の中位を二条単位の波状沈線無文帯が貫流し、下帯は無文帯を挟んで縄文帯が横位平行する構成である。以下は無文であるが、胴部最大径は欠損部以下に求められることから、全形はかなり長胴と推すべきだろう。沈線原体は幅4～5㎜と深く明瞭であるのに対し、縄文原体は節幅約2㎜と細めの短節RL縄文が用いられている。区画帯内部への縄文の充填が不徹底である点でやや古相を反映するものの、本資料は口、頸、胴三帯間を通して磨消縄文手法が厳守されている点において、先の土坑群資料とは型式学的な時間差が看取される。つまり鈴木徳雄氏の提唱する三原則、「帯状文意匠描出の原則」、「描線不交差の原則」、「交互充填施文の原則」の全てを満たしているのである（鈴木1990、1993）。頸部や胴部上帯において縄文充填のポジ＝ネガ現象が生じ



第23図　A－１区 SR13001出土遺物実測図

ているのはこうした磨消縄文の施文原理を厳守したためであり、従来、中津Ⅱ式の型式学的指標として重視されてきた反転現象は、磨消縄文成立当初から存在していたことを、本資料は裏付けている。それでは、本資料（43）を後期初頭にまで下げて考えるべきか、と云えば、つぎに挙げる３点においてその条件は満たされていない。１点目に独立した鰭状肥厚帯と口唇部文様帯の蕨手状区画文、２点目にその口唇部文様帯における磨消縄文手法の未成熟が挙げられ、さらに３点目として区画内部への充填縄文の不徹底（空白部の目立つ点）が挙げられる[6]。また沈線原体が太く明瞭である点や、長胴形を成すプロポーションも相対的に古相を示す要素といえる。このように43の諸特徴を総合的に観察するならば、土坑群出土資料に若干後続する中期最終末期の土器と位置付けることがより妥当な結論といえよう。色調は灰褐色系、胎土中には石英・長石・雲母が確認される。この43は白石氏の分析No45に相当する。

44は先の26と同様、特殊な小円筒形の土器であり、底径は5.6cmを測る。外縁に低平な隆帯を設けた高台底で、胴部は直立する。外器面は明瞭な巻貝条痕、内面は粗いナデのまま放置されており、26と同様、非日常的な器種を想起させる。色調は褐系、胎土中には石英・長石・雲母を含有する。

自然流路跡（SR13002）

A－１区南西隅を東西に走る自然流路で、残長約16.5m、幅約1.3～2.6m、深さは最深部で約20cmが遺存している。断面は上下二段から成るレンズ状を呈し、覆土は２層に分層された。第24図平面は遺物45の出土した遺構東端付近を図示したものである。

45は砂質片岩製の打欠石錘で、近隣に産する河原小円礫を素材としている。長さ7.6cm、幅6.2cm、厚

さ1.9㎝、重量は残存110ｇを測る。

(5) 第13包含層出土遺物の観察

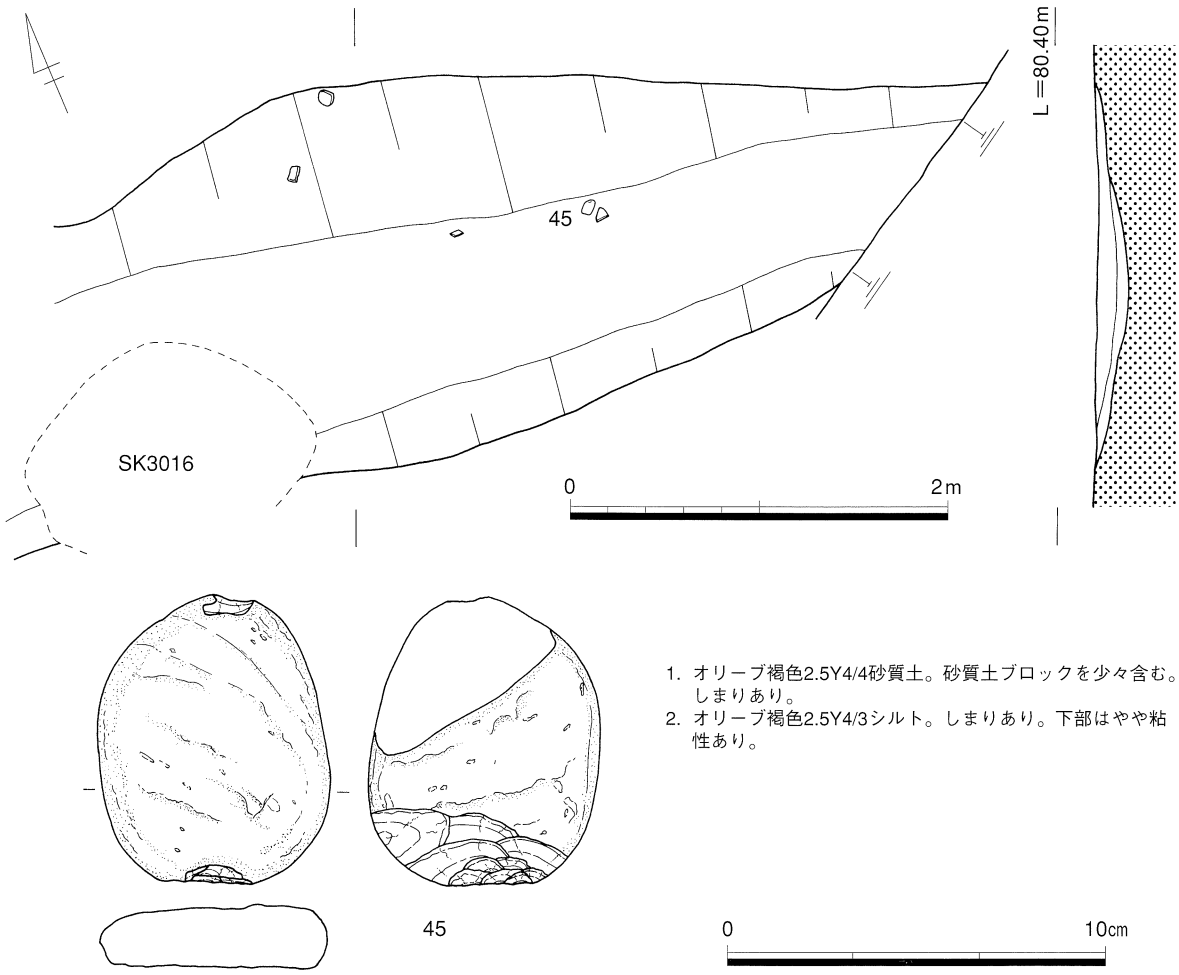
冒頭でも述べたように、A－１区では遺構面直上を中心に第13包含層下部にかけて纏まった量の遺物が出土している。特に本来の遺構面直上に相当するレベルでは、調査区中央北半部を中心に面的な出土が確認されている（第25・26図）。これは先述の土坑集中域とも重なることから、以下直上出土と見做す資料には本来、いずれかの遺構に帰趨されるべき例が一定量含まれるものと予測される。

以下、第25・26図に示された遺構面直上出土資料と、包含層出土資料に分けて説明したい。

① 第13遺構面直上出土遺物

遺構面直上相当レベルからは土器179片（同一個体を複数に換算）、石器24点（一次剥片・砕片を含む）を検出した。時期は縄文中期末に限定される。ここでは土器30個体分（口縁、底部片は全点）、石器７点を第27～29図に示した。

46は里木Ⅱ・Ⅲ類型の深鉢頸部片である。SK13009周辺から出土した。器面は内外ともヘナタリ属巻貝により粗く仕上げられている。外面上半には幅４㎜を測る、浅くて平坦な原体を用いた緩波状文が四

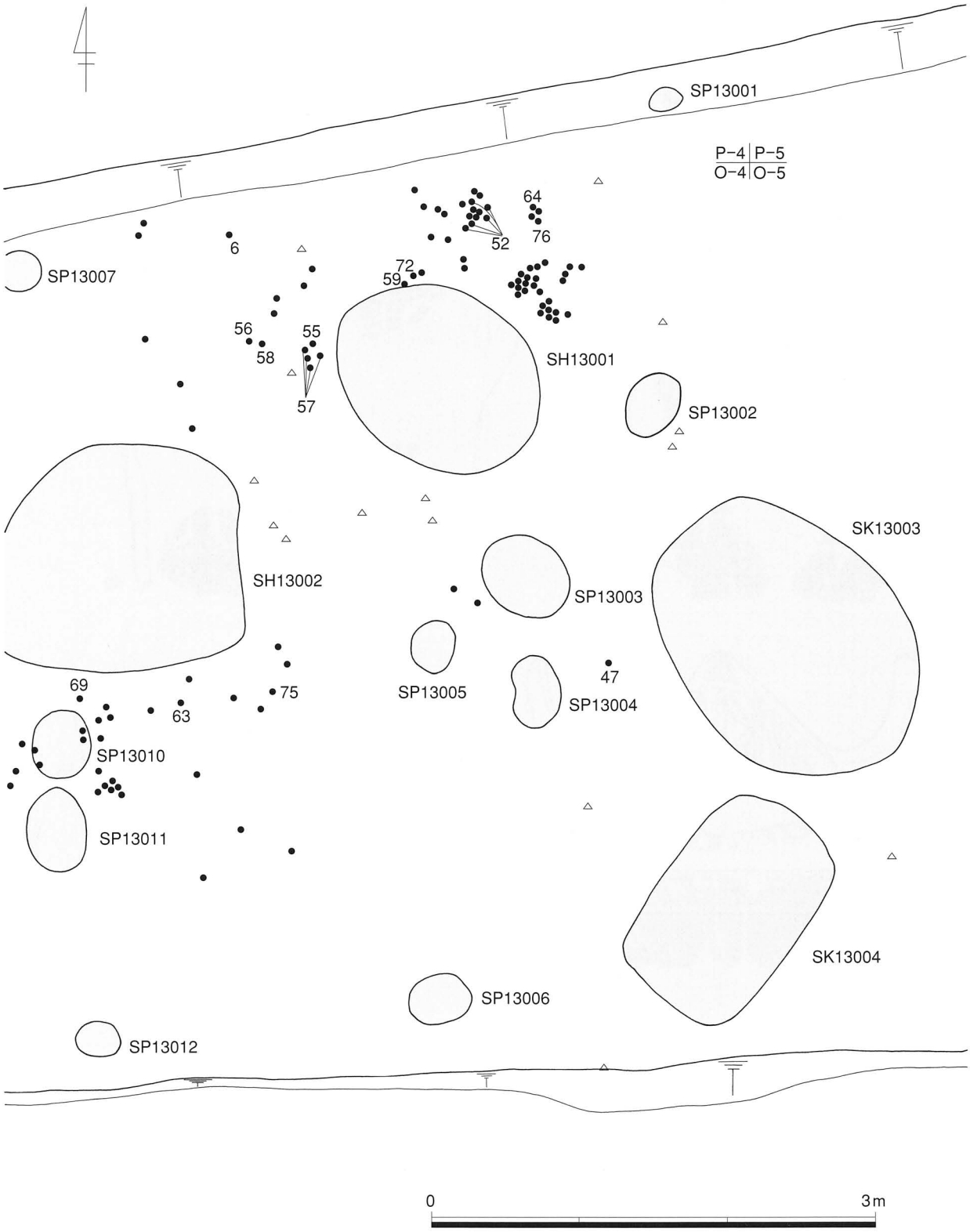


第24図　A－１区 SR13002遺構・遺物実測図

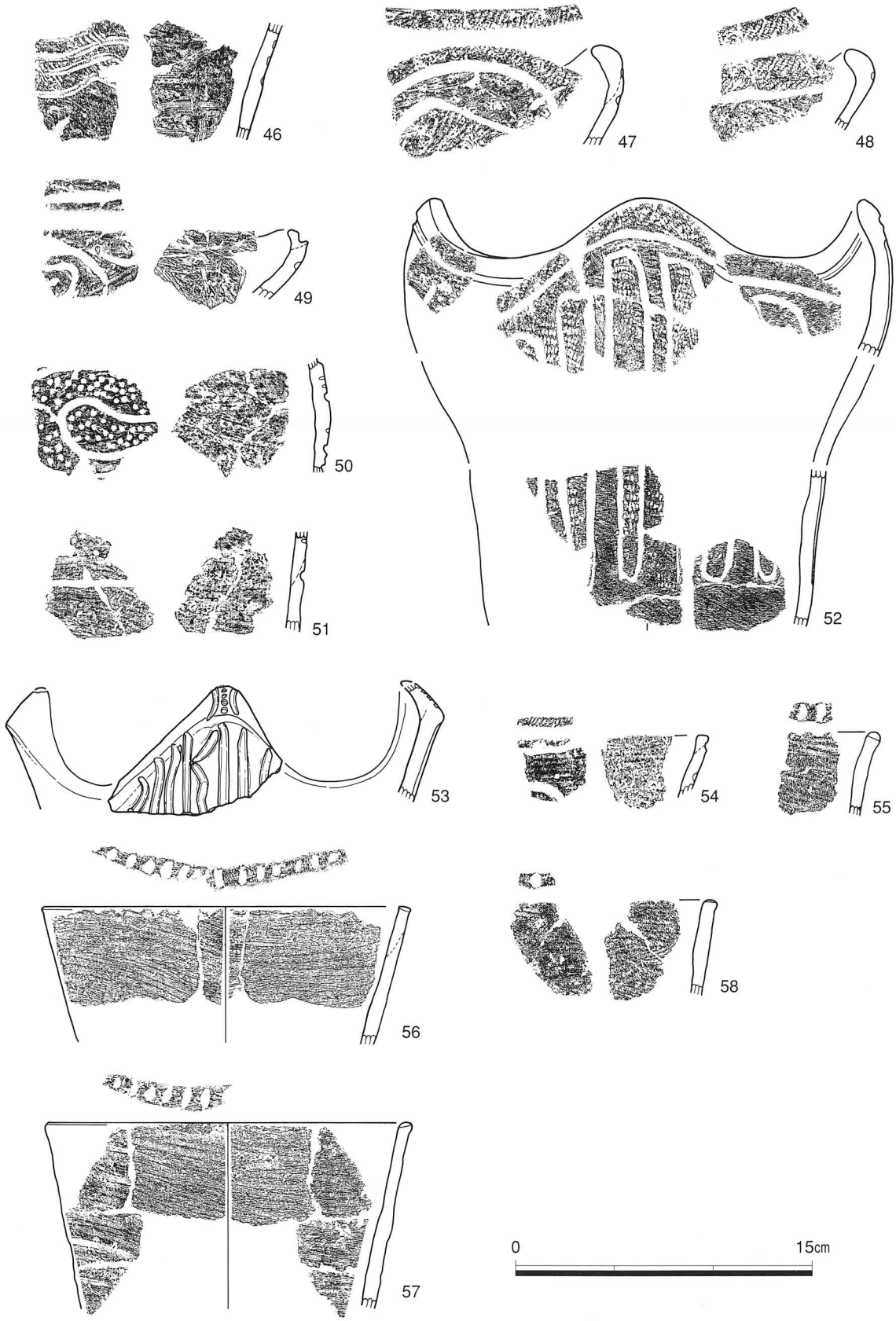
条以上重層施文されており、また沈線施文後には条幅1.8㎜の無節Rl縄文が複数沈線を跨いで粗雑に充填されている。沈線に他と趣の異なる原体を用いているが、波状文の振幅、条痕原体や器厚から判断して中期末を遡ることはないだろう。47・48は同一個体である。SK13009周辺から出土した。頸部が内折する内彎口縁を呈し、緩い波頂部下には横長J字文風のモチーフが描かれている。文様には里木Ⅱ・Ⅲ類型からの系譜が窺える。区画帯内部と派生する口唇面上において節幅約2㎜の短節LR縄文が充填されており、沈線は幅5.5㎜と太く明瞭である。49は集線文系浅鉢の口縁部片で、SK13009周辺から出土した。浅いボウル形を呈し口縁端部を内面側に強く屈曲させている。内面には不定方向に走る巻貝条痕が顕著に残されており、調整は粗雑である。端部には一条の横走沈線、外面には渦文ないし重弧文と予想される曲線状モチーフが描かれている。沈線は幅4～5㎜と深く明瞭であるが、縄文の併用は確認されていない。50・51は沈線文と円形刺突文の充填により文様を構成する深鉢胴部片である。ともにSK13009周辺から出土した。50は区画内外、51は区画内にのみ刺突文の充填が認められる。刺突文は幅2㎜、深さ2～3㎜と深く鋭い。類似したモチーフは瀬戸内地方を中心に確認されているが、系統的にみて北白川C類型の系譜が想定される[7]。52は推定口径21.6㎝、胴部径17㎝前後を測る深鉢で、SH13001周辺から出土した。文様構成上、北白川C式の系譜を引くと考えられる。胴部が直立気味に長く延びるのに対し、口縁は強く内彎成形されている。波状縁となる口縁端部に沿った一条の横走沈線と、以下縦位に展開する方形区画文で文様帯は構成される。沈線原体は幅4～5㎜と太く明瞭であるが、内部に線状の擦過痕が複数平行に残されており、小巻貝尾部による施文と推定される。口縁部沈線より上位、および方形区画文内には節幅4㎜と太い縄文が粗く充填施文されているが、縄文は一部区画外に及んでおり、磨消縄文手法は厳守されていない。口縁のそれが短節LR縄文であるのに対し、頸部以下の区画文内には短節RL縄文が採られているのだが、意識的な使い分けとみるよりも、むしろ、施文工程上の時間差を反映したものと捉えられる。器面は内外とも巻貝条痕後ナデによって仕上げられている。53は器形、文様とも稀有な深鉢形土器である。口縁は波頂部推定で18.2㎝を測る。頸部から口縁部にかけて直線的に外傾し、口縁端部を内傾屈曲させて幅2～3㎝の狭い口縁部文様帯を形成している。波頂部から垂下する縦位の対向弧線二条と、その間に幅4㎜を測る円形の竹管状工具による刺突文を縦位一列に付して主文様と成し、両翼は無文のまま放置させている。頸部には幅4～5㎜と太く明瞭な原体により縦位の直線的な垂下文と、三条おきと推定される縦位鋸歯文を密に組合せている。縄文の施文は全く認められない。類例はないが、個別文様モチーフには北白川C式との類縁性が窺える。54は沈線文系深鉢の口縁部片である。口唇部に短節LR縄文を付す点で典型例とはいえない。原体に節幅2.5㎜と1.5㎜の無節Rl2本を撚合わせた特異な紐を用いている。口縁外面には条痕後ナデ地に幅3.5～4㎜の明瞭な沈線文が単独施文されているが、小片のため文様構成は不明である。

55～58は口唇に刻目を有する無文系深鉢1類型である。口縁部形状は直口(56～58)ないし外反(55)で、すでに有文諸系統とは器面上の作分け意志が備わっている。うち56・57はともに砲弾形を呈し、器形、法量、内外器面調整とも酷似するが、刻目、色調がやや異なっており、同時性を示す別個体と認識しておきたい。ともにSH13001周辺から出土している。これら砲弾形を呈する無文系深鉢1類型は九州および山陰西部を中心に分布しており、瀬戸内を介した製作伝統上の交流を示すものとして注目される[8]。口唇の刻目はいずれも丸い棒状工具の直角方向への押引きに基づいており、幅4～6㎜と相対的にみて太く明瞭である。59・60は無文系深鉢2類型である。59はSH13001周辺、60はSK13009周辺から出土した。口縁部形態はいずれも直口外傾で、1類と同様、すでに有文諸系統とは器形が異なってい

第25図　A－1区第13遺構面直上遺物出土状況図(1)



第26図　A－1区第13遺構面直上遺物出土状況図(2)



第27図　A－１区第13遺構面直上出土土器(1)

る。ともに器表面には巻貝条痕が遺存する。

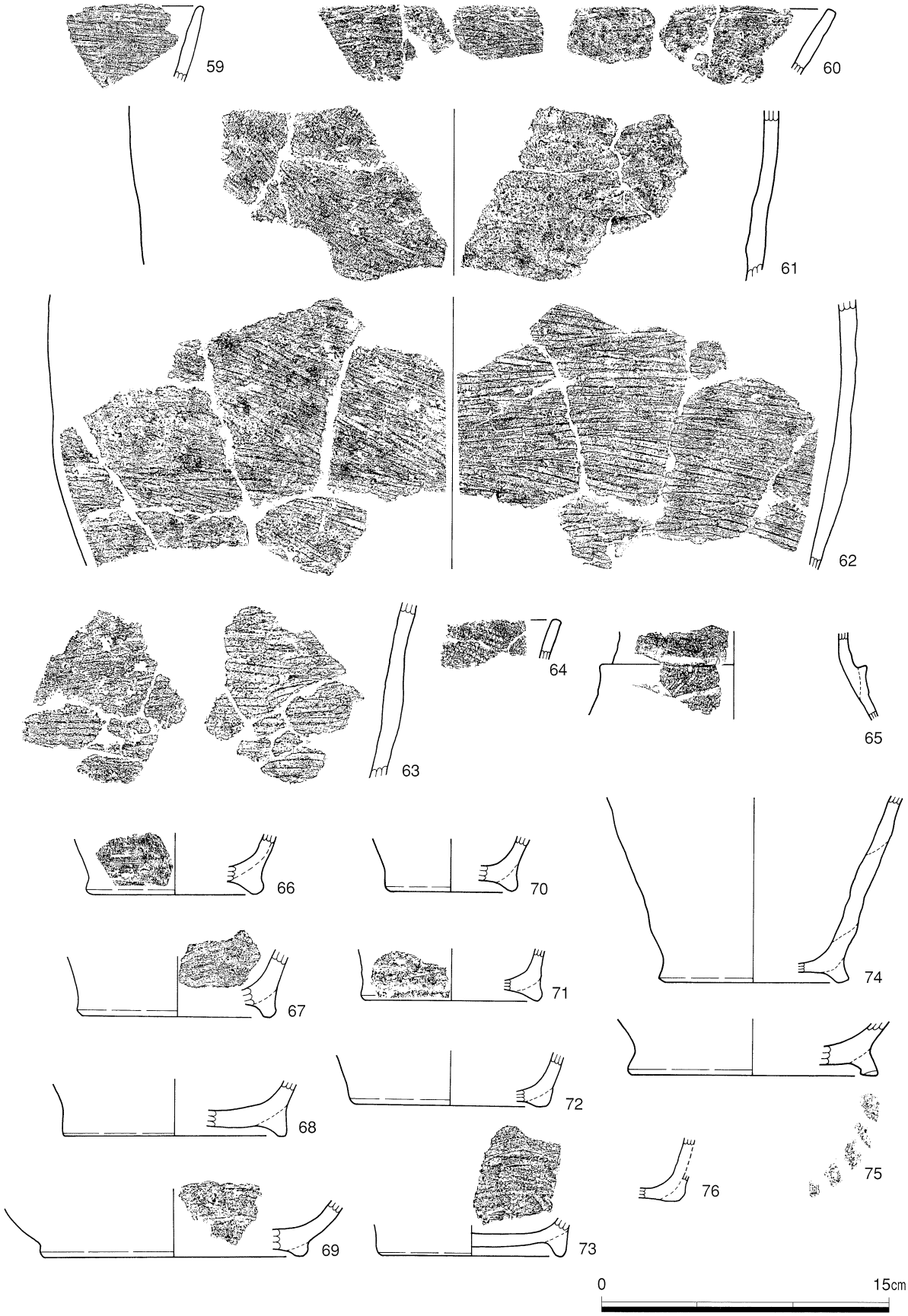
61～63は文様系統不詳の深鉢胴部片で、残存部はいずれも無文である。うち61・62の胴部最大径はそれぞれ残存部で33.9cm、41.7cmを測る。61・62とも器面調整は巻貝条痕によるが、62の内外は特に条痕が明瞭に残されている。また63内外には本遺跡では稀少といえる二枚貝条痕を明瞭に残している。

64は全縄文類型の浅鉢口縁部片で、先述のSH13001出土の9とは同一個体片の可能性が強い。SH13001周辺から出土している。65は隆帯文系壺形土器の胴部片で、肩部の径は推定13.8cmを測る。肩部に鍔状隆帯を貼付け、上下帯を明瞭に区分している。隆帯外面には節幅2.5mmを測る短節LR縄文が浅く充填施文される。隆帯下端部は緩いカーブをもつことから、肩部以下に何らかの意匠を形成するものと推察される。無文部には丁寧なナデ調整が施されており、平滑に仕上げられている。穂積裕昌氏は双耳壺肩部の鍔状隆帯は中津式の成立するⅠa期までには消滅すると述べており（穂積1992)、穂積編年と年代的にも合致する。

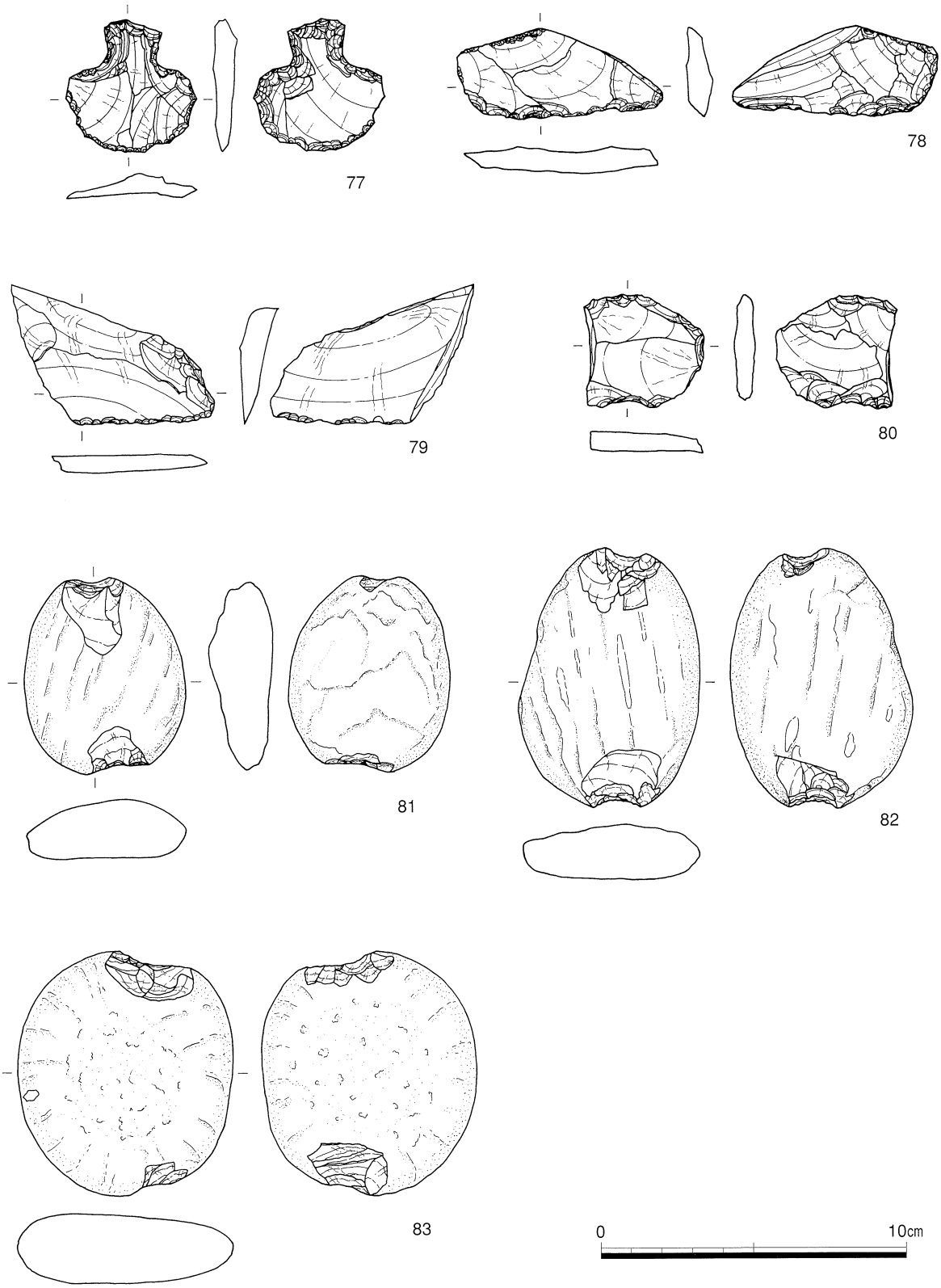
66～76は深鉢底部で、66～75までが高台底に分類される。うち隆帯が外方に張出す形態(66～72・74・75）が圧倒的に主流であり、66・68～72・74のように隆帯内面側を弧状に整形する例が目立つ。高台底のうち75のみ隆帯接地部に刻目が施されている。刻目原体はヘナタリ属小巻貝であり、貝殻の押捺によりやや斜位に刻目を付す特異な例である。かような例は瀬戸内西部～九州地方を中心に散見される。76は平底Ⅱ類に分類される底部小片である。中央に向け器壁が僅かに隆起している。底径は66～75まで順に、8.2cm、9.8cm、11.4cm、12.6cm、6.4cm、9.0cm、9.0cm、9.4cm、9.2cm、12.6cmで、平均値は9.8cm、69と75は大型といえる。

つぎに色調、胎土についてみておこう。色調で圧倒的に多いのは「にぶい黄橙系」で、46～49・52・55・57・59・61～63・65～75が該当する。遺構内出土資料と共通した傾向である。うち結晶片岩、砂岩系河原小円礫の含有が認められるのは46～49・63・66・71・74で、残りの資料は石英・長石・雲母を含んでいる。片岩を含む63は、器面調整の特徴から徳島平野南部からの搬入品である可能性が考えられる。例外として59・65には胎土中に領家帯起源の花崗岩が含まれており、明らかに搬入品と見做されよう。このほか稀少例として「灰黄褐系」(50・54・56)、「褐灰系」(51)、「赤褐系」(53・60)、「橙系」(58)、「褐系」(64)、「黄褐系」(76）が挙げられる。うち51には結晶片岩が含まれるが、残りの資料は石英・長石・雲母のみで構成されている。このように、片岩、砂岩系河原小円礫を含む土器の多くが「にぶい黄橙系」に類別されており、器面発色と胎土構成物には一定の関係が導き出せるものと推察される。なお50・52・57・71・73・74については白石純氏による胎土分析結果が後頁第Ⅴ章にて紹介されている（順に分析No.35・ 8 ・25・34・33・52)。

77～83は遺構面直上出土の石器である。77はサヌカイト製の石匙。刃部は弧状を呈し、細部調整は全周に及ぶ。全長4.3cm、幅4.3cm、厚さ約8mm、重量は11.4gである。78はサヌカイト製の横長剥片を素材としたサイドスクレイパーである。刃部の調整は粗く、目視では磨耗痕や擦過痕等は全く確認できない。背部にはブランティング加工が施されている。長さ2.9cm、幅6.7cm、厚さ約9mmで、重量は17.3gを測る。79もサヌカイト製のサイドスクレイパーである。刃部には細かな細部調整が施されているが、磨耗痕等は同じく確認できない。また背部は折断面のまま放置されている。一部を折損するため全形は不明であるが、いわゆる石庖丁状石器としてではなく、不定形削器と認定すべき資料である（中越利夫1993、横田美香2003)。長さ4.6cm、残幅6.7cm、最大厚1.4cmで、残存重量は25.3gを測る。80は両極打法による上下二次加工痕を伴う小形のサヌカイト剥片である。技法および形状から慣例に従って楔形石



第28図　A－１区第13遺構面直上出土土器(2)



第29図　A－1区第13遺構面直上出土石器

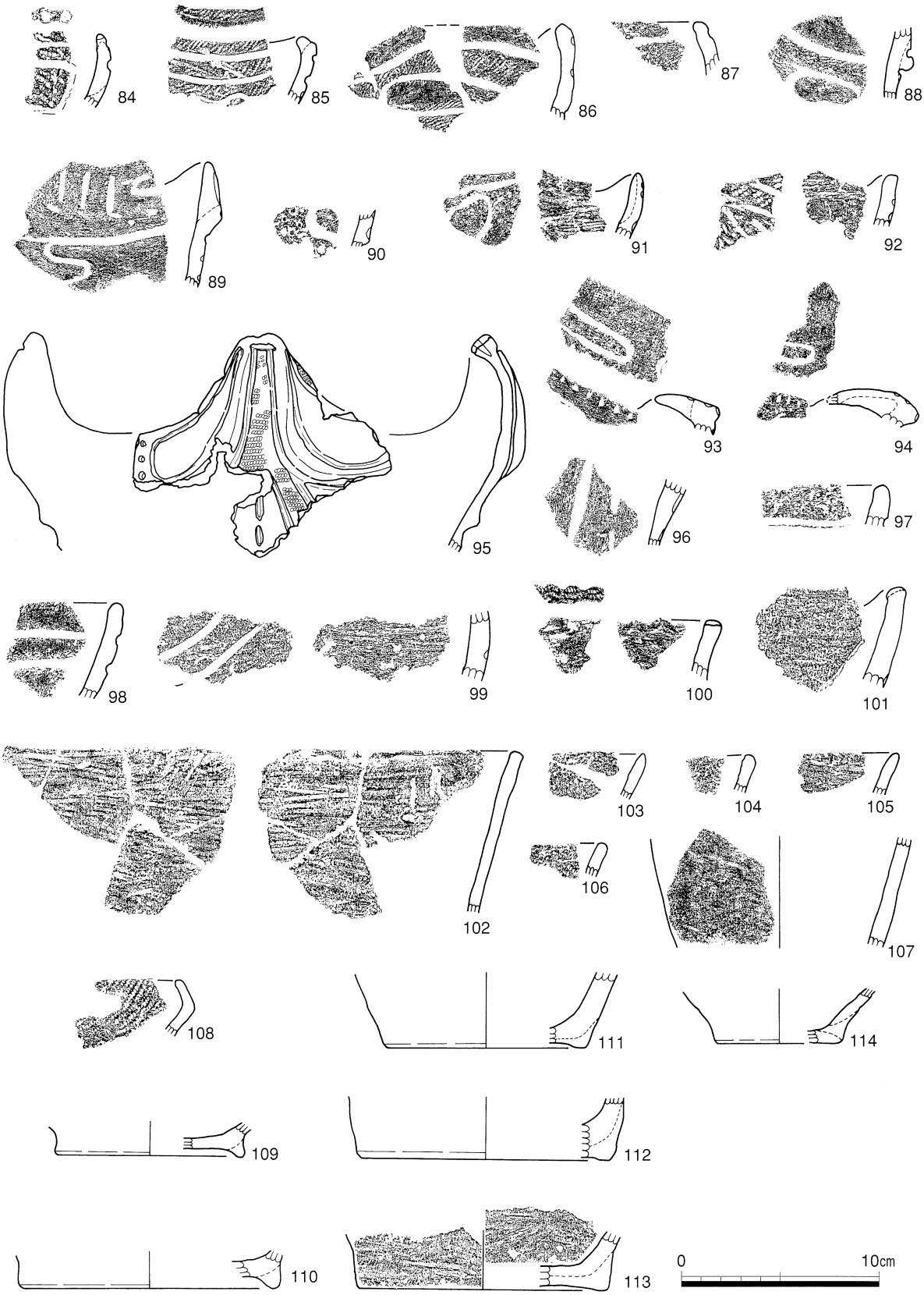
器に分類しているが、いわゆるピエス＝エスキーユとしての機能性は想定しがたい。本例の場合、むしろ平面略三角形という形状が強く意識されている。一辺に浅い弧状の折断面、上下二辺には平面三角形様を意識した、粗い二次加工としての折取調整と両極打法が併用されており、石鏃未製品として捉えることもできる。長さ3.2㎝、幅3.9㎝、厚さ約７㎜、重量は14.0ｇである。

81～83は小形の打欠石錘である。いずれも扁平な緑色片岩河原礫を素材としており、重量はそれぞれ、110ｇ、150ｇ、220ｇを測る。200ｇを越す83は後述124に次いで本層位では大型に属する。

② 第13包含層出土遺物

遺物は包含層下部を中心に出土している。遺構面直上から遺物は量を減じつつも連続的に堆積しており、遺構面に対して相対的に上位に位置するものをここでは包含層資料として扱ったが、時期的には遺構面資料と重複する場合が多いと予想される（第30・31図）。

第30図は土器資料である。これまでと同様、口縁と底部については小片にかかわらず全点掲載の方針をとった。84は里木Ⅱ・Ⅲ類型深鉢の口縁部小片である。強い内彎口縁を呈し、口唇は若干先尖気味に整形している。口唇上には幅７㎜、深さ3.5㎜を測る大振りの直刻文を付す。外面には節幅３㎜の太くしっかりした短節RL縄文を地文に施し、口縁端部に沿う一条の横走沈線と、方形を窺わせる区画文を配している。沈線原体は幅４～５㎜と深く明瞭である。85は口縁が直口外傾し、端部を内面側に肥厚させる。外面、および口縁端部には節幅1.5㎜を測る短節LR縄文が全面施文されており、これを地文として外面には横走沈線二条と、その下には振幅の短い波状沈線文が描かれている。沈線原体は幅３㎜を測り深くやや細めのものを使用している。文様モチーフには里木Ⅱ・Ⅲ類型からの系譜が想定されることから、ここでは仮称、大柿類型に分類する。86は内彎口縁を呈する有文深鉢である。口唇は緩い波状縁を成すが波頂部には広い平坦面を有している。外面は幅５㎜の太い沈線で横長J字文風のモチーフを描き、区画内を中心に節幅1.3㎜と肌理細やかな短節LR縄文をやや密に施している。本資料に限り縄文は沈線施文以前に施されており、後のナデ消しが不充分であるが、狭義磨消縄文に近い手法である。口唇部に文様帯はなく、新相を示すが、外面文様は里木Ⅱ・Ⅲ類型からの系譜上にある。87も沈線文による区画内に短節LR縄文を組合わせる例で、86とは器形、文様構成とも類似する可能性がある。88は大波頂を呈すると予想される深鉢頸部である。口縁部文様帯下端に沿い明瞭な隆帯を貼付け、さらに口縁部側には平行する一条の沈線を添える。隆帯以下頸部には小さな楕円形の区画文が配されており、隆帯の下端と連絡している。縄文原体はともに節幅1.5㎜と肌理細かい原体を用いているが、口縁部が短節LR縄文であるのに対し、頸部区画外には短節RL縄文が用いられており、口縁部文様帯製作との僅かな工程上の時間差が看取される。口頸部間が一体化しつつある点で遺構群出土資料よりも若干新相と捉えられるが、製作にはなおも口頸部間の作分けが強く意識されている。89は直口する口縁部外面を断面三角形状に弱く肥厚させる北白川C類型深鉢口縁部である。界線となる横走沈線を境に口頸部文様帯を区分する。口縁部にはナデ地に縦位三ないし四条の短沈線を主文としておき、狭く退化した楕円形区画文で連繋する。頸部以下には縦位の蛇行沈線文一条が、横走する界線に接して描かれている。沈線原体は幅４～５㎜と太く明瞭であるが、縄文は併用されない。北白川C式の系譜を引くが、全体に退化傾向著しく、北白川C式Ⅳ期に後続する中期最終末期に位置付けられよう。90は幅５㎜を測る明瞭な区画文の外に幅4.5㎜の竹管状工具による刺突文を密に充填する例である。先の遺構面直上50・51に類する可能性もあるが、本例の場合、工具、刺突の緻密度といった点でやや違和感を覚える。仮に擬似



第30図　A－１区第13包含層出土土器

縄文の一種と捉えるならば、九州東南部との影響関係を想定することもできる。ただしこの場合、四国地方における類例は徳島市矢野遺跡（藤川編2003）、愛媛県広見町岩谷遺跡（犬飼徹夫ほか1979）など極少量に限定される。91は条痕後ナデ地に横走沈線と縦位の楕円形区画文を組合わせる内彎口縁深鉢の例で、縄文の有無を除けば先述の遺構面直上52資料とは類似した意匠と推定される。条痕原体にはアルカ属二枚貝の使用が観察される。92は矢部奥田類型の可能性がある有文深鉢口縁部小片である。口縁は直口し、外面には重層する山形沈線文が、節幅３㎜とやや太い短節LR縄文地に描かれており、矢野分類のｆ種に相当する可能性がある（矢野1994a）。95は推定４単位の大波頂を有する北白川Ｃ類型深鉢で、口径は推定23.0㎝を測る。口頸部間は明瞭な無文隆帯で区画される。口縁部文様帯は方形の区画文と、幅４㎜、深さ５㎜と深い縦位３点の円形刺突文によって構成され、原則として縄文は伴わない。口唇波頂部にも同等の刺突文一対が確認される。頸部以下は波頂部から垂下する縄文帯が開放して紡錘文を構成し、主文となる。区画内には長さ1.2㎝程度の縦位短沈線文が一列に付加されている。器形、文様構成ともいわゆる中津Ⅰ式古段階の様相に近づいているが、口頸部間隆帯に注目するならば、鈴木の三原則には依然合致せず（鈴木1990、1993）、中期最終末期に位置付けるべき資料といえる。縄文原体には節幅３㎜と太くやや撚りの弱い短節LR縄文が用いられており、空白の目立つ粗い充填手法にも中期末の伝統を窺わせる。93・94は北白川Ｃ類型Ｃ類の系譜を引く大波頂口縁両翼の鰭状肥厚帯に相当し、両者は同一個体の可能性も残る。ともに長楕円形の区画文が施されており、区画内には短節RL縄文が浅く充填施文される。節幅はそれぞれ３㎜、2.5㎜である。沈線は幅約４㎜で、ヘナタリ属の小巻貝尾部を原体とする。口縁への界線となる屈曲稜線上には幅2.5～３㎜の円形刺突文が連続施文されており、うち遺存状態の比較的良好な93では刺突内中央部に一条の稜線が観察される。口縁部外面以下にも一部沈線文の存在が窺えるが、構成等は全く不明である。これら93・94の諸特徴は先の遺構資料と比較しても遜色なく、95などと比較するならば明らかに古相に属するであろう。96は頸部小片であるが、95にみられるような紡錘文の一部と予想される。左側縁には弧状に走る隆帯が併用されており、北白川Ｃ類型Ｃ類の大波頂口縁となる可能性が高い。沈線原体は幅４㎜と深く明瞭であるが、縄文は確認できない。97は端部を緩く内彎させる深鉢口縁である。平縁となる口縁に併行して幅4.5㎜を測る浅い沈線一条が認められるが、文様構成、縄文の有無とも明らかではない。98は沈線文系深鉢の口縁部片である。緩く内彎する平縁に平行して幅５㎜を測る浅い沈線二条が描かれている。99は沈線文系１類の胴部片で、緩い連弧状のモチーフ二条が認められる。沈線原体は幅4.5～５㎜と太く明瞭、内面にはアルカ属の二枚貝条痕が明瞭に残されている。

100は外反口縁平縁となる無文系深鉢１類型であるが、口唇付加文は極めて特異である。すなわちヘナタリ属小巻貝の回転押捺により幅10㎜前後を単位とする大振りの直刻文を擬したもので、県下ではこれまで全く例がない。類例を求めるならば周防灘沿岸～別府湾周辺地域を挙げるほかなく、瀬戸内西部を経路とする搬入土器の可能性が強いであろう。器面内外には巻貝条痕が残る。

101は口縁の強く内彎する沈線文系深鉢ないし鉢で、口縁端部は面取り調整を施して緩い波状を成す。外面は巻貝条痕を一部に残すナデ地に鋸歯文、ないし振幅の強い波状文一条がかろうじて確認されるが（右下側縁）、しかし文様構成は不明である。器厚９～11㎜と本遺跡としては異例に厚く、また後頁第Ⅴ章掲載の白石氏の分析では、胎土中に角内石を含むと指摘されている。東瀬戸内方面からの搬入が予想される資料である。

102～106は無文系深鉢２類型である。口縁はいずれも直口外傾の平縁に整形されている。102の内外

面には横位のアルカ属二枚貝条痕が明瞭に残る。

107は無文の胴部下半資料であるが、文様系統は不明である。残存部の最大径は推定13.0cmで、やや小形の深鉢に復元される。器面調整は丁寧であるが、外面の一部には二枚貝条痕を留めている。胎土中には金雲母を多量に含んでおり、搬入資料の可能性が強いと判断される。

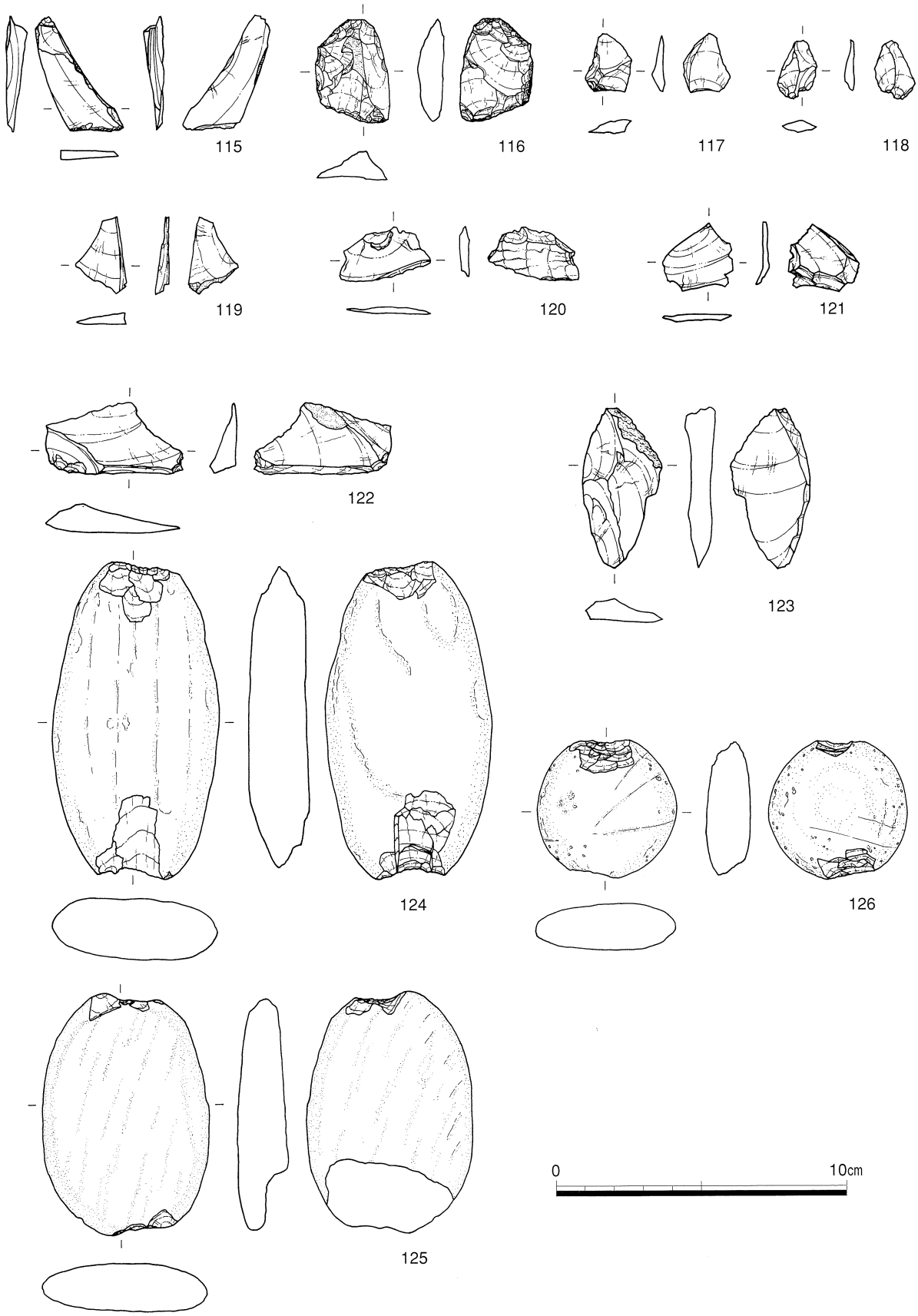
108は全縄文類型浅鉢の口縁部片である。口縁を逆く字状に内傾屈曲させており、外器表面に節幅2.8㎜と太めの短節LR縄文が、全面施文されている。

109～114は深鉢底部である。形態には高台底（109～111）、平底Ⅱ類（112・113）、平底Ⅰ類（114）の三者があり、やはり高台底の割合が高いが、相対的にみて明瞭な隆帯を有する高台底が減少し(109・110)、平底が増加しつつある。底径は順に9.4cm、12.4cm、9.2cm、12.4cm、12.4cm、6.0cm、平均値は10.3cmで、若干大型化の傾向が窺える。なお平底Ⅰ類としては唯一の資料となる114は他と比較して明らかに底径が小さく、また後述の胎土、色調から判断して搬入土器と判断される。

最後に包含層資料の胎土、色調についてみておく。全体的にはやはり「にぶい黄橙系」が主体を占めており（86・87・91・92・94・96・97・99・101・102・105・108・110・112・113)、うち86・87・97・98・99・101には結晶片岩ないし砂岩系河原小円礫の含有が認められる。また色調は多少異なるが85・90・95・98にも同様の岩石混和が観察されることから、これらについては同一グループに含めるべきかもしれない。他に「にぶい黄褐系」(84・89・108・114)、「褐系」(93・106・107)、「灰黄褐系」(100)、「赤褐系」(103・104・109)、「黄褐系」(111）があり、胎土組成も石英・長石・雲母を主とする。うち100、107は明らかに搬入資料とみている。また105・114は胎土中に花崗岩粒が含まれており、瀬戸内領家帯からの搬入が想定される。ちなみに、95・98・101・112は後頁第Ⅴ章白石氏分析のNo49・50・51・47に相当する。

第31図は包含層出土の石器である。115は横長剥片の縁辺を刃部とする二次加工ある剥片。長さ4.5cm、幅1.7cm、厚さ7㎜、重量4.6gを測る。116はサヌカイト製の楔形石器。両極打法による二次剥離にはステップ、ヒンジフラクチャー、スポールが頻発しており、加撃面となる上下両側縁には顕著な潰痕も認められた。長さ3.5cm、幅2.5cm、厚さ1.0cm、重さは6.8gである。117～119は小型のサヌカイト剥片のうち石鏃素材となる可能性がもたれる例。うち119の長辺には折取調整が加えられており、二等辺三角形を意識した調整と捉えることもできる。120・121は不定形の小剥片である。厚さ3～5㎜と薄く、石器素材として利用される可能性は低い。122はサヌカイト製の二次加工ある素材剥片で、長さ2.4cm、幅4.7cm、最大厚1.0cm、重量は8.7gを測る。縁辺に折断面、二次剥離が認められ、うち左側縁にはバルブ除去を意図した細部調整も観察される。製品ではなく、素材調整を意図した剥片と捉えられる。123は本遺跡で類例の少ないサヌカイト製縦長剥片であるが、表剥離面の切合い状況からみて、偶発的に生じた剥片と判断される。左下側縁には二次的な急角度調整が連続して認められるが、製品としてではなく、素材に対する調整剥離と捉えるべきである。長さ5.5cm、幅2.7cm、最大厚1.1cm、重量は11.2gを測る。

124～126は打欠石錘である。石材は124が緑色片岩、125・126が砂質片岩である。いずれも隣接する吉野川の河原等で容易に採取可能な石材である。うち124は長さ10.9cm、重量230gを測り、縄文中期末段階では最大の石錘となる。



第31図　A－1区第13包含層出土石器

(6) 小結

以上、縄文中期末の成果について述べてきた。紹介したA－1区は遺跡本体からすれば南縁付近と推察されるため、集落構造、生業形態復元等の側面に関しては云えば未だ資料が不充分といえる。しかし、時期が縄文中期末に限定された点で四国地方では極めて重要な成果であることに違いはない。特に土器に関しては従来実体不明とされてきた時期であるだけに、今後の編年研究において頻用が期待される遺跡となろう。ここでは紙数の都合詳細な検討を行えないが、出土土器について若干の検討を加え、本節を締め括りたい。

以下ではまず、器種、文様系統組成から順に振り返っておこう。

器種は深鉢形が圧倒的に多く86.1％を占め、ついで浅鉢9.7％、壺形4.2％（底部を除く全個体の実質個体数計72点の集計）が続く。ただし口縁部片に基づく一般的な個体数識別法によれば深鉢90.0％、浅鉢10.0％（口縁計50点）となり、壺形土器のような極少器種については、多少数値の誤差が生ずる。

こうした限界を承知したうえで個体識別法に基づく京都市北白川追分町遺跡の調査報告で示された深鉢：浅鉢：壺形＝81：19：0という数値と本遺跡を比較するならば、まず明らかに浅鉢の割合が少ない点に気付くはずである（泉1985）。そこでやや視野を広げ、西日本全域における中期末～後期初頭段階の組成比95事例を第3～4表に纏め、その性格を探りたい（個体識別法に基づく報告書または筆者個人集計）。なお鉢形土器は今回深鉢に含めて換算している。

表からは、まず西日本の外縁に位置する南九州や対馬といった地域で浅鉢を欠く、あるいはその比率が極端に低い傾向にあり、これらの地方に関しては浅鉢を日常的食事作法に採入れない、あるいは土器以外の代替器種の存在を予想すべきだろう。これらを例外とするならば、西日本では深鉢組成比9割前後を示す遺跡が最も多いといえる。しかしより詳細に地方内部の遺跡群を比較すると、遺跡の立地条件、特に海浜部や山間部遺跡を中心に、深鉢が8割前後の比較的低い数値を示す遺跡が一部確認できる。すなわち、特定の立地条件において浅鉢組成比の高い遺跡が散見される点には注意が必要である。

壺形土器については中期末～後期初頭において1割以上の高比率を示す遺跡は対馬、さらに隣接する韓半島南部に限定されており、西日本では組成比3％未満、胴部片等を含めても、全く確認されない遺跡がむしろ大半に及んでいる。

このように西日本全域を鳥瞰するならば、従来よく比較参考資料として引用されてきた京都市北白川追分町遺跡の組成比は、近畿地方でさえ一般的とはいえないことがよく理解される。近年、小濱学氏は三重県多気町新徳寺遺跡を事例に挙げつつ、伊勢湾西岸の地域的特徴として深鉢9割以上という組成比の普遍性を主張しているが（小濱1997）、この傾向はむしろ、遺跡の立地条件や性格によって、当時食材の獲得方法や種類、日常的食事形態や作法、内容に変化があったものと捉えるべきであろう。中期後葉以降複雑化する西日本の器種セット関係は、単純に地方差として峻別換言できるものではない。多くの遺跡では幾つかの生業類型の複合体から成立つために、土器組成と生業形態の相関を的確に捉えることには困難を覚えるが、立地環境の再考は今後、社会構造の一端を究明する手段として有効な視座となることは疑いないだろう（幸泉2004c）。

文様系統としては、大柿遺跡では横位連繋の波状文、横長J字文、渦文と、それらを連絡する横位連繋を基調とした広義磨消縄文の土器（2・3・34・43・46～48・85・86など）が、学史上判然としてこなかった未命名類型に該当するもので、今回、大柿類型と仮称して説明を行った一群でもある。広義磨消縄文の手法や波状縁、また文様属性の一部において北白川C式からの影響が窺えるものの、横位に

第３表　西日本縄文中期末～後期初頭器種組成一覧表１（参考）

所在地	遺跡・地点	深鉢・鉢	浅 鉢	壺 形	時 期
石川県白峰村	東島包含層	39(100%)	0	0	古府～大杉谷
石川県小松市	軽海西芳寺包含層	151(95.6%)	6(3.8%)	1(0.6%)	古府～中津併
石川県金沢市	北塚13次河道跡	94(94.0%)	2(6.0%)	0	串田新～中津併主
富山県大門町	串田新1993年度調査区	72(100%)	0	0	串田新
岐阜県古川町	岡前第1～5号住居址	92(94.8%)	5(5.2%)	0	加曽利ＥⅠ～Ⅲ併主
岐阜県藤橋村	戸入村平第2号住居跡	110(100%)	0	0	加曽利ＥⅡ～Ⅲ併
岐阜県関ヶ原町	小関御祭田住居跡	58(100%)	0	0	北白川ＣⅢ～Ⅳ併主
岐阜県藤橋村	塚第2号竪穴住居跡	67(98.5%)	1(1.5%)	0	北白川ＣⅢ～Ⅳ併
愛知県南知多町	林ノ峰貝塚Ｈ層	53(100%)	0	0	林ノ峰Ⅰ
愛知県南知多町	林ノ峰貝塚Ｇ層	155(98.1%)	3(1.9%)	0	林ノ峰Ⅱ
愛知県南知多町	林ノ峰貝塚Ｅ～Ｆ層	118(96.7%)	3(2.5%)	1(0.8%)	林ノ峰Ⅲ主
福井県南条町	上平吹Ⅱ～Ⅲ層	272(99.3%)	2(0.7%)	0	古府～串田新
滋賀県安土町	上出Ａ遺跡 T2区 SK13	36(94.7%)	2(5.3%)	0	北白川ＣⅢ～Ⅳ
滋賀県安土町	上出Ａ遺跡 T4区 SH1	28(100%)	0	0	北白川ＣⅢ～Ⅳ
三重県鈴鹿・亀山市	東庄内Ｂ・SB8	36(87.8%)	4(9.8%)	1(2.4%)	北白川ＣⅢ
三重県芸濃町	大石 SH48	58(93.5%)	4(6.5%)	0	北白川ＣⅢ～Ⅳ
三重県嬉野町	堀之内Ｃ地区下層	87(85.3%)	11(10.8%)	4(3.9%)	北白川ＣⅣ
三重県松阪市	薮ノ下包含層	160(98.2%)	3(1.8%)	0	中津主
三重県嬉野町	焼野第Ⅱ包含層	72(98.6%)	1(1.4%)	0	中津主
京都府京都市	北白川追分町 BG311区黒色土1・2層	269(81.0%)	63(19.0%)	0	北白川Ｃ
京都府大宮町	裏陰 C2区	235(95.5%)	11(4.5%)	0	中津Ⅰ古
京都府長岡京市	下海印寺土坑3	19(95.0%)	1(5.0%)	0	中津
大阪府堺市	小阪縄文河川7・8	28(100%)	0	0	北白川ＣⅣ
大阪府和泉市	仏並354－OD	22(95.7%)	1(4.3%)	0	北白川ＣⅣ
大阪府和泉市	池田寺土坑群	101(93.5%)	7(6.5%)	0	中津
兵庫県神戸市	篠原Ａ遺跡 G5住居址	73(96.1%)	2(2.6%)	1(1.3%)	篠原Ａ
兵庫県姫路市	丁・柳ヶ瀬Ａ・Ｂ地区	44(84.6%)	8(15.4%)	0	北白川Ｃ主
兵庫県龍野市	片吹 SB08	42(91.3%)	4(8.7%)	0	北白川Ｃ
兵庫県龍野市	片吹 SB07	37(94.9%)	1(2.6%)	1(2.6%)	北白川Ｃ～中津Ⅰ
島根県匹見町	石ヶ坪1989調査区 F2区Ⅲ層	27(87.1%)	4(12.9%)	0	並木～中津
島根県松江市	九日田 SK08	54(98.2%)	1(1.8%)	0	九日田
島根県松江市	九日田貯蔵穴群(SK08以外)	29(70.7%)	10(24.4%)	2(4.9%)	九日田～中津Ⅱ併
島根県瑞穂町	郷路橋Ｃ区黒褐色土下面遺構群	14(93.3%)	1(6.7%)	0	中津～福田 K2古
島根県瑞穂町	郷路橋Ｃ区包含層	71(97.3%)	2(2.7%)	0	中津～福田 K2古
広島県東城町	帝釈寄倉岩陰1次調査区第6層	40(90.9%)	4(9.1%)	0	北白川Ｃ併～中津主
広島県東城町	帝釈名越岩陰第7層	30(85.7%)	5(14.3%)	0	中津主
岡山県倉敷市	矢部奥田貝層	42(100%)	0	0	里木Ⅱ・Ⅲ～矢部奥田
岡山県総社市	日羽建行田包含層	32(86.5%)	5(13.5%)	0	中津Ⅰ古
岡山県総社市	窪木斜面堆積1	59(75.6%)	19(24.4%)	0	中津主
徳島県三好町	大柿(光下新町)Ａ－1区第13包～13面	45(90.0%)	5(10.0%)	0	中期終末期
徳島県徳島市	矢野3区 SB6006	28(93.3%)	2(6.7%)	0	中津Ⅰ古主
徳島県徳島市	矢野2区6層	10(83.3%)	1(8.3%)	1(8.3%)	中津Ⅰ古主
徳島県徳島市	矢野3区 SB6003	66(97.1%)	2(2.9%)	0	中津Ⅰ古～新主
徳島県徳島市	矢野3区5層	47(95.9%)	2(4.1%)	0	中津Ⅰ古～新主
徳島県徳島市	矢野3区6面直上	84(97.7%)	2(2.3%)	0	中津Ⅰ古～新主
徳島県徳島市	矢野4区4層	26(89.7%)	2(6.9%)	1(3.4%)	中津Ⅰ古～新主
高知県南国市	奥谷南Ⅲ区ＪⅠ～Ⅲ包含層	28(90.3%)	3(9.7%)	0	北白川Ｃ併～中津
愛媛県波方町	江口Ⅲ区2層	148(94.9%)	8(5.1%)	0	北白川Ｃ併～中津Ⅰ

第４表　西日本縄文中期末～後期初頭器種組成一覧表２（参考）

所在地	遺跡・地点	深鉢・鉢	浅 鉢	壺 形	時 期
愛媛県波方町	江口Ａトレンチ5下層	359(88.2%)	48(11.8%)	0	中津主
福岡県福岡市	野多目拈渡4次1号流路下層	33(89.2%)	4(10.8%)	0	阿高
福岡県二丈町	矢風ピット群十包含層	109(100%)	0	0	阿高
福岡県北九州市	浜田Ｍ区Ｄ－19土坑下層	59(96.7%)	2(3.3%)	0	北白川Ｃ併～中津Ⅰ併主
福岡県北九州市	浜田Ｍ区Ｄ－19土坑上層	51(96.2%)	2(3.8%)	0	中津併
福岡県北九州市	脇田丸山1号土坑	48(80.0%)	10(16.7%)	2(3.3%)	中津併
福岡県北九州市	脇田丸山2号土坑	28(90.3%)	3(9.7%)	0	中津併
福岡県北九州市	脇田丸山4号土坑	29(93.5%)	1(3.2%)	1(3.2%)	中津併
福岡県北九州市	脇田丸山10号土坑	30(93.4%)	2(6.3%)	0	中津併
福岡県鞍手町	新延貝塚2次区土坑群	37(90.2%)	4(9.8%)	0	中津併
福岡県福岡市	桑原飛櫛貝層	79(91.9%)	6(7.0%)	1(1.2%)	中津併
佐賀県鳥栖市	平原2区下層	53(94.6%)	3(5.4%)	0	並木～中尾田Ⅲ類
佐賀県唐津市	徳蔵谷1992区Ⅶ～Ｘ層	59(98.3%)	1(1.7%)	0	阿高
佐賀県佐賀市	来迎寺包含層	59(98.3%)	1(1.7%)	0	阿高～中津併
佐賀県西有田町	坂の下1～3次9層	244(98.8%)	3(1.2%)	0	坂の下
長崎県福江市	白浜貝塚包含層	15(100%)	0	0	並木～阿高
長崎県豊玉町	ヌカシ第Ⅳ層	10(66.7%)	0	5(33.3%)	阿高主
長崎県豊玉町	ヌカシ第Ⅲ層	20(100%)	0	0	阿高主
長崎県豊玉町	ヌカシ第Ⅱ層下部	8(88.9%)	0	1(11.1%)	中津併主
長崎県郷ノ浦町	名切Ｂ－20・21Gri5層	15(100%)	0	0	阿高～坂の下
長崎県多良見町	伊木力Ⅱ次第3包含層	47(95.9%)	2(4.1%)	0	坂の下
長崎県長崎市	深堀Ｂ地区Ⅵ層	22(64.7%)	12(35.3%)	0	阿高～出水
長崎県小値賀町	殿崎第二次調査区	139(100%)	0	0	阿高～出水主
長崎県波佐見町	山角 S47試掘区2層	28(100%)	0	0	阿高～出水
長崎県岐宿町	鰐川貝塚暗褐色粘質土層	18(100%)	0	0	坂の下～出水
宮崎県えびの市	上田代ＸＶ区Ⅳb 層	146(96.7%)	5(3.3%)	0	阿高
宮崎県えびの市	上田代ＸⅡ～ＸＶ区Ⅳa 層	338(99.7%)	1(0.3%)	0	阿高～出水主
熊本県城南町	黒橋貝塚Ｖ層	9(75.0%)	3(25.0%)	0	並木～阿高
熊本県城南町	黒橋貝塚土壙群	86(91.5%)	7(7.4%)	1(1.1%)	阿高
熊本県城南町	黒橋貝塚Ⅳ層	55(82.1%)	10(14.9%)	2(3.0%)	阿高
熊本県城南町	黒橋貝塚Ⅲ層	110(85.9%)	15(11.7%)	3(2.3%)	阿高～出水主
熊本県城南町	黒橋貝塚1975年度県調査区東貝塚地点	122(99.2%)	1(0.8%)	0	西和田～出水主
鹿児島県高尾野町	江内貝塚3Tr 下層	24(100%)	0	0	春日～阿高
鹿児島県高尾野町	江内貝塚3Tr 上層	107(100%)	0	0	春日～南福寺
鹿児島県出水市	出水貝塚1996～1998市教委区22Tr	29(96.7%)	1(3.3%)	0	阿高～南福寺主
鹿児島県出水市	出水貝塚1996～1998市教委区23Tr	82(94.3%)	5(5.7%)	0	阿高～出水
鹿児島県出水市	出水貝塚1996～1998市教委区17Tr	130(95.6%)	3(2.2%)	3(2.2%)	阿高～出水
鹿児島県出水市	出水貝塚1996～1998市教委区18Tr	44(91.7%)	3(6.2%)	1(2.1%)	南福寺～出水主
鹿児島県姶良町	南宮島第Ⅲ層上層	63(100%)	0	0	春日～岩崎上層
鹿児島県横川町	中尾田Ⅲa 層	202(99.5%)	1(0.5%)	0	春日～出水
鹿児島県末吉町	宮之迫Ⅲ層主	599(99.3%)	4(0.7%)	0	阿高～出水
鹿児島県高尾野町	柿内包含層	254(84.7%)	36(12.0%)	10(3.3%)	阿高～南福寺主
鹿児島県山川町	成川16～18層	340(99.1%)	2(0.6%)	1(0.3%)	春日～指宿
釜山広域市	東三洞貝塚第3層	2255(86.0%)	91(3.5%)	277(10.6%)	新石器中期
蔚山広域市	新岩里Ａ区	45(88.2%)	4(7.8%)	2(3.9%)	水佳里Ⅰ主
慶尚南道金海市	水佳里貝塚Ⅵ～Ⅴ層	36(65.4%)	15(27.3%)	4(7.3%)	水佳里Ⅰ
慶尚南道金海市	水佳里貝塚Ⅳ～Ⅲ層	32(52.5%)	25(41.0%)	4(6.5%)	水佳里Ⅱ

※算定は口縁部片を対象とした個体識別法に基づく。

展開する波状文等のモチーフについては明らかに在地里木Ⅱ・Ⅲ式からの系譜を引くものであり、頸部以下を縦位展開させる近畿以東とは根本的な文様配分の相違が指摘されるのである。以前筆者が提起した沈線文系統１・４類（24・54・98・99など；幸泉2001）とこれらは類縁する意匠を描きつつ、しかし磨消縄文という東方からの文化伝統を選択的に受容しており、以後、四国における磨消縄文系統という精製土器成立の直接的基盤を担った文様系統として、重要な位置を占めるようになる（幸泉2004b）。他方、児島湾沿岸を中心とする矢部奥田類型の典型は本遺跡では非常に限られており（39・92など）、頸部以下を無文とする特徴も加味するならば、矢部奥田式の分布はかなり限定された範囲となるものと想定されよう。これに対して、四国では里木Ⅱ・Ⅲ類型の文様意匠を継承しつつ北白川Ｃ類型の伝統を比較的寛容に受容するという、穏やかな交渉関係がこうした文様系統組成からも看取され、相対的に強力な個性を帯びた児島湾沿岸地域よりも円滑、かつ直接的な文化伝達網が形成されていた可能性が考えられる。大柿遺跡において浅鉢、壺形土器が既に安定的器種として一定量存在していた背景には、そうした四国地方における伝播網の発達や生業形態の変化が関与するのかもしれない。

つぎに、今回の報告では特に土器の色調、胎土について可能な限りの分類を行い、その観察所見をやや繁雑すぎるほどに述べてきた。さらに岡山理科大の白石純氏にも蛍光Ｘ線分析、胎土観察をお願いし、より専門的視座から御検証頂いた。分析結果からは10数種の細分が可能となった。うち花崗岩や角閃石、花崗閃緑岩を含む例は明らかに遠隔地からの搬入、すなわち瀬戸内東部を故地とすることが予想できたが、その他については比較資料を欠くため、胎土のみからのアプローチでは現状において言及が困難といえる。ただ今回の観察を通じ、一集落内部の土器が予想以上に様々な地域から持ち込まれていることが明らかになったことは、望外な成果である。先述の文様系統分類と照合させるならば、本遺跡の場合必ずしも外部からの搬入土器が北白川Ｃ類型や矢部奥田類型など特定文様系統に結び付くものではなく、無文系統も含め各系統万遍なく複数種類の胎土から構成されていることから、文様系統が特定の交易活動を示唆する可能性は低いことが窺われた。こうした社会構造に関する復元作業については今後更なる資料の積み重ねが必要であろう。

土器の地域的差異、搬入についての実体を究明するうえで製作技法の比較検討もまた重要な視点となる。筆者はこれまでに深鉢底部を素材として土器製作技術の小地域差に関する検討を進めてきた（幸泉2002a、2002b、2003、2004）。ここでは第５表として大柿を中心とする東瀬戸内周縁の底部個体数調査結果を示した。先述のごとく大柿遺跡では高台底が圧倒的主体を占める。組成比は79.2％にのぼるが、うち外縁隆帯が外側に張り、隆帯内側を弧状に整形する例が本遺跡の典型といえる。底径は９～10cmと、12～13cmの２箇所にピークが認められた。さて、こうした特徴を周辺地域と比較するならば、まず吉野川下流域の徳島市矢野遺跡（藤川編2003）、中流域の貞光前田遺跡（泊強編2001）では平底が圧倒的主体を占め、明らかに様相の違いを窺わせる。近年、遺跡の存在が確認された高知県南国市奥谷南遺跡でも、該期では中期伝統を継承した平底が主体を占めている（松村信博編1999）。中期後葉以降、高台底が急増するのは、周辺では瀬戸内中西部沿岸のみであり、代表例として岡山県倉敷市中津貝塚（水原岩太郎1920、佐藤寛介2004）、総社市日羽建行田遺跡（間壁忠彦・間壁葭子1967）、広島県福山市洗谷貝塚（小都隆1976）等が挙げられる。すなわち徳島県西北部に位置する本遺跡は、当時の日常活動域として瀬戸内中西部側との交渉がより盛んであったとみるべきであろう。ただし備讃瀬戸周辺では大柿遺跡のような外縁の明瞭に張る高台底は稀有であり、また既に指摘したように本遺跡における矢部奥田類型の出土は極僅かであったことから、その主要交渉圏は燧灘南岸、現在の愛媛県東予地方周辺部に求められ

第５表　深鉢底部形態組成の比較（参考）

所在地	遺跡名・時期		形態 平底	高台底	凹底		底径 計測不能	5cm以下	～6cm	～7cm	～8cm	～9cm	～10cm	～11cm	～12cm	～13cm	～14cm	～15cm	～16cm	総数
徳島県三好町	**大柿（光下新町）第13包～13面**	点	**4**	**19**	**1**	点	**1**		**1**	**1**	**1**	**3**	**7**		**3**	**5**		**2**		**24**
	（中期終末期）	割	***16.7%***	***79.2%***	***4.2%***	割	**—**		***4.3%***	***4.3%***	***4.3%***	***13.0%***	***30.4%***		***13.0%***	***21.7%***		***8.7%***		
徳島県徳島市	矢野3区SB6006	点	11	2		点						2	1	3	5	2				13
	（中津Ⅰ古主）	割	*84.6%*	*15.4%*		割						*15.4%*	*7.7%*	*23.1%*	*38.5%*	*15.4%*				
徳島県徳島市	矢野2区6層	点	5	2		点				1				2	3	1				7
	（中津Ⅰ古主）	割	*71.4%*	*28.6%*		割				*14.3%*				*28.6%*	*42.9%*	*14.3%*				
徳島県貞光町	貞光前田ⅠA・SB2001	点	8		1	点					4	2	1	1	1					9
	（中津～津雲A）	割	*88.9%*		*11.1%*	割					*44.4%*	*22.2%*	*11.1%*	*11.1%*	*11.1%*					
兵庫県神戸市	篠原A・G5住居址	点	8	1	17	点	6		2	3	7	5		2	1					26
	（篠原A）	割	*30.8%*	*3.8%*	*65.4%*	割	—		*10.0%*	*15.0%*	*35.0%*	*25.0%*		*10.0%*	*5.0%*					
兵庫県神戸市	篠原A土坑3・5	点	5	1	4	点	5				1	2		2						10
	（篠原A）	割	*50.0%*	*10.0%*	*40.0%*	割	—				*20.0%*	*40.0%*		*40.0%*						
兵庫県姫路市	丁・柳ヶ瀬A・B地区	点	3	1	3	点				2	1	2			1				1	7
	（北白川C主）	割	*42.9%*	*14.3%*	*42.9%*	割				*28.6%*	*14.3%*	*28.6%*			*14.3%*				*14.3%*	
兵庫県龍野市	片吹SB08	点	13			点	2			2		4	1	4						13
	（北白川C）	割	*100%*			割	—			*18.2%*		*36.4%*	*9.1%*	*36.4%*						
兵庫県龍野市	片吹SB07	点	4		2	点	1				1	1		2	1					6
	（北白川C～中津Ⅰ古）	割	*66.7%*		*33.3%*	割	—				*20.0%*	*20.0%*		*40.0%*	*20.0%*					
大阪府堺市	小阪縄文河川7・8	点	4		3	点							1	2	2	2				7
	（北白川C）	割	*57.1%*		*42.9%*	割							*14.3%*	*28.6%*	*28.6%*	*28.6%*				
大阪府和泉市	池田寺土坑群	点	7	1	5	点				1	3	4	1	2	1	1				13
	（中津）	割	*53.8%*	*7.7%*	*38.5%*	割				*7.7%*	*23.1%*	*30.8%*	*7.7%*	*15.4%*	*7.7%*	*7.7%*				
高知県南国市	奥谷南Ⅲ区JⅠ～Ⅲ層	点	23	4	3	点			1	4	1	7	7	3	4	2		1		30
	（北白川C併～中津Ⅱ）	割	*76.7%*	*13.3%*	*10.0%*	割			*3.3%*	*13.3%*	*3.3%*	*23.3%*	*23.3%*	*10.0%*		*6.7%*		*3.3%*		
岡山県総社市	日羽建行田包含層	点	2	9	4	点		1	1	1		2	1		3	4	1		1	15
	（中津Ⅰ古）	割	*13.3%*	*60.0%*	*26.7%*	割		*6.7%*	*6.7%*	*6.7%*		*13.3%*	*6.7%*		*20.0%*		*6.7%*		*6.7%*	
広島県福山市	洗谷貝塚3区2層	点	1	18	4	点	5	1		2	1	6	5	2	1					23
	（中津主）	割	*4.3%*	*78.3%*	*17.4%*	割	—	*5.6%*		*11.1%*	*5.6%*	*33.3%*	*27.8%*	*11.1%*	*5.6%*					
愛媛県今治市	江口Ⅲ区2層	点	8	8	5	点	15		2		2		1	1						21
	（北白川C併～中津Ⅰ古）	割	*38.1%*	*38.1%*	*23.8%*	割	—		*33.3%*		*33.3%*		*16.7%*	*16.7%*						
愛媛県今治市	江口Aトレンチ5下層	点	21	37	15	点	47		2	2	1	1	11	6	2	1				73
	（中津主）	割	*28.8%*	*50.7%*	*20.5%*	割	—		*7.7%*	*7.7%*	*3.8%*	*3.8%*	*42.3%*	*23.1%*	*7.7%*	*3.8%*				

※アミカケ部分は組成比3割以上を示す。

る可能性が残されている。

さて、後頁第Ⅴ章で述べられている白石氏の成果を一部加味させて頂くならば、高台底のうち外縁の明瞭に張る底部は白石分類Ａグループ（JⅠ・Ⅱ類）に最も多く、粒径３㎜以下の結晶片岩、砂岩系河原小円礫を特徴的に含む土器こそが、地元周辺における製作を示唆することになる。また量的に最も多い、石英・長石・雲母・砂岩で構成される「にぶい黄褐系」土器についても同等に高台底が多いことから、地元周辺で製作された可能性が強い。これらの差異は吉野川を介して近接する南岸（結晶片岩三波川変成帯）と北岸（領家和泉砂岩帯）程度の集落差を表すものと推察される。いっぽう、量的に少ない平底に関しては徳島市矢野遺跡等、徳島平野河口域の南岸地域において普遍的な結晶片岩を含む例が稀であることから、鳴門海峡周辺、大阪湾沿岸を含む東瀬戸内からの長距離移入を想定せざるを得ないだろう。

以上、今回の調査成果をもとに四国の縄文中期末土器について若干の検討を加えてきた。胎土、色調、底部形態に着目した検討結果からは従来の予想を遙かに超えた多地域間との頻繁な交渉関係が実証できたが、この事実は同時に、中期末の四国地方が特定地域からの大規模な集団移住や文化享受によって説明されるべきでないことを示している。このことは小地域的主体性をもった製作伝統、在地的な文様系統の継承からも充分に窺い知ることができるだろう。近年、重層する横帯や波状文帯、横長Ｊ字文風の文様のみを主文に文様を構成する中期末、後期初頭土器の出土事例が着実に増加しているが、過去注視された星田式等（岡田茂弘1965、泉1982、1985）、西日本における中津式土器成立の背景は東方からの単なる伝播論として済まされるべきではなく、小地域由来の伝承要素を、新たな分類概念等も加味しつつ広域的に再評価される姿勢が今後も必要となるだろう。　（幸泉満夫）

註

（1）．近年の調査事例として、池田町山田遺跡（Ⅰ）（小泉1995、原1997）、美馬町荒川遺跡（佐野1997、1998）、薬師遺跡（下窪編2001）、三加茂町稲持遺跡（湯浅編1991）、貞光町貞光前田遺跡（泊編2001）が挙げられるほか、過去の調査として池田町ウエノ遺跡（岡本1951）、三加茂町加茂谷川岩陰遺跡群（松藤和人ほか編1999）が著名である。

（2）．澤下孝信氏は瀬戸内西部における中期末段階の資料として福田C式の並立を主張しているが、図示を含め、福田C式の具体的検討が成されていない点において課題を残している（澤下1991、1997）。福田C式は標式資料の提示が充分でないため、そもそも実体の不明瞭な土器といえる。戦後初の講座本、『日本考古学講座』において鎌木義昌・木村幹夫の両氏は「条痕のみの土器が多く、文様あるものは比較的幅広い沈線が胴部より上の器体が外方に開いた部分にほどこされている。縄文はほとんど見られない。底部は凹底である。」として福田C式を設定した。しかし標式となる資料の少なさから、具体性に欠く上記表現のまま実体検証は保留されている（鎌木・木村1955）。1965年の『日本の考古学』で鎌木・高橋護両氏は、「福田C式は類似の遺跡分布もいまだあきらかにされておらず、ここでは縄文のない、沈線文土器とのみしるしておく。」としたため、以後さらなる混乱を生じている（鎌木・高橋1965）。なお、間壁忠彦・潮見浩の両氏は帝釈寄倉岩陰遺跡第6層出土の縄文地土器を、層位的にみて福田C式より後出で、京都市北白川資料と関連する中期最終末の土器であると、この当時既に予察していた点は留意されよう（間壁・潮見1965）。1971年、倉敷考古館による里木貝塚の調査成果が纏められたが、ここでは層位的な出土事例から船元Ⅲ式に前後する時期であると認識され（船元Ⅲ式E類；間壁忠彦・間壁葭子1971）、以後、泉氏もこの説に賛同しているが（泉1979）、1956年の日本考古学講座に図示された船元Ⅲ式E類以外に、1956年の設定当初は里木Ⅲ式が含まれていたのではないか、とする考え（鎌木1986、泉1988、冨井1999）、あるいは里木Ⅲ式の一部であるという見解（高橋1981）、さらには瀬戸内中部の里木Ⅱ・Ⅲ式と分布を異にして並立するという考えも依然存続しており（田中1981、澤下1991、1997）、調査成果の蓄積が進む今日においてなお、見解の統一には至っていない。

そうした混乱の要因は、福田C式の標式資料が極めて少なく曖昧である点、そして瀬戸内地方の中期後葉～後期初頭までの変遷が依然不明瞭である点に集約される。ここでは福田C式という実体不明型式を一端棚上げし、該期土器編年の再構築を現時点で目指すべきではないかと考える。

（3）．無文深鉢・鉢形については、瀬戸内、山陰、九州地方北部ではこの中期末以降に一器種として安定した存在を示すようになるが、既にこの時期、同時に地域差も顕著である。九州北部や芸予諸島以西の瀬戸内西部一帯では有文土器の器形を模倣した「有文土器模倣形」が主流を占めるのに対し、山陰、瀬戸内中東部では出現当初より有文土器とは異なった器形を採っている。なお矢野健一氏は後期前葉の福田K2式併行期以降において、有文・無文間の作分けが促進した、と指摘している（矢野1990、1994b）。

（4）．第3～4表参照。

（5）．高知県土佐山田町林田シタノヂ遺跡土坑P8の土器と出土状況が類似する可能性がある（山崎正明編1993）。

（6）．中津式を三段階区分した玉田芳英氏は、磨消縄文手法の全器種完成を中津Ⅰ式新段階に求め、Ⅰ式古段階については資料的制約もあって、口～胴部文様帯の一体化を指標としつつも、尚も中期的要素が残る段階という曖昧な表現で示されている（玉田1989、1990）。しかし本遺跡出土の3・34・43などのように口～胴部文様帯の一体化、あるいは分帯そのものの概念を持たない磨消縄文未完成の土器を中津Ⅰ式古段階と見做すわけにもいかないだろう。このことは本遺跡伴出の北白川C類型、矢部奥田類型土器の存在が傍証している。いっぽう昨年には岡山県立博物館保管の中津貝塚資料について、佐藤寛介氏が資料公開を果たしており、従来知られてきた水原岩太郎氏の報告資料以外にも中期末、および後期前葉の福田K2式土器が若干量混在していることが明らかにされた（水原岩太郎1920、佐藤寛介2004）。2004年6月には中四国縄文研究会大会において「中津式の成立と展開」をテーマとする活発な議論が交わされたが、設定当時に比べ西日本各地で資料が飛躍的に増加した今日、既存型式に拘らず、後期初頭と中期最終末期を区分する指標の再定義が必要であることは言うまでもない。

（7）．類例は大阪府小阪遺跡、兵庫県篠原A遺跡、片吹遺跡、丁・柳ヶ瀬遺跡、岡山県矢部奥田遺跡、香川県大浦浜遺跡、南草木遺跡、愛媛県満越遺跡、岩谷遺跡、高知県松ノ木遺跡、徳島県桧寺前谷川遺跡等にみえる。時期が先行する東海西部の神明式のなかですでに刺突文の充填手法が窺えることから、この意匠は北白川C式の系譜を受けつつ中期末の瀬戸内地方で発達したと判断される。

（8）．縄文中期末～後期初頭段階、九州地方を中心に大振りで口唇に対して直角方向に押引かれた刻目、ないし円形刺突文を付す無文系深鉢が分布する。瀬戸内地方における該期の組成比は1～2割程度であるが、それでも近畿・中部・東海・山陰地方と比較すればかなりの高比率である。いっぽう、九州地方では組成比5割以上の高比率を占める遺跡が少なくない。従ってその起源が九州阿高系土器にあることは疑いないだろう。九州では同等の刻目を付す阿高系土器が後期前葉にまで継承されている。無文系1類型のうち大振りの直刻、ないし円形刺突文を付す例の淵源は、中期末における東方からのプロト磨消縄文系～磨消縄文系伝播に起因する阿高系土器の無文化によるものであって、東方起源の製作系統ではないのである。この中期由来在地系土器群の素文、無文化過程については以前、筆者が検討を行っている（幸泉2001）。つづく後期前葉以降では、縄文条線の傾斜を擬した右斜位の細い刻目が次第に盛行する。

参考文献

合田幸美1992「北白川C式土器について ― 小阪遺跡出土土器を中心として ―」『小阪遺跡』
大阪府教育委員会・大阪府文化財センター

泉　拓良1979「西日本の縄文土器」『世界陶磁全集』1、小学館

泉　拓良1982「西日本縄文土器再考 ― 近畿地方縄文中期後半を中心に ―」『考古学論考』
小林行雄博士古稀記念論集刊行委員会

泉　拓良1985「中期末縄文土器の分析」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ ― 北白川追分町縄文遺跡の調査 ―』
京都大学埋蔵文化財研究センター

泉　拓良1988「咲畑・醍醐式土器様式」『縄文土器大観』3、小学館

泉　拓良1990「関西地方の中期最終末土器群」『特集称名寺式土器に関する交流研究会の記録』
横浜市埋蔵文化財センター調査研究集録第7冊

犬飼徹夫ほか1979『岩谷遺跡』岩谷遺跡発掘調査団

今村啓爾1977a「称名寺式土器の研究（上）」『考古學雑誌』第63巻第1号、日本考古学会

今村啓爾1977b「称名寺式土器の研究（下）」『考古學雑誌』第63巻第2号、日本考古学会

岡田茂弘1965「縄文文化の発展と地域性　近畿」『日本の考古学』Ⅱ、河出書房

岡本健児1951「徳島縣池田町出土の縄文式遺物」『貝塚』(38)、物質文化研究会

小都　隆1976『洗谷貝塚』福山市教育委員会・洗谷貝塚発掘調査団

鎌木義昌・木村幹夫1955「中国」『日本考古学講座』3、河出書房

鎌木義昌・高橋　護1965「縄文文化の発展と地域性　瀬戸内」『日本の考古学』Ⅱ、河出書房

鎌木義昌1986「福田古城貝塚」『岡山県史』第18巻、岡山県史編纂委員会・山陽新聞社

亀山行雄2004「岡山県長縄手遺跡の発掘調査」『中津式の成立と展開』中四国縄文研究会

栗林誠治編2001『大柿遺跡』Ⅰ、徳島県教育委員会・徳島県埋蔵文化財センター

小泉信司1995「山田遺跡（Ⅰ）」『埋蔵文化財センター年報』Vol.6、徳島県埋蔵文化財センター

幸泉満夫2001「西日本縄文後期土器組成論 ― 瀬戸内地方における沈線文系土器に関する研究 ―」『考古学研究』
第48巻第3号、考古学研究会

幸泉満夫2002a「縄文時代後期土器の非視覚的領域」『論集　徳島の考古学』徳島考古学論集刊行会

幸泉満夫2002b「土器底部形態にみる縄文時代後期社会の小地域性 ― 四国西北部地域とその周縁 ―」
『四国とその周辺の考古学』犬飼徹夫先生古稀記念論集刊行会

幸泉満夫2003「土器底部から見た縄文社会の地域性」『瀬戸内海考古学研究』
十周年記念大会、瀬戸内海考古学研究会

幸泉満夫2004a「山陰地方における縄文時代後期社会の小地域性」『考古論集 — 河瀬正利先生退官記念論集 —』
河瀬正利先生退官記念事業会
幸泉満夫2004b「西部瀬戸内」『中津式の成立と展開』中四国縄文研究会
幸泉満夫2004c「土器から見た山地域と沿岸域」『日本考古学協会2004年度広島大会研究発表資料集』
日本考古学協会広島大会実行委員会
幸泉満夫・山崎文子2004「西南四国の縄文文化」『西南四国の歴史と古代ロマンの里構想の今』
愛媛大学法文学部考古学研究室・西予市教育委員会
小濱　学1997「結語」『新徳寺遺跡』三重県埋蔵文化財センター
坂　靖編2000『南郷遺跡群』Ⅳ、奈良県立橿原考古学研究所
佐藤寛介2004「倉敷市中津貝塚出土の縄文土器」『岡山県立博物館紀要』23・24、岡山県立博物館
佐野耕市1997「荒川遺跡」『埋蔵文化財センター年報』Vol.8、徳島県埋蔵文化財センター
佐野耕市1998「荒川遺跡」『埋蔵文化財センター年報』Vol.9、徳島県埋蔵文化財センター
澤下孝信1991「土器様式伝播考～西日本の縄文時代後期磨消縄文土器を中心として～」『古文化談叢』
第25集、九州古文化研究会
澤下孝信1997「縄文中期後半の西日本における様相」『研究紀要』第１号、下関市立考古博物館
下窪光俊2001「薬師遺跡」『薬師遺跡・坊僧遺跡』徳島県教育委員会・徳島県埋蔵文化財センター
島田豊彰2002「大柿遺跡」『埋蔵文化財センター年報』Vol.13、徳島県埋蔵文化財センター
鈴木徳雄1986「称名寺式土器の文様構成と変遷」『土曜考古学会１月例会資料』土曜考古学会
鈴木徳雄1990「称名寺式土器」『特集称名寺式土器に関する交流研究会の記録』
横浜市埋蔵文化財センター調査研究集録第７冊
鈴木徳雄1993「称名寺式土器の変化と中津式 — 型式間交渉の一過程 —」『縄文時代』４、縄文時代文化研究会
高橋　護1981「近畿・中国・四国地方」『縄文土器大成』２、講談社
高畑知功編1993『山陽自動車道建設に伴う発掘調査』６、岡山県教育委員会
田中良之1981「阿高式土器」『縄文文化の研究』第４巻、雄山閣出版
玉田芳英1989「中津・福田ＫⅡ式土器様式」『縄文土器大観』４、小学館
玉田芳英1990「中津式土器」『特集称名寺式土器に関する交流研究会の記録』
横浜市埋蔵文化財センター調査研究集録第７冊
中四国縄文研究会実行委員会編2004『中津式の成立と展開 — 第15回中四国縄文研究会大会資料 —』
中四国縄文研究会
泊　強編2001『貞光前田遺跡』徳島県教育委員会・徳島県埋蔵文化財センター
冨井　眞1999「近畿・中国・四国地方　中期」『縄文時代』第10号、縄文時代文化研究会
中越利夫1993「縄文時代後期の瀬戸内 — 打製石器を中心として —」『考古論集 — 潮見浩先生退官記念論文集 —』
潮見浩先生退官記念事業会
原　芳伸1997「山田遺跡（Ⅰ）」『埋蔵文化財センター年報』Vol.8、徳島県埋蔵文化財センター
藤川智之編・湯浅利彦ほか2003『矢野遺跡』（Ⅱ）、徳島県教育委員会・徳島県埋蔵文化財センター
穂積裕昌1992「縄文時代後期の壺形土器 — 中津・福田Ｋ２式土器に伴う双耳壺を中心に —」『考古学と生活文化』
同志社大学考古学シリーズ刊行会
間壁忠彦・潮見　浩1965「縄文文化の発展と地域性　山陰・中国山地」『日本の考古学』Ⅱ、河出書房
間壁忠彦・間壁葭子1971『里木貝塚』倉敷考古館
間壁忠彦・間壁葭子1967「岡山県昭和町日羽ケンギョウ田（建行田）遺跡」『倉敷考古館研究集報』
第３号、倉敷考古館
松藤和人ほか編1999『徳島県三好郡三加茂町所在加茂谷川岩陰遺跡群』同志社大学文学部文化学科
松村信博編1999「奥谷南遺跡Ⅰ～Ⅲ区調査のまとめ」『奥谷南遺跡』Ⅰ、高知県文化財団埋蔵文化財センター
水原岩太郎1920『縄紋式土器模様』洗心齋

宮本一夫編1990「文京遺跡第11次調査出土の縄文土器の検討」『文京遺跡第８・９・11次調査 ― 文京遺跡における縄文時代遺跡の調査 ―』
愛媛大学法文学部考古学研究室・愛媛大学埋蔵文化財調査室
柳浦俊一2003「山陰中部域における縄文時代後期土器の地域性 ― とくに「中津式」の小地域性について ―」『立命館大学考古学論集』Ⅲ－１、立命館大学考古学論集刊行会
矢野健一1994b「縄文後期における土器の器種構造の変化」『江口貝塚』Ⅱ、愛媛大学法文学部考古学研究室
矢野健一1990「縄文土器」『小路頃才ノ木遺跡発掘調査報告書』間宮町教育委員会
矢野健一1993「縄文時代中期後葉の瀬戸内地方」『江口貝塚』Ⅰ、愛媛大学法文学部考古学研究室
矢野健一1994a「北白川Ｃ式併行期の瀬戸内地方の土器」『古代吉備』第16集、古代吉備研究会
矢野健一1994b「縄文時代における土器の器種構成の変化」『江口貝塚』Ⅱ、愛媛大学法文学部考古学研究室
山崎正明編1993『林田シタノヂ遺跡』Ⅱ、土佐山田町教育委員会
湯浅利彦編1991『稲持遺跡　三三大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（図版編）』徳島県教育委員会
横田美香2003「縄文時代後期の石包丁状の石器」『津島岡大遺跡』12、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

第２節　縄文時代晩期～弥生時代（第12遺構面～第７遺構面）の調査と成果

(1)　地形の概要

第12遺構面は、A－１区（縄文中期末）と連続すると思われる遺構面である。A－２区で南西に向かって下がり、A－４区では検出できない。A－３・４区の調査区間、第12面の上、第３遺構面で南北に流れるSRが検出されている。第12遺構面では未検出だが、地形に影響を与えていると思われる。第11～７遺構面は、A－９～11区とB区で確認され、水田域を形成する。西側微高地の南側低湿地に位置する。第11遺構面の開墾時期は、弥生時代中期前半以前と思われるが、遺構出土遺物はB－１区のSD出土の流木と自然礫のみであり、詳細な時代は不明である。A区とB区の水田が同時期に開墾されたかどうかも不明である。11遺構面直下はA・B区ともに砂礫層である。A区ではSPとSKがそれぞれ１基ずつ、稲株と足跡が多数検出されている。畦畔がかろうじて判別できるが、水田の形態や規模、給水方法をつかめるほどではない。全体的には北から南に緩傾面を形成するが、A区では、10区はB区の水田は、その直下の砂礫層の影響を受けてわずかに起伏に富み、その地形を利用するように一辺４m前後の小区画水田が構築されている。それぞれの区画には水口・水尻が設けられ、その高低差から田落しで北から南の水田へ配水されていたと考えられる。B－１区の東側には、水田部分が終了し一段高く立ち上がる。この段差部分に沿うように南北方向の溝が検出されており、用水路も併せ持っていたものと思われる。

(2)　遺構および出土遺物の観察

①第12遺構面

土坑墓　ST12001（第32図）

A－３区、β－Ⅵ、K－13グリッドから検出された。SP12077と側溝で切られるが、平面形態は隅丸長方形、断面形態は不整形を呈する。長軸80cm（残存値）、短軸74cm、深さ22cmを測る。

出土遺物は縄文土器、弥生土器などであるが、図化できたのは、127・128の縄文土器小片２点のみである。127は口縁端部に沈線と刻目を施す。

柱穴　SP12077（第32図）

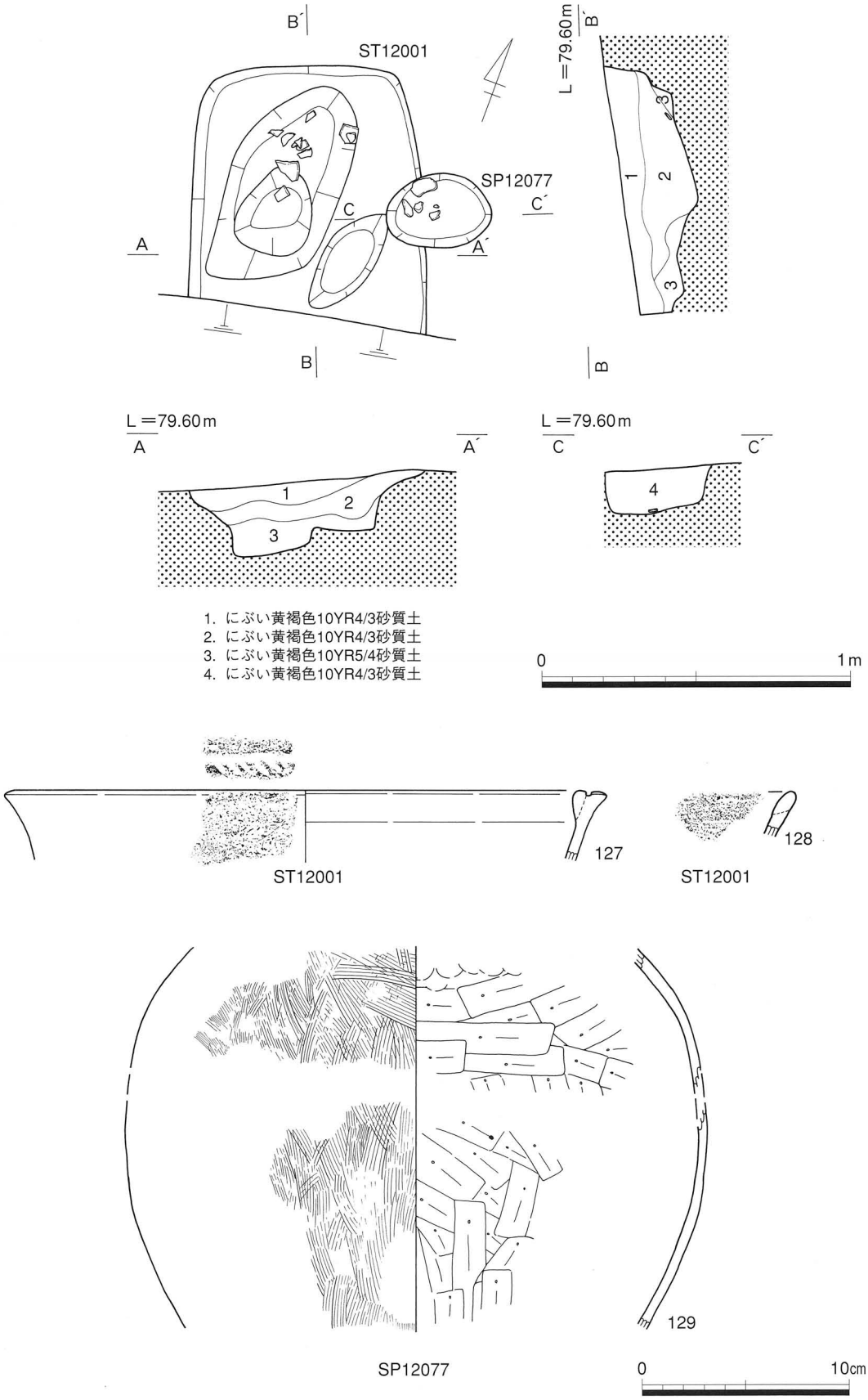
A－３区、β－Ⅵ、K－13グリッドから検出された。ST12001を切る。平面形態は楕円形、断面形態は逆台形を呈する。長軸35cm、短軸24cm、深さ13cmを測る。

129は弥生土器甕あるいは壺の体部である。球形に膨らみ外面はハケが縦方向に施される。

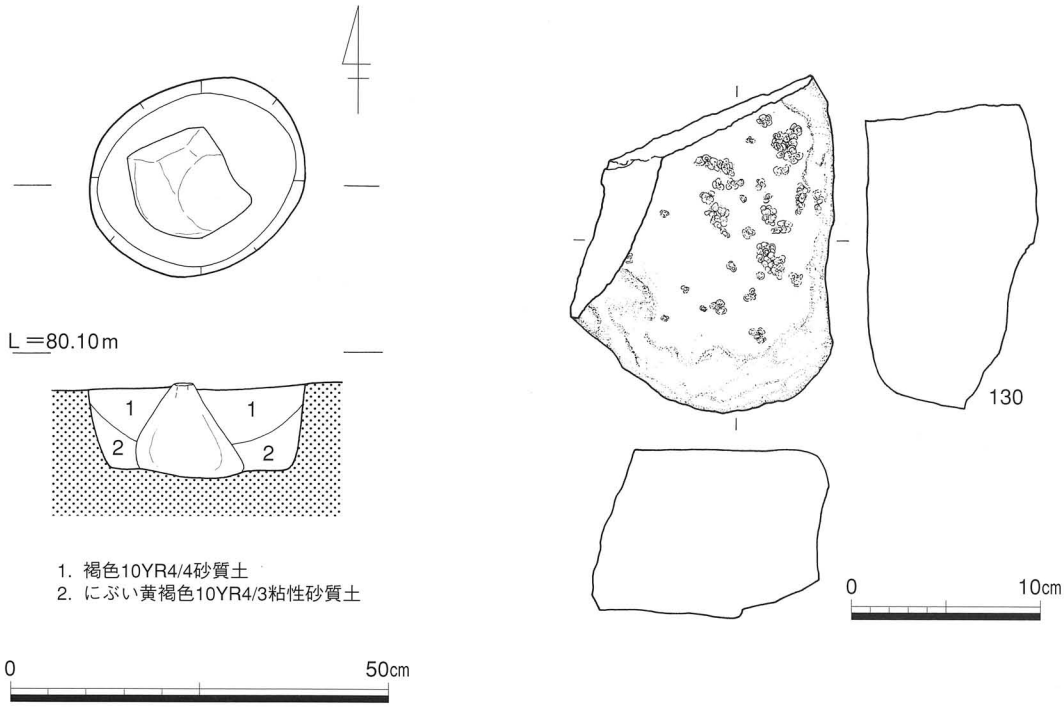
柱穴　SP12119（第33図）

A－３区、β－Ⅵ、M－12グリッドから検出された。平面形態は楕円形、断面形態は逆台形を呈する。長軸30cm、短軸24cm、深さ12cmを測る。

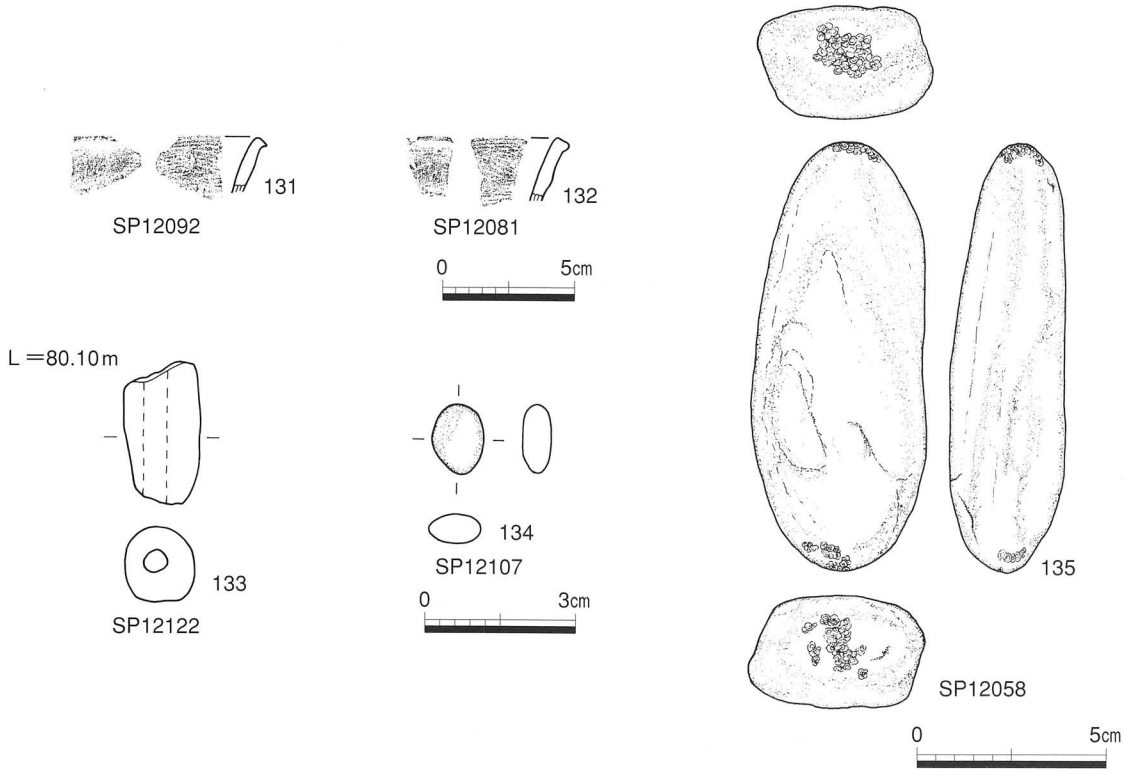
焼土、石器が出土している。図化したのは130の砂岩の石皿である。欠損しているが、表面には敲打痕が見られる。



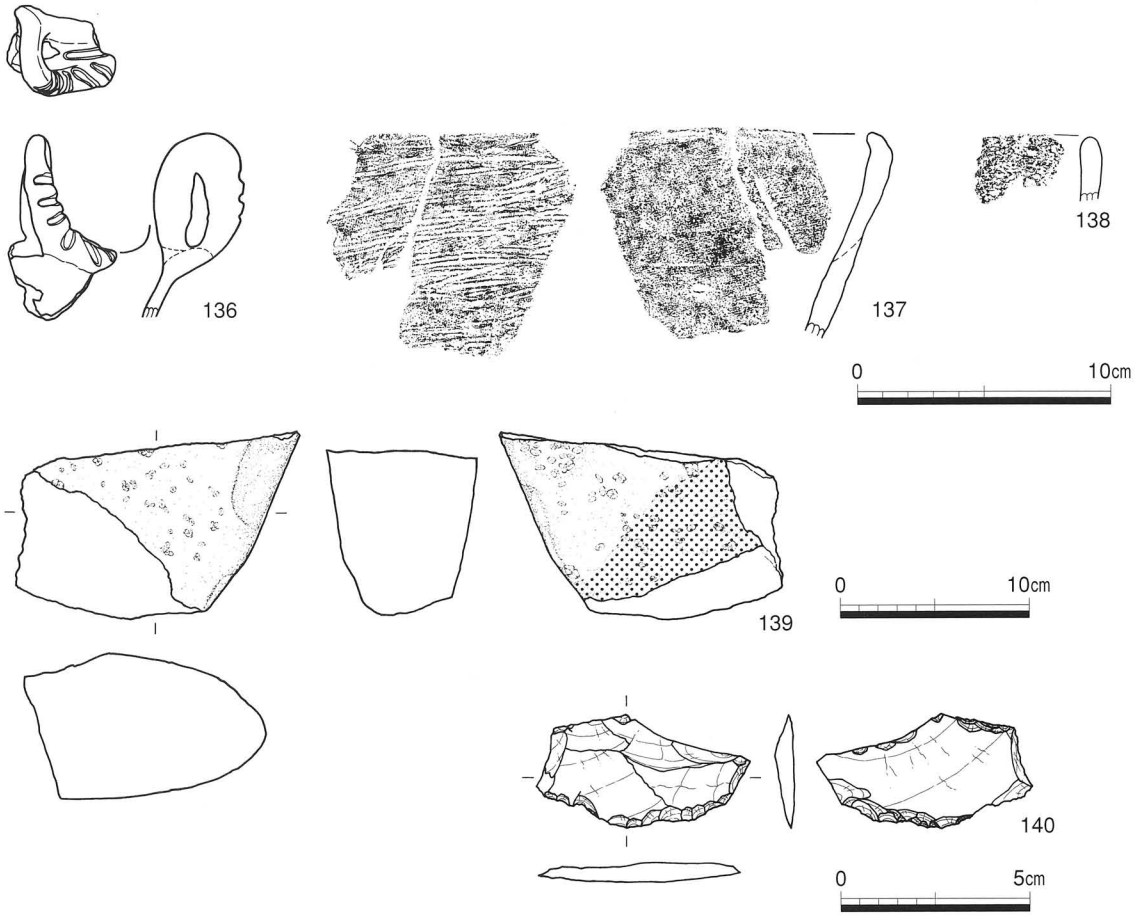
第32図　A－3区 ST12001・SP12077遺構・遺物実測図



第33図　A－3区 SP12119遺構・遺物実測図



第34図　A区第12遺構面 SP 出土遺物実測図



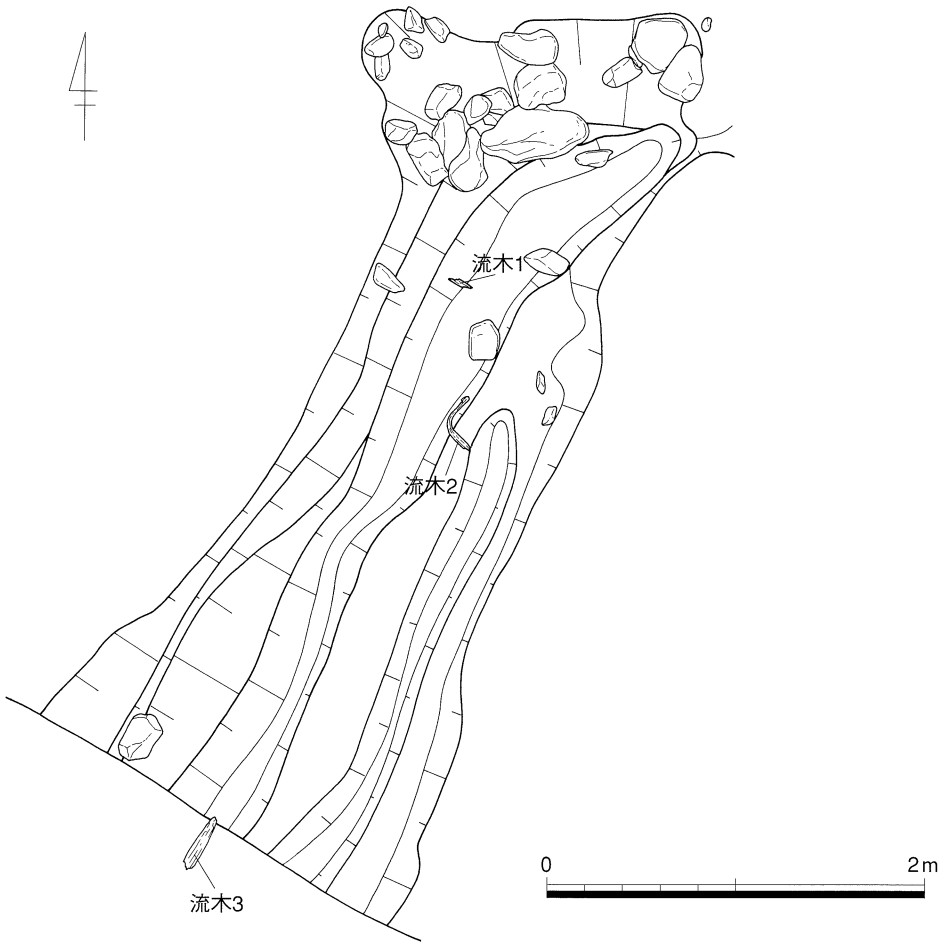
第35図　A区第12包含層出土遺物実測図

第12遺構面柱穴内出土遺物（第34図）

全てA－3区からの出土である。131はβ－Ⅵ、L－12グリッドで検出されたSP12092から出土した縄文土器の口縁部である。132はβ－Ⅵ、K－13グリッドで検出されたSP12081から出土した縄文土器の口縁部である。131と132は同一固体の可能性がある。133は、β－Ⅵ、M－11・12グリッドで検出されたSP12122から出土した土錘である。134は、β－Ⅵ、L・M－12グリッドで検出されたSP12107から出土した自然円礫である。碁石の可能性がある。135は、β－Ⅵ、L－12グリッドで検出されたSP12058から出土した結晶片岩の敲石である。両端に敲打痕が残されている。

第12包含層出土遺物（第35図）

136は縄文土器深鉢の口縁部である。頸部を強く外反させ口縁端部内面側を幅広く肥厚させる平縁上に高さ4.5cmを測るリング状把手を貼り付けている。時代は晩期前半である。137は縄文土器深鉢口縁部である。頸部から口縁にかけて直線的に外傾直口し口縁端部を内面側に短くつまみ出している。138は縄文土器深鉢口縁部である。ほぼ直口する口縁部は端部を丸くおさめる。139は砂岩の石皿である。敲打痕が表裏両面に見られる。140はサヌカイトのスクレイパーである。横長剥片を素材として、下側縁部に刃部の調整を施している。



第36図　B－1区 SD11001遺構実測図

②第11遺構面

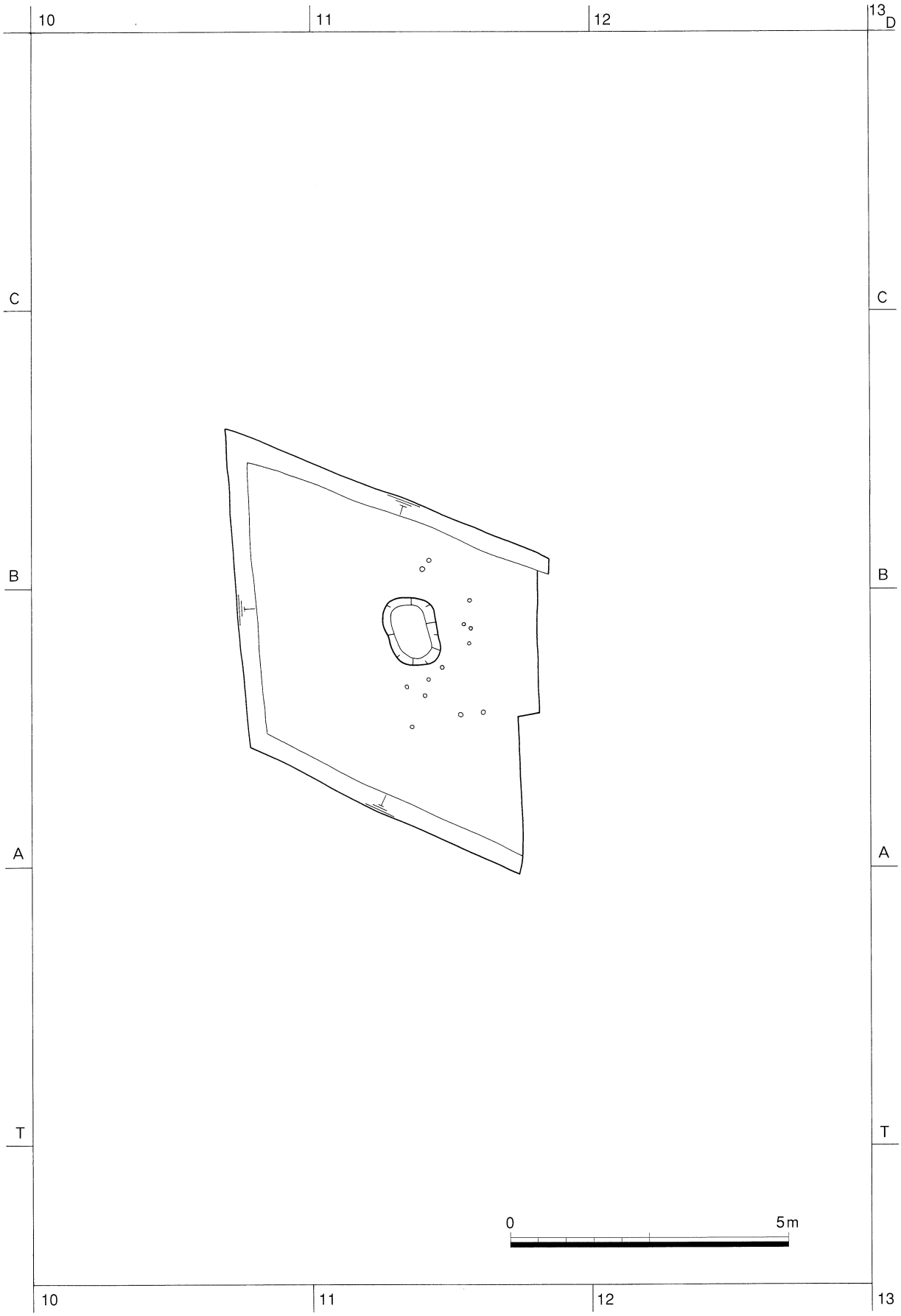
溝　SD11001（第36図）

B－1区、γ－Ⅲ・Ⅳ、F－20・1グリッドから検出された。この溝の西側には水田が広がるが、東側は水田部分が終了し、一段高く立ち上がる。この微高地に沿うように北から南に向かって流れる。水田側には水口が検出されているため、灌漑用水路と思われる。南側を側溝に切られる調査区内で全長は494cm（残存値）、最大幅は174cm、深さは30cmを測る。南側ほど深くなる。自然礫、流木などが出土しているが図化できる遺物はない。流木は樹種同定の結果、ヒノキであった。

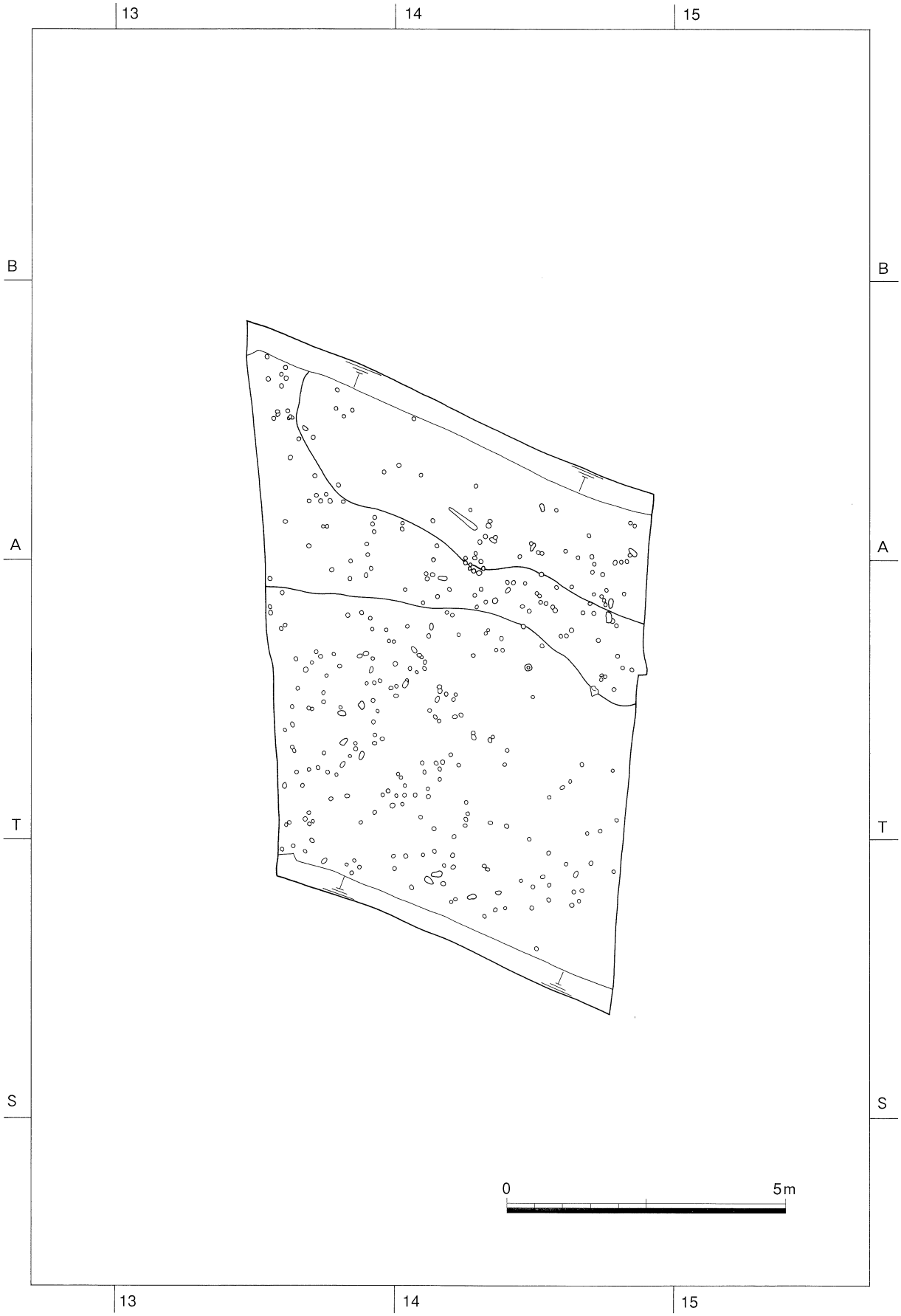
第11包含層出土遺物（第43・44図）

A区からは、縄文土器小片と石器が図化できた。主にA－10区からの出土である。141は縄文土器深鉢口縁部である。142は縄文土器深鉢体部である。外面、内面ともにナデ調整されているが、142の外面には指頭ナデ痕が見られる。143はサヌカイトのスクレイパーである。縁辺部に両面から調整を加えている。144はサヌカイトの石核である。上面に自然面を残している。145は結晶片岩の石錘である。146・147は結晶片岩の自然礫である。148は完形の砂岩敲石である。敲打痕が認められる。

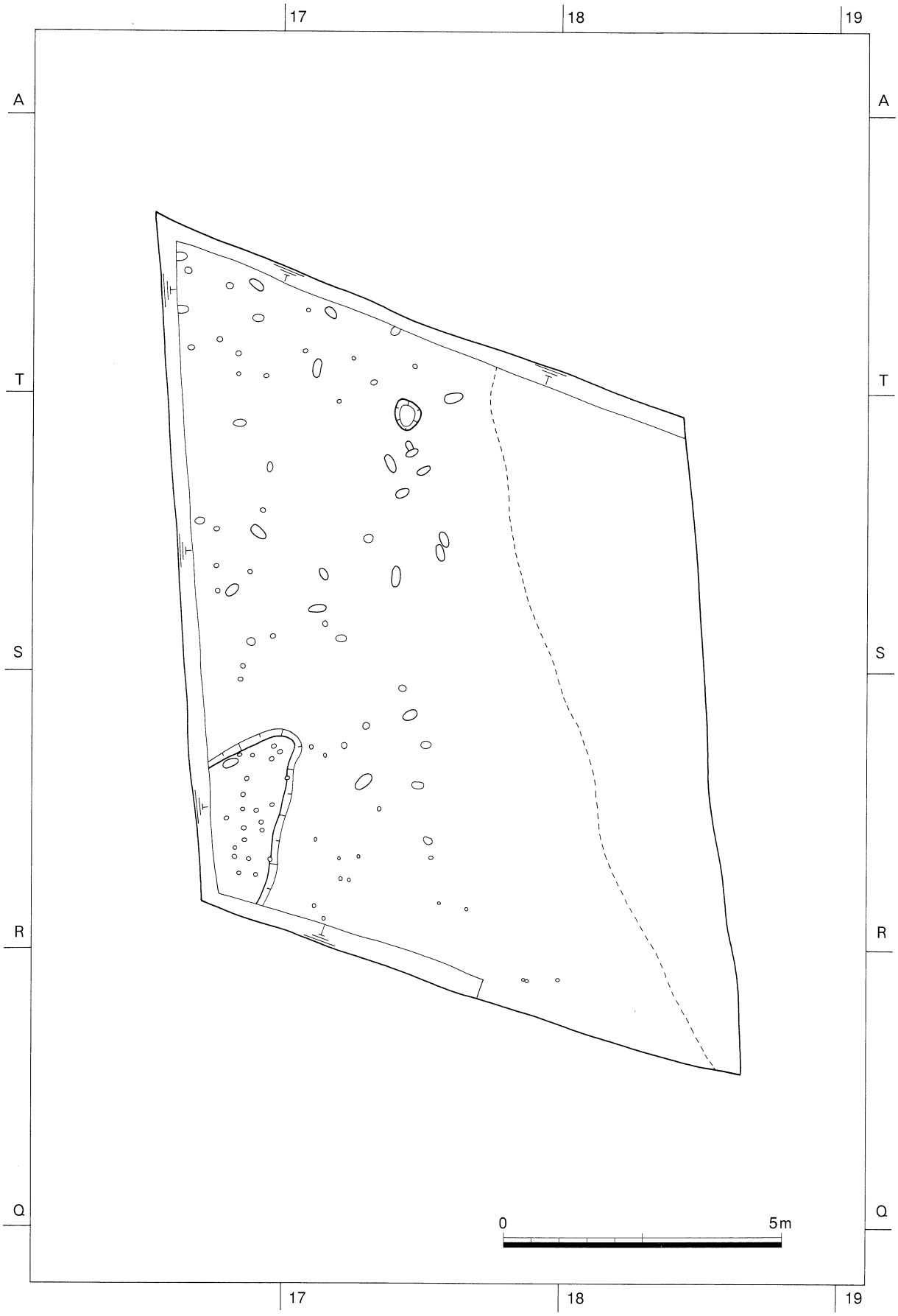
B区からの出土遺物は、石器2点が図化できた。149と150の結晶片岩の扁平打製石斧である。基部と



第37図　A—11区第11遺構面水田実測図



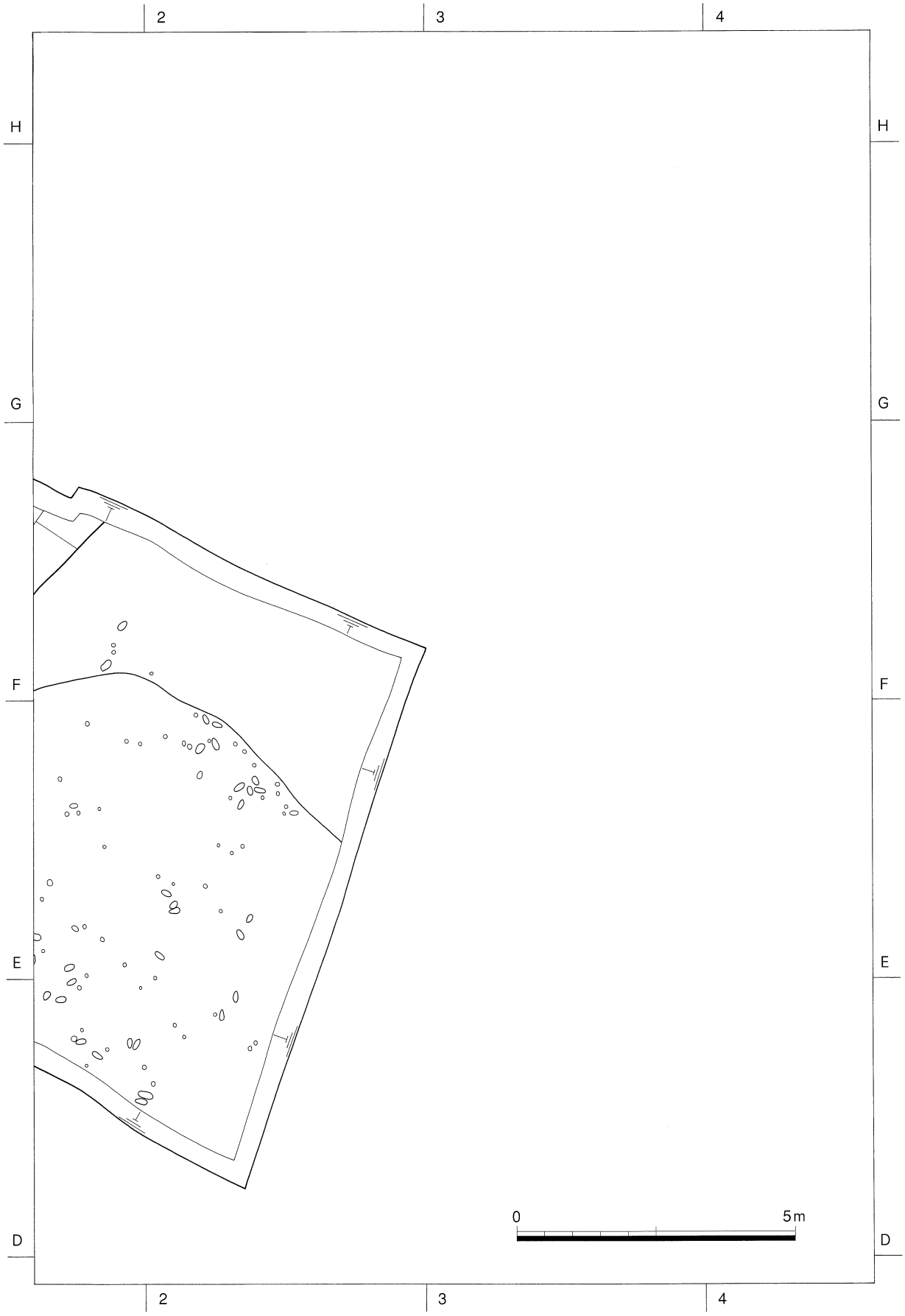
第38図　A−10区第11遺構面水田実測図



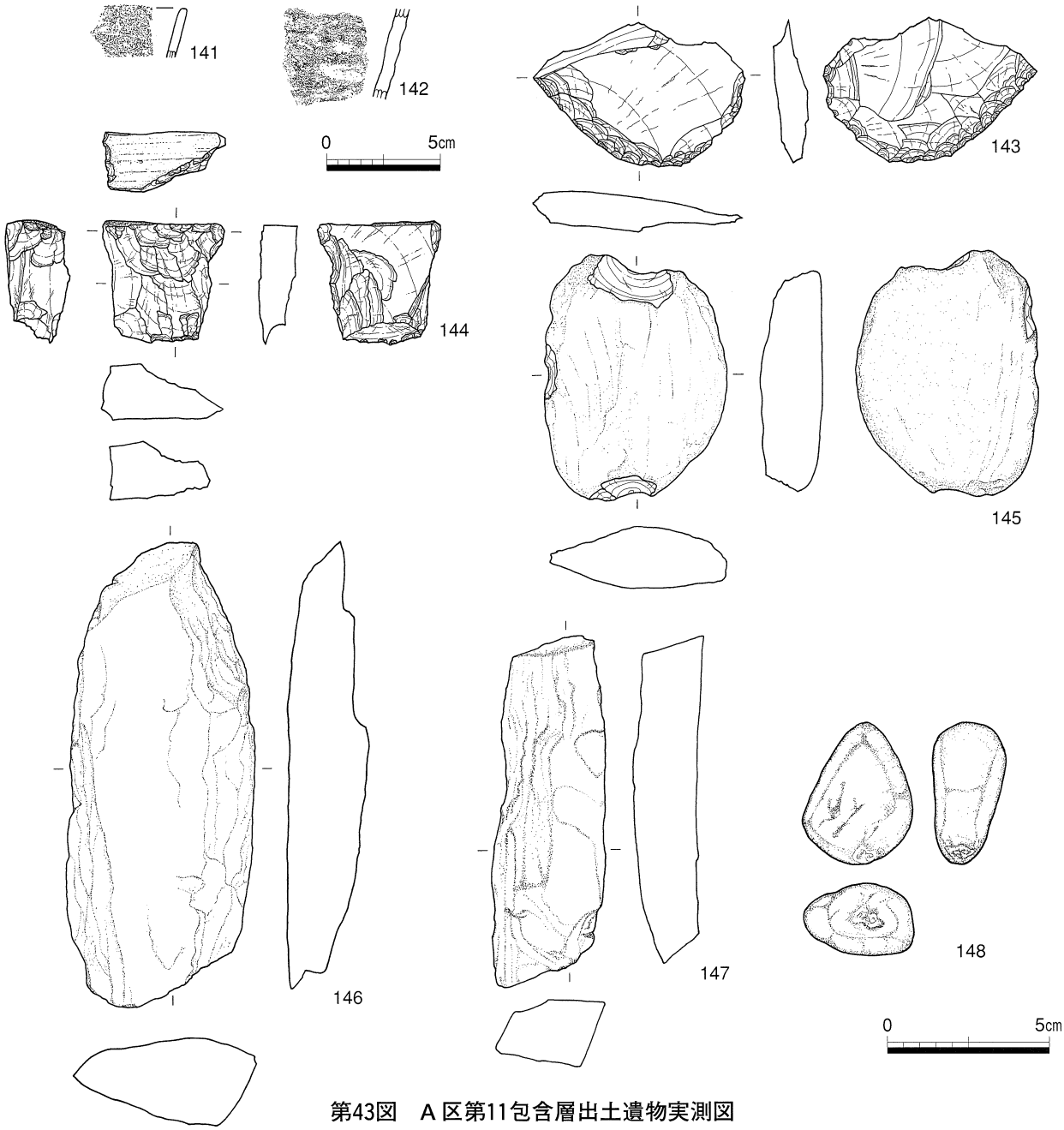
第39図　A－９区第11遺構面水田実測図

第40図　B－２・１区第11遺構面水田実測図

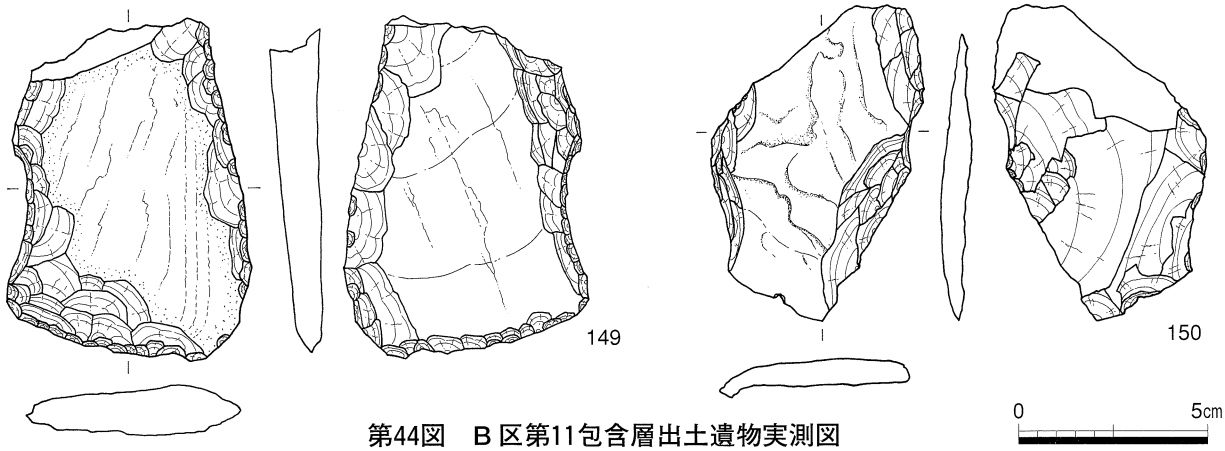
第41図　B－１区第11遺構面水田実測図(1)



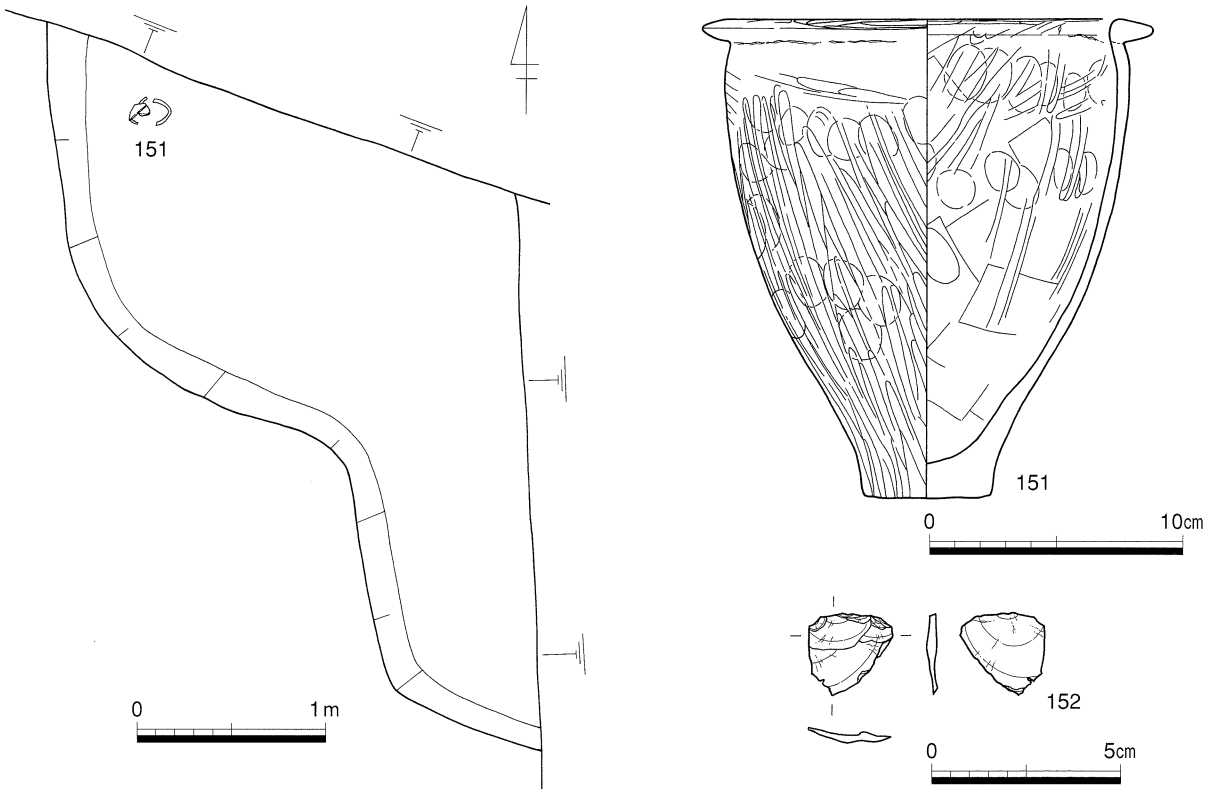
第42図　B－１区第11遺構面水田実測図(2)



第43図　A区第11包含層出土遺物実測図



第44図　B区第11包含層出土遺物実測図



第45図　A－9区 SK10001遺構・遺物実測図

刃部に調整を加えている。上部は欠損している。

③第10遺構面

土坑　SK10001（第45図）

A－9区、β－Ⅳ、S・T－17・18グリッドで検出された。A－9区北東隅に位置し、側溝に切られている。長軸294cm（残存値）、短軸240cmである。

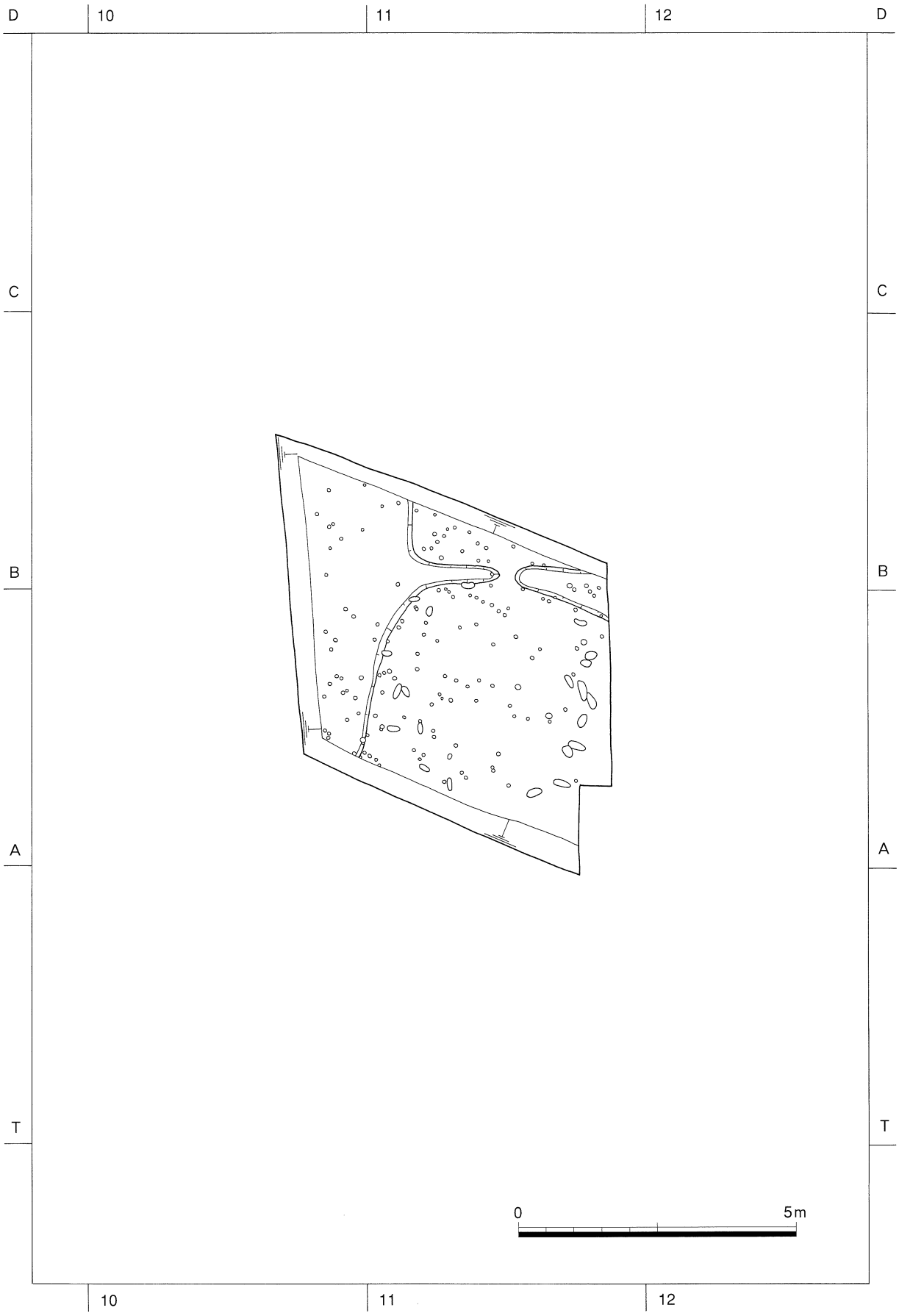
151は弥生土器のほぼ完形の甕である。底部は平底を呈し、体部は直線気味に立ち上がった後、やや内彎して立ち上がり、口縁部は逆L字状を呈する。外面の調整は、無文で丁寧なナデが施される。時代は弥生中期と思われる。152はサヌカイトの剥片である。

第10遺構面水田出土遺物（第53図）

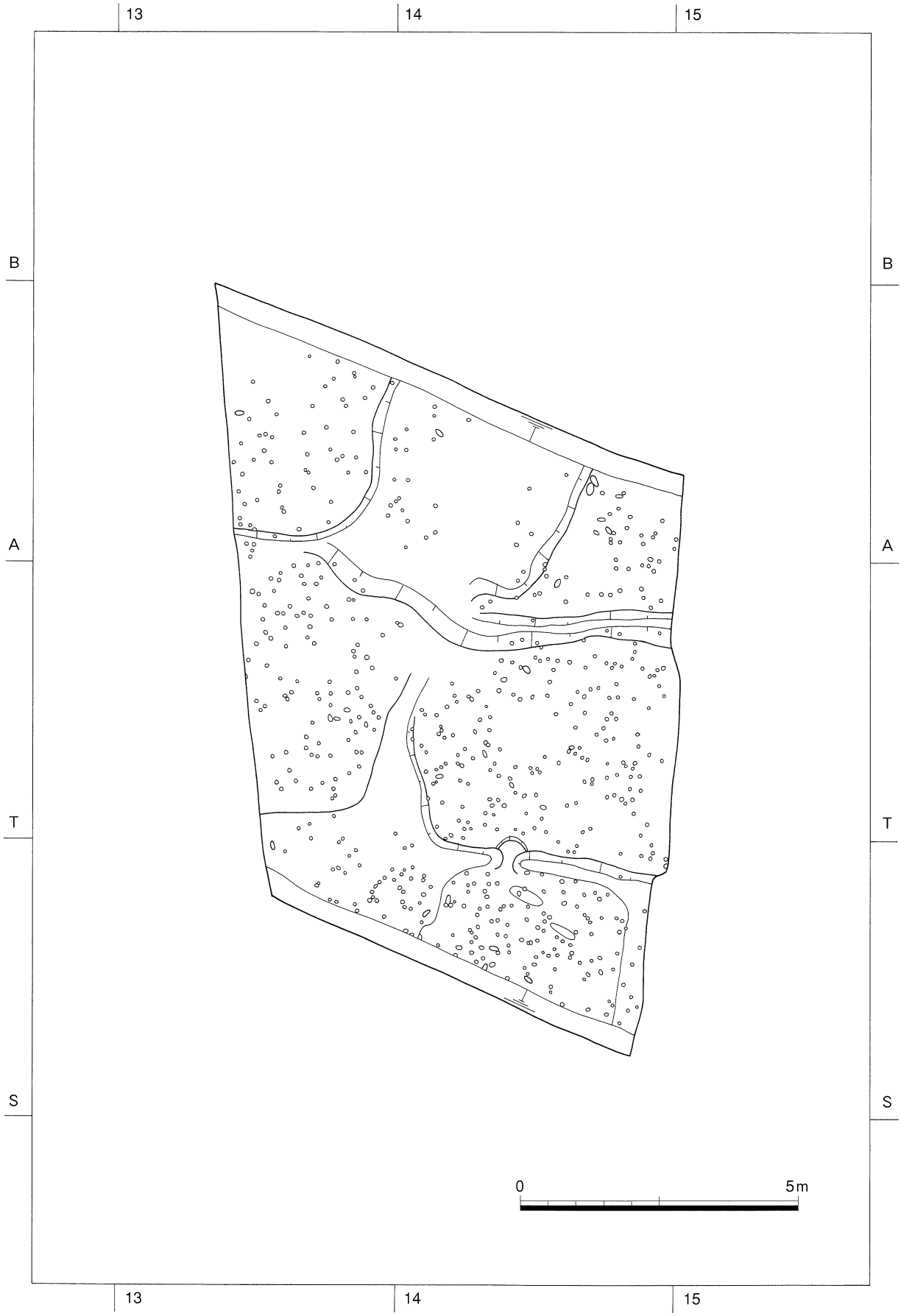
153はA－10区の水田より出土したサヌカイトの石核である。右側縁部に裁断面を有している。

第10包含層出土遺物（第54・55図）

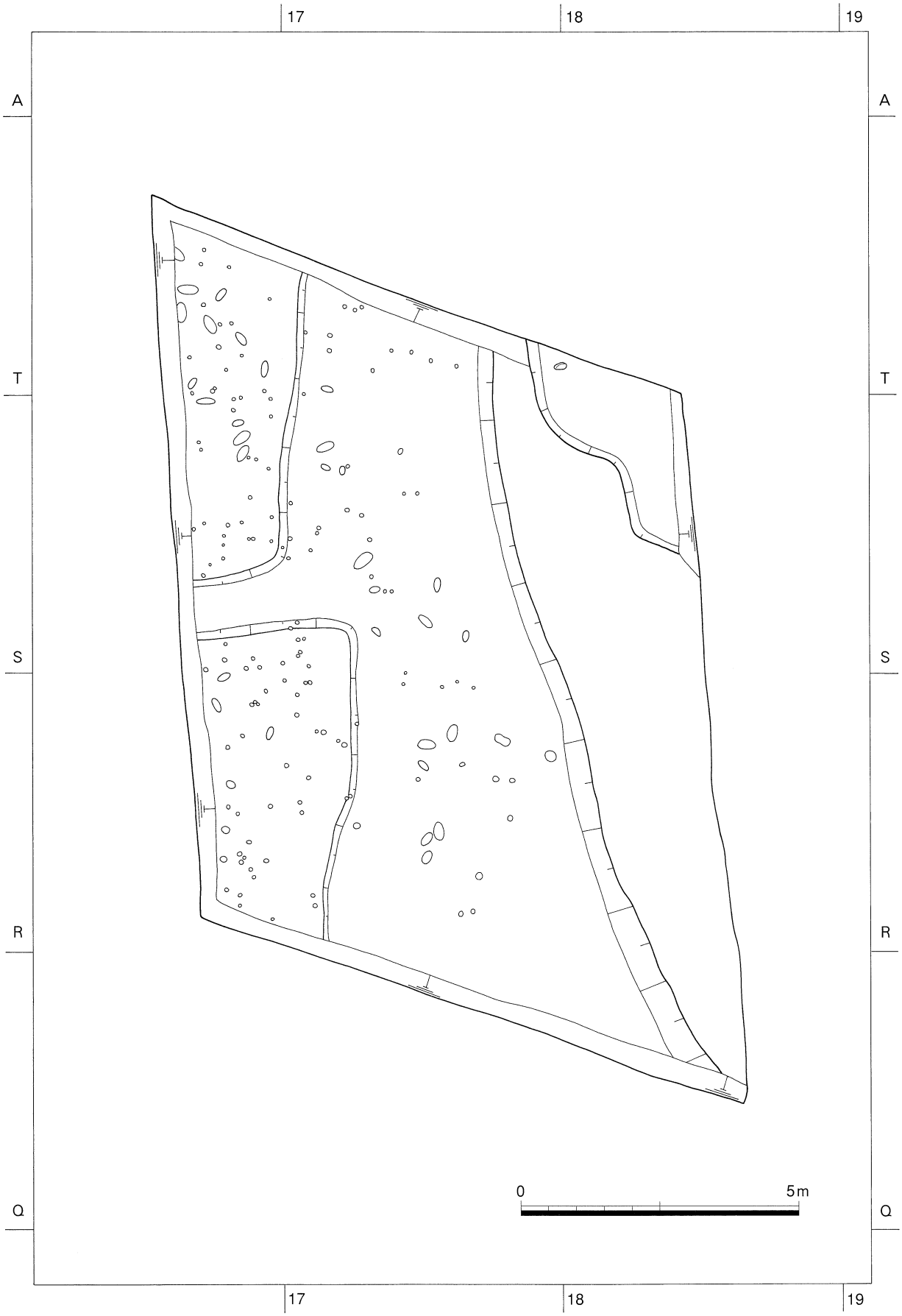
154はA－9区からの出土、155～161はA－10区からの出土である。154～158は縄文土器である。154は深鉢の口縁部である。口縁部は緩く外反し端部を丸くおさめる。口縁端部下約4㎜の位置に1条の刻目突帯を貼り付ける。155は、深鉢の口縁部である。口縁は直口外傾し、口縁端部を丸くおさめる。内面の調整は、条痕後ナデが施される。156は深鉢の体部である。外面に刻目突帯文を施す。157、158は深鉢体部である。外反して外上方に開き、内面に数条の沈線文が見られる。159はサヌカイトのスクレ



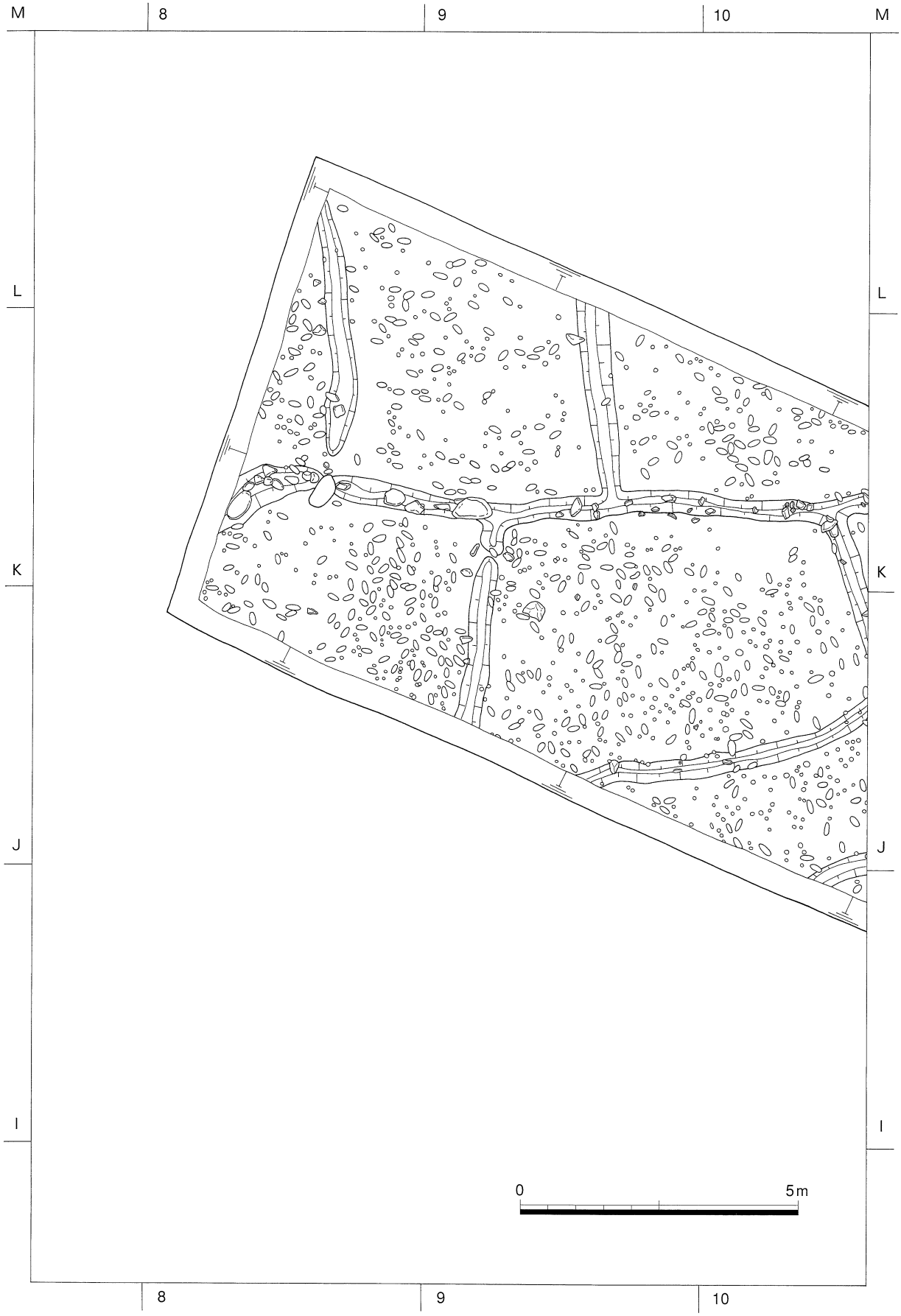
第46図　A−11区第10遺構面水田実測図



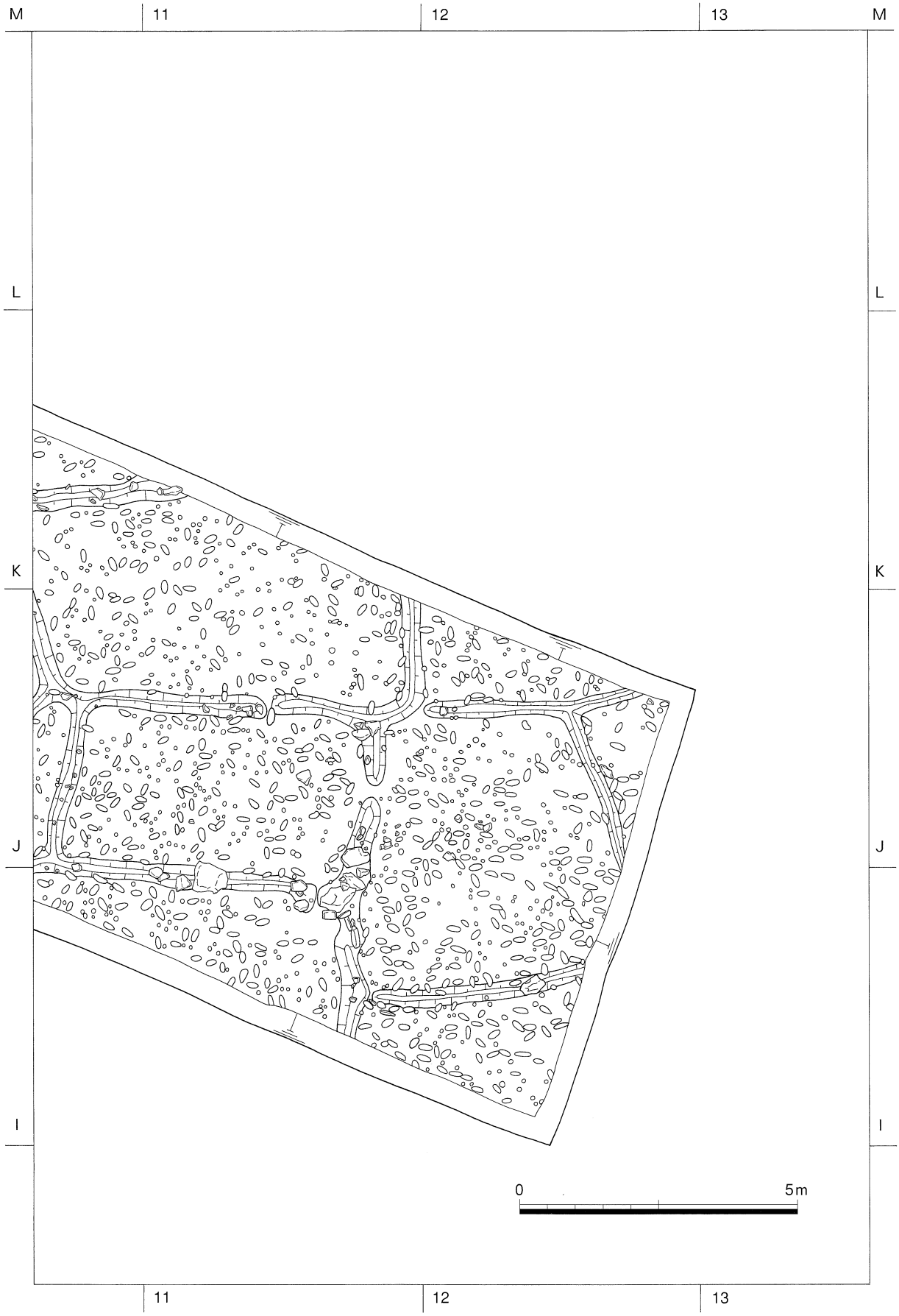
第47図　A−10区第10遺構面水田実測図



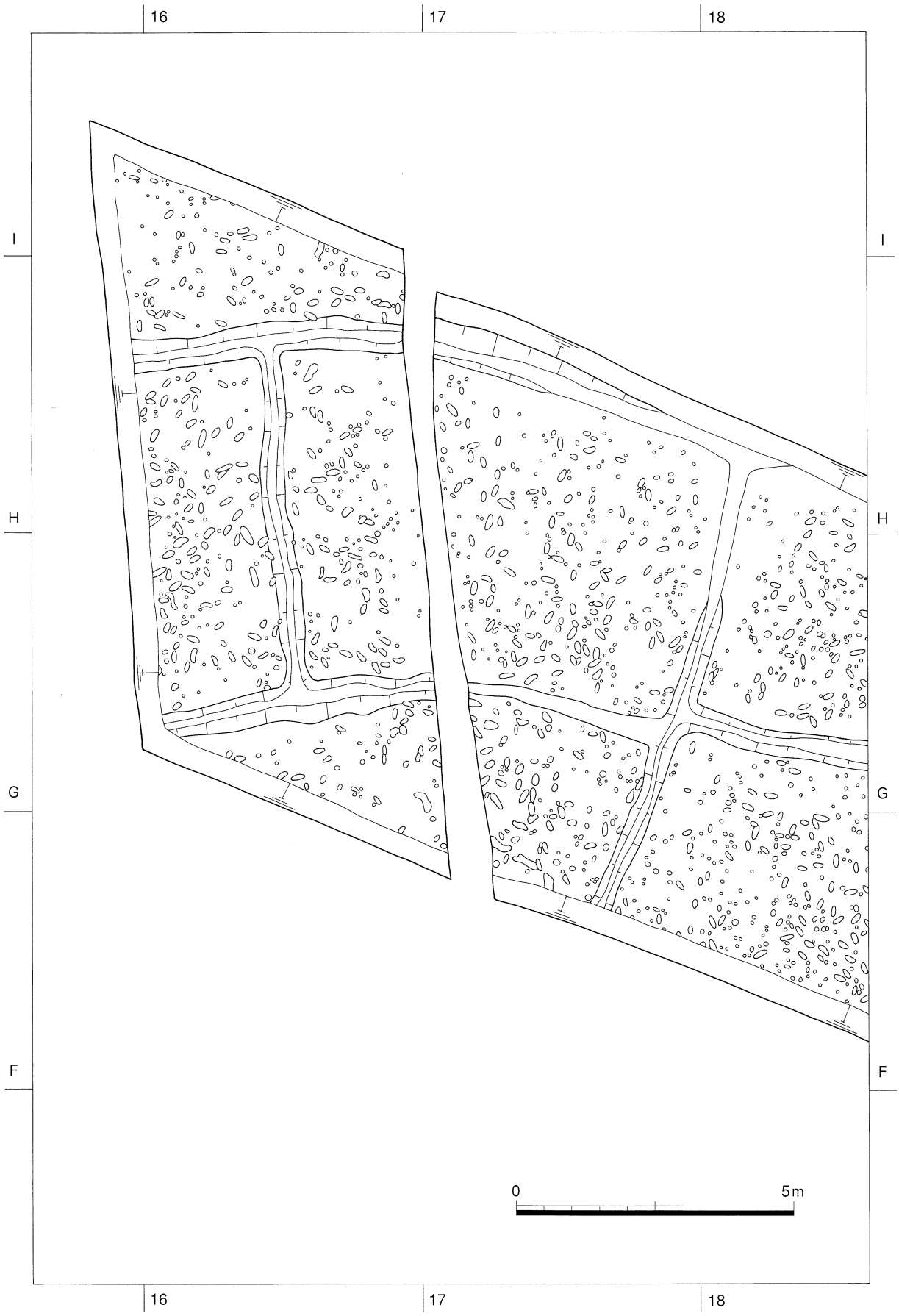
第48図　A－９区第10遺構面水田実測図



第49図　B－3区第10遺構面水田実測図(1)

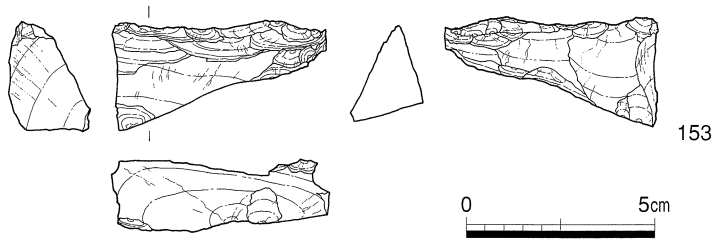


第50図　B－3区第10遺構面水田実測図(2)

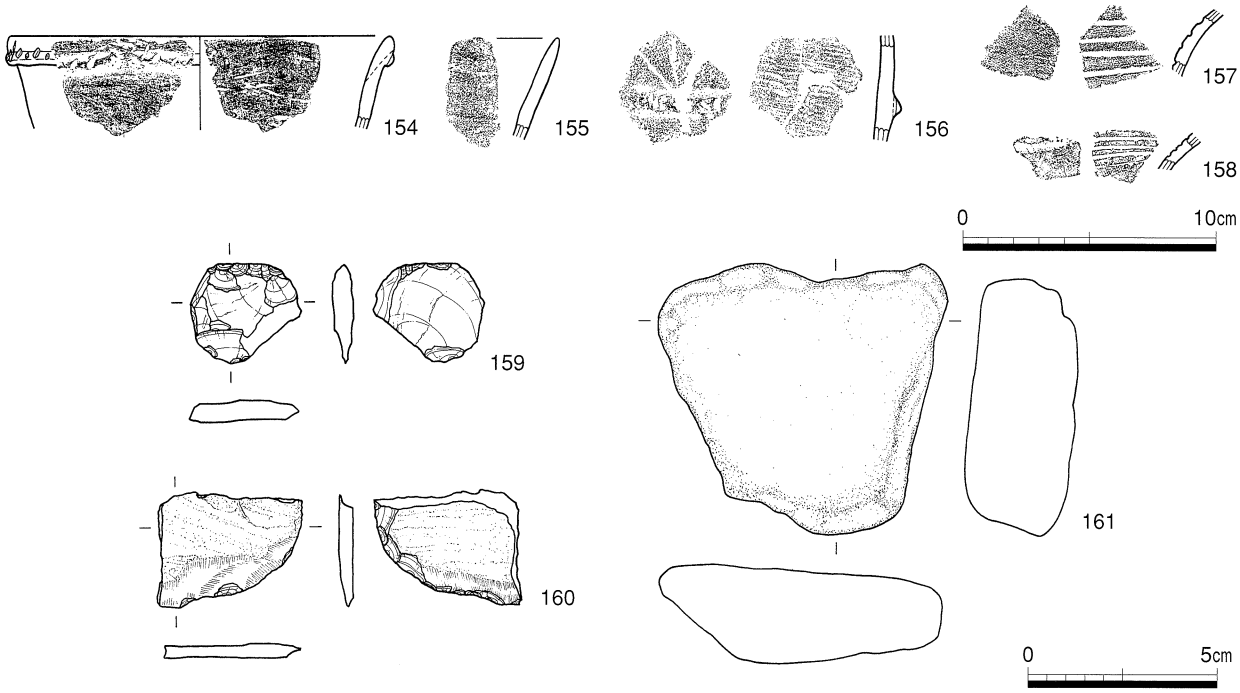


第51図　B－２・１区第10遺構面水田出土遺物実測図

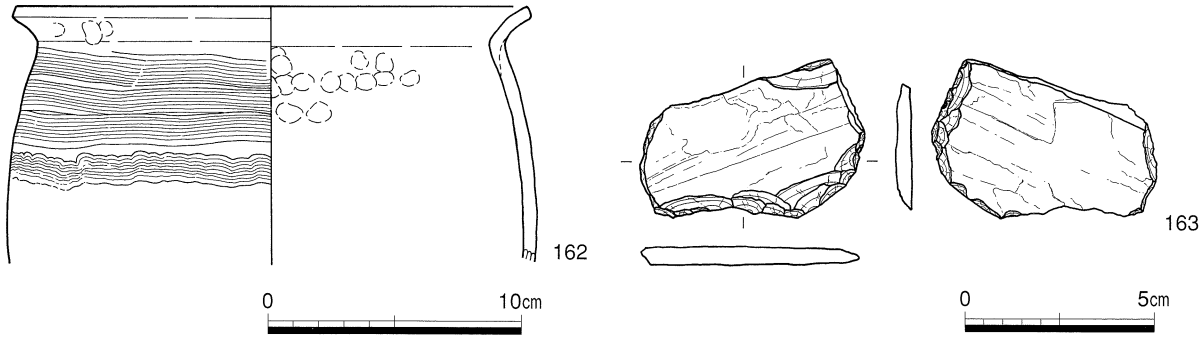
第52図　B－1区第10遺構面水田実測図



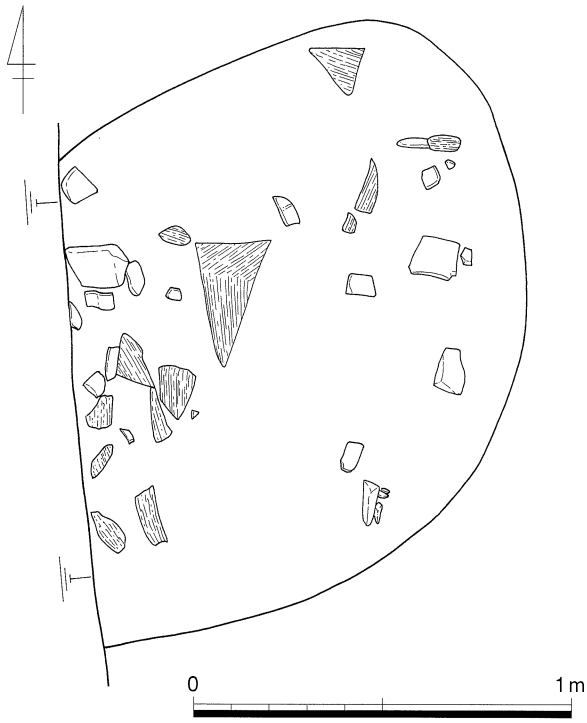
第53図　A−10区第10遺構面水田出土遺物実測図



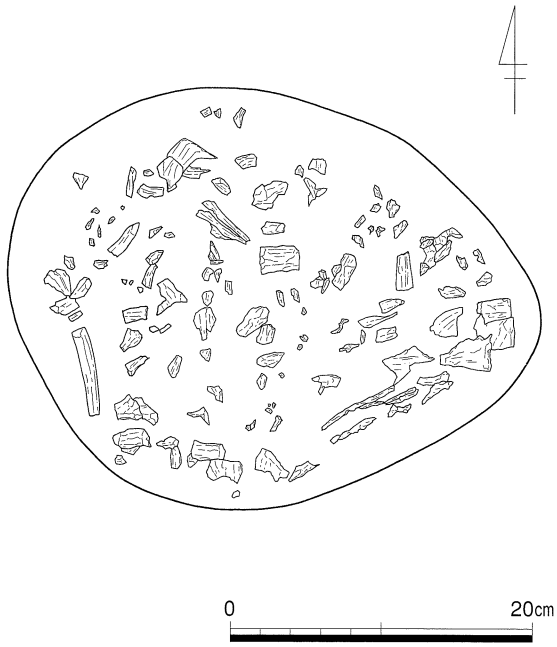
第54図　A 区第10包含層出土遺物実測図



第55図　B 区第10包含層出土遺物実測図



第56図　A－9区 SH9001遺構実測図



第57図　B－2区 SH9002遺構実測図

イパーである。刃部には細かい調整が施される。160は結晶片岩の局部磨製石庖丁である。表裏面とも剥離調整後、刃部に研磨が施される。表面の剥離面稜線は研磨に切られるが、裏面は表面ほど研磨が顕著ではない。161は砂岩の完形の磨石である。磨痕は肉眼では確認できない。162、163はB－1区からの出土である。162は弥生土器の口縁～体部である。口縁部は「く」の字に屈曲し、体部上半部に櫛描直線文と波状文が施される。弥生中期である。163は結晶片岩の石庖丁である。刃部の部分が著しく磨滅している。

④第9遺構面

炉跡　SH9001（第56図）

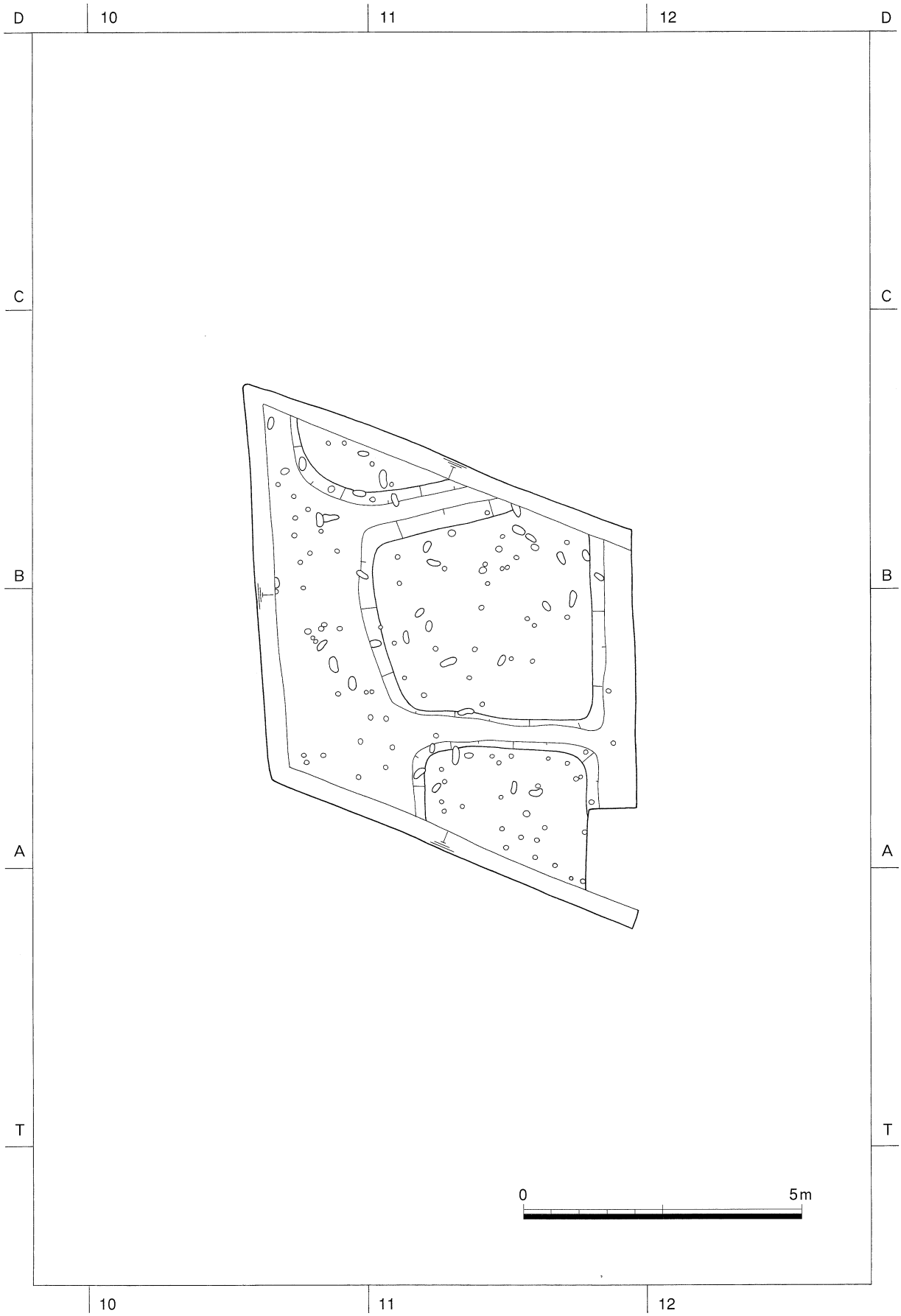
A－9区、β－Ⅳ、S－16グリッドで検出された。西側を側溝に切られ長軸145cm、短軸120cm（残存値）を測る。炭化物・焼土ブロックが広がる部分を炉跡として検出した。炭化物は放射性炭素年代測定によると、BC195年に相当するとの結果が出た。図化できる遺物はない。

炉跡　SH9002（第57図）

B－2区、γ－Ⅲ、G－16グリッドで検出された。長軸35cm、短軸28cmである。平面形態は、楕円形である。炭化物が広がる部分を炉跡として検出した。炭化物は放射性炭素年代測定によると、BC200年に相当するとの結果が出た。図化できる遺物はない。

第9包含層出土遺物（第64・65図）

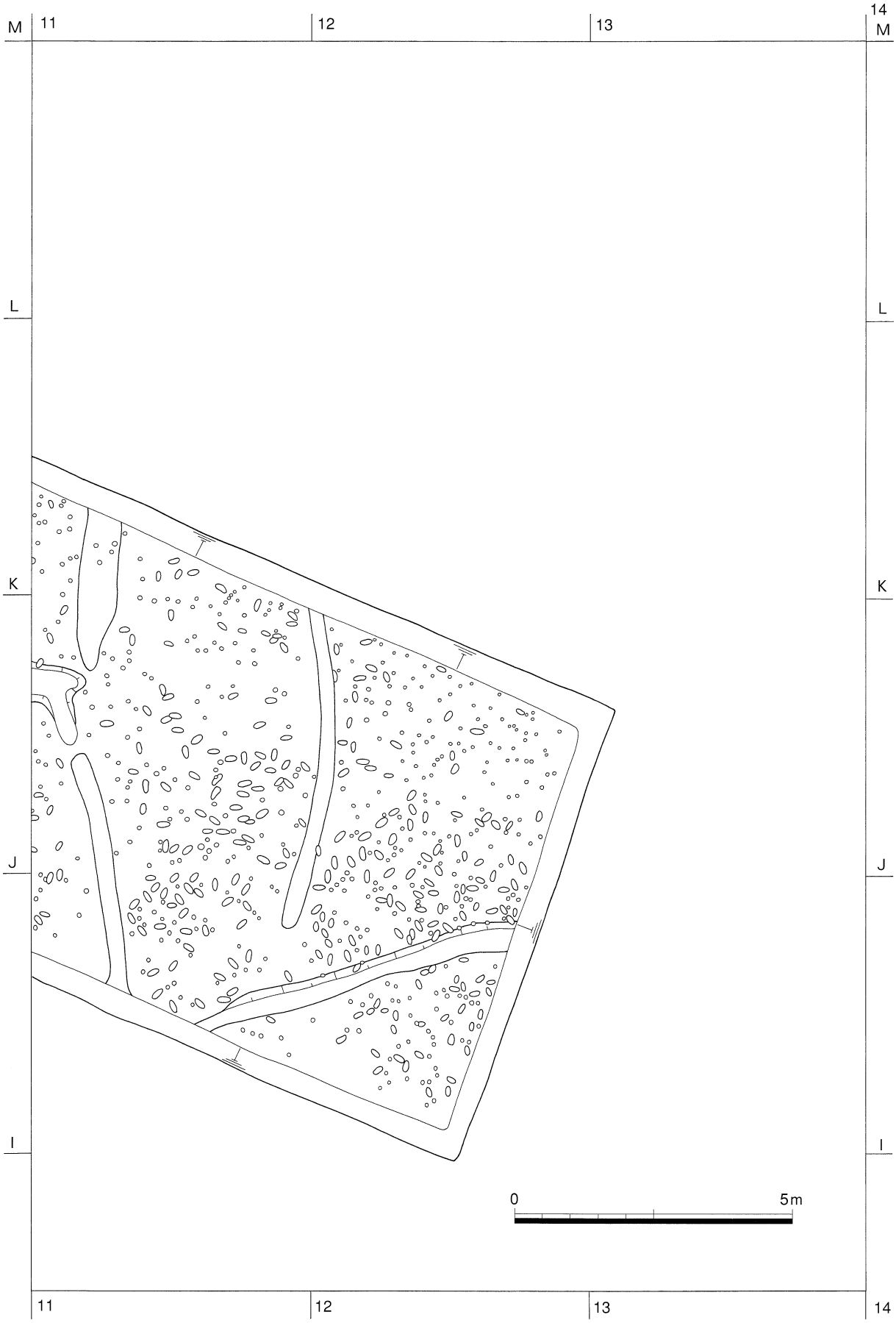
A区からの出土は、164と165である。164は弥生土器壺の体部である。櫛描文と竹管文が外面に施さ



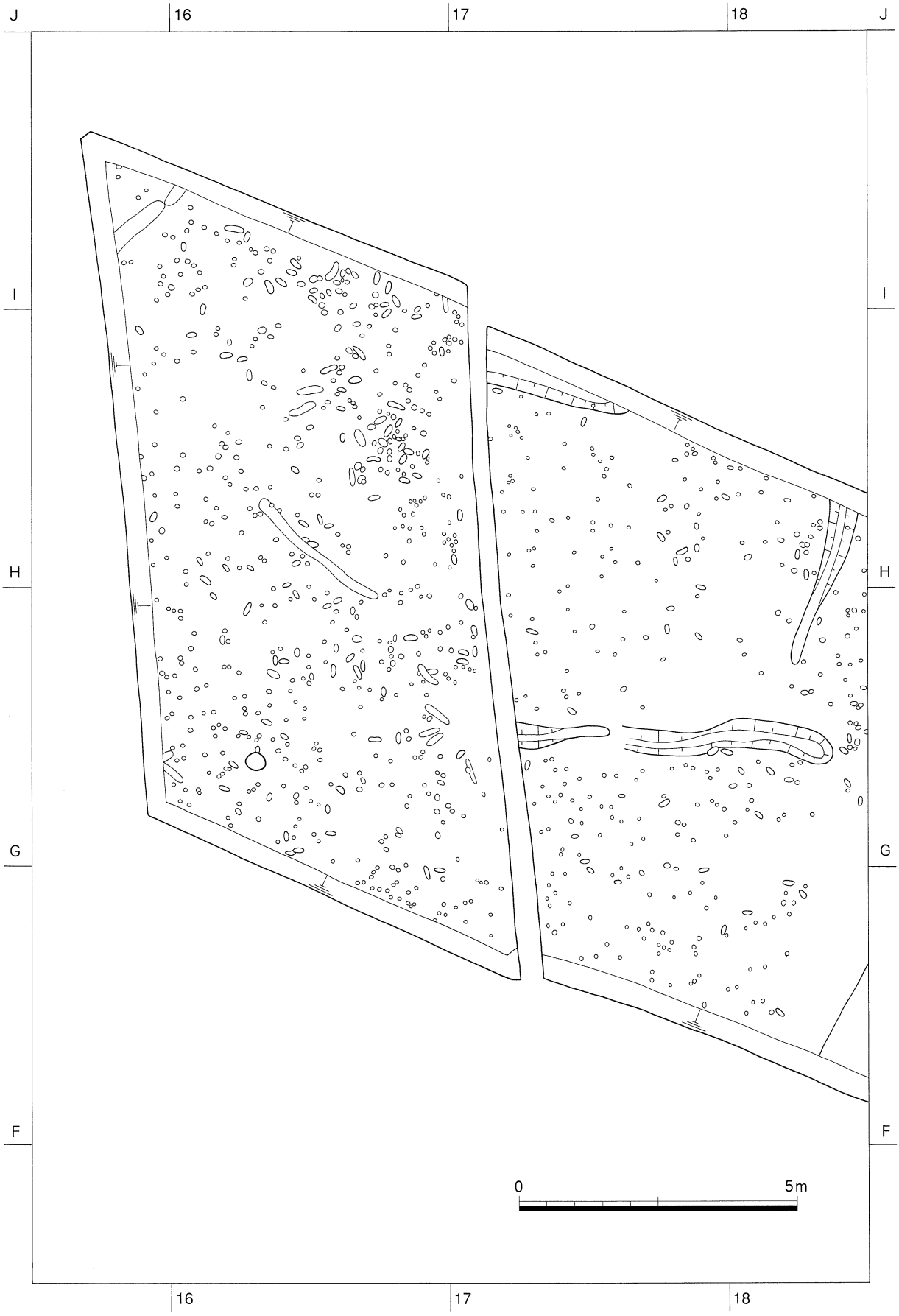
第58図　A—11区第９遺構面水田実測図

第59図　A－9区第9遺構面水田実測図

第60図　B－3区第9遺構面水田実測図(1)



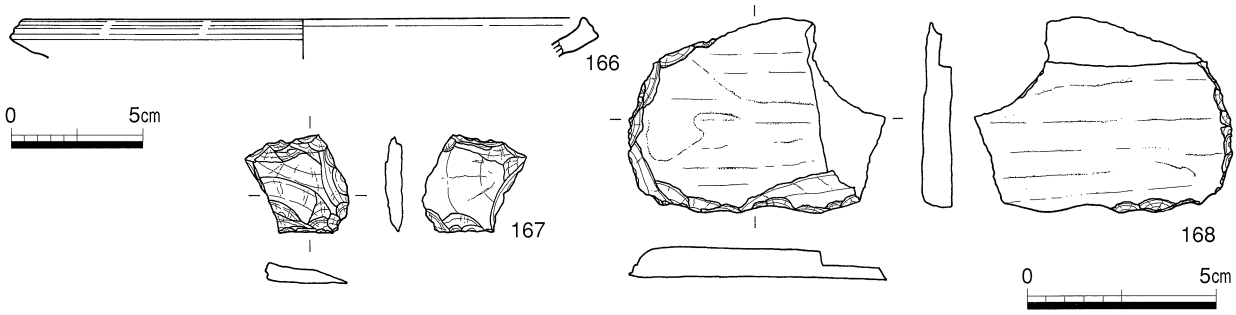
第61図　B－3区第9遺構面水田実測図(2)



第62図　B－２・１区第９遺構面水田実測図

第63図　B－1区第9遺構面水田実測図

第64図　A 区第 9 包含層出土遺物実測図



第65図　B 区第 9 包含層出土遺物実測図

れる。内面はヘラミガキで調整されるが磨滅気味である。弥生中期に相当する。165は弥生土器甕の底部である。若干、上げ底を呈する。

166～168は B 区からの出土である。166は弥生土器甕の口縁部である。「く」の字に屈曲して口縁端部でわずかに上方に拡張し、凹線文をめぐらせる。167はサヌカイトの剥片である。両極打法が見られる。168は結晶片岩の石庖丁である。刃部は使用によりかなり磨滅している。

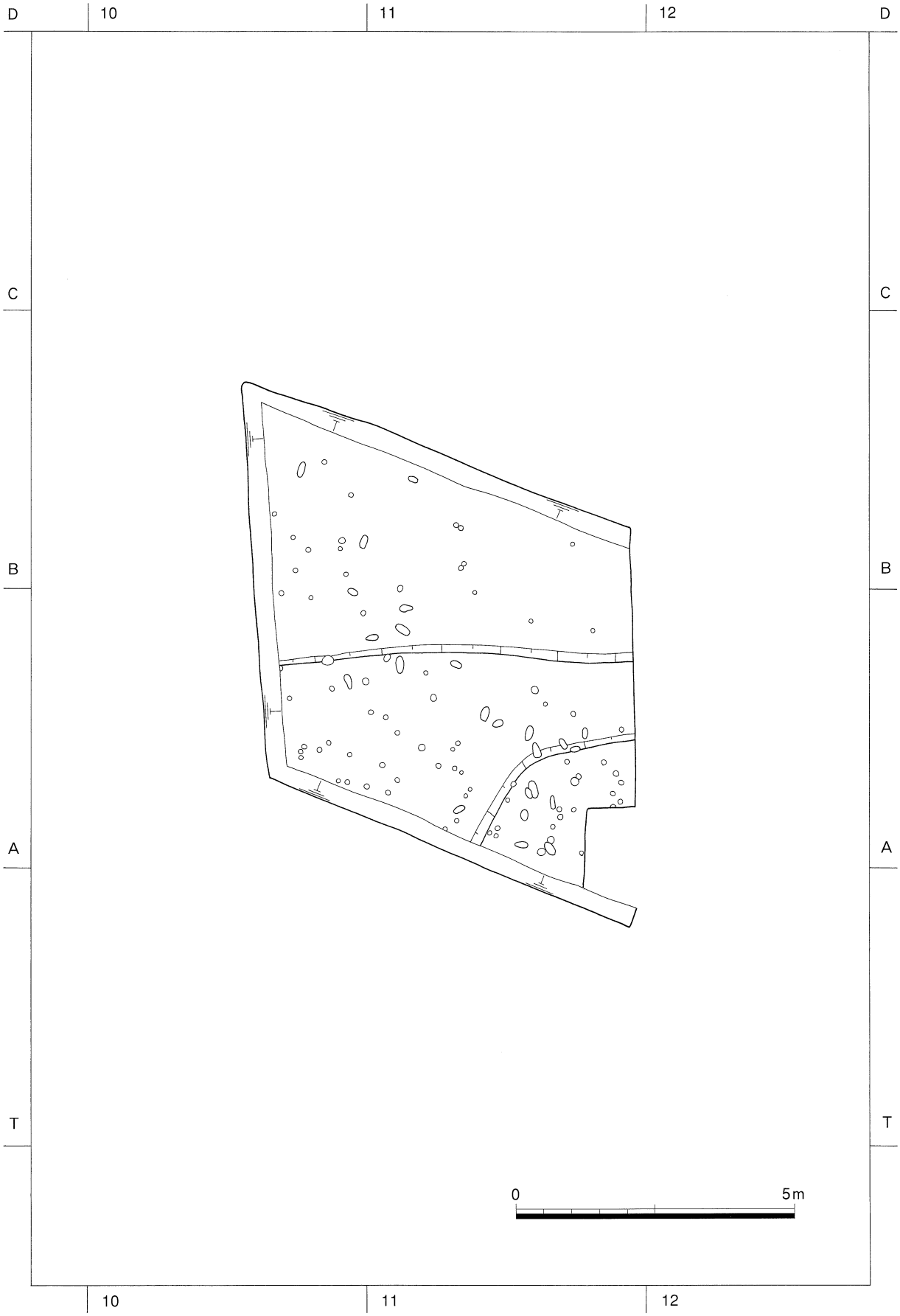
⑤第 8 遺構面

第 8 遺構面水田出土遺物（第73図）

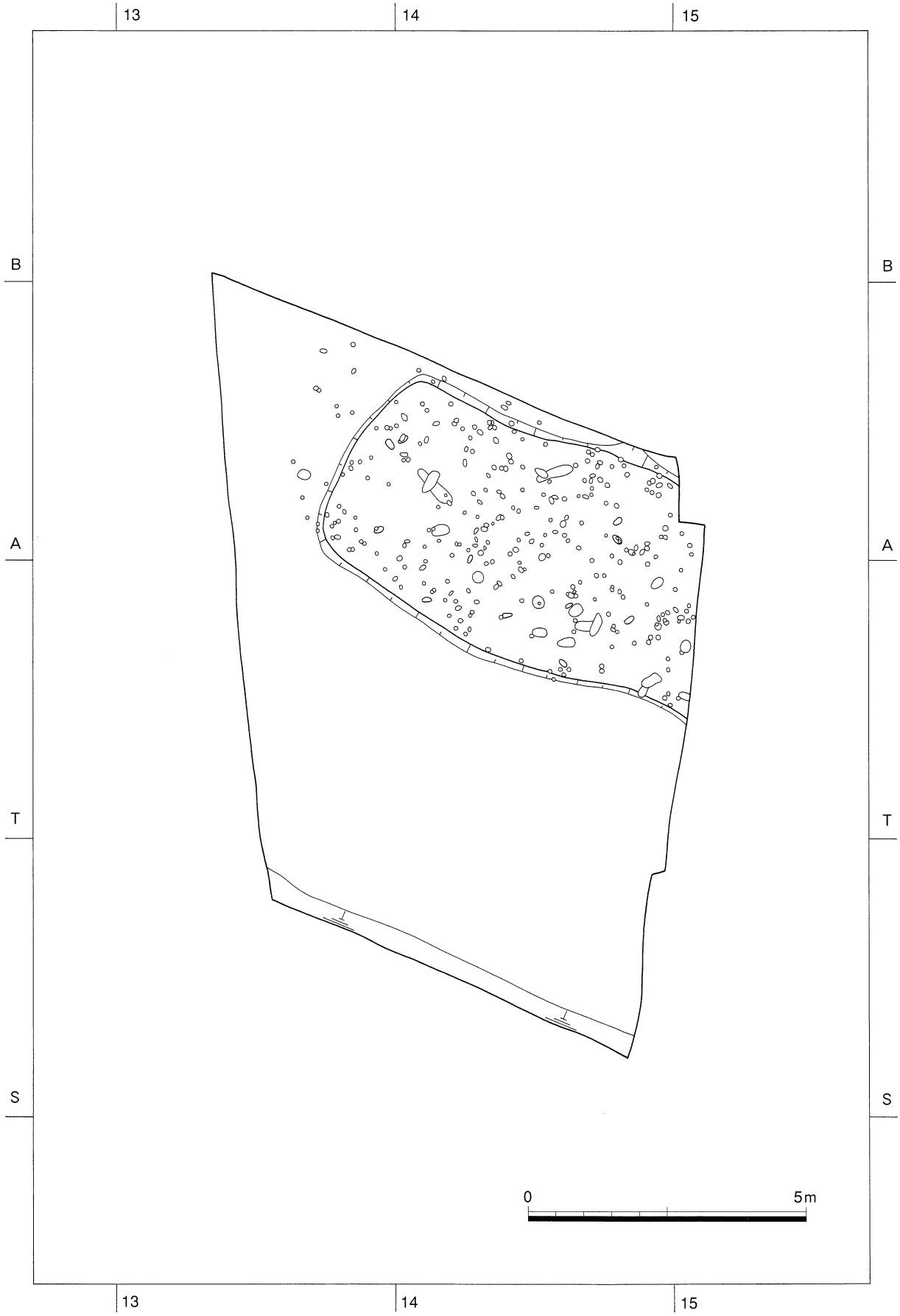
全て A－10区からの出土である。169～178は晩期に相当する縄文土器である。169・170は深鉢口縁部で、口縁端部に刻目を持つ。171は浅鉢の口縁部で、172は深鉢の口縁部、171は口縁端部に沈線文、172は凹線文が施される。173は深鉢の体部で、縦位の沈線文を外面に施す。174は浅鉢の口縁部で、内面に横位の沈線文を施す。深鉢の175は、体部で、刻目突帯文を施す。176・177は深鉢の体部で、176は斜行沈線文、177は爪形文を施す。178は深鉢の高台底に分類される（幸泉2002a・2002b・2004a）。179は弥生土器甕あるいは壺の底部である。平底を呈し、外面はハケが施される。180はサヌカイトの石鏃、181はサヌカイトの石鏃未製品、182はサヌカイトの石核である。183は砂岩の敲石で、敲打痕が残る。

第 8 包含層出土遺物（第74図）

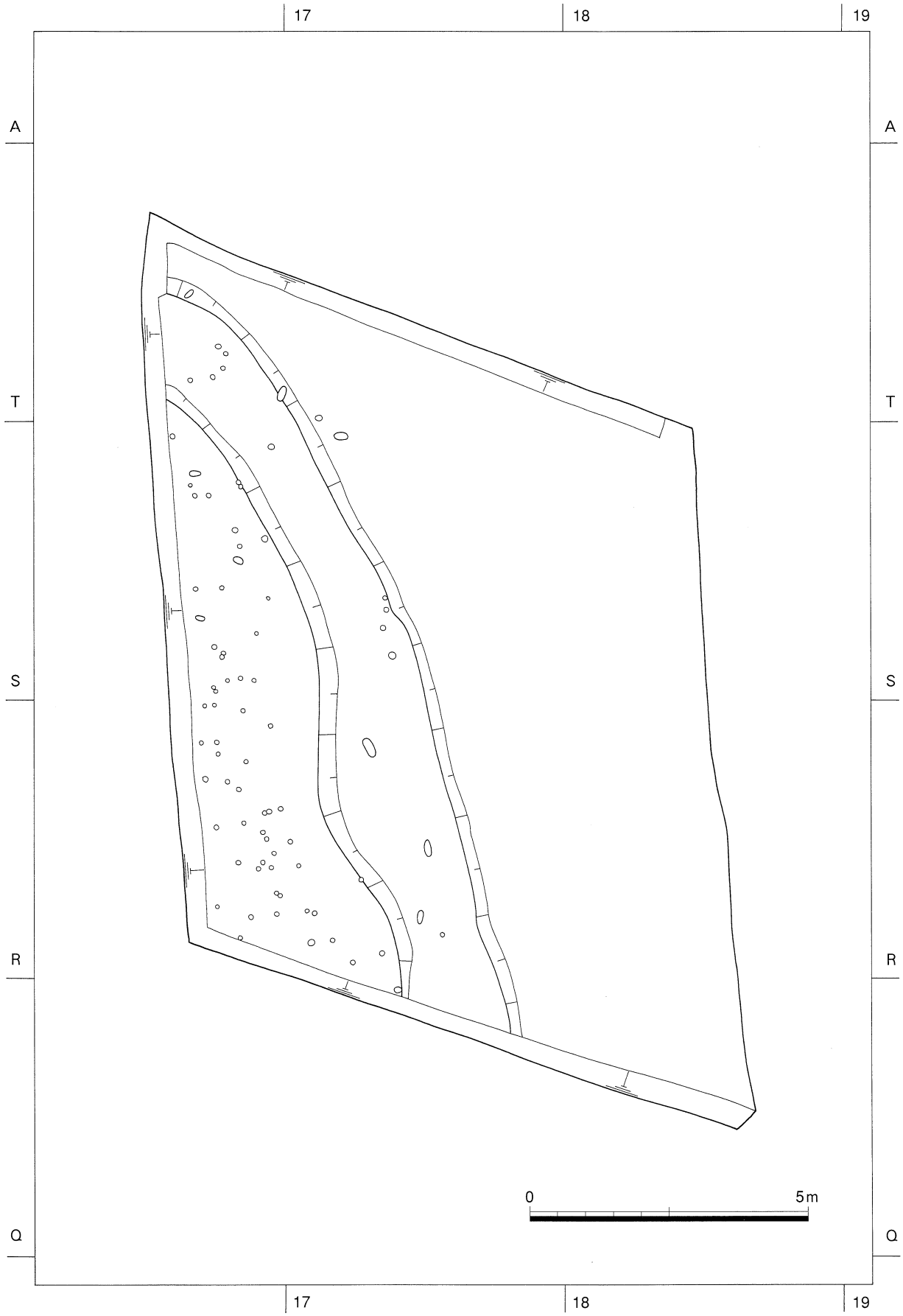
A・B 区からの出土である。184～188は晩期に相当する縄文土器である。184・185は深鉢の口縁部で、突帯文が施される。186は深鉢の口縁部で、端部に刻目が施される。187は壺の口縁部で口縁端部で逆「く」の字に屈曲する。188は深鉢の体部で外面に縦位沈線文を施す。189は弥生土器壺の口縁部～体部である。緩やかに外反する口縁部を持ち、体部と口縁部の境に突帯をめぐらせる。弥生後期前半と思われる。190・



第66図　A−11区第８遺構面水田実測図



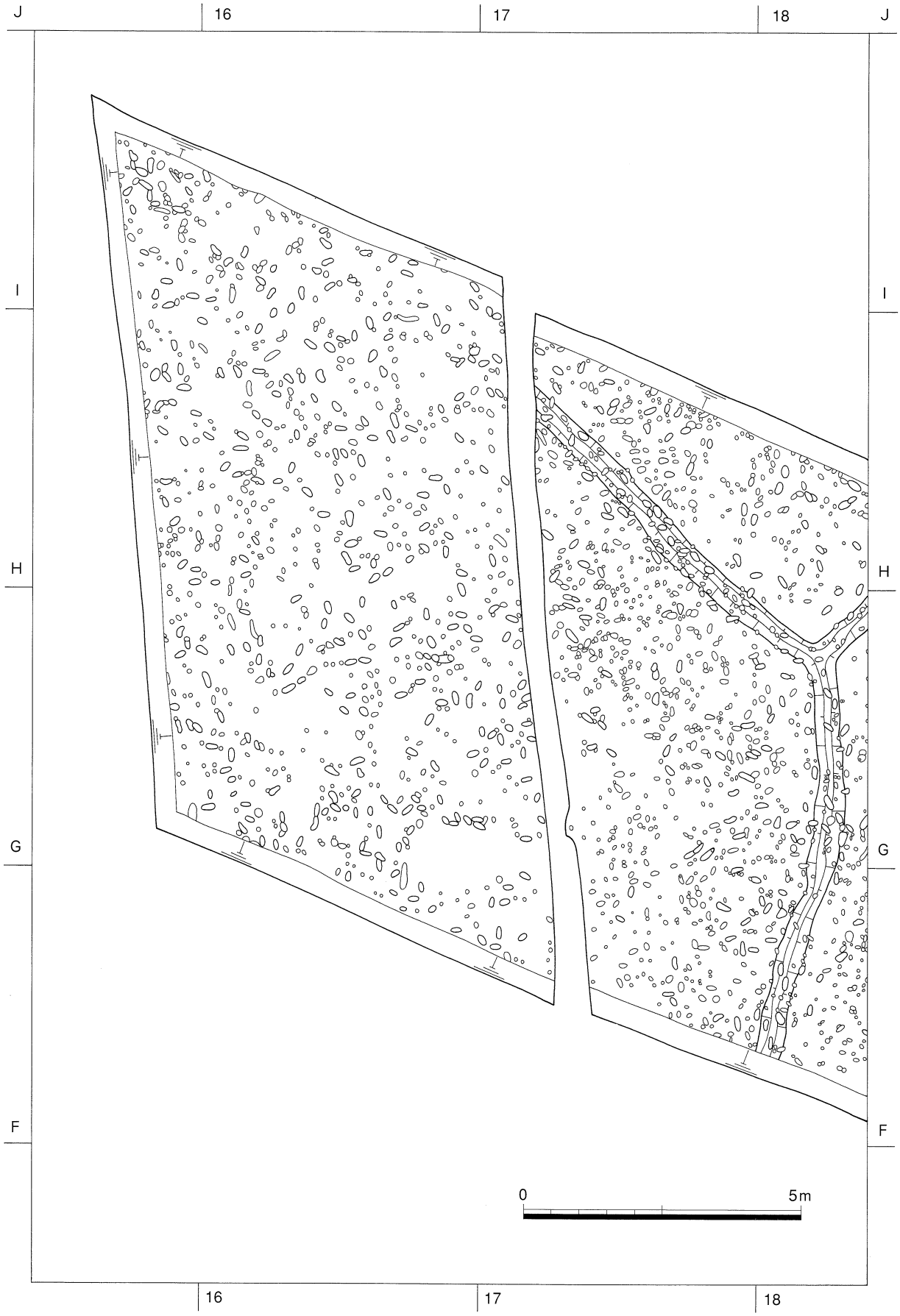
第67図　A—10区第８遺構面水田実測図



第68図　A－9区第8遺構面水田実測図

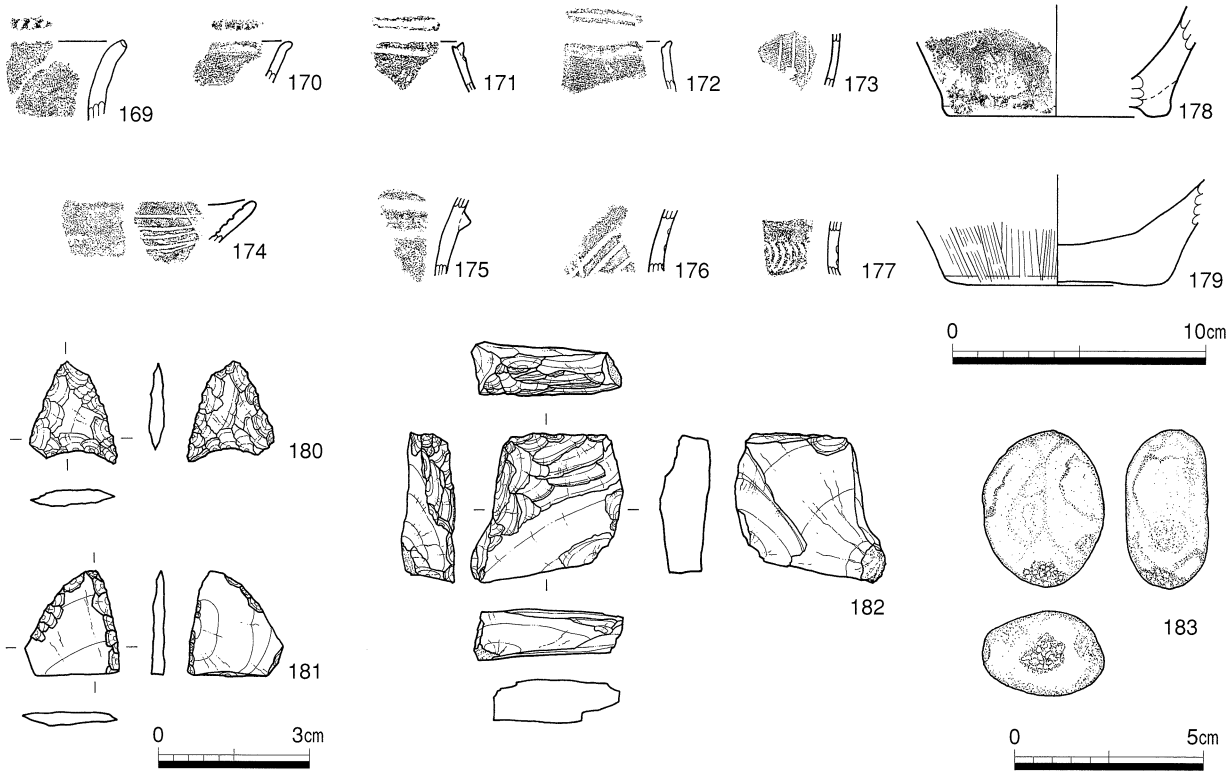
第69図　B－3区第8遺構面水田実測図(1)

第70図　B－3区第8遺構面水田実測図(2)

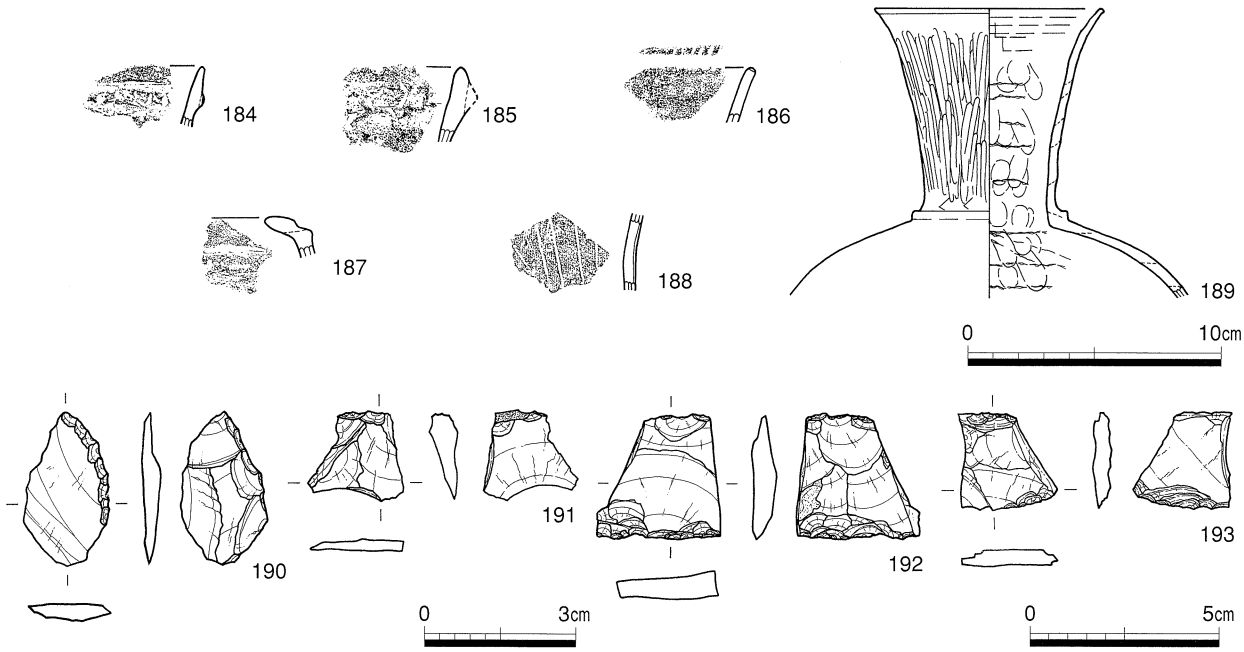


第71図　B－２・１区第８遺構面水田実測図

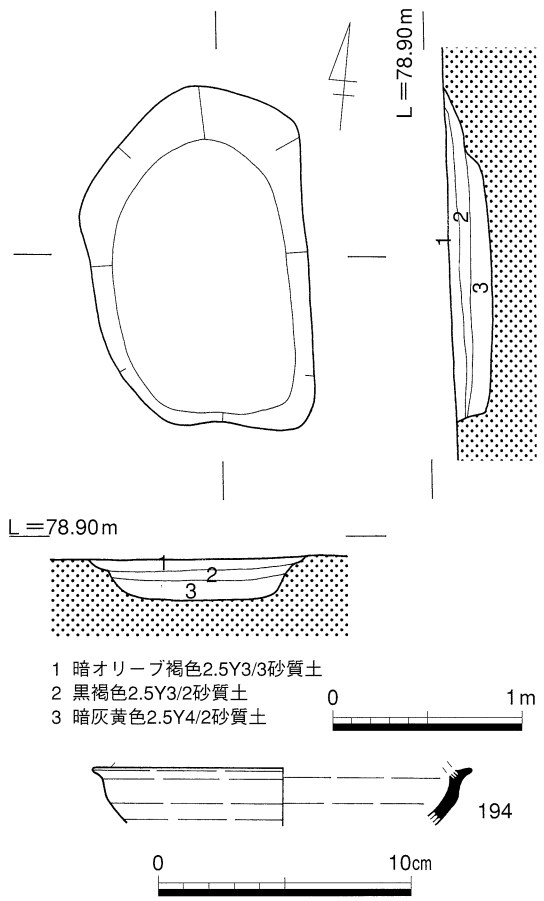
第72図　B－1区第8遺構面水田実測図



第73図　A−10区第８遺構面水田出土遺物実測図



第74図　A・B区第８包含層出土遺物実測図



第75図　A－9区 SK7001遺構・遺物実測図

191はサヌカイト石鏃未製品、192・193はサヌカイト製楔形石器である。

⑥第7遺構面

土坑　SK7001（第75図）

A－9区、β－Ⅳ、Q・R－17・18グリッドから検出された。長軸176cm、短軸116cm、深さ22cmを測り、平面形態は楕円形、断面形態は逆台形を呈する。

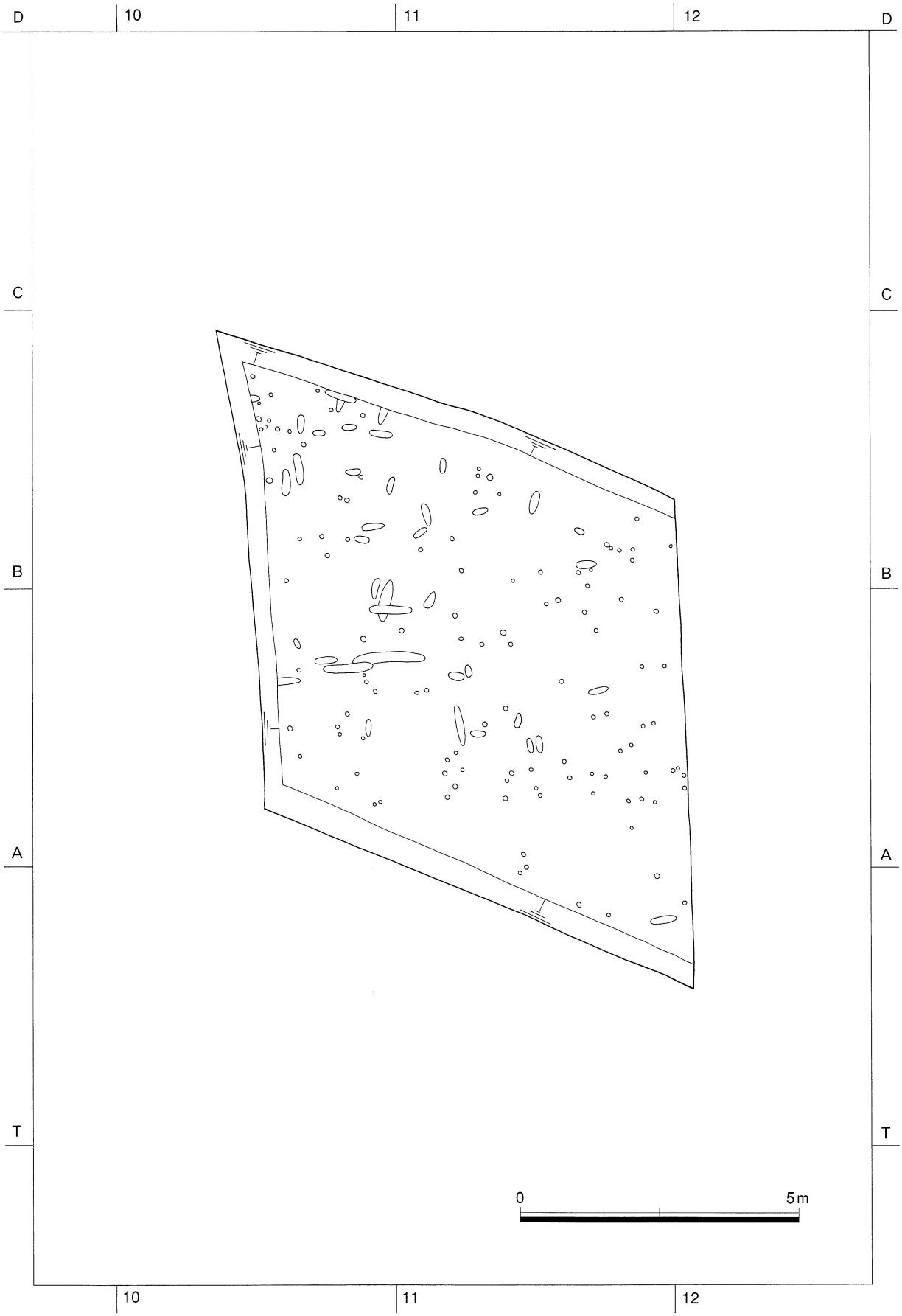
出土遺物は、194の須恵器の杯身である。受部はやや上向きに伸び、杯身の立ち上がり部は欠損している。

第7遺構面水田出土遺物（第84図）

195～197は晩期の縄文土器である。195は浅鉢の口縁部で、口縁部はやや外反し、内面に沈線を施す。196は深鉢で内面口縁端部に沈線をめぐらせる。197は深鉢の平底Ⅱ類である（幸泉2002a・2002b・2004a）。198はサヌカイトのスクレイパーである。

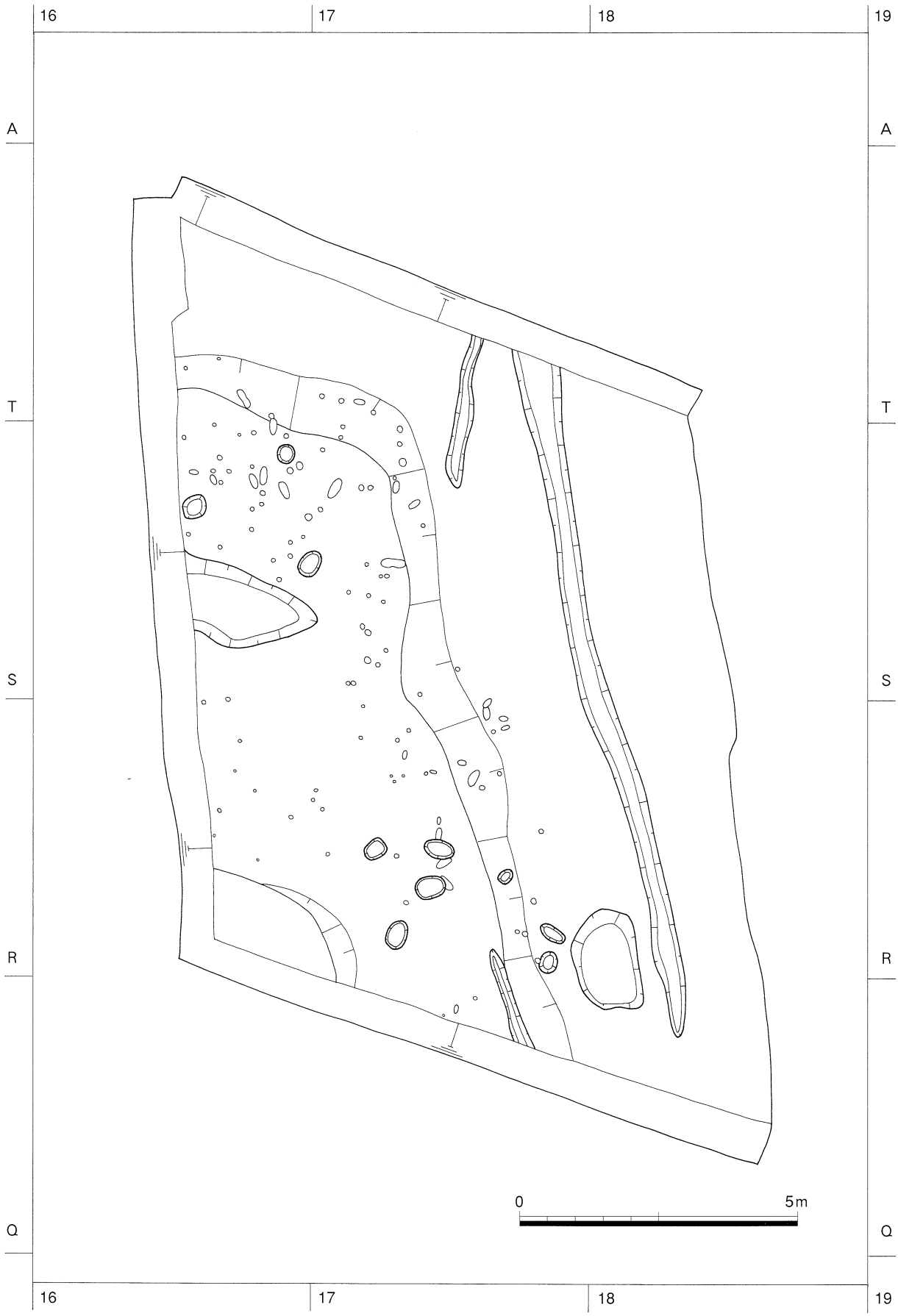
第7包含層出土遺物（第85図）

199は弥生土器甕の口縁部～体部である。体部の最大径は肩部にあり、口縁部は「く」の字に屈曲して端部は上方に拡張する。器壁は薄めで体部はハケを施す。200は須恵器の杯蓋で、明瞭な稜を有する。201は須恵器の杯身である。受部はやや上向きに伸び、杯身のたちあがり部は内彎する。202・203はサヌカイトのスクレイパーである。

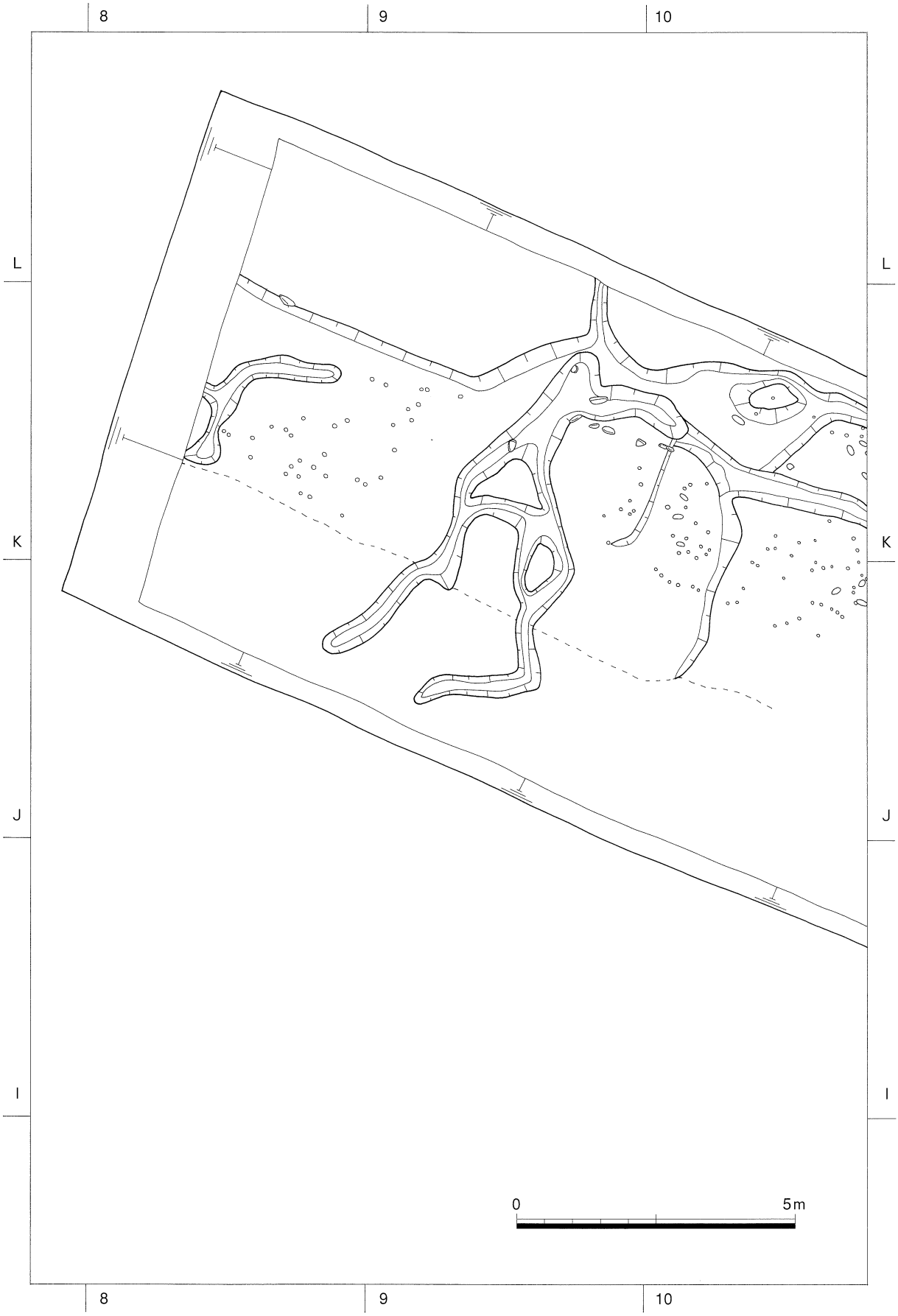


第76図　A－11区第７遺構面水田実測図

第77図　A−10区第７遺構面水田実測図

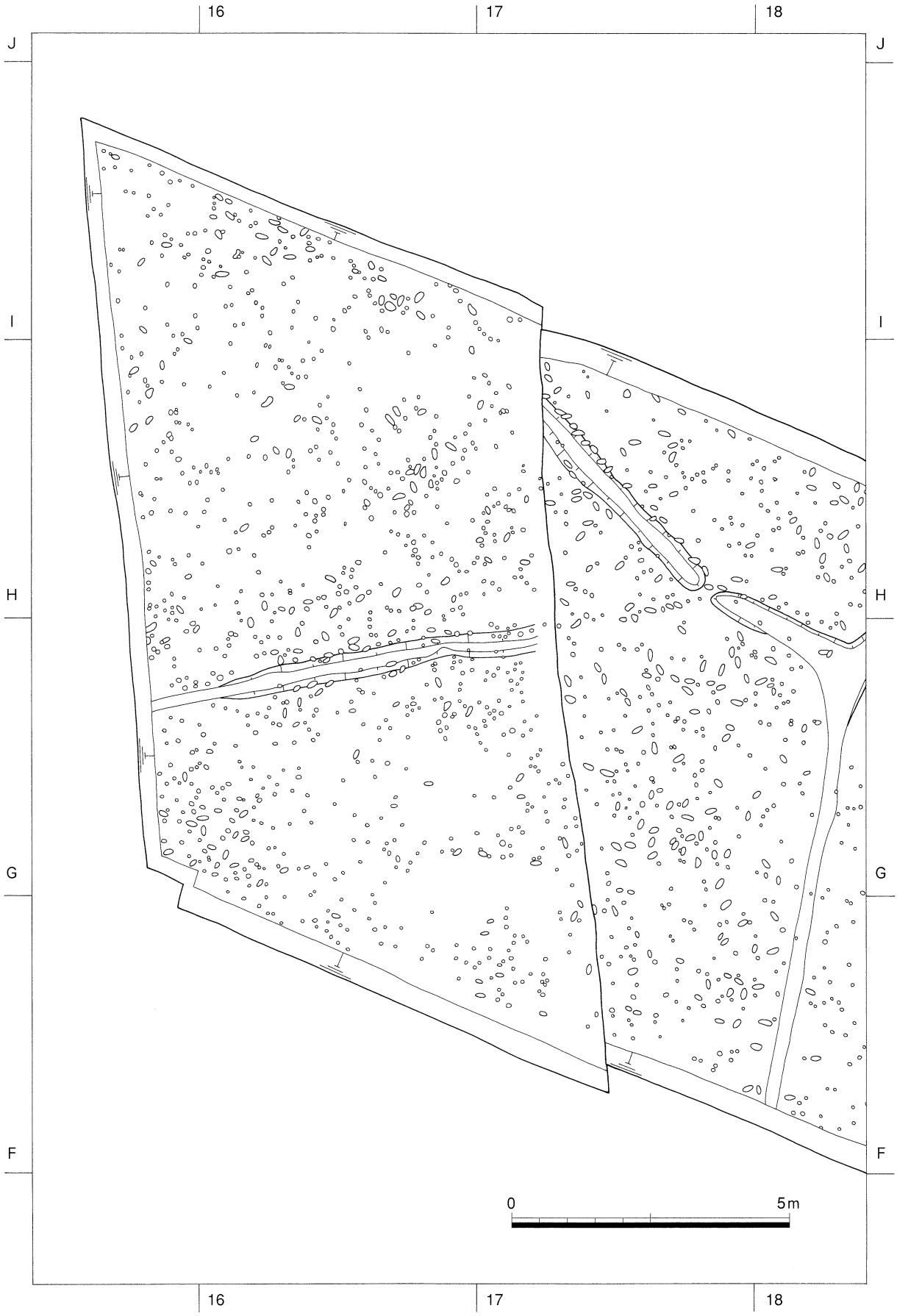


第78図　A－９区第７遺構面水田実測図



第79図　B－3区第7遺構面水田実測図(1)

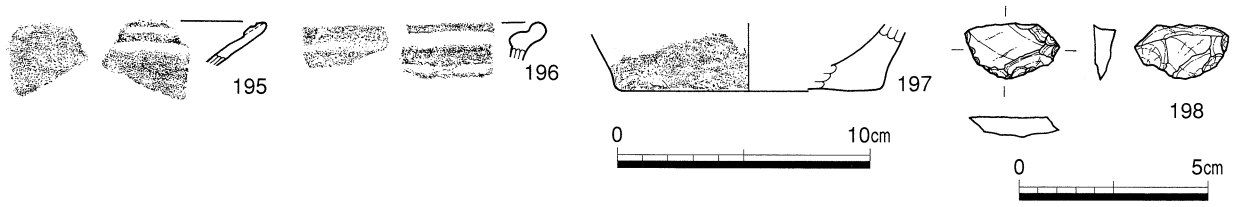
第80図　B－3区第7遺構面水田実測図(2)



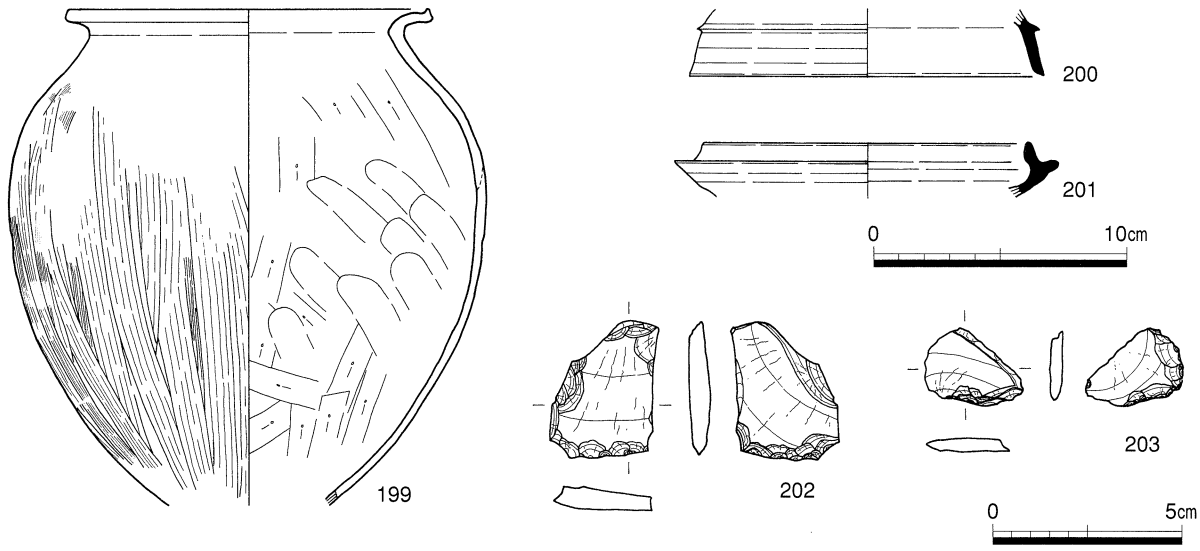
第81図　B－２・１区第７遺構面水田実測図

第82図　B－1区第7遺構面水田実測図(1)

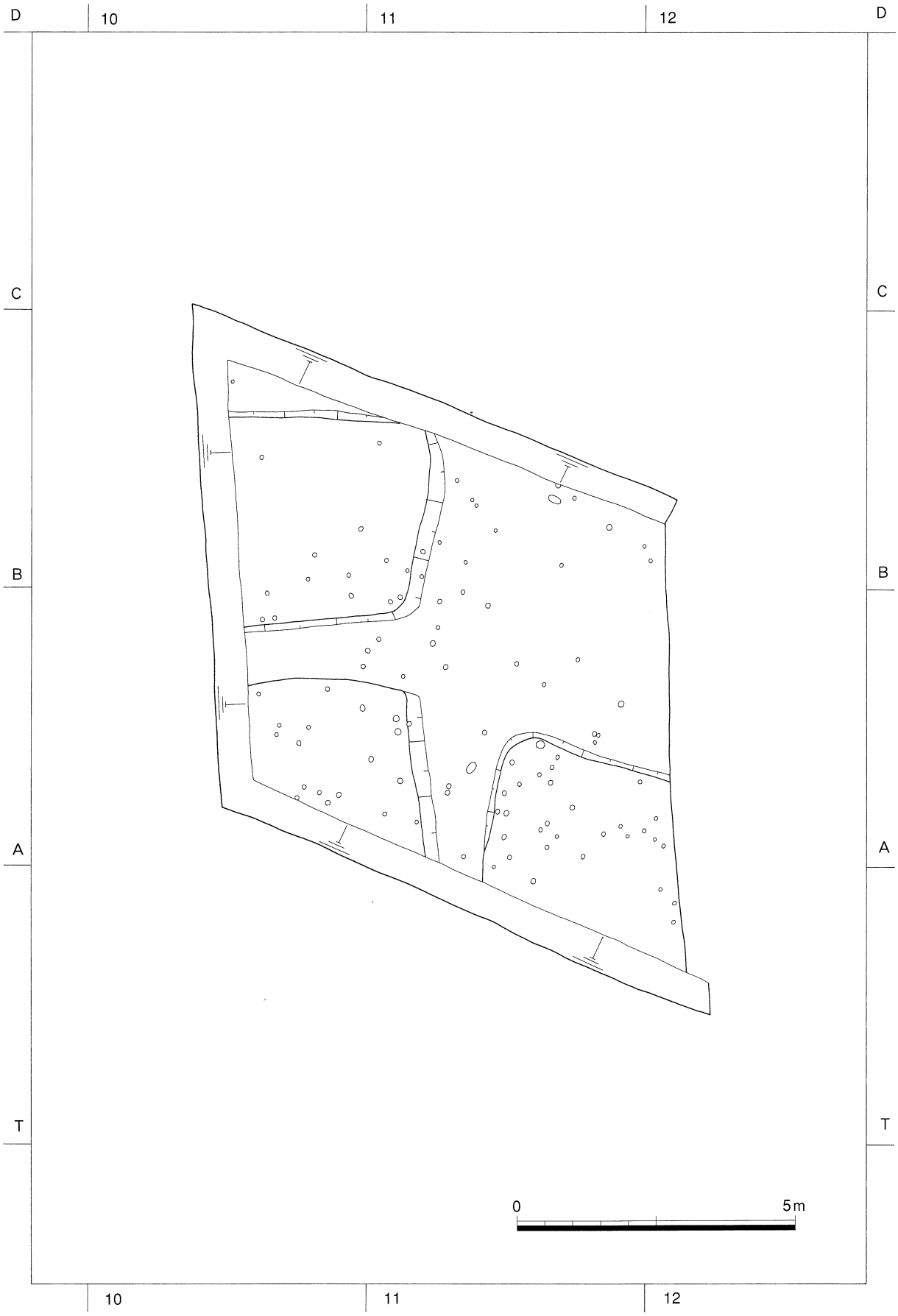
第83図　B－1区第7遺構面水田実測図(2)



第84図　A－10区第７遺構面水田出土遺物実測図



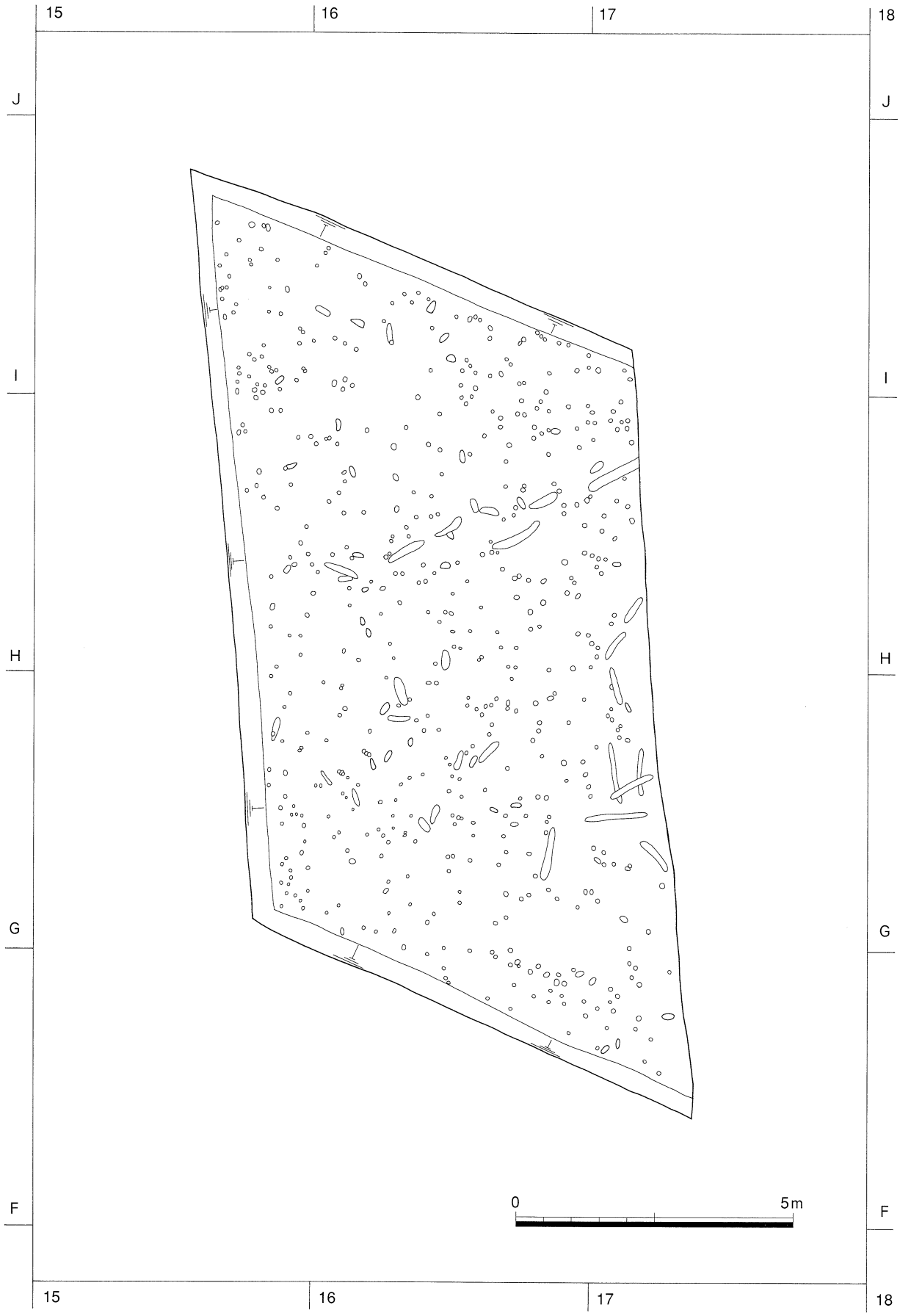
第85図　A・B区第７包含層出土遺物実測図



第86図　A－11区第６遺構面水田実測図

第87図　A−10区第６遺構面水田実測図

第88図　A－9区第6遺構面水田実測図



第89図　B－2区第6遺構面水田実測図

第３節　古墳時代～古代（第６遺構面～第４遺構面）の調査と成果

(1)　遺構および出土遺物の観察

①第６遺構面

第６包含層出土遺物（第90図）

204は須恵器の杯蓋である。天井部は丸みを持ち、外面には回転ヘラケズリが施される。205は須恵器の杯身である。受部はほぼ水平に伸びる。206は弥生土器甕の口縁部で、「く」の字に屈曲する。

②第５遺構面

柵列　SG5001（第91図）

A－11区、γ－Ⅳ、β－11グリッドで検出された柵列で、長さは400cmを測る。

土坑　SK5001（第92図）

A－８区、β－Ⅳ、S－18・19、R－18グリッドで検出された。側溝に切られているが、長軸592cm（残存値）、短軸235cm、深さ50cmを測る。207・208は縄文土器である。207は深鉢の口縁部で端部に刻目を施す。208は深鉢の体部である。209は深鉢の底部で平底Ⅱ類である（幸泉2002a・2002b・2004a）。

第５包含層出土遺物（第97・98図）

210～216はＡ区出土である。210は縄文土器深鉢体部である。外面は２枚貝条痕を施すが、内面は磨滅気味である。211は弥生土器甕の体部（頸部）で「く」の字に屈曲する。212は須恵器の杯蓋つまみ部である。213は須恵器の高杯脚部で、端部を上方に拡張する。214は土師質土器の鍋口縁部である。215は須恵器の高台付杯で、底部に断面半円形の高台を持つ。216はサヌカイトの石核である。

217～222はＢ区出土である。217・218は弥生土器壺口縁部である。ほぼ水平に開いて口縁端部を上部に拡張する。218は口縁端部に凹線文を巡らせる。219は弥生土器小型壺の底部～体部である。尖底を呈し体部最大径は肩部にある。220・221は須恵器の杯身である。220は上向きの受部を有し、たちあがり部は短く内彎する。222は結晶片岩の磨石である。

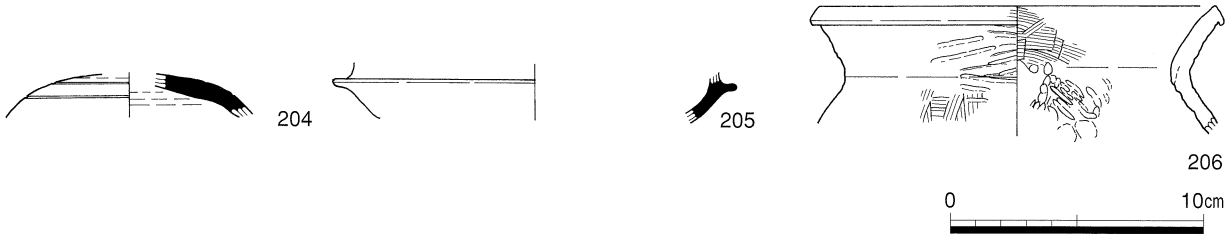
③第４遺構面

溝　SD4002（第99図）

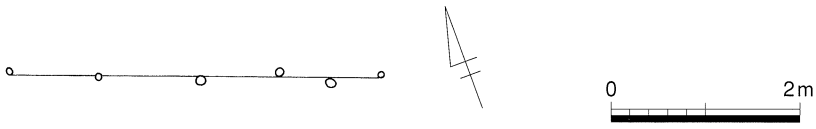
A－８区、β－Ⅳ、R－19グリッドで検出された。傾斜変換ライン付近である。長軸243cm、短軸60cm、深さ34cmを測る。平面形態は不整形、断面形態は逆台形を呈する。223はほぼ完形の弥生土器壺である。弥生時代中期後半と思われる。頸部に凹線文を２本配し、口縁端部はやや外反して肥厚する。体部最大径は肩部に有する。224は砂質片岩の敲石である。両端は多くの敲打痕で、かなり磨滅している。

溝　SD4003（第100図）

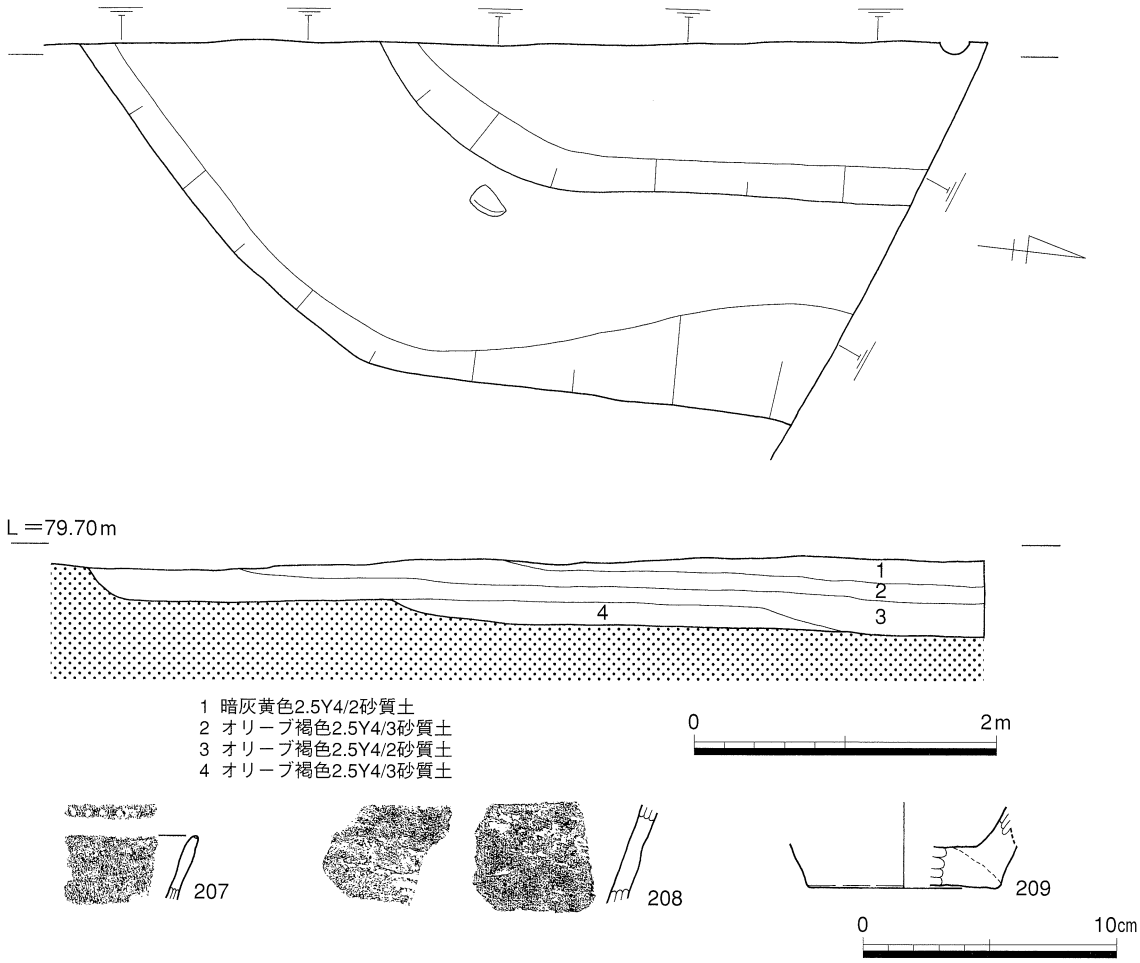
A－８区、β－Ⅳ、R・S－19グリッドで検出された。側溝に北側を切られる。SP12006に東側を切ら



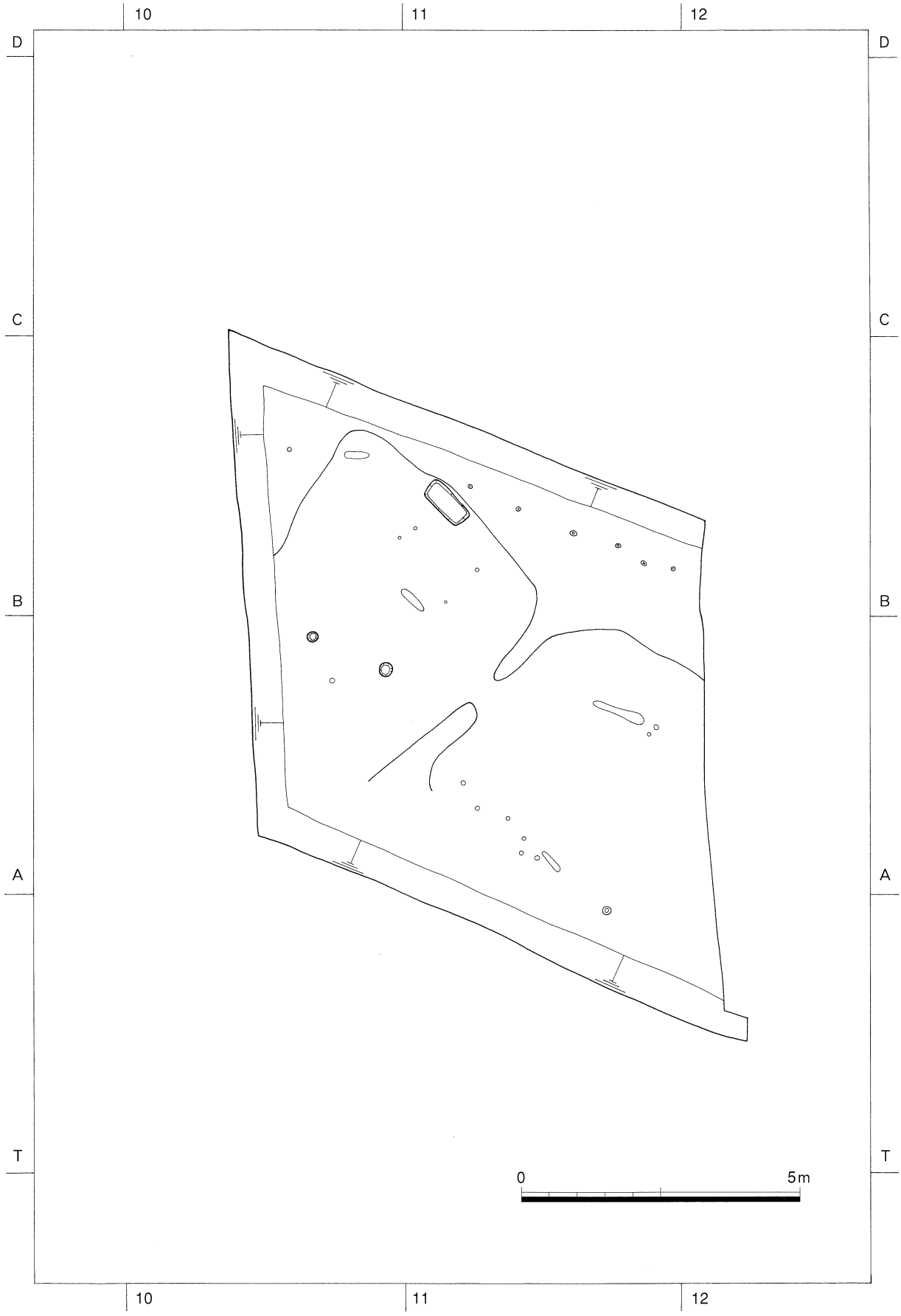
第90図　A・B区第6包含層出土遺物実測図



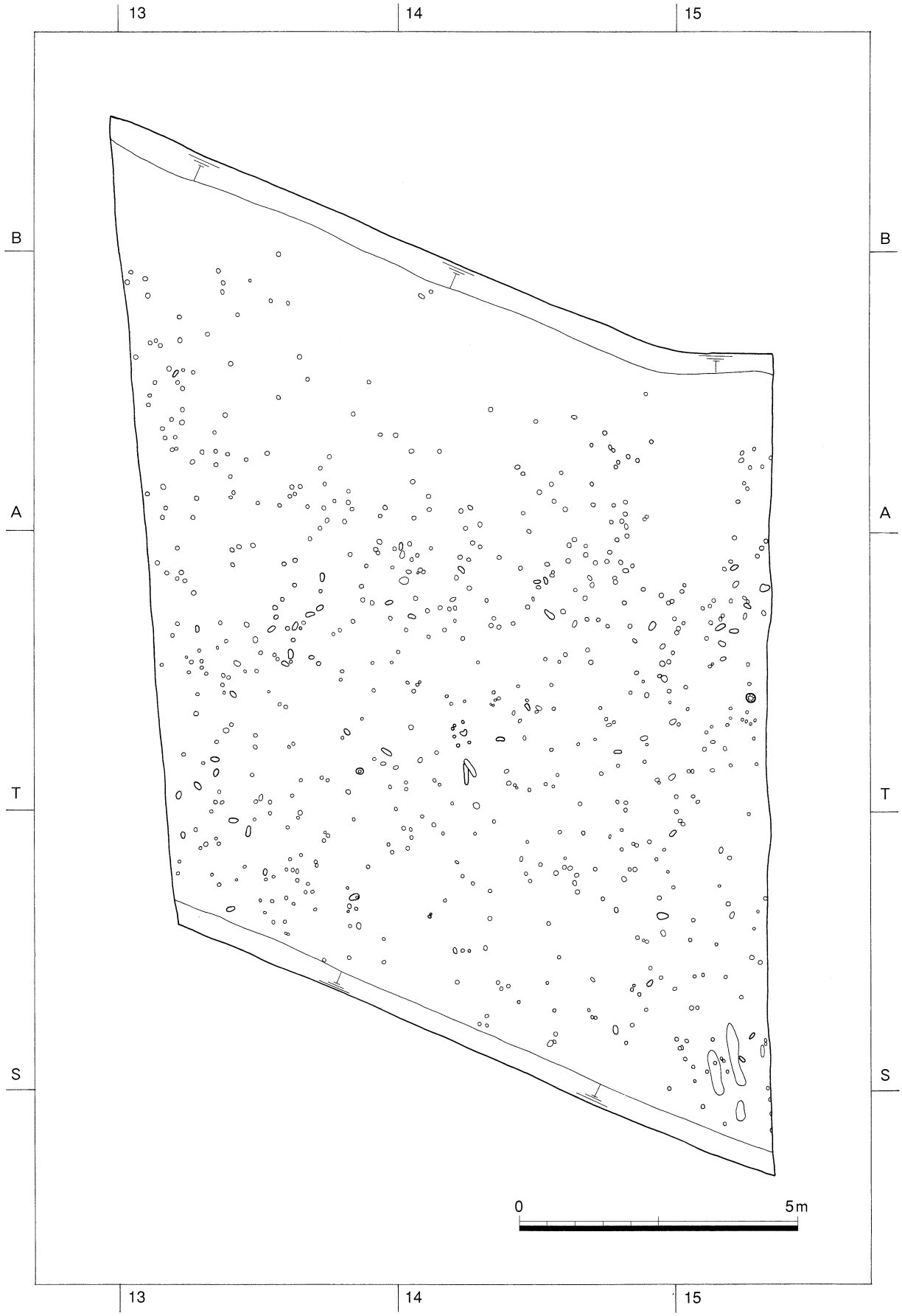
第91図　A—11区 SG5001遺構実測図



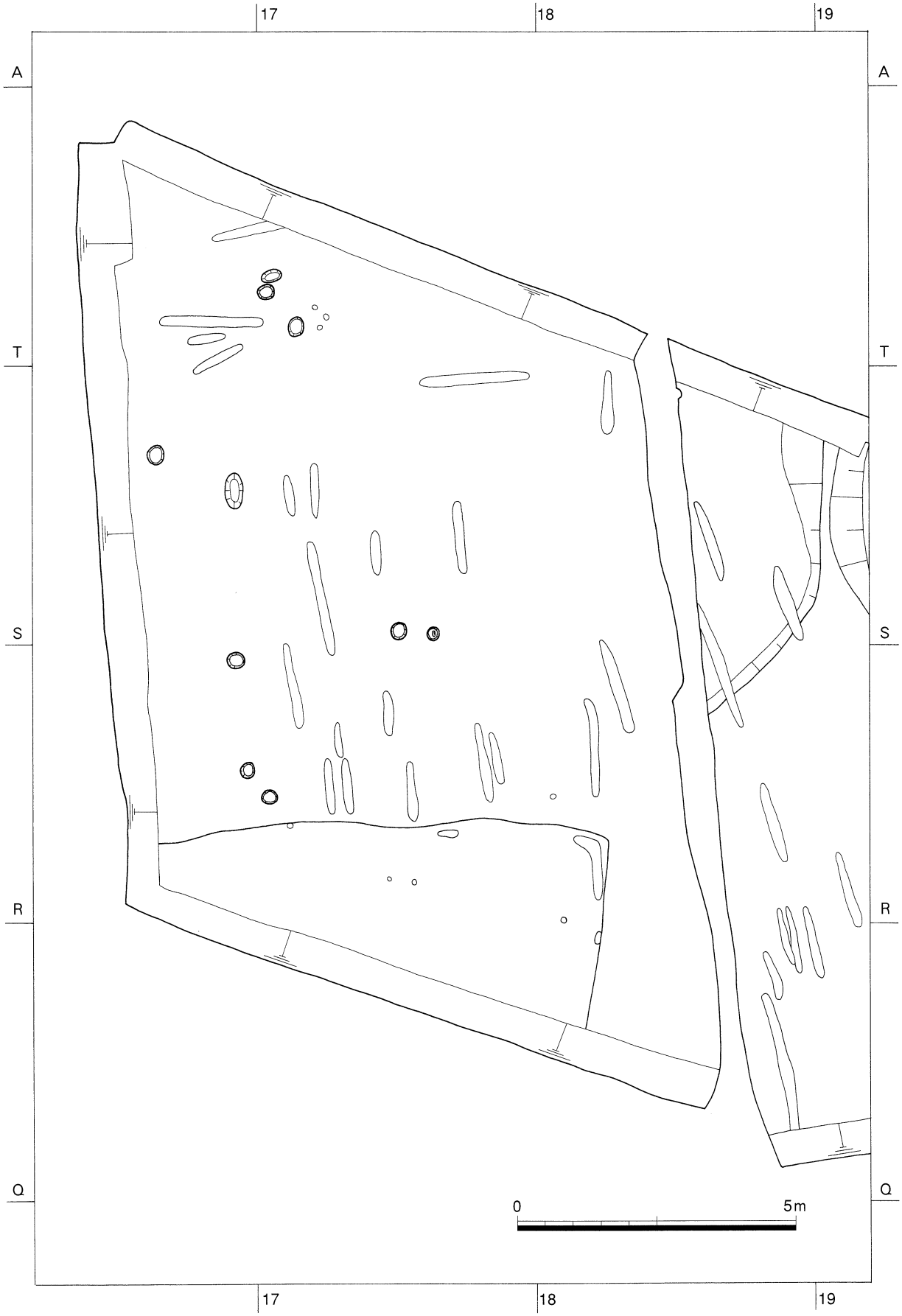
第92図　A— 8区 SK5001遺構・遺物実測図



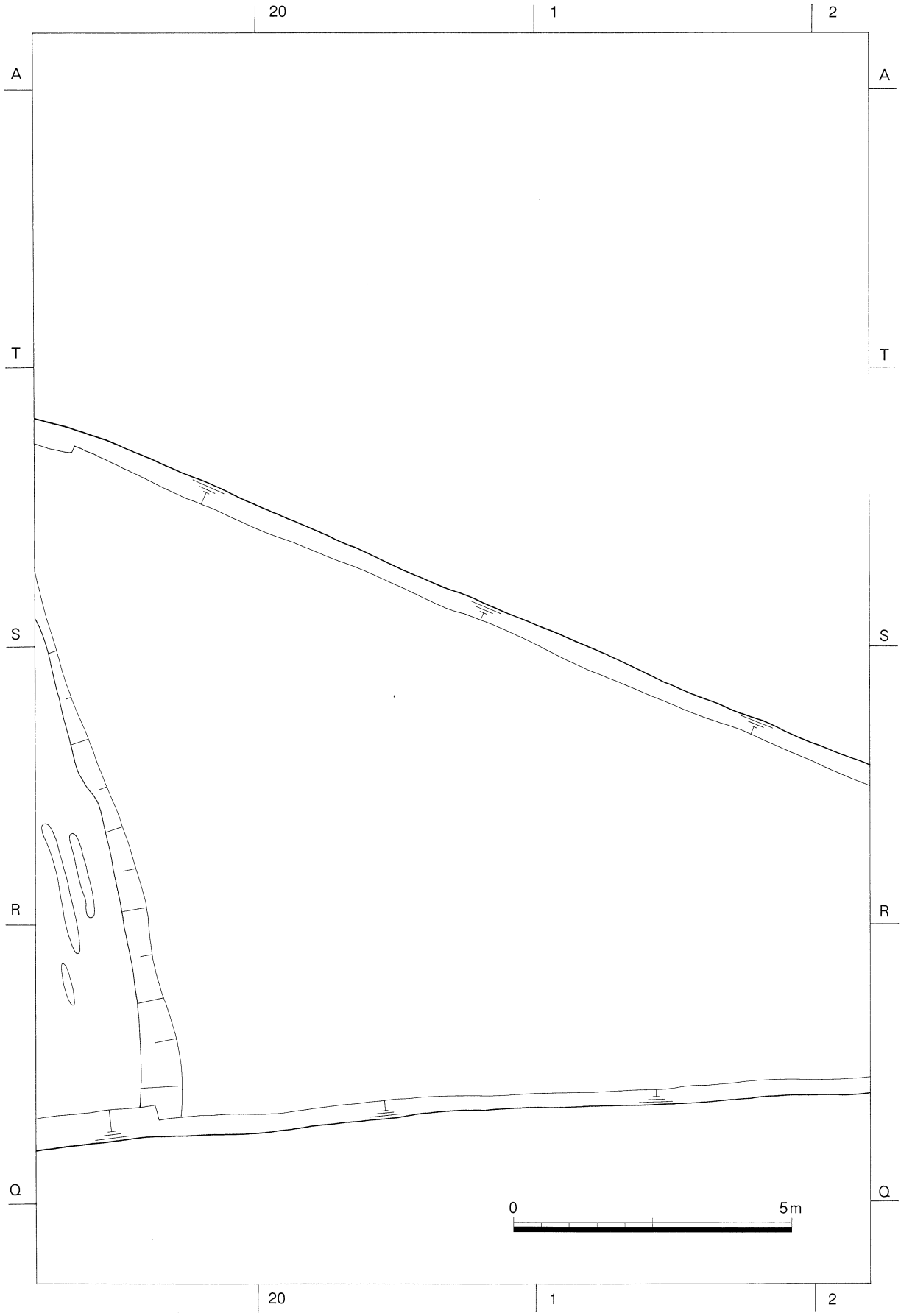
第93図　A—11区第５遺構面水田実測図



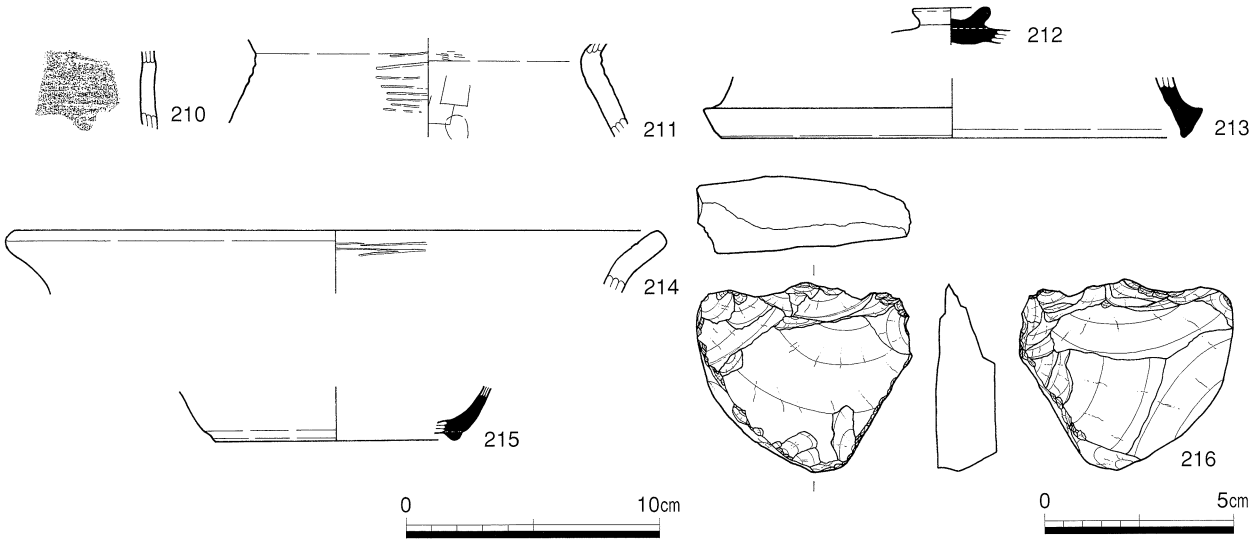
第94図　A—10区第５遺構面水田実測図



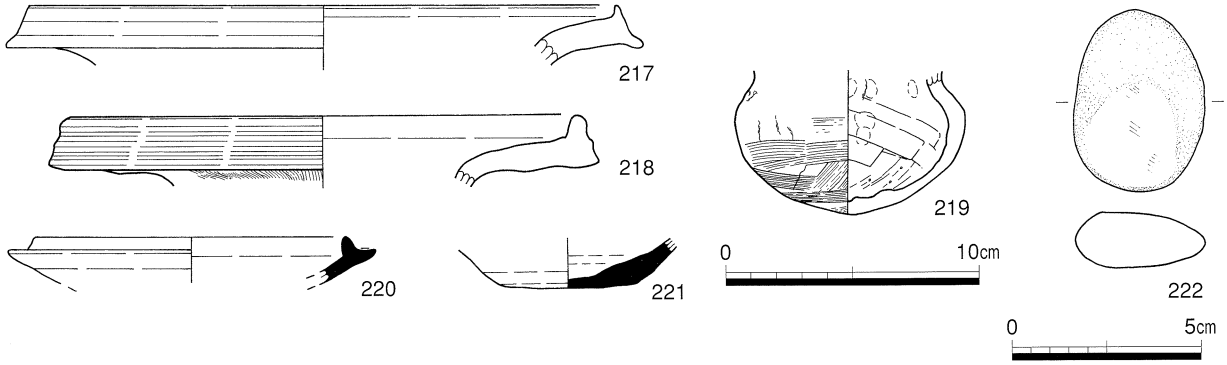
第95図　A－9・8区第5遺構面水田実測図



第96図　A－8区第5遺構面水田実測図



第97図　A区第5包含層出土遺物実測図



第98図　B区第5包含層出土遺物実測図

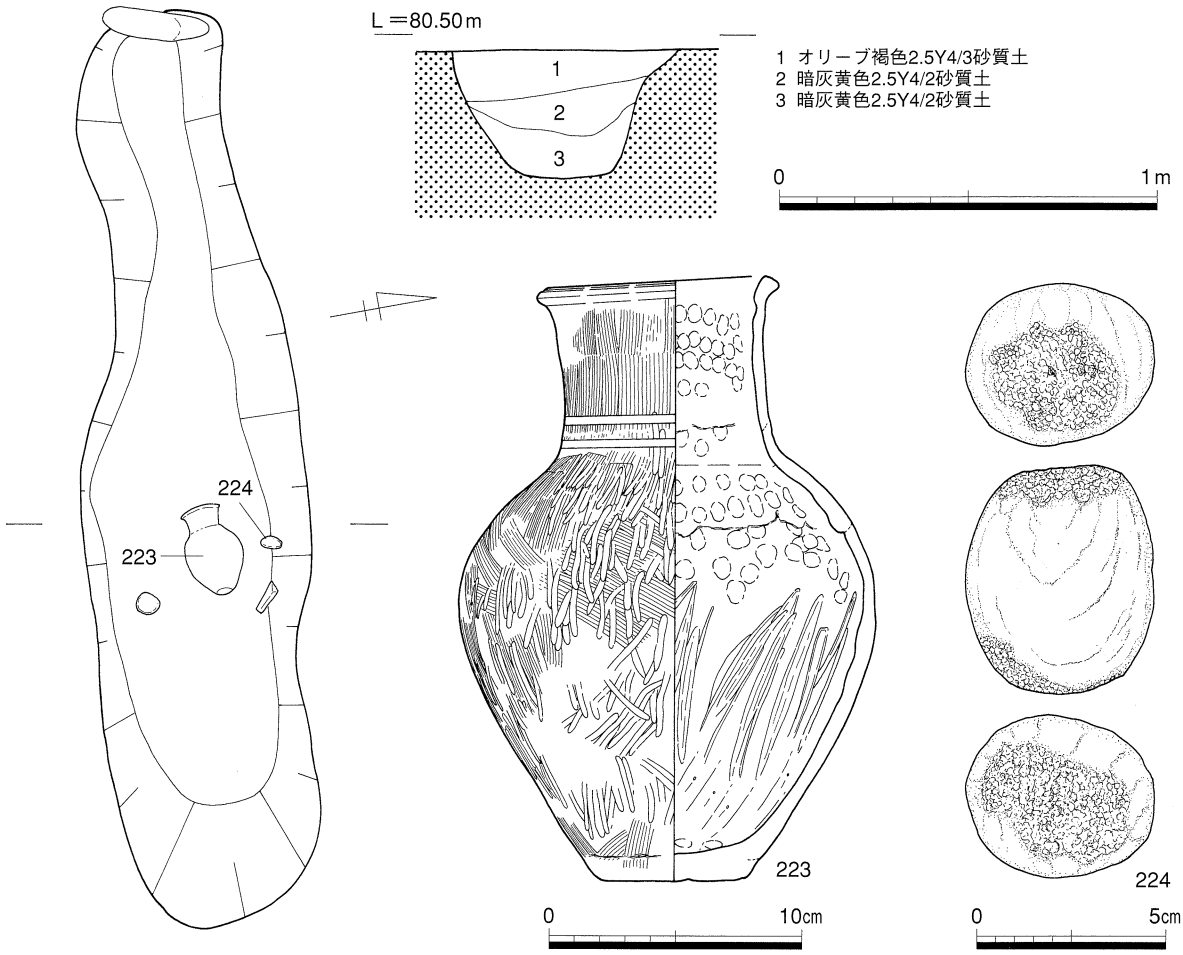
れ長軸380cm（残存値）、短軸78cm、深さ38cmを測る。断面形態はレンズ状である。この遺構の東側に、30cm大の石を南北方向に配置した列石が検出されている。

225は弥生土器壺の口縁部である。口縁部は外反して外上方に大きく開く。口縁端部は上下に拡張し外面は端面を持ち竹管による刺突文を施す。頸部外面には櫛描文が巡る。弥生時代中期に相当すると思われる。

土坑　SK4003（第101図）

A－5区、β－V、K・L－18グリッドで検出された。SK4004に切られる。長軸104cm（残存値）、短軸92cm、深さ38cmを測る。平面形態は楕円形、断面形態は逆台形を呈する。

226は土師質土器杯の口縁部である。体部は外上方に外反して開き口縁端部を丸くおさめる。内面に種子圧痕が見られる。器壁は薄めである。



第99図　A－8区 SD4002遺構・遺物実測図

柱穴　SP4040（第102図）

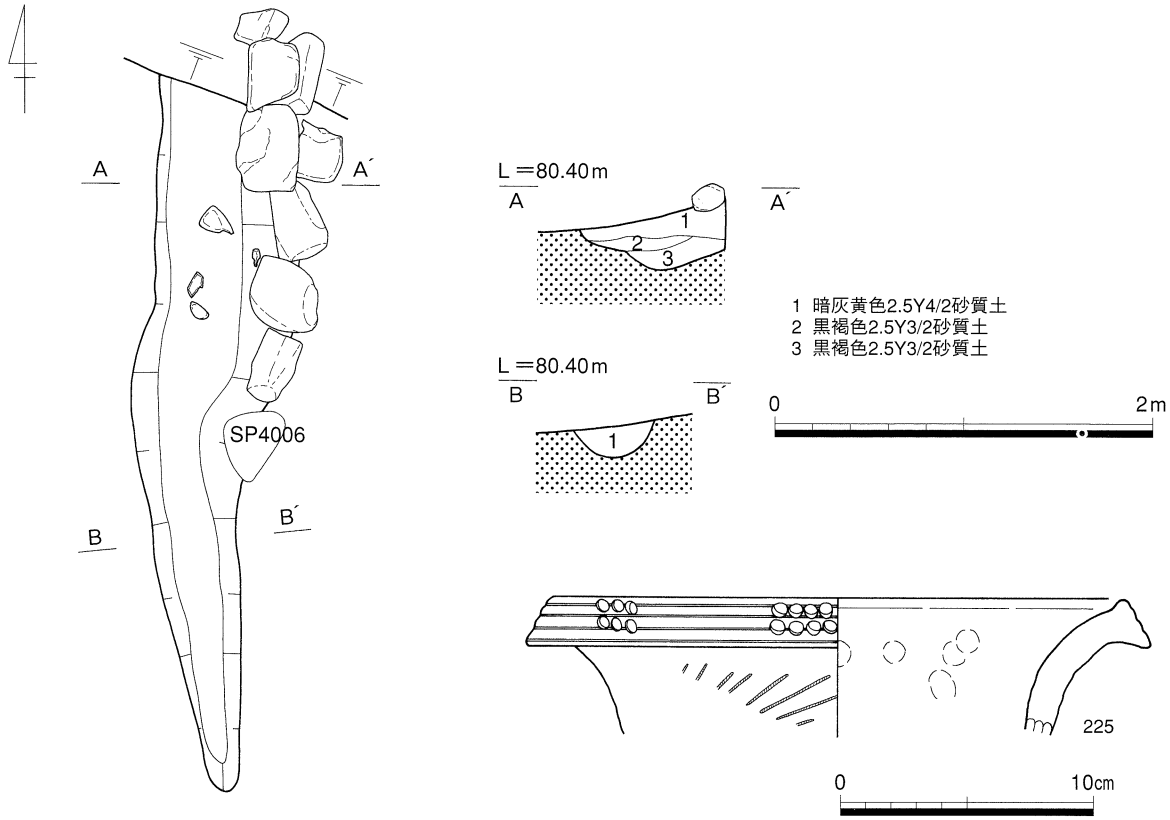
A－5区、β－V、L－12グリッドで検出された。第2遺構面のSP2851に切られる。長軸25cm、短軸18cm（残存値）、深さ23cmを測る。平面形態は楕円形、断面形態はU字形を呈する。

227は土師質土器の鍋である。口縁部は緩やかに外反して端部を丸くおさめる。内外面ともに指頭痕が顕著である。228は土師質土器底部である。内面は、被熱クラックを受けて剥離している。

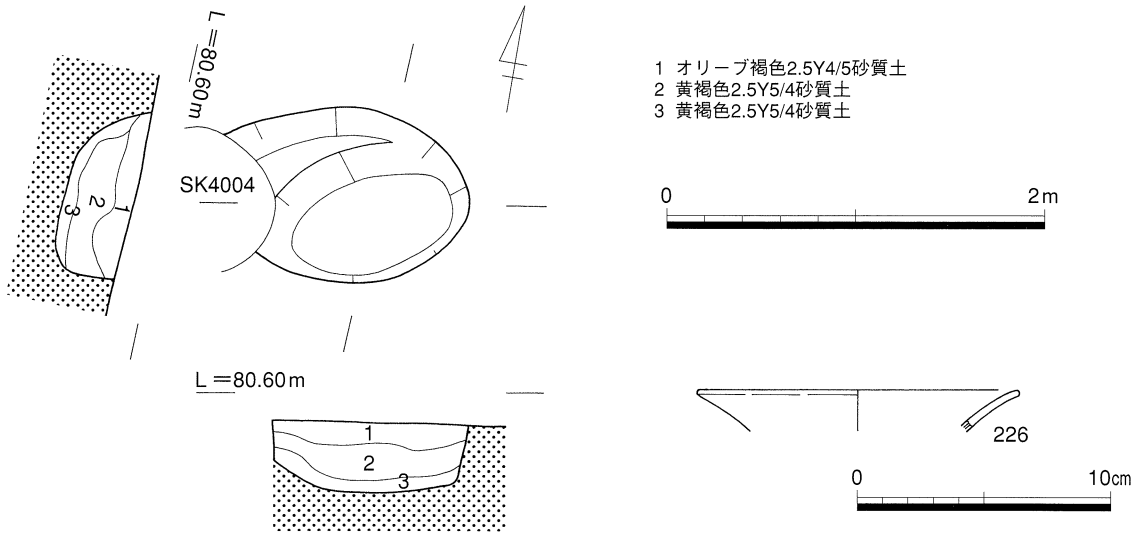
A－5区第4遺構面柱穴内出土遺物（第103図）

229はA－5区、β－V、L－10グリッドで検出されたSP4068から出土した土師質土器杯の口縁部である。端部は丸くおさめる。230はA－5区、β－V、L－10グリッドで検出されたSP4066から出土した土師質土器杯の底部である。体部は直線的に外上方に開き、底部と体部の境はやや突出する。231はA－5区、β－V、L－10グリッドで検出されたSP4067から出土した土師質土器の底部である。回転ヘラ切り後ナデ調整を施す。

232はA－5区、β－V、L－11グリッドで検出されたSP4059から出土したサヌカイトの石鏃で、凹基無茎式である。先端部を欠損している。



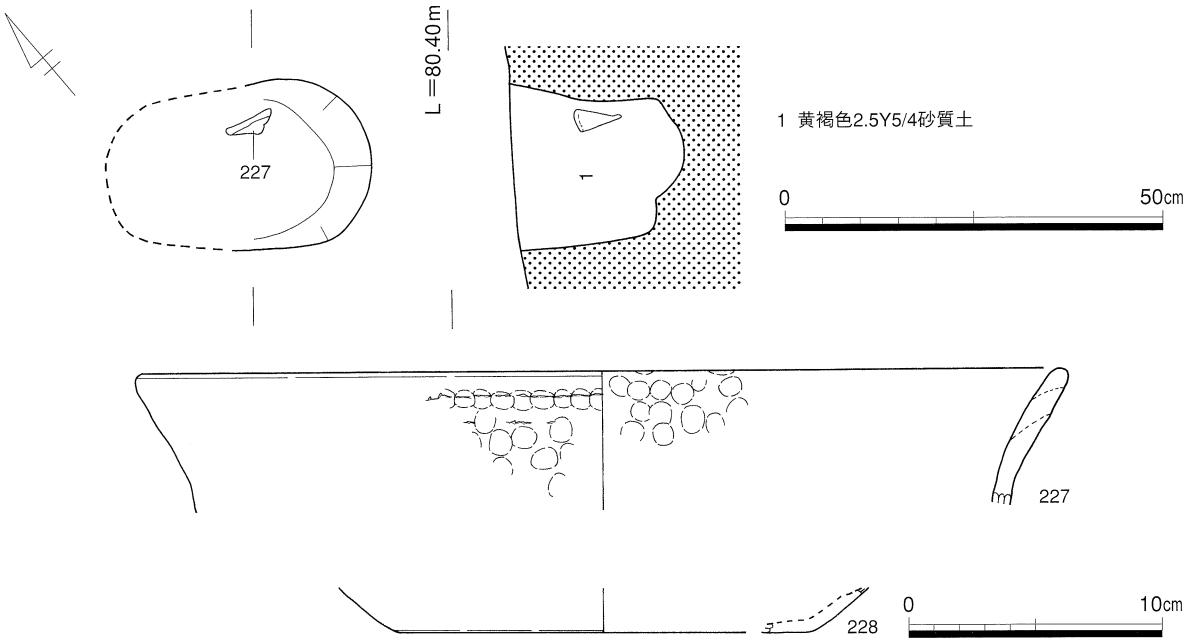
第100図　A－8区 SD4003遺構・遺物実測図



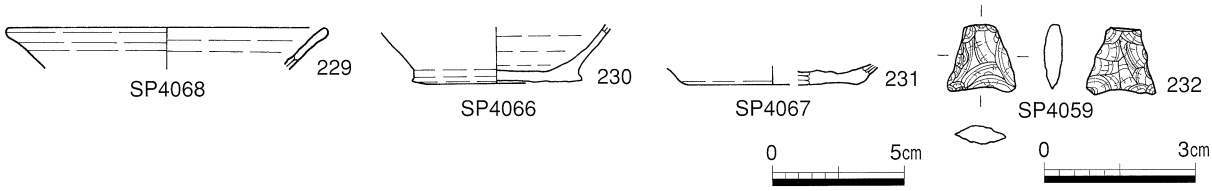
第101図　A－5区 SK4003遺構・遺物実測図

柱穴　SP4099（第104図）

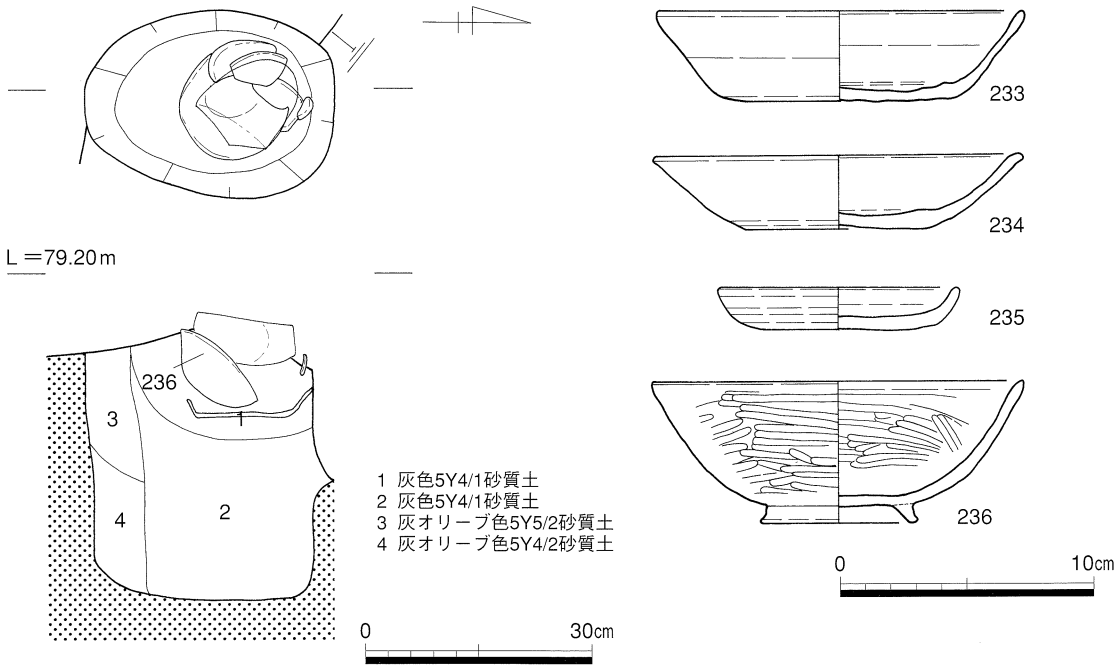
A－9区、β－Ⅳ、T－16グリッドで検出された。長軸33cm、短軸25cm、深さ35cmを測る。平面形態は楕円形、断面形態はU字形を呈する。柱の抜き取り後に土師質土器杯・土師質土器皿・黒色土器椀を重ね、最後に握り拳大の礫をおいた祭祀の痕跡と思われる。



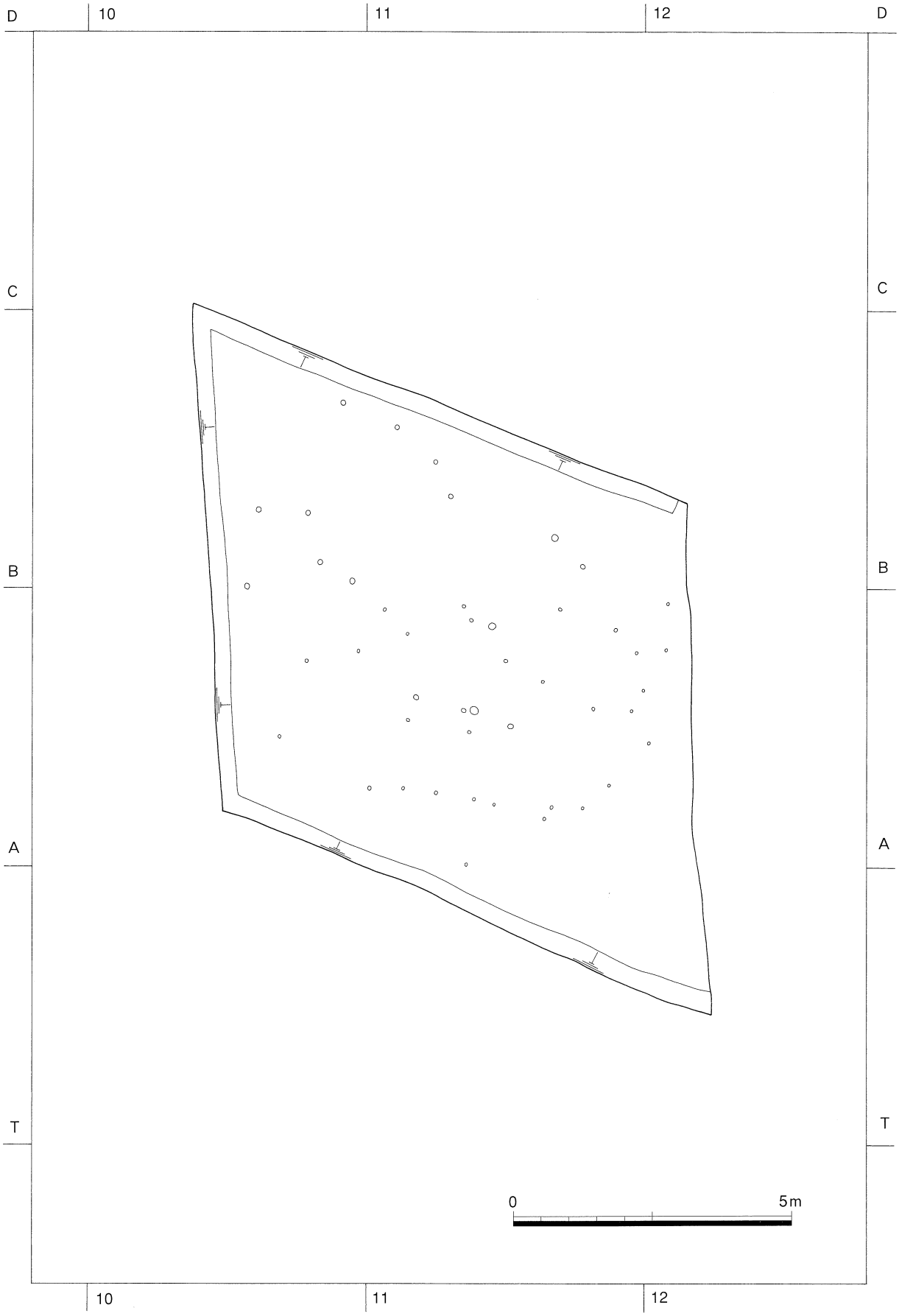
第102図　A－5区 SP4040遺構・遺物実測図



第103図　A－5区第4遺構面 SP 出土遺物実測図

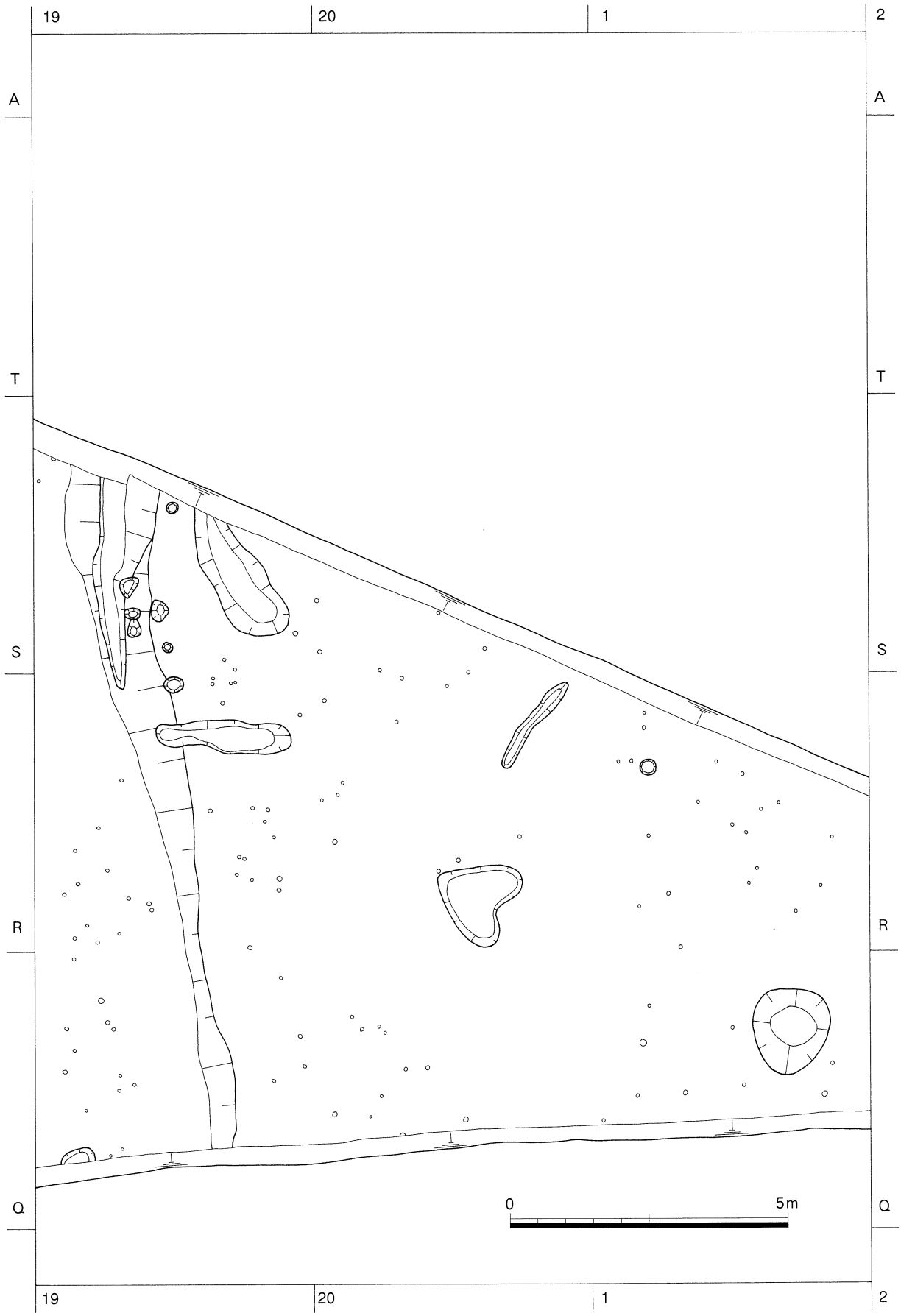


第104図　A－9区 SP4099遺構・遺物実測図

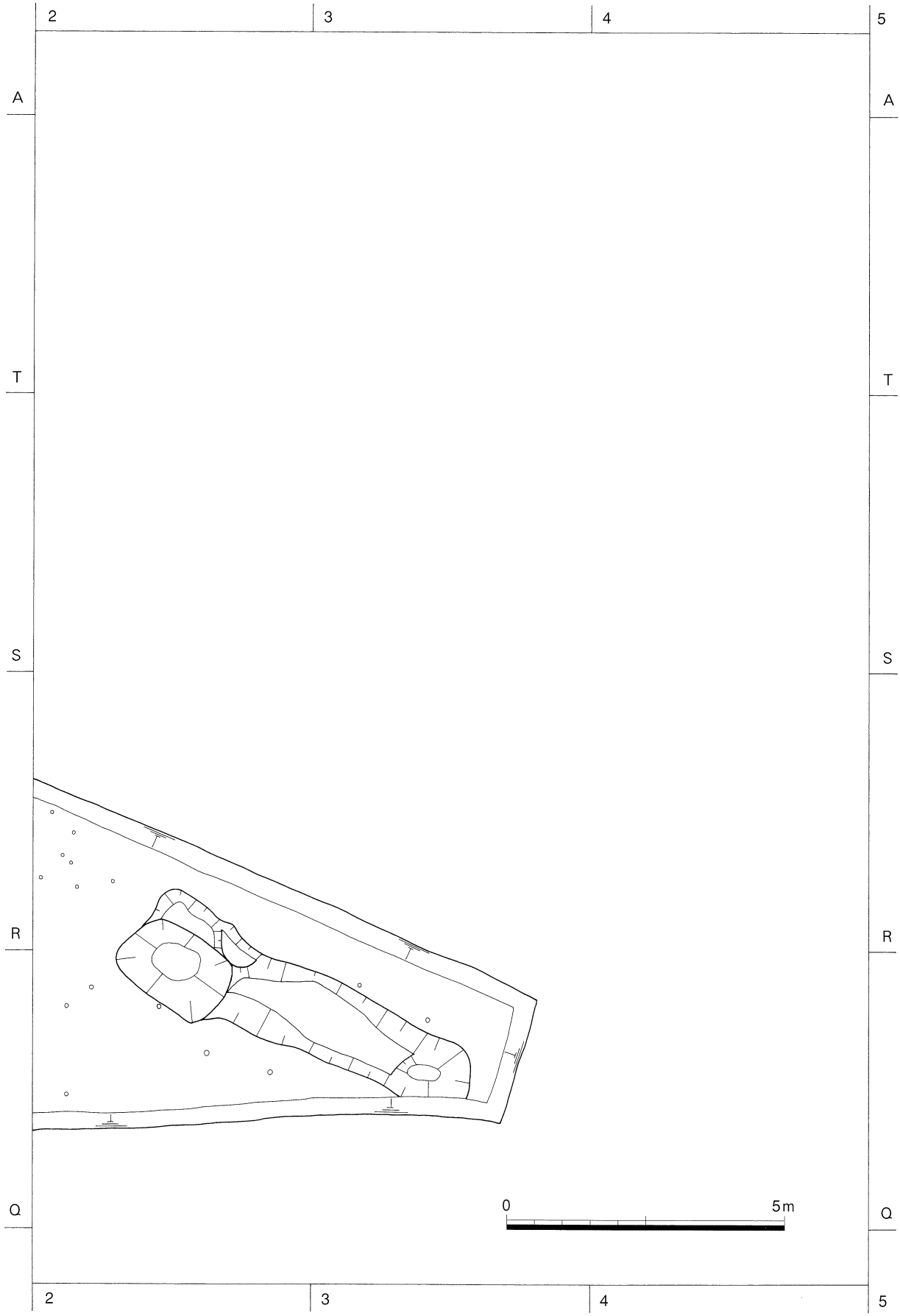


第105図　A−11区第４遺構面水田実測図

第106図　A－9・8区第4遺構面水田実測図

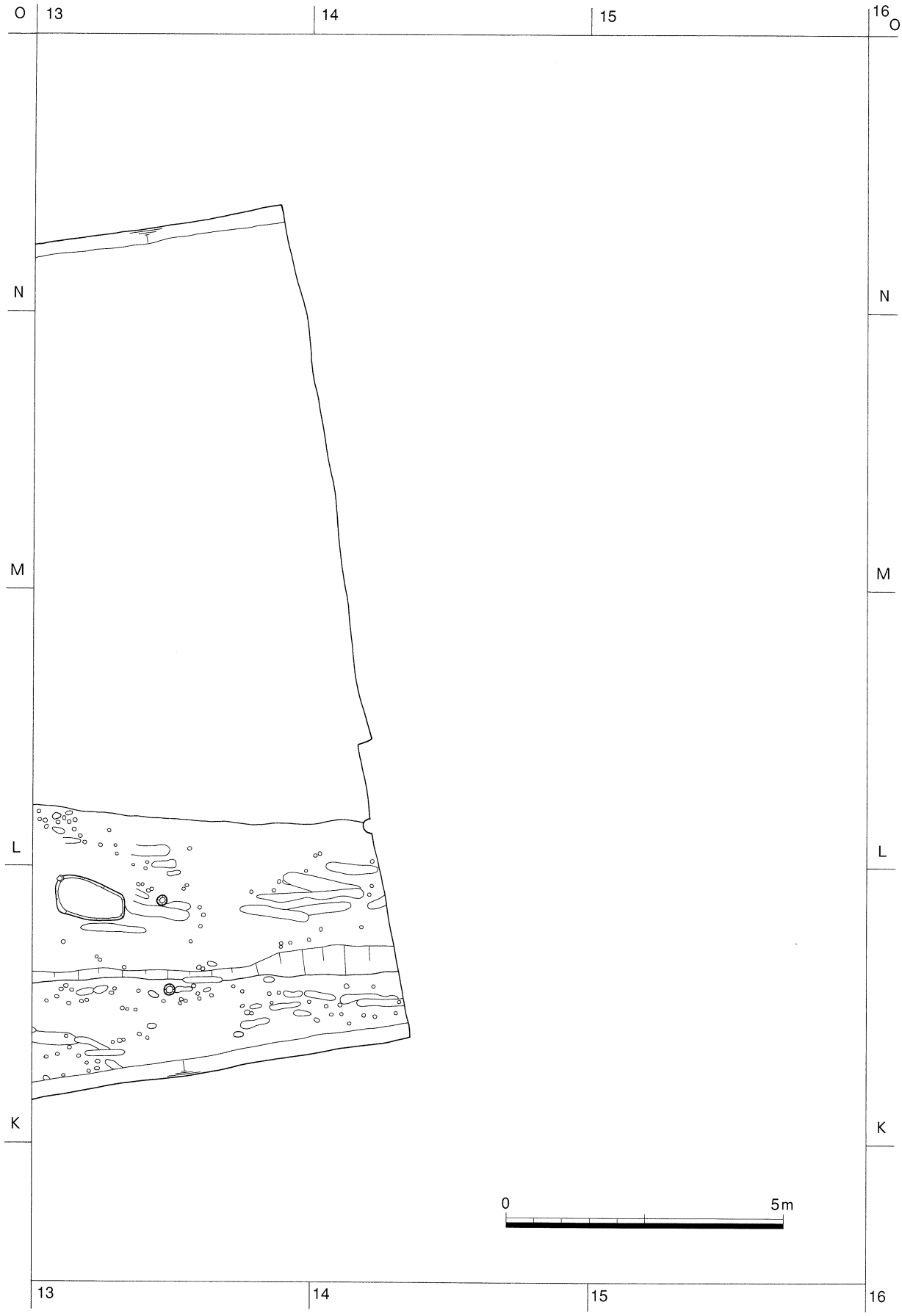


第107図　A－8区第4遺構面水田実測図(1)

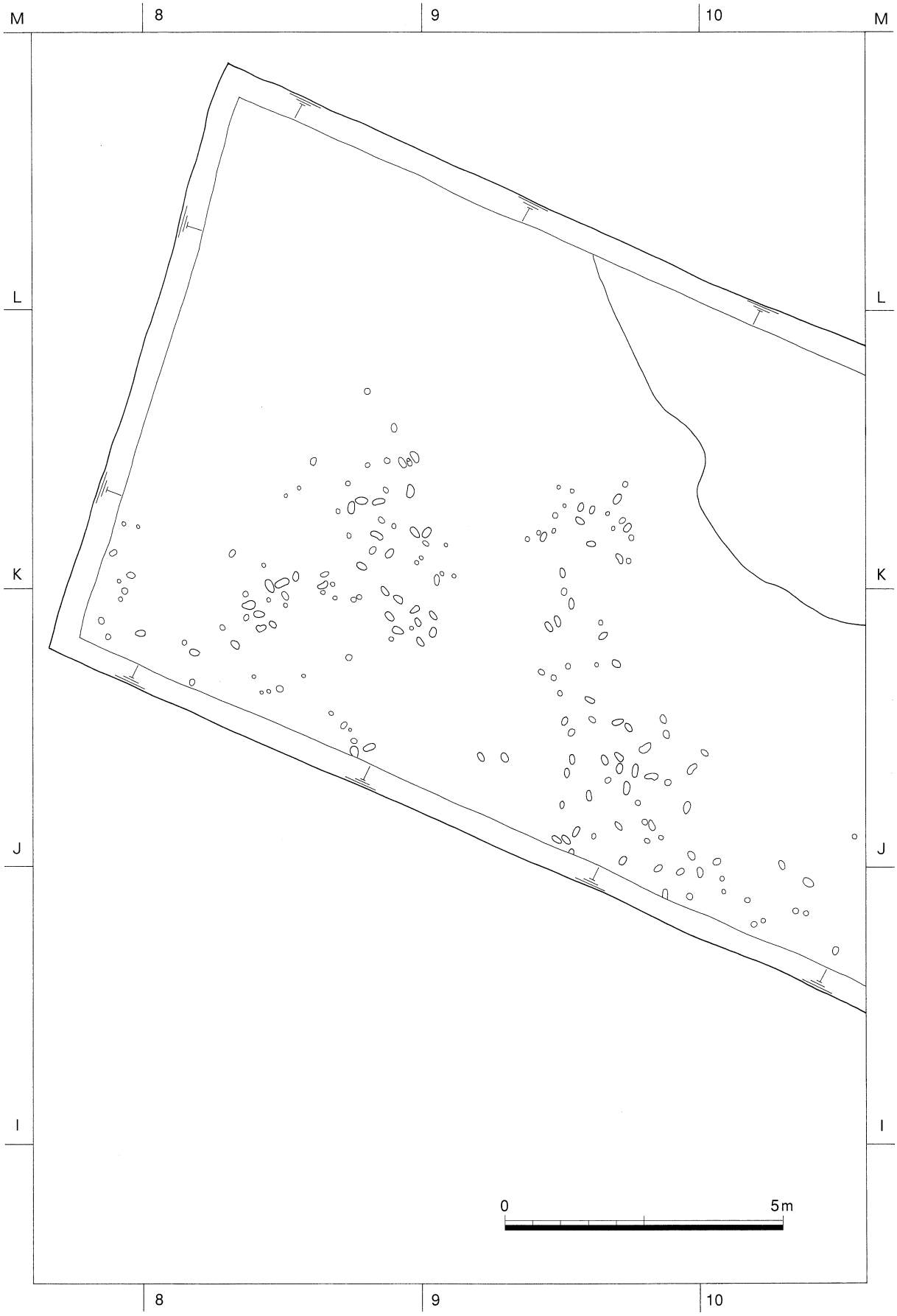


第108図　A－8区第4遺構面水田実測図(2)

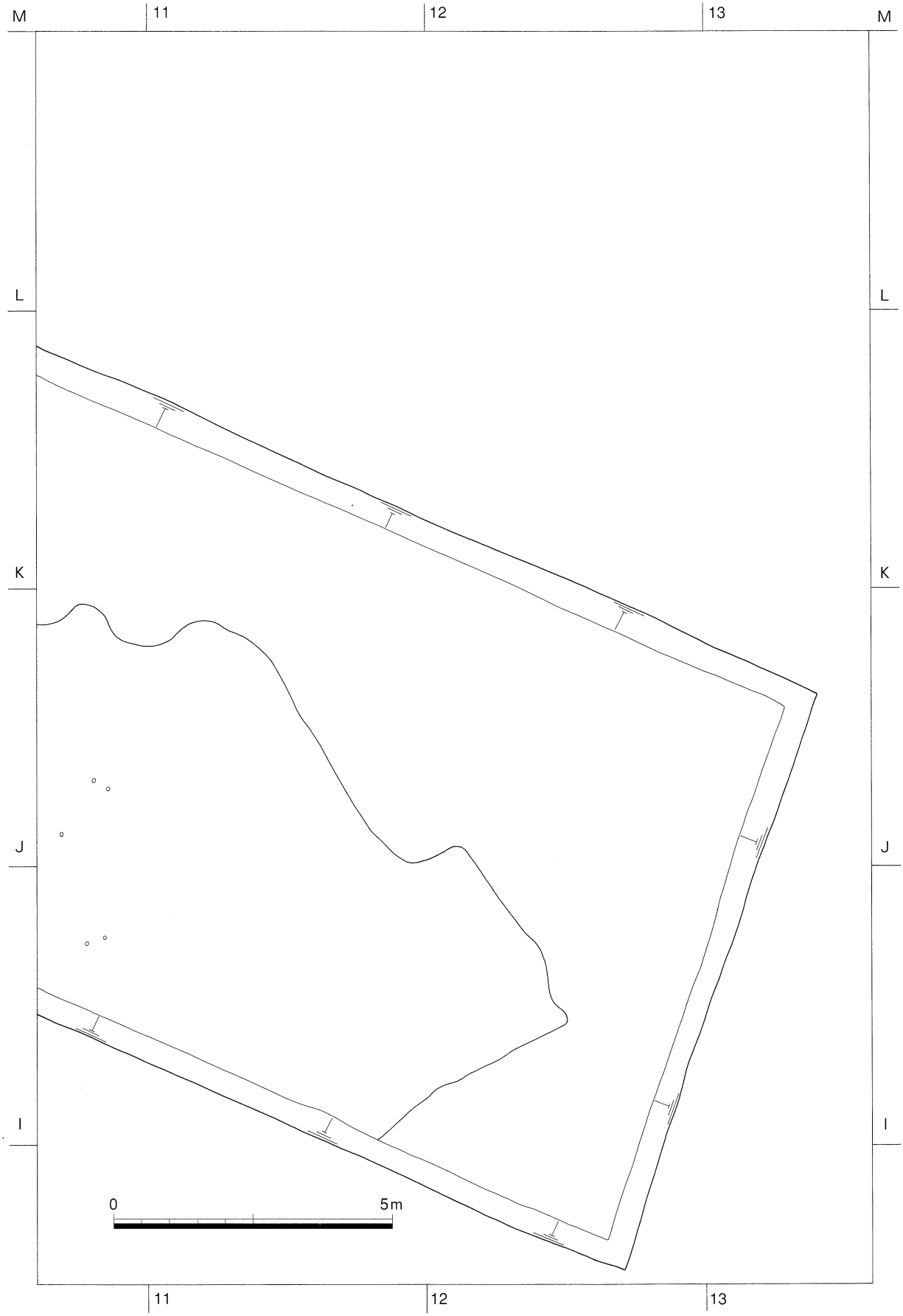
第109図　A－3区第4遺構面水田実測図(1)



第110図　A－3区第4遺構面水田実測図(2)

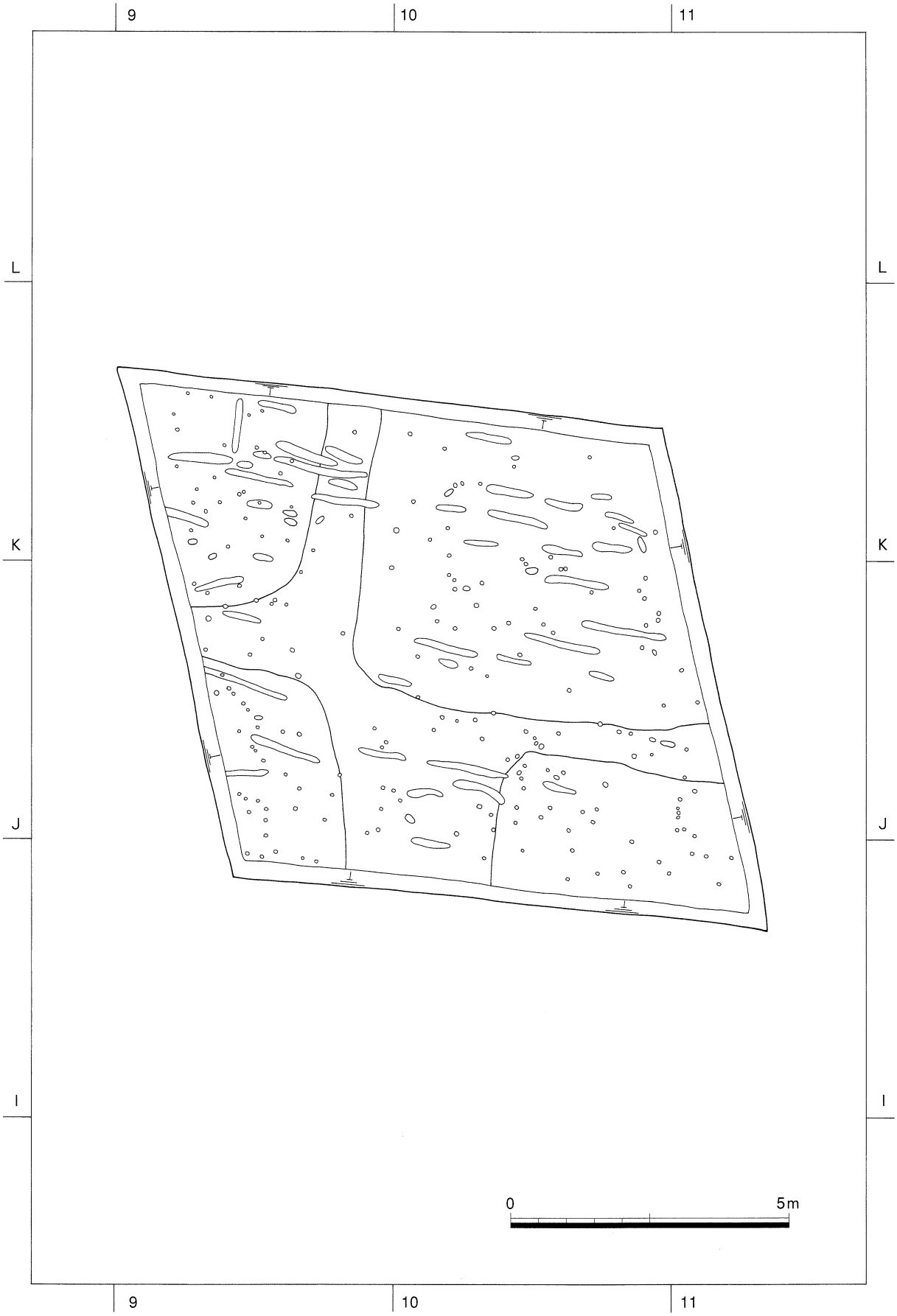


第111図　B－3区第4遺構面水田実測図(1)

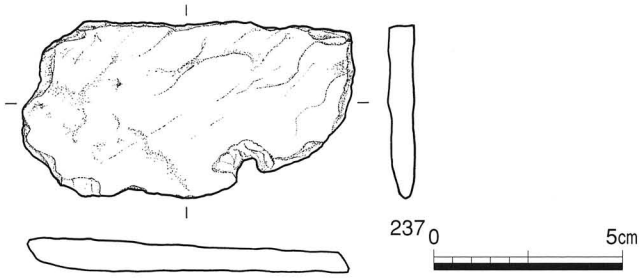


第112図　B－3区第4遺構面水田実測図(2)

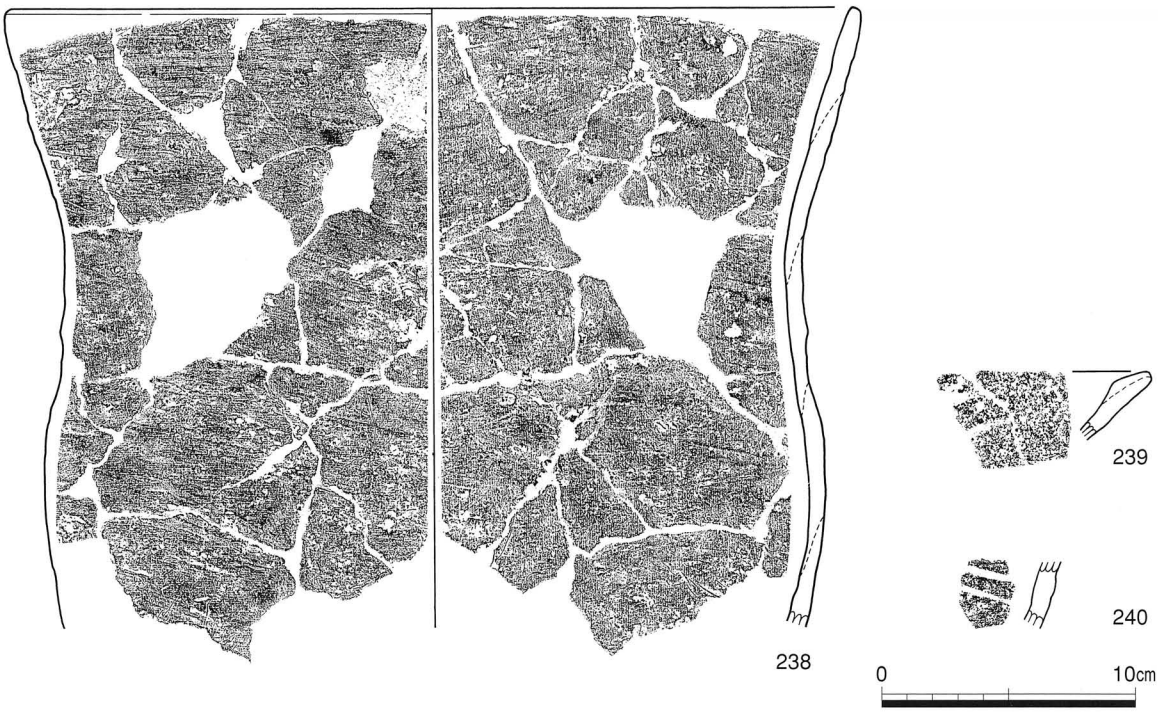
第113図　B－２区第４遺構面水田実測図



第114図　C－２区第４遺構面水田実測図



第115図　A－3区第4遺構面水田出土遺物実測図



第116図　A区第4包含層出土遺物実測図(1)

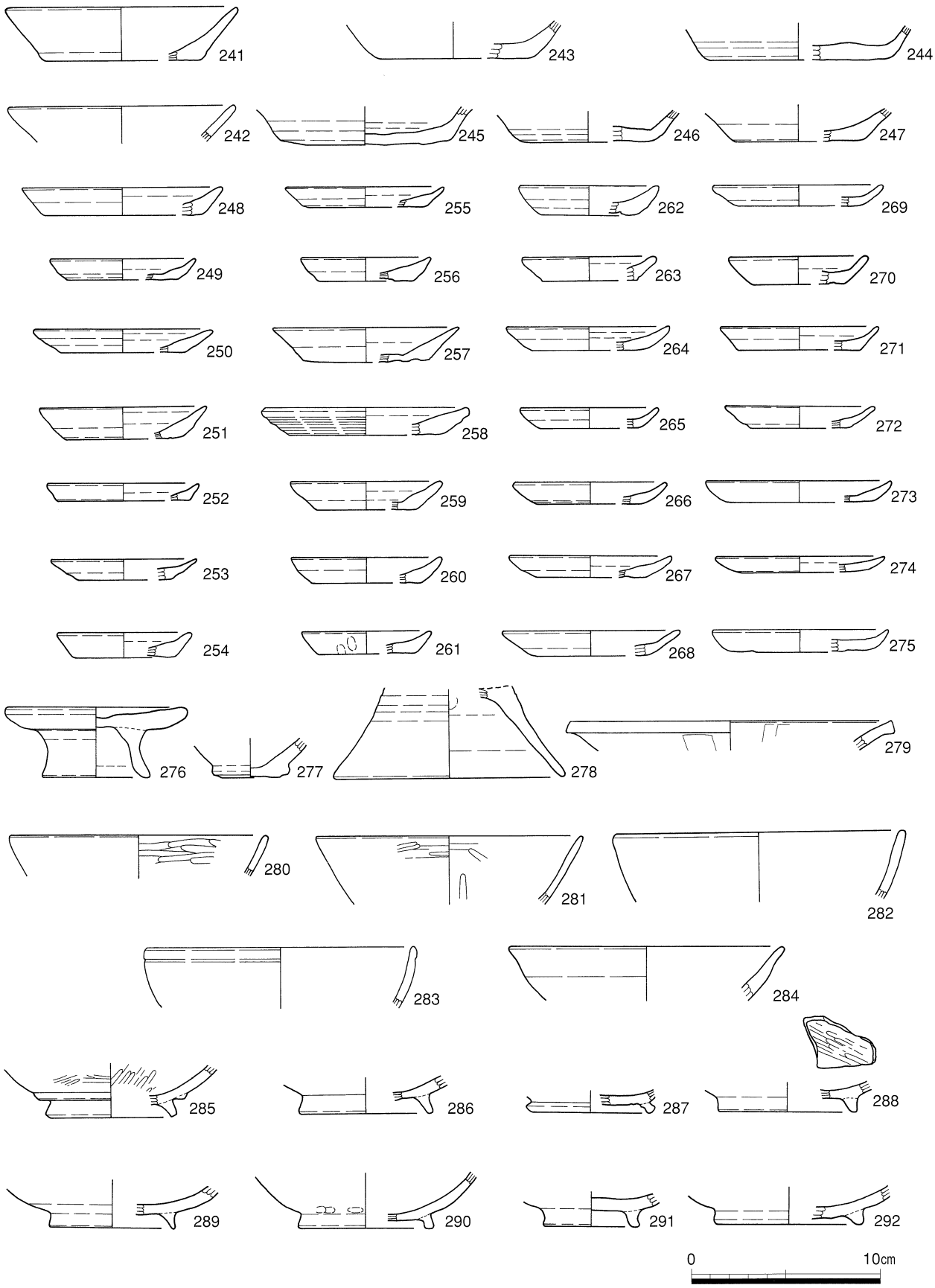
233は土師質土器杯である。体部は外上方に立ち上がり、口縁端部でわずかに肥厚して丸くおさめる。234は土師質土器杯である。体部は外上方に大きく開く。底部調整は回転ヘラ切り後板状圧痕を施す。235は土師質土器皿である。底部と体部の境は丸く、口縁端部も丸くおさめる。底部調整は回転ヘラ切りを施す。236は黒色土器椀である。内外面ともに、ヘラミガキを丁寧に施し炭素を吸着させる。体部は内彎して外上方に立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。高台は断面逆三角形で、ハの字に開く。

第4遺構面水田出土遺物（第115図）

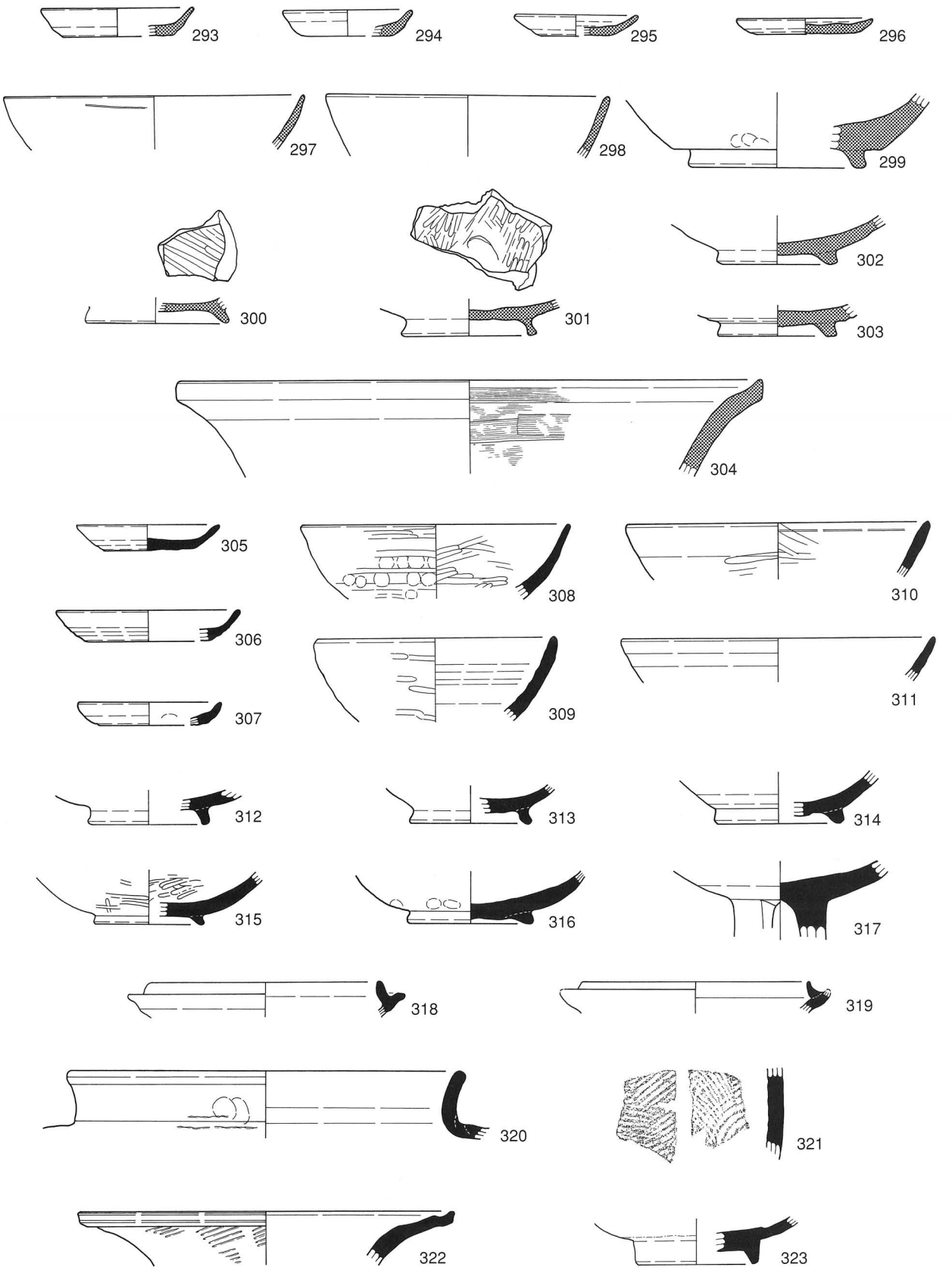
237はA－3区から出土した結晶片岩の石庖丁である。刃部は片面に施され、紐孔を有すると思われるが、磨滅が著しく断定はできない。

A区　第4包含層出土遺物（第116～119図）

238～240は縄文土器である。A－5区からの出土である。238は深鉢の口縁部～体部である。体部か



第117図　A区第4包含層出土遺物実測図(2)



第118図　A区第4包含層出土遺物実測図(3)

ら頸部にかけて緩やかにくびれて、口縁部を弱く外傾気味に直口させ、端部付近を若干内傾気味に立ち上げる。縄文中期末～後期前葉に相当する。239は浅鉢の口縁部である。大きく外傾して鍋形を呈すると思われる。240は深鉢の体部である。やや磨滅が進んでいるが、２条を単位として区画内部に縄文を充填した緩い弧状縄文帯が確認できた。縄文後期前葉に相当する。

241～292は土師質土器である。241～247は杯である。241は、体部を直線的に外上方に開いて口縁端部を尖り気味におさめる。242は杯口縁部である。口縁端部は丸くおさめる。243～247は杯の底部である。244・245・247は底部回転ヘラ切り後ナデ調整を施す。

248～275は皿である。法量は、口径は6.1cm～10.4cm、底径は５cm～8.4cm、高さは0.9cm～1.8cmに分布する。口径・底部径は小片のため、復元が正確とはいいがたいものもある。248～257は口縁端部を尖り気味におさめる。257は器高が高めである。258～275は口縁端部を丸くおさめる。258は体部外面に細かくナデ調整が施される。底部調整は、磨滅・小片のため確認不可能なもの以外は、全て回転ヘラ切りによる。

276は脚付皿である。脚部は外反して外下方に若干開き、端部を丸くおさめる。皿部はほぼ水平で器高は低く、口縁端部を丸くおさめる。277は円盤状高台付小皿と思われる。突出気味の底部から体部は外上方に開く。底部調整は回転ヘラ切り後ナデが施される。278は脚部である。脚部はやや外反して外下方に開き、次第に器壁を薄くして端部を丸くおさめる。外面上部に横ナデが細かく残る。279は壺あるいは甕の口縁部である。大きく外上方に開く口縁部は端部を断面方形におさめる。

280～292は土師質土器椀である。280～284は口縁部である。280は黒色土器で、内面にヘラミガキ後、炭素が吸着されている。281は内外面にヘラミガキを施すが磨滅気味である。282・283は口縁端部を丸くおさめる。284は口縁部に横ナデが施され、口縁端部を尖り気味におさめる。285～292は底部である。285～288は黒色土器椀である。285は内外面に炭素吸着が認められる。外面の底部と体部の境に稜を有する。高台は断面方形を呈してハの字に開く。286は内面に炭素吸着、高台は高めでハの字に開く。287は内外面に炭素吸着、高台は低めでハの字に開く。288は内面に炭素吸着、ヘラミガキが認められる。289は、高台断面は逆三角形で高めである。290の高台は断面方形で、ハの字に開く。体部の下方に指頭痕が見られる。291の高台断面は逆三角形でほぼ直立する。292の高台は断面半円形で高さは低い。

293～304は瓦質土器であるが、焼成不良で土師質土器と見分けがつき難いものもある。293から296は皿である。293・294の体部はやや外反して外上方に開き、口縁端部を丸くおさめる。295・296の体部は大きく外上方に開いて口縁端部を丸くおさめる。297～303は瓦器椀である。297は口縁部に横ナデが施され、口縁端部を尖り気味におさめる。298は口縁端部を丸くおさめる。299は体部下部に指頭痕が見られる。器壁が厚く、高台は断面方形でハの字に開く。300・301は内面に緻密なヘラミガキが見られる。小片のため不明だが、黒色土器の可能性もある。高台はハの字に開く。302・303は高台断面は方形を呈し、幅広である。304は瓦質土器鍋の口縁部である。外反しながら外上方に開き、口縁端部を若干拡張し、断面逆三角形におさめる。内面にハケ調整が確認できる。

305～316は須恵質土器である。305～307は小皿である。体部はやや内彎して外上方に開き、口縁端部を丸くおさめる。305は焼成不良である。308～316は須恵質土器椀である。308～311は口縁部で、端部を丸くおさめる。308は口縁部外面に横ナデを施す。内外面ともに簡略なヘラミガキが見られる。外面は横ナデの跡が強く残り、指頭痕の痕跡もある。309は内面の調整はナデだが、外面には簡略なヘラミガキを施す。器壁は厚めである。310は内外面にヘラミガキを施す。311は調整は不明瞭だが、口縁部外

面に横ナデの跡が残る。312～316は底部である。312・313の高台は高めでハの字に開く。314は高台の断面は半円形を呈する。315は高台は断面逆三角形で、高さは低くハの字に開く。内外面にヘラミガキが部分的に残る。316は外面下部に指頭痕が残る。高台は低い。

317～322は須恵器である。317は高杯脚部～杯部である。脚部には方形透かしを施す。318・319は杯身である。受部はやや上方に開いて端部を丸くおさめる。立ち上がり部は内傾して端部を尖り気味におさめる。320は甕の口縁部である。口縁部はやや外反して短く立ち上がり端部を丸くおさめる。321は甕の体部である。外面にはタタキ、内面には同心円状当て具痕が残る。322は壺の口縁部である。外反しながら外上方に大きく開き、端部は上方に拡張する。口縁部内面に強い横ナデが入る。

323は白磁碗の底部である。外面下半が露胎で高めの輪高台を削り出す、横田・森田分類の白磁Ⅷ類に相当する。

324～327は石器である。324はサヌカイトの石鏃未製品である。平基無茎式である。基部を欠損している。素材の剥離面が未調整のまま残されている部分がある。325はサヌカイトの楔形石器である。両極打法に加えられた縁辺部はつぶれが著しい。326はサヌカイトの２次加工のある剥片である。部分的に階段状の調整が加えられ、刃部が作り出されている。

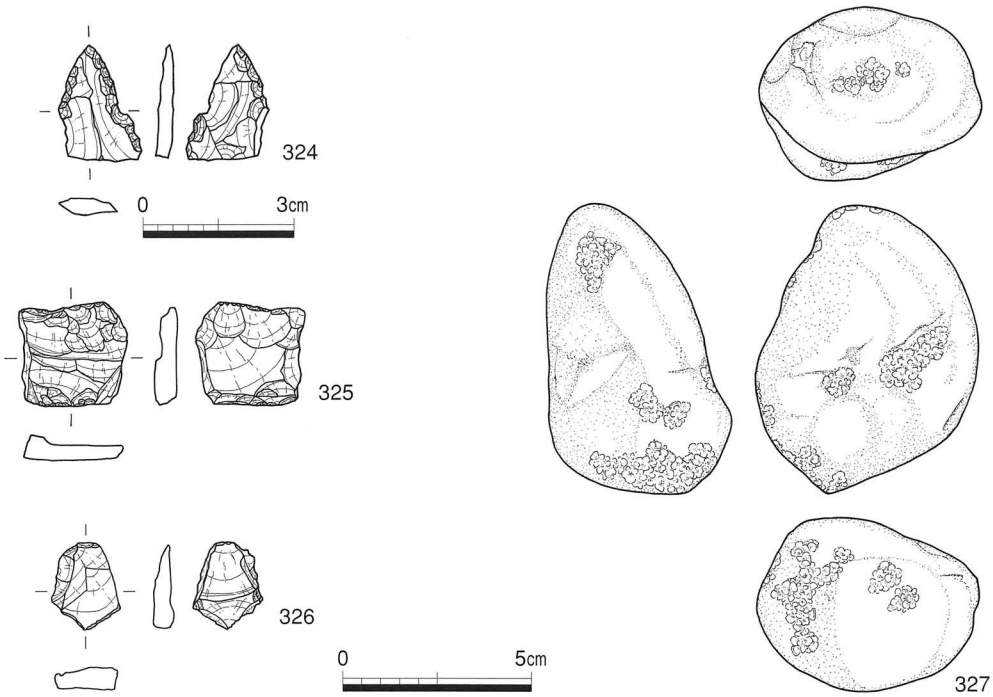
B区　第４包含層出土遺物（第120図）

328～333は土師質土器である。328は杯である。体部はやや内彎して外上方に立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。横ナデによる稜線が強く残る。底部調整は回転ヘラ切りを施し、板状圧痕が残る。329は小皿である。体部はやや内彎して立ち上がり口縁端部を尖り気味におさめる。330～332は釜口縁部である。口縁部わずかに内彎し、端部を丸くおさめる。低い鍔がめぐる。333は釜の脚部である。

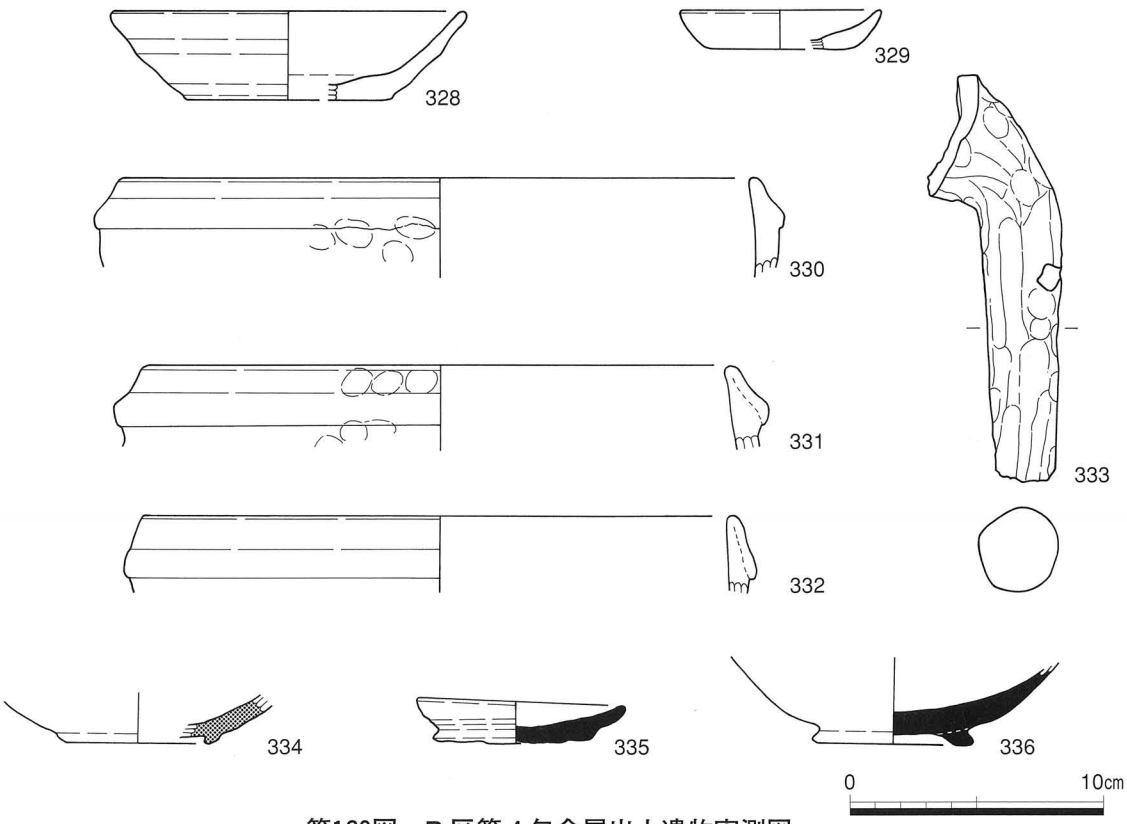
334は瓦器椀の底部である。ごく小さな断面半円形の高台を有する。335は須恵質土器の小皿である。体部は内彎気味に外上方にのび、口縁部は丸くおさめる。体部と底部の境は外方に突出する。336は須恵質土器椀である。高台部は断面方形を呈し、ハの字に開く。

C区　第４包含層出土遺物（第121図）

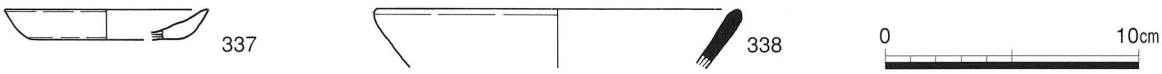
337は土師質土器小皿である。体部は外上方に立ち上がり、口縁端部を尖り気味におさめる。338は須恵質土器杯であるが磨滅が著しい。



第119図　A 区第 4 包含層出土遺物実測図(4)



第120図　B 区第 4 包含層出土遺物実測図



第121図　C 区第 4 包含層出土遺物実測図

第４節　古代～中世
（第３遺構面～第１遺構面）の調査と成果

(1)　遺構および出土遺物の観察

①第３遺構面

掘立柱建物　SA3001（第122図）

Ａ－１区、β－Ⅶ、Ｐ－７・８グリッドで検出された５基の柱穴で構成される掘立柱建物である。北側は側溝に切られて調査区外に広がると思われる。建物の規模は残存値で、梁間２間（264cm）、桁行３間（564cm）、床面積は11.7m²を測り、平面形態は長方形を呈する。柱間寸法は、梁間で205cm、桁行188cmを測る。棟方向はＮ－７°－Ｗに向く。柱痕跡は３基の柱穴で認められた。柱穴より土師質土器が数点出土しているが、小片のため図化していない。

溝　SD3004（付図６・７）

Ａ－４区、β－Ⅴ・Ⅵ、Ｌ－１・２　Ｋ－１・２・３・４　Ｊ－20・１・２・３・４・５グリッドで検出された。調査区の北から南へ貫通し、逆台形に近い断面形態で、比較的掘り込みも深い。溝としての形状を留めている部分では、幅282cm、深さ114cmを測る。しかし傾斜変換ラインから南へは溝としても形状と機能を留めず、地形の中にとけ込むようになる。おそらく南側低位にあると思われる水田へ水を供給する灌漑用水路と思われる。この溝からは後期～古墳時代初頭に相当する多量の弥生土器片が出土している。覆土は大きく４層に分かれ、各層とも多量の土器片を含む。比較的大型の破片の上に直径１～３cmほどの小破片が密に出土している。出土状況を見ると、溝であるにもかかわらず、ローリングを受けた状態は見られず、ある程度同一固体と思われるまとまりが見られることから使用が不可能となった土器の廃棄行為が行われていたと思われる。

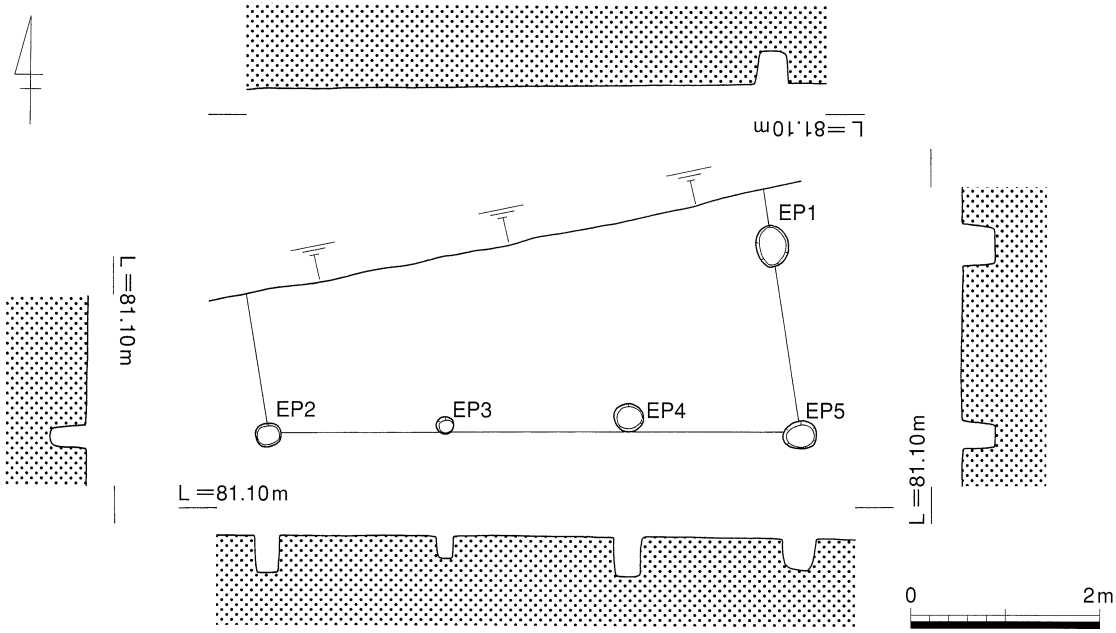
溝　SD3004出土遺物（第123～160図）

（１層）

339～344は１層からの出土遺物である。339・340は弥生土器高杯である。339はほぼ完形である。杯部は内彎口縁部端部は丸くおさめる。脚部下半は大きく開き、端部はやや断面方形気味に仕上げる。340は杯部である。杯部は内彎して外上方にひらき、口縁部で短く外反し、端部を丸くおさめる。外面は磨滅気味で、調整は残っていない。341は須恵器壺口縁部である。口縁部が大きく外反して開く広口壺だと思われる。外面に櫛描波状文を施す。342～344はサヌカイト剥片である。

（２層）

345～402は２層からの出土である。345～390は弥生土器で、345～353は壺である。345・346は口縁部である。345の口縁部は、頸部から大きく水平に開いて端部を若干上方に拡張する。外面には縦方向のハケを施す。346の頸部は垂直に立ち上がり、口縁部で緩やかに外反して上方にのび、端部は平坦におさめる。調整は磨滅のため不明である。347・348の頸部は短く垂直に立ち上がり、口縁部を外反させて、端部を平坦におさめる。348の体部は肩部に最大径を持つ。349・350の頸部は直立気味に立ち上がる。



第122図　A区 SA3001遺構実測図

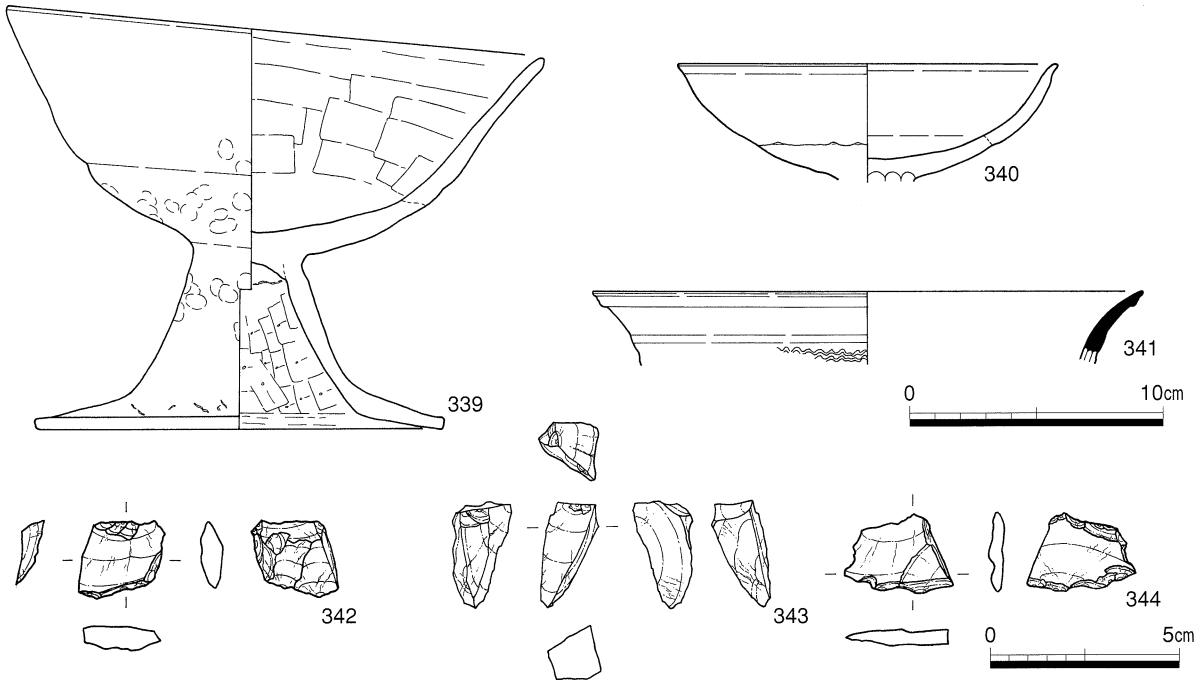
351の底部はやや平底を呈する丸底で、体部最大径は肩部に有し、頸部は垂直に立ち上がる。352は大きく膨らむ壺の体部から頸部である。調整は、タタキ後に縦方向のハケを施すものが多い。353は大型壺である。高さは残存値で63.7cmを測る。１～４層、広範囲にわたり破片が確認されている。底部は平底を呈し、肩部に最大径を持つ。調整は、外面にはタタキ後ハケを、内面には板ナデ、指頭痕を施す。数箇所に接合痕が見られる。

354～368は甕である。354～356は口縁部で端部は上下に拡張する。器壁は薄めである。354・355は端部に凹線を施す。354は胎土分析の結果、吉野川下流域の胎土と類似していることが判明した。357～362も、くの字に屈曲し端部を丸くおさめる口縁部である。

363～367は甕底部である。363～366は丸底気味の平底を呈する。367は突底を呈する。368は体部である。外面の調整はタタキ後ハケを施すが366はタタキのみである。363・366・367は内面にケズリが見られる。364は指ナデ、365はハケ、368は板ナデを施す。369～374は鉢である。369～372は口縁部～底部まで図化できた。369・370は平底を呈する。369は外面にタタキを施す。371は底部やや突底で、縦皺痕が顕著に残る。調整は磨滅気味だが、底部のケズリ、内面底部の指頭痕は残る。372は底部丸底を呈する。口縁端部は断面方形におさめる。器形は369～371は体部は内彎する椀形を呈するが、372の体部は外上方に直線的に開き、器高が低めである。373・374は底部である。平底を呈し、体部との境は外方に突出する。374は底部に木の葉痕を残す。

375～378は有孔鉢である。375・376は平底、377は突底、378は丸底を呈する。全て外面の調整はタタキだが、378はケズリ後、放射線状タタキを施す。

379～384は高杯である。379・380は杯部である。379の体部は内彎してやや深めの椀形をなし、口縁部は短く外反して端部を丸くおさめる。体部外面は磨滅気味である。380は直線的に外上方に開く杯の口縁部である。磨滅のため調整不明である。381～384は杯脚部である。381の脚部は外反して開き、端部は断面方形気味におさめる。透孔を４ヶ所に施す。器壁は厚めである。382は脚部端部を尖り気味に



第123図　A－4区 SD3004－1層出土遺物実測図

おさめる。383は器高が高めである。裾部で大きく開き、器壁を薄くする。384は杯部～脚部片である。調整は磨滅のため不明であるが、脚部に絞り痕を残す。

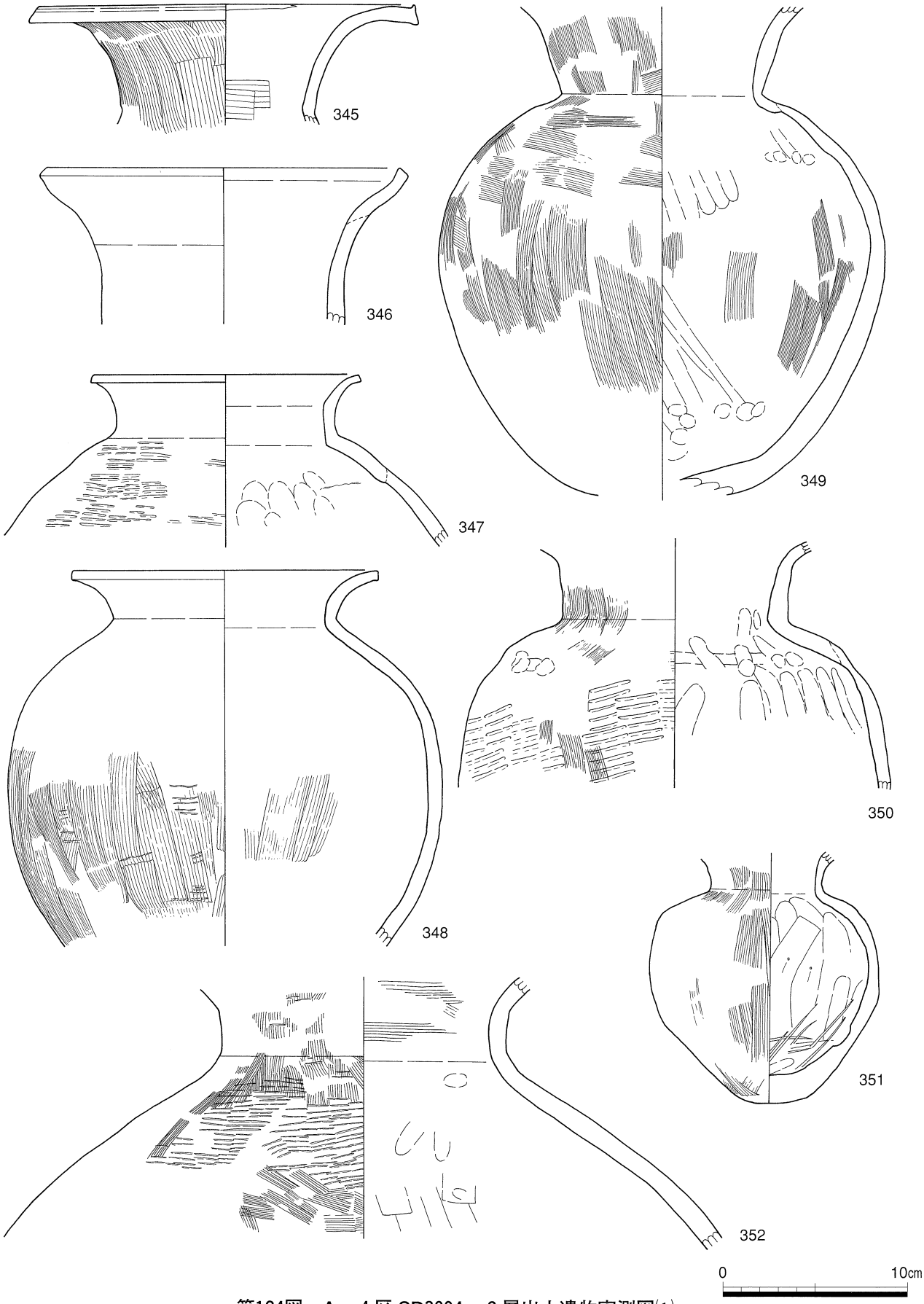
385～390は底部である。385・386は平底を呈する。386の胎土は赤褐色を呈し、搬入品の可能性もある。387は突底を呈する。388～390は丸底を呈する。

391～402は石器である。391・392はサヌカイト石鏃である。391は無茎平基式を呈する。側縁部は緩やかな外湾弧を描き、調整を表裏面に細かく施す。392は基部を欠損しているが、無茎凹基式を呈すると思われる。直線的な側縁部を持つが剥離の単位は大きめである。393～395はサヌカイト剥片である。395は自然面を有する。396はサヌカイト石核である。両極打法による剥離が上部表面に顕著に残る。397は結晶片岩の石庖丁である。ほぼ完形で、表裏面四辺全てに調整が残る。398は砂質片岩の石錘である。399は頁岩の石鍬である。400は砂質片岩の敲石である。両端に敲打痕が残る。401は砂質片岩の台石である。表面中央部に敲打痕が残る。402は砂岩の石皿である。表面は平らに整えられ、研磨の跡も見られる。

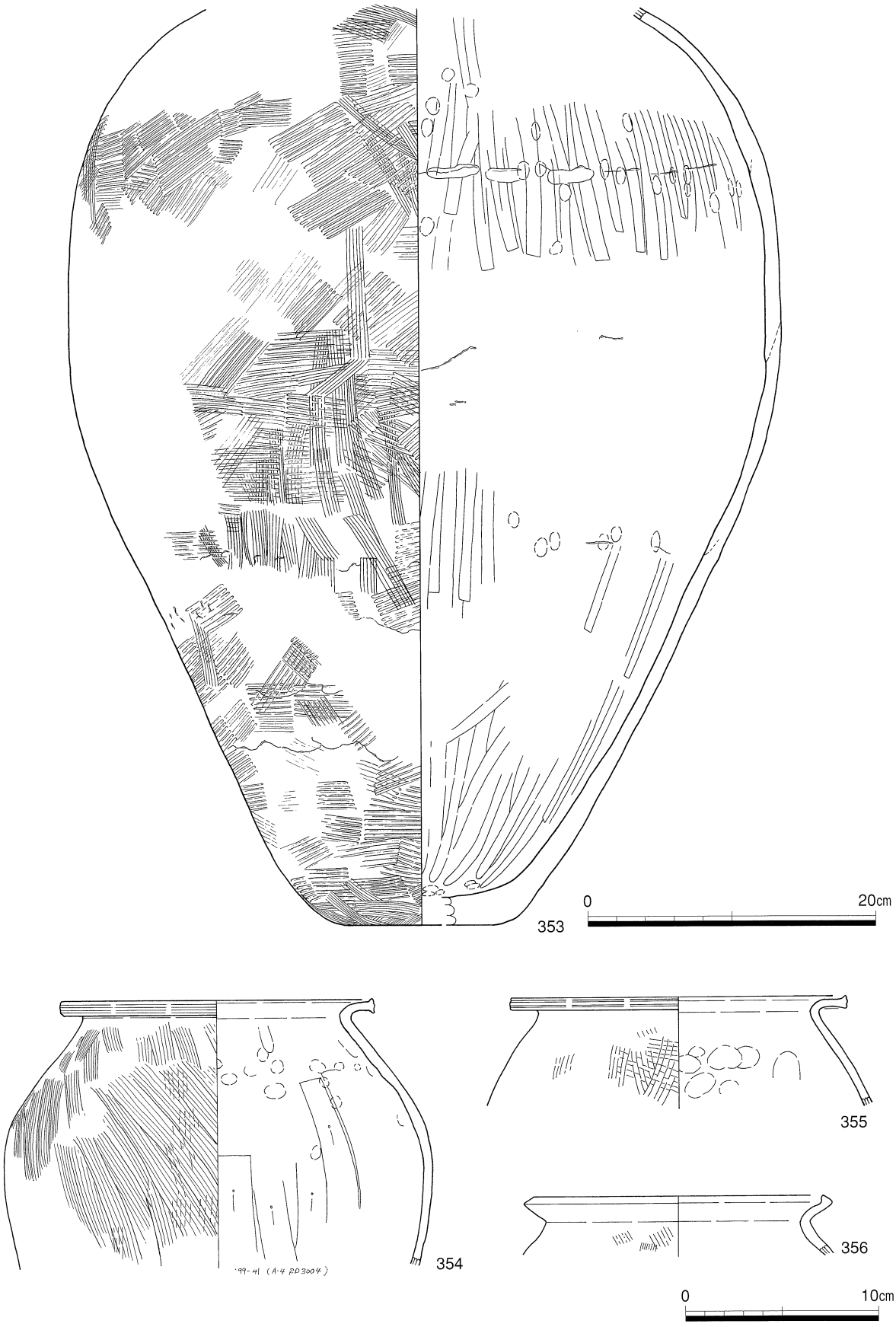
（3層）

403～622は3層からの出土である。出土遺物数は4層中最も多い。403～409は縄文土器深鉢である。縄文中期後葉～後期前葉に相当する。403の口縁部は緩い波状を呈して、波頂部はC字状降帯を形成する。404の口縁部は強く屈曲内傾して、外面に文様を施文する。端部は緩やかな波状口縁を呈する。405の口縁端部は外反し、内面側を肥厚して口唇部文様帯を形成する。406は口縁端部内面側を強く肥厚させ、上面に口唇部文様帯を形成する。407～409は底部である。407は平底Ⅰ類、408は凹底、409は高台底に分類される（幸泉2002a・2002b・2004a）。

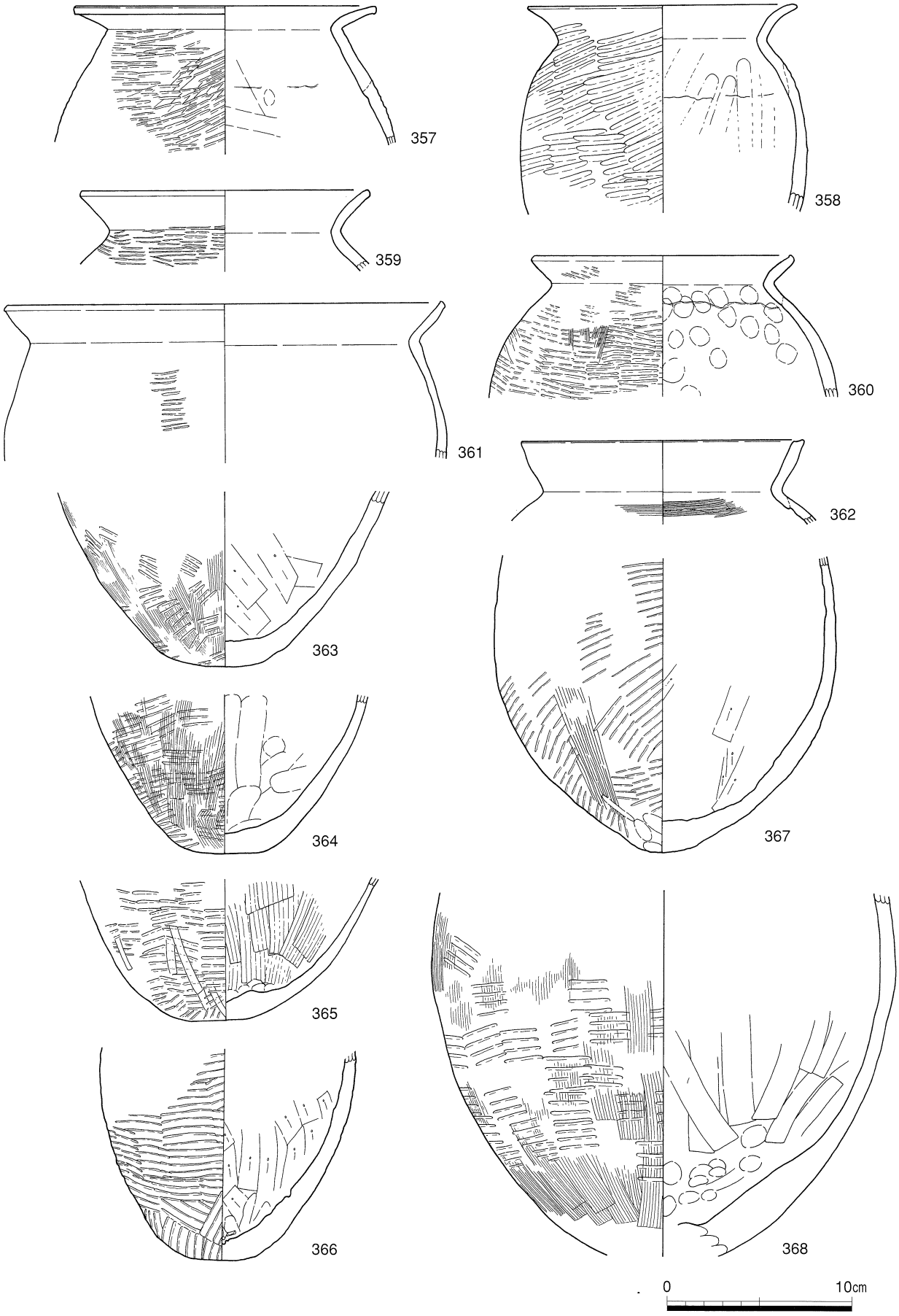
410～600は弥生土器である。410～439は壺である。410は完形の壺で、体部最大径は肩部に有するが、



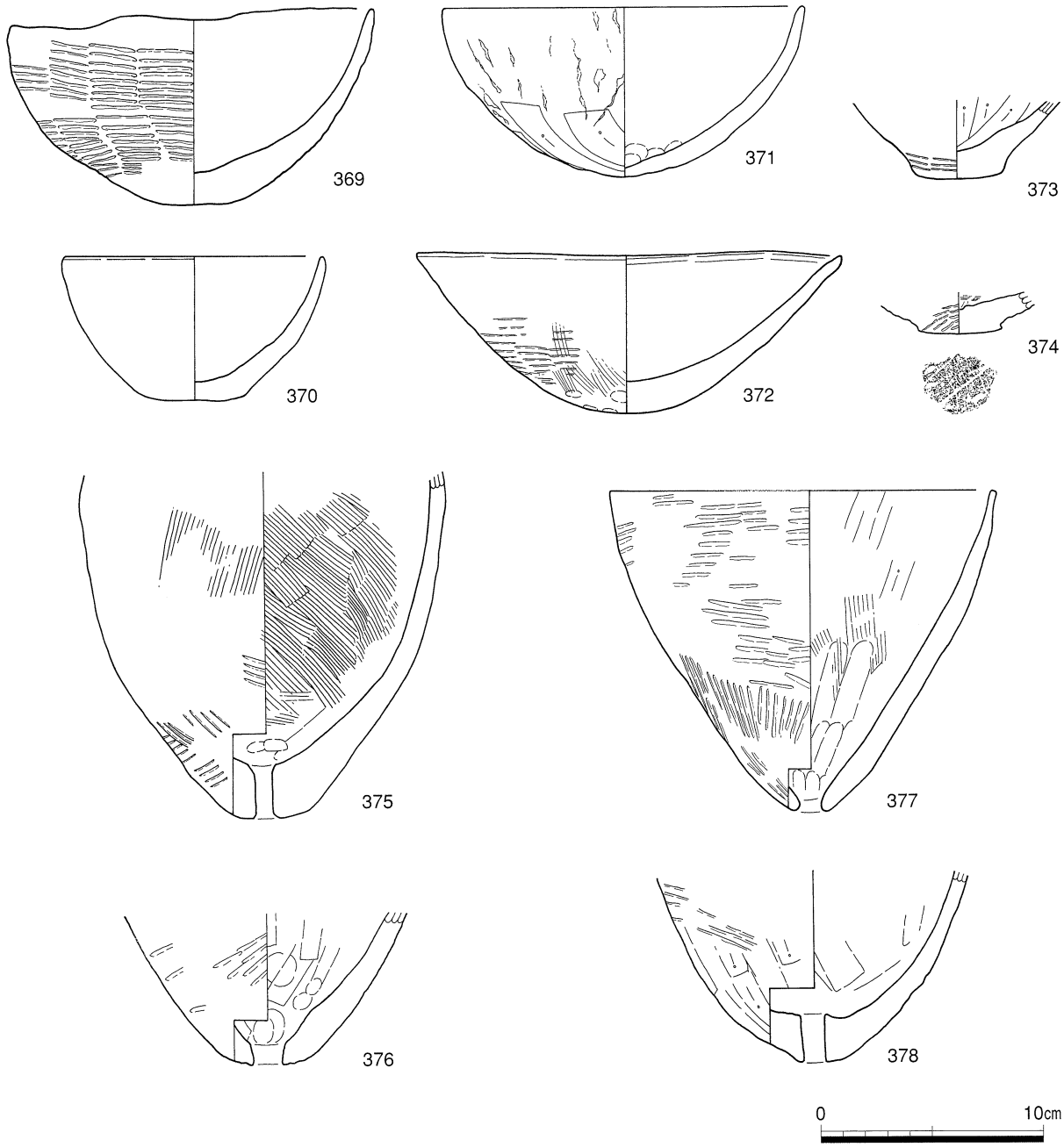
第124図　A－4区 SD3004－2層出土遺物実測図(1)



第125図　A－4区 SD3004－2層出土遺物実測図(2)

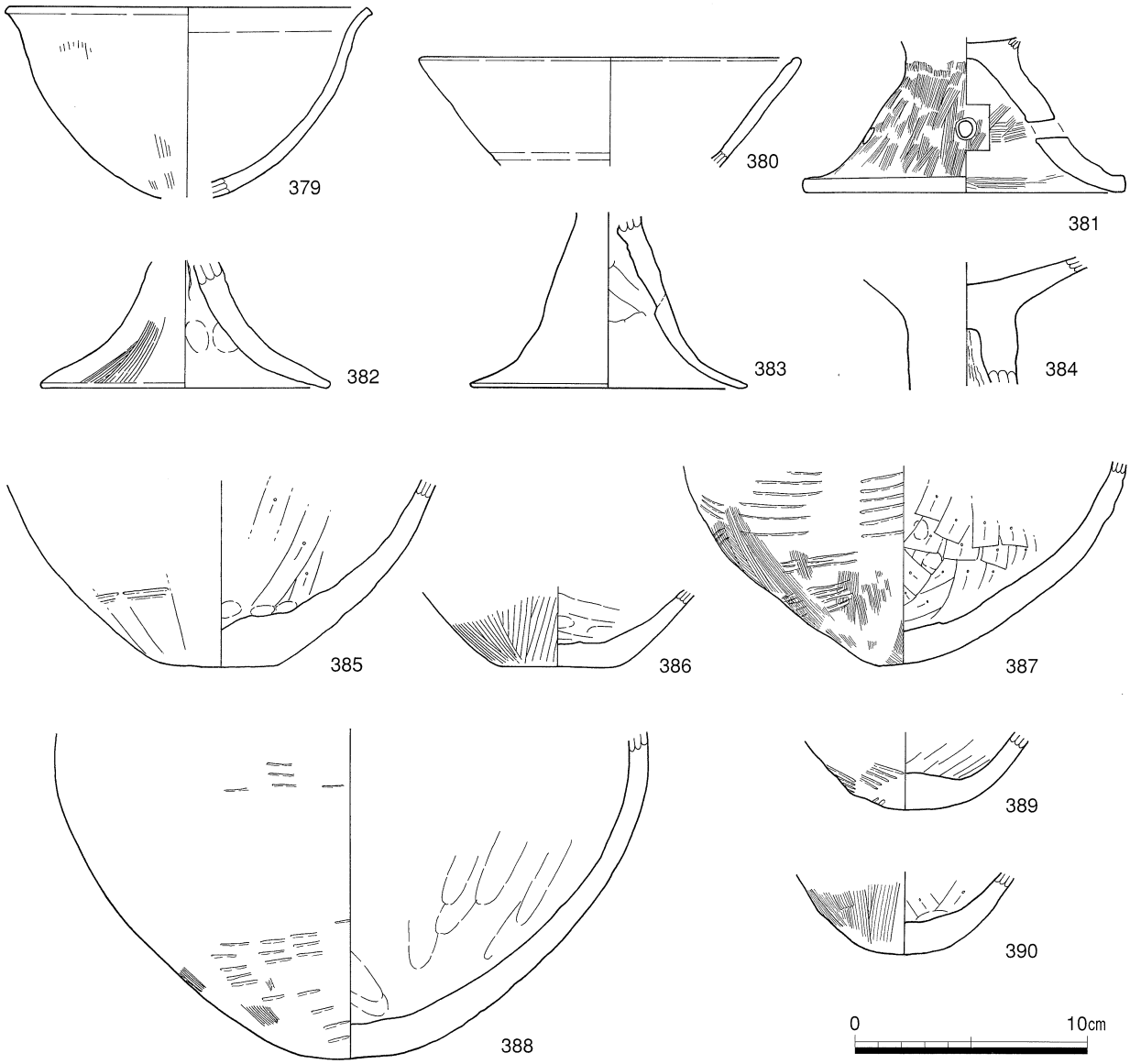


第126図　A－4区 SD3004－2層出土遺物実測図(3)



第127図　A－4区 SD3004－2層出土遺物実測図(4)

丸底を呈し体部は球形に近い。頸部は垂直に立ち上がり口縁部は屈曲して斜め上方に開く。口縁端部は上部にやや拡張して平坦におさめる。調整は外面にタタキ後ハケを施す。411～416は壺体部～口縁端部である。411の体部は最大径をほぼ体部中央に持ち、球形を呈すると思われる。頸部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁部は強く屈曲して水平に開き、口縁端部はわずかに拡張して平坦におさめる。体部外面にはハケを縦方向に施す。体部下半部にはタタキも見られ、ハケは斜め方向に施される。412～415も体部は球形を呈すると思われる。412は張りの弱い体部から、頸部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁部は屈曲は弱いが、水平気味に開いて端部を平坦におさめる。体部外面にはタタキを施す。413は口縁部の屈曲が412よりも強い。414は頸部は垂直に立ち上がり、口縁部は緩やかに外反して斜め上方に開く。口縁端



第128図　A－4区 SD3004－2層出土遺物実測図(5)

部はわずかに拡張して平坦に収める。415は頸部は垂直に立ち上がり口縁部は屈曲して斜め上方に開く。口縁端部はやや丸くおさめる。416は頸部は垂直に立ち上がり口縁部は外反して斜め上方に開く。口縁端部はわずかに拡張して平坦気味におさめる。417は頸部は体部から立ち上がり、口縁部は緩やかに外反しながら斜め上方に開く。口縁端部は平坦におさめる。体部は球形を呈し、外面の調整はタタキ後ハケを施す。418・419は頸部の立ち上がりは緩やかで、口縁端部まで緩やかに外反して斜め上方に開く。口縁端部は平坦におさめる。420～430は壺口縁部である。420～424は口縁部は屈曲しほぼ水平に開き、口縁端部は平坦におさめる。420・423は口縁端部を拡張させる。425～428は口縁部は屈曲せずに緩やかに外反して斜め上方に開き、口縁端部は平坦におさめる。429は接合痕が見られ二重口縁を呈すると思われる。430は直口壺の口縁部である。431・432は頸部～口縁部である。体部から頸部の立ち上がりは、はっきりとしていたと思われる。433～435は壺底部～体部である。433はわずかに凹む平底を呈し、体部の最大径をやや中央下よりに持ち球形に膨らむ。外面の調整はハケの後ヘラミガキを施す。434は体